四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五十五冊

前田東・中村遺跡Ⅱ

2005.10

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
西日本高速道路株式会社

序　　文

前田東・中村遺跡は、四国横断自動車道建設事業に伴い発掘調査が行われた香川県高松市前田東町に所在する遺跡です。

調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成９年度から同11年度まで発掘調査を実施し、弥生時代から江戸時代にかけての遺構が検出されました。特に古代の土器や軒丸瓦などの瓦類、陶印などを発見できたことは当時の生活・文化を知る貴重な資料となりました。

このたび、平成16年４月から平成17年３月まで実施しておりました整理事業が終了し、「四国横断自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第五十五冊　前田東・中村遺跡Ⅱ」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年10月

香川県埋蔵文化財センター

所長　渡部　明夫

例　　言

１．本報告書は、四国横断自動車道高松～高松間（高松市内区間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第55冊で、香川県高松市前田東町に所在する前田東・中村遺跡（まえだひがし・なかむらいせき）の報告を収録した。

なお、前田東・中村遺跡の報告書は５調査区を収録した第55冊と、３調査区を収録した第56冊の２分冊を予定しており、第56冊については、平成17年度末の刊行を予定している。

２．発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

３．発掘調査は平成９年９月から平成11年６月まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成９年度　喜岡永光、山元素子、宮﨑哲治、住野正和、森川　歩、藤澤正則

平成10年度　喜岡永光、宮﨑哲治、溝渕大輔、住野正和、佐々木明子、秋山　亮

平成11年度　宮﨑哲治、増井泰弘、糸山　晋

４．調査にあたって、下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

国土交通省四国地方整備局・西日本高速道路株式会社四国支社・香川県土木部横断道対策総室（当時）・四国横断自動車道前田地区対策協議会（当時）地元自治会・地元水利組合・川田　勇

５．本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の執筆・編集は宮﨑が行った。

６．報告書の作成にあたっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。(順不同、敬称略)

谷山　穣（元香川大学)、平川　南（国立歴史民俗博物館）

７．本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は基本的に下記の略号により表示している。

SA　柵列　　SB　掘立柱建物跡　　SD　溝状遺構　　SE　井戸　　SF　窯跡

SH　竪穴住居跡　　SK　土坑　　SP　柱穴　　SR　自然河川　　SX　不明遺構

８．本報告書で使用する遺構名は、現地調査段階のものに小調査区名を冠したものをそのまま使用する。そのため、作業の進捗に伴い欠番となったものや、上記の遺構略号と一致しないものも存在する。

例：H①区　SD09　→　H①SD09

９．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

10．石器実測図中、平面図中の淡いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れをそれぞれ表す。なお、現在の折損は黒く塗りつぶしている。

11．土器実測図中、平面図中の淡いトーン部分は摩滅痕を、濃いトーン部分は付着した炭化物・ススをそれぞれ表す。

12．遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1993年版』による。

13．添付CD-ROM内の写真図版のビューワーは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com）『蔵衛門10』を使用した。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査・整理の経過 …… 2
第２章　立地と環境
　第１節　地理的・歴史的環境 …… 5
　第２節　既往の調査成果 …… 7
第３章　調査の成果
　第１節　土層序 …… 9
　第２節　Ｈ区の調査 …… 20
　第３節　Ｉ区の調査 …… 49
　第４節　Ｊ区の調査 …… 88
　第５節　Ｌ区の調査 …… 130
　第６節　M区の調査 …… 143
　第７節　まとめ …… 175

挿 図 目 次

第１図　遺跡位置図
第２図　四国横断自動車道高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地
第３図　周辺の遺跡（1/25,000）
第４図　調査区割図（1/2,000）
第５図　基本土層序模式図（天地1/80、左右1/160）
第６図　土層断面図①（天地1/40、左右1/160）
第７図　土層断面図②（天地1/40、左右1/160）
第８図　土層断面図③（天地1/40、左右1/160）
第９図　土層断面図④（天地1/40、左右1/160）
第10図　H①SR01断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第11図　H②SD25断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第12図　H①SD20断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第13図　H③SD08･10断面図（1/50）、SD08出土遺物（1/4）
第14図　H③SD11断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第15図　H③SX01平･断面図（1/50）
第16図　H①SA01平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4、1/5）
第17図　H③SA01平･断面図（1/100）
第18図　H①SB01平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4）
第19図　H③SB02平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4）
第20図　H③SB03平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4）
第21図　H③SB04平･断面図（1/100）
第22図　H①SD02･10断面図（1/50）、SD02出土遺物（1/4）
第23図　H①SD12断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第24図　H①SD14断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第25図　H①SD17断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第26図　H①SD18断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第27図　H②SD05断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第28図　H②SD06断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第29図　H②SD07･19断面図（1/50）
第30図　H②SD08断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/4）
第31図　H②SD20断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第32図　H②SD21断面図（1/50）、出土遺物（1/4、1/5）
第33図　H③SD03断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第34図　H②SK04平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第35図　H②SK05平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4）
第36図　H②SE01平･断面図（1/40）
第37図　H②SE01出土遺物①（1/4、1/6）
第38図　H②SE01出土遺物②（1/3、1/4、1/5）

第39図　H①SX02平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第40図　H①SX03平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第41図　H①SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)
第42図　H①SD04・09断面図(1/50)、SD09出土遺物(1/4)
第43図　H①SD11断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第44図　H①SD13断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第45図　H②SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第46図　H②SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第47図　H②SD15断面図(1/40)、出土遺物(1/4)
第48図　H②SD18断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第49図　H③SD01・04断面図(1/50)
第50図　H②SK03平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第51図　H①SE01平・断面図(1/40)
第52図　H①SE01出土遺物①(1/4、1/5)
第53図　H①SE01出土遺物②(1/2、1/4、1/5)
第54図　H①SE01出土遺物③(1/3)
第55図　H①SF01平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)
第56図　H②SX03平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第57図　H①SP31断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第58図　H①SP56平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第59図　H①SP57断面図(1/50)
第60図　H②SP03・04・05・15・30・39・100・107断面図(1/50)
第61図　H②SP20平・断面図(1/40)
第62図　H②SP34断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第63図　H②SP38平・断面図(1/40)
第64図　H②SP40平・断面図(1/40)
第65図　H②SP45平・断面図(1/50)
第66図　H②SP50断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第67図　H②SP57断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第68図　H②SP59平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第69図　H②SP62断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第70図　H②SP69断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第71図　H②SP82断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第72図　H②SP94断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第73図　H②SP96断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第74図　H③SP39断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第75図　H③SP46・51・116・118・147・150・157・173断面図(1/50)
第76図　H③SP66断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第77図　H③SP89断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第78図　H③SP101断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第79図　H③SP159断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第80図　H③SP176断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第81図　H③SB01平・断面図(1/100)
第82図　H③SE01平・断面図(1/40)
第83図　H区包含層出土遺物(1/2、1/4)
第84図　I④SX04断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第85図　I④SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第86図　I④SD16断面図(1/50)
第87図　I④SD17断面図(1/50)
第88図　I①SK01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第89図　I③SX01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第90図　I①SR01東・01西断面図(1/50)
第91図　I①SR01東出土遺物(1/2、1/4)
第92図　I①SR01西出土遺物(1/2、1/4)
第93図　I④SR01流路断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第94図　I④SR01西断面図(1/50)、出土遺物①(1/2、1/4)
第95図　I④SR01西出土遺物②(1/4)
第96図　I④SR01西出土遺物③(1/3、1/4)
第97図　I②SR03断面図(1/50)
第98図　I②SR03出土遺物(1/4)
第99図　I②SR02、SR02・03断面図①(1/50)
第100図　I②SR02・03断面図②(1/50)
第101図　I②SR02出土遺物①(1/2、1/3、1/4)
第102図　I②SR02出土遺物②(1/2、1/4)
第103図　I②SR02出土遺物③(1/4)
第104図　I④SR01東断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/3、1/4)
第105図　I③SB02平・断面図(1/100)
第106図　I③SB03平・断面図(1/100)
第107図　I①SD02断面図(1/50)
第108図　I①SD02出土遺物(1/3、1/4、1/5)
第109図　I②SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第110図　I①SD01断面図(1/50)、出土遺物①(1/4、1/5)
第111図　I①SD01出土遺物②(1/4)
第112図　I③SD19断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)
第113図　I③SD19出土遺物②(1/5)
第114図　I②SD01断面図(1/50)

第115図　I②SD04断面図(1/50)
第116図　I②SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第117図　I②SD12断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第118図　I②SK02平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第119図　I③SK12平・断面図(1/20)、出土遺物(1/4)
第120図　I③SK13平・断面図(1/40)、出土遺物①(1/4、1/5)
第121図　I③SK13出土遺物②(1/3)
第122図　I③SK16平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/5)
第123図　I④SX02断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第124図　I③SB01平・断面図(1/100)
第125図　I③SB04平・断面図(1/100)、出土遺物(1/4)
第126図　I③SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第127図　I③SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第128図　I③SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第129図　I③SD11断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第130図　I③SD16断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第131図　I③SD18断面図(1/50)
第132図　I③SD22断面図(1/50)
第133図　I③SD27断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第134図　I③SD28断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第135図　I③SD29出土遺物(1/4)
第136図　I③SD30・31・32断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第137図　I③SK01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/2)
第138図　I③SK04平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第139図　I③SK06平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第140図　I③SK07平・断面図(1/50)
第141図　I③SK09平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第142図　I①SE01平・断面図(1/40)
第143図　I③SX02断面図(1/50)
第144図　I③SP33断面図(1/50)
第145図　I③SP56断面図(1/50)
第146図　I③SP75断面図(1/50)
第147図　I③SP100断面図(1/50)、出土遺物(1/2)
第148図　I③SP119断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第149図　I③SP125断面図(1/50)
第150図　I③SP140断面図(1/50)
第151図　I③SP181断面図(1/50)
第152図　I③SP205断面図(1/50)
第153図　I③SP210断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第154図　I④SP21断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第155図　I④SA01平・断面図(1/100)
第156図　I④SA02平・断面図(1/100)
第157図　I④SB01平・断面図(1/100)
第158図　I区包含層出土遺物①(1/2、1/3、1/4、1/5)
第159図　I区包含層出土遺物②(1/4)
第160図　J②SH01平・断面図(1/100)
第161図　J⑦SD03断面図(1/50)
第162図　J⑦SD07・J②SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第163図　J②SD06・SX03断面図(1/50)
第164図　J②SD06出土遺物①(1/4)
第165図　J②SD06出土遺物②(1/4)
第166図　J②SD08断面図(1/50)
第167図　J③SD16断面図(1/50)
第168図　J③SD16出土遺物①(1/4)
第169図　J③SD16出土遺物②(1/4)
第170図　J③SD18断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)
第171図　J③SD18出土遺物②(1/4)
第172図　J③SD18出土遺物③(1/4)
第173図　J③SD18出土遺物④(1/2、1/4)
第174図　J⑤SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第175図　J⑤SD11断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第176図　J⑤SD12断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/3、1/4)
第177図　J②SX03出土遺物①(1/4)
第178図　J②SX03出土遺物②(1/2、1/4)
第179図　J④西SX02平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第180図　J③SR01断面図(1/50)
第181図　J③SR01出土遺物(1/4)
第182図　J④西SR02断面図(1/50)
第183図　J④西SR02出土遺物①(1/4)
第184図　J④西SR02出土遺物②(1/2、1/4)
第185図　J④東SR01断面図(1/50)
第186図　J④東SR01出土遺物①(1/4)
第187図　J④東SR01出土遺物②(1/4)
第188図　J③SA01平・断面図(1/100)
第189図　J①SD01・J⑦SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第190図　J②SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

第191図　J③SD09断面図(1/50)
第192図　J③SD10断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第193図　J③SD11断面図(1/50)
第194図　J③SD14断面図(1/50)
第195図　J④西SD09断面図(1/50)
第196図　J④西SD09出土遺物(1/4、1/5)
第197図　J⑤SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第198図　J⑦SK01平・断面図(1/50)
第199図　J③SK06平・断面図(1/50)
第200図　J③SK08平・断面図(1/50)
第201図　J③SK11平・断面図(1/50)
第202図　J②SB01平・断面図(1/100)
第203図　J③SK05平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)
第204図　J③SK09平・断面図(1/50)
第205図　J④西SK01平・断面図(1/50)
第206図　J④西SK04平・断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第207図　J④東SD01断面図(1/50)
第208図　J④東SD02断面図(1/50)
第209図　J①SP04、J②SP29、J⑦SP11・14・15・19・84・87・88・108・120断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第210図　J⑦SP05平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第211図　J⑦SP08平・断面図(1/50)
第212図　J③SP23・33断面図(1/50)
第213図　J③SP60出土遺物(1/4)
第214図　J④西SP16・52・54・63・69・89・104・114・117・119断面図 (1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第215図　J④西SP35平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)
第216図　J④西SP60平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)
第217図　J①SB01平・断面図(1/100)
第218図　J⑤SB01平・断面図(1/100)
第219図　J区包含層出土遺物①(1/4)
第220図　J区包含層出土遺物②(1/2、1/4、1/5)
第221図　J区包含層出土遺物③(1/2、1/4)
第222図　L③SR01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第223図　L③SK04平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第224図　L③SK05平・断面図(1/50)
第225図　L③SB01平・断面図(1/100)、出土遺物(1/3)
第226図　L③SB04平・断面図(1/100)
第227図　L①SD04断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第228図　L①SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第229図　L①SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第230図　L②西SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第231図　L②西SD17断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第232図　L②西SD18断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第233図　L③SD01断面図(1/50)
第234図　L②西SK01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4、1/5)
第235図　L②西SK02平・断面図(1/50)
第236図　L③SE01平・断面図(1/40)
第237図　L③SE01出土遺物(1/4、1/5)
第238図　L①SX01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第239図　L②西SX01出土遺物(1/4、1/5)
第240図　L③SB02平・断面図(1/100)、出土遺物(1/4)
第241図　L①SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第242図　L①SD06断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第243図　L②西SD04断面図(1/50)
第244図　L②西SD20断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第245図　L②東SK03平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第246図　L①SP14断面図(1/50)
第247図　L①SP17断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第248図　L②西SP07断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第249図　L②西SP14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第250図　L②西SP43断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第251図　L②西SP47断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第252図　L②東SP18・24断面図(1/50)
第253図　L③SP08断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第254図　L③SP65平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第255図　L③SP87断面図(1/50)
第256図　L区包含層出土遺物(1/4、1/5)
第257図　M②SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第258図　M①SX01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第259図　M②SX01断面図(1/50)
第260図　M③SX01断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第261図M①SR01東・01西断面図(1/50)
第262図　M①SR01東出土遺物①(1/2、1/4)
第263図　M①SR01東出土遺物②(1/4)
第264図　M①SR01西出土遺物(1/2、1/4)

第265図　M①SR01・02合流部・02断面図(1/50)
第266図　M①SR01・02合流部出土遺物(1/2、1/4)
第267図　M①SR02出土遺物(1/2、1/4)
第268図　M①SR02土器集中部平面図(1/50)
第269図　M①SR02土器集中部出土遺物(1/4、1/8)
第270図　M②SR01断面図(1/50)
第271図　M②SR01出土遺物(1/4)
第272図　M①SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第273図　M②SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第274図　M③SD08断面図(1/50)
第275図　M③SK11平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第276図　M③SK12平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第277図　M③SX02出土遺物(1/4)
第278図　M①SB01平・断面図(1/100)、出土遺物(1/2)
第279図　M①SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第280図　M①SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第281図　M①SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第282図　M①SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第283図　M①SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第284図　M③SD01断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)
第285図　M③SD01出土遺物②(1/2、1/3、1/5)
第286図　M③SD07断面図(1/50)
第287図　M③SD10断面図(1/50)
第288図　M①SK01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第289図　M②SK02平・断面図(1/50)
第290図　M③SK03平・断面図(1/50)
第291図　M③SK04平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第292図　M③SK05平・断面図(1/50)
第293図　M③SK07平・断面図(1/50)
第294図　M③SK08平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第295図　M③SK09平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第296図　M③SK10平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第297図　M③SK13平・断面図(1/50)、出土遺物(1/5)
第298図　M③SE01平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)
第299図　M①SP13・15・40・50断面図(1/50)
第300図　M①SP16断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第301図　M①SP23断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第302図　M①SP29断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第303図　M①SP39断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第304図　M①SP72・73平・断面図(1/20)
第305図　M①SP72・73出土遺物(1/4)
第306図　M①SP93平・断面図(1/20)
第307図　M①SP93出土遺物(1/4)
第308図　M①SP94断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第309図　M②SP32断面図(1/50)
第310図　M②SP51平・断面図(1/20)
第311図　M②SP51出土遺物(1/2、1/4)
第312図　M③SP15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第313図　M③SP16・21・49・50・51・53断面図(1/50)
第314図　M③SP22平・断面図(1/20)、出土遺物(1/4)
第315図　M③SP40断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第316図　M③SP57断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第317図　M③SP58断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第318図　M③SP64断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第319図　M③SP65断面図(1/50)、出土遺物(1/3)
第320図　M③SP74断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)
第321図　M③SP75断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第322図　M③SP77断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第323図　M③SP86断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第324図　M③SP92断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第325図　M③SP95断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第326図　M③SP98断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第327図　M③SP101断面図(1/50)、出土遺物(1/3、1/4)
第328図　M③SP123断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第329図　M③SP126断面図(1/50)、出土遺物(1/4)
第330図　M③SP139出土遺物(1/4)
第331図　M区包含層出土遺物(1/2、1/4)
第332図　遺構変遷図①(1/2,000)
第333図　遺構変遷図②(1/2,000)

表　目　次

第１表　高松市内区間の包蔵地
第２表　発掘調査と整理作業の体制
第３表　整理作業工程表

ＣＤ目次

OMNa-2004-ikou

画像１　H①区上層全景①（南から）
画像２　H①区上層全景②（西から）
画像３　H①区下層・H②区上層全景（南西から）
画像４　H①区下層全景（東から）
画像５　H②区上層全景（東から）
画像６　H②区下層全景（南から）
画像７　H③区全景（北から）
画像８　H①SR01全景（北から）
画像９　H①SB01（西から）
画像10　H③SB02～04（東から）
画像11　H③SB03（南東から）
画像12　H③SB02・04（南から）
画像13　H②SD14など（西から）
画像14　H②SE01井戸枠検出状況①（南東から）
画像15　H②SE01井戸枠検出状況②（南東から）
画像16　H②SE01井戸枠検出状況③（南から）
画像17　H②SE01半裁状況（南から）
画像18　H②SE01井戸枠検出状況④（南から）
画像19　H②SE01井戸枠検出状況⑤（南から）
画像20　H②SE01井戸枠の細部①（南から）
画像21　H②SE01井戸枠の細部②（南東から）
画像22　H②SE01井戸枠と掘り方（南から）
画像23　H②SE01掘り方完掘（南西から）
画像24　H①SX03（南から）
画像25　H①SE01石組み（南から）
画像26　H①SE01石組み下の井戸枠検出（南から）
画像27　H①SE01井戸枠検出①（南から）
画像28　H①SE01井戸枠検出②（南から）
画像29　H①SE01石敷き検出（南から）
画像30　H①SE01曲げ物検出①（南から）
画像31　H①SE01曲げ物検出②（南から）
画像32　H①SE01曲げ物検出③（南から）
画像33　H①SE01掘り方完掘①（南から）
画像34　H①SE01掘り方完掘②（南から）
画像35　H①SF01完掘①（西から）
画像36　H①SF01完掘②（東から）
画像37　H①SF01断面①（東から）
画像38　H①SF01焚口部断面①（北東から）
画像39　H①SF01焚口部断面②（北東から）
画像40　H①SF01焚口部断面③（南西から）
画像41　H①SF01焚口部断面④（東から）
画像42　H①SP56（西から）
画像43　H②SP20（北から）
画像44　H③SB01（東から）
画像45　H③SE01検出状況（南西から）
画像46　H③SE01完掘（南から）
画像47　H③SE01断ち割り（東から）
画像48　Ⅰ①区上層全景①（西から）
画像49　Ⅰ①区上層全景②（東から）
画像50　Ⅰ②区上層全景（南西から）
画像51　Ⅰ②区下層全景①（南から）
画像52　Ⅰ②区下層全景②（北から）
画像53　Ⅰ③・④区上層全景（南から）
画像54　Ⅰ③区上層西半全景（東から）
画像55　Ⅰ③・④区下層全景（北から）
画像56　Ⅰ③区下層全景（西から）
画像57　Ⅰ④区下層全景（東から）
画像58　Ⅰ①SK01土器出土状況①（西から）
画像59　Ⅰ①SK01土層断面（南から）
画像60　Ⅰ①SR01東土器出土状況①（西から）

画像61　Ⅰ④SR01西土器出土状況（北から）
画像62　Ⅰ①SR01西土器出土状況（南西から）
画像63　Ⅰ④SR01西完掘（南東から）
画像64　Ⅰ④SR01東完掘（南西から）
画像65　Ⅰ①SR01西・東断面（北から）
画像66　Ⅰ②SR02・03土層断面（北東から）
画像67　Ⅰ③SB01・02・03（東から）
画像68　Ⅰ①SD02遺物出土状況（東から）
画像69　Ⅰ①SD01・02・SE01（南から）
画像70　Ⅰ③SD19（南から）
画像71　Ⅰ③SD19土層断面（南西から）
画像72　Ⅰ③SK12曲げ物検出状況（北から）
画像73　Ⅰ③SK12断ち割り（南から）
画像74　Ⅰ③SK12曲げ物（北から）
画像75　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況①（北から）
画像76　Ⅰ③SK13曲げ物（北から）
画像77　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況②（北から）
画像78　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況③（北東から）
画像79　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況④（北から）
画像80　Ⅰ③SK13櫛出土状況（北から）
画像81　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況⑤（北から）
画像82　Ⅰ③SK13曲げ物検出状況⑥（北から）
画像83　Ⅰ③SK13掘方完掘（北から）
画像84　Ⅰ③SK16曲げ物検出状況①（北から）
画像85　Ⅰ③SK16曲げ物検出状況②（北西から）
画像86　Ⅰ③SK16曲げ物検出状況③（北東から）
画像87　Ⅰ③SK16櫛出土状況（北東から）
画像88　Ⅰ③SK16掘方完掘（北から）
画像89　Ⅰ③SB04（南から）
画像90　Ⅰ③SD02（北から）
画像91　Ⅰ③SD03（北から）
画像92　Ⅰ①SE01（東から）
画像93　Ⅰ④SP21遺物出土状況（南から）
画像94　Ⅰ④SB01・SA01（南から）
画像95　Ⅰ④SA02（南東から）
画像96　Ｊ①区全景（東から）
画像97　Ｊ②区上層全景（西から）
画像98　Ｊ②区下層全景①（南から）
画像99　Ｊ②区下層全景②（東から）
画像100　Ｊ③区上層全景①（東から）
画像101　Ｊ③区上層全景②（西から）
画像102　Ｊ③区下層全景①（北から）
画像103　Ｊ③区下層全景②（西から）
画像104　Ｊ④区西上層全景（南から）
画像105　Ｊ④区西中層全景（東から）
画像106　Ｊ④区西下層全景（南西から）
画像107　Ｊ④区東上層全景（東から）
画像108　Ｊ④区東中層全景（東から）
画像109　Ｊ⑤区下層全景①（西から）
画像110　Ｊ⑤区下層全景②（西から）
画像111　Ｊ④区東下層・Ｊ⑤区下層全景（西から）
画像112　Ｊ⑥区全景（南西から）
画像113　Ｊ⑦区上層全景①（南から）
画像114　Ｊ⑦区上層全景②（西から）
画像115　Ｊ⑦区下層全景（南西から）
画像116　Ｊ④区東調査区南壁土層断面（北から）
画像117　Ｊ②区調査区東壁土層断面（北西から）
画像118　Ｊ②SX03・SD06土層断面（北西から）
画像119　Ｊ③SD16・SD18（東から）
画像120　Ｊ③SD16遺物出土状況（南から）
画像121　Ｊ⑤SD11・SD12（東から）
画像122　Ｊ③SR01（東から）
画像123　Ｊ④西SR02（北東から）
画像124　Ｊ④東SR01遺物出土状況①（西から）
画像125　Ｊ④東SR01遺物出土状況②（東から）
画像126　Ｊ④西SD09・SR02（北東から）
画像127　Ｊ④西SD09遺物出土状況①（北東から）
画像128　Ｊ④西SD09遺物出土状況②（南西から）
画像129　Ｊ②SB01・SD02・SD03（南西から）
画像130　Ｊ⑦SP05遺物出土状況（南西から）
画像131　Ｊ④西SP35遺物出土状況（東から）
画像132　Ｊ①SB01・SD01（北から）
画像133　Ｊ⑤SB01（東から）
画像134　Ｌ①区全景（西から）
画像135　Ｌ②区西・東全景（南から）
画像136　Ｌ②区西全景①（北から）

画像137　Ｌ②区西全景②（西から）
画像138　Ｌ②区東全景（北から）
画像139　Ｌ③区全景①（西から）
画像140　Ｌ③区全景②（西から）
画像141　Ｌ③区調査区西壁土層断面（東から）
画像142　Ｌ③SR01（南から）
画像143　Ｌ③SB01・SB02（北から）
画像144　Ｌ②西SK02土層断面（北から）
画像145　Ｌ③SE01土層断面（北から）
画像146　Ｌ③SP08遺物出土状況（南東から）
画像147　Ｌ③区・M①区下層全景（北から）
画像148　M①区上層全景（南東から）
画像149　M①区下層全景（北から）
画像150　M②区全景（南から）
画像151　M②区全景（北から）
画像152　M③区全景①（東から）
画像153　M③区全景②（東から）
画像154　M①区調査区西壁土層断面（東から）
画像155　M①SR01西土層断面（北東から）
画像156　M①SR01西遺物出土状況（北から）
画像157　M①SR01土器集中部遺物出土状況（北から）
画像158　M①SD02土層断面（東から）
画像159　M③SD01遺物出土状況（東から）
画像160　M③SE01井戸枠検出状況①（東から）
画像161　M③SE01井戸枠検出状況②（西から）
画像162　M③SE01井戸枠検出状況③（西から）
画像163　M③SE01完掘（西から）
画像164　M①SP93遺物出土状況（東から）
画像165　M②SP51遺物出土状況①（西から）
画像166　M②SP51遺物出土状況②（北東から）
画像167　M③SP22遺物出土状況（南東から）
画像168　Ｉ①区作業風景（北東から）
画像169　Ｊ②区作業風景①（東から）
画像170　Ｊ②区作業風景②（北東から）
画像171　Ｊ④区西作業風景①（東から）
画像172　Ｊ④区西作業風景②（北から）
画像173　Ｊ④区西作業風景③（西から）
画像174　M③区作業風景（西から）
画像175　Ｊ区雪化粧（北西から）

OMNa-2004-ibutu

画像176　25
画像177　28
画像178　44
画像179　44
画像180　44
画像181　44
画像182　77
画像183　77
画像184　80
画像185　80
画像186　87・80・81
画像187　87・80・81
画像188　81
画像189　81
画像190　87
画像191　87
画像192　118
画像193　119
画像194　138
画像195　138
画像196　138
画像197　143
画像198　144
画像199　144
画像200　195
画像201　197
画像202　218・219
画像203　218・219
画像204　224・256・225・254・226
画像205　229
画像206　230
画像207　230
画像208　236
画像209　237
画像210　246
画像211　246
画像212　269
画像213　275
画像214　275
画像215　275
画像216　294・293・316
画像217　294・293・316
画像218　299
画像219　300
画像220　313
画像221　313
画像222　314
画像223　317

画像224　318
画像225　401
画像226　420
画像227　420
画像228　420
画像229　443
画像230　449
画像231　449
画像232　456
画像233　488
画像234　488
画像235　494
画像236　494
画像237　507
画像238　509・510
画像239　509・510
画像240　509・510
画像241　535
画像242　571
画像243　577
画像244　596
画像245　611
画像246　620
画像247　640
画像248　641
画像249　645
画像250　645
画像251　678
画像252　719
画像253　721
画像254　722
画像255　723
画像256　728
画像257　730
画像258　730
画像259　821
画像260　821
画像261　839
画像262　840
画像263　865
画像264　889・890・888・886
画像265　893
画像266　901
画像267　901
画像268　945
画像269　972
画像270　975
画像271　975
画像272　992
画像273　1058
画像274　1066
画像275　1066
画像276　1077
画像277　1115
画像278　1119
画像279　1125
画像280　1126
画像281　1143
画像282　1143
画像283　1176・1267・1268
画像284　1176・1267・1268
画像285　1211
画像286　1211
画像287　1231
画像288　1231
画像289　1232～1248
画像290　1249～1253
画像291　1249～1253
画像292　1255～1266・1267・1268
画像293　1290
画像294　1290

観　察　表

遺構配置図

遺構配置図①（H区第１面）
遺構配置図②（H区第２面）
遺構配置図③（Ｉ区第１面）
遺構配置図④（Ｉ区第２面）
遺構配置図⑤（Ｊ区第１・２面）
遺構配置図⑥（Ｊ区第３面）
遺構配置図⑦（Ｌ区）
遺構配置図⑧（M区第１面）
遺構配置図⑨（M区第２面）

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

前田東・中村遺跡は、高松東道路（国道11号高松東バイパス）建設事業に伴い、香川県教育委員会（以下、「県教委」と呼称）が試掘調査を実施した結果、文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断した遺跡である。昭和63年度から断続的に発掘調査を実施し、すでに高松東道路部分の保護措置は終了している。

このたびの四国横断自動車道高松～高松間（高松市内区間）建設事業に伴い、県教委が路線内の分布調査を実施し、路線内７地区において文化財保護法に基づく保護措置が必要であると判断した。前田東・中村遺跡は、高松東インターチェンジ建設予定地としてそのうちのひとつに該当し、高松市内区間においては最も東に位置する。

この結果に基づき、平成８年４月に県教委と日本道路公団高松建設局との間で埋蔵文化財発掘調査についての委託契約が締結され、さらに同年同月に県教委と財団法人香川県埋蔵文化財調査センター（以下「財団センター」と呼称）との間で「埋蔵文化財調査委託契約」を締結し、財団センターが発掘調査を担当する運びとなった。

第１図　遺跡位置図

第 2 節　調査・整理の経過

高松～高松間（高松市檀紙町～同前田東町）における埋蔵文化財調査の対象となる部分は、四国横断自動車道が国道11号の上部に建設されるため、国土交通省施工区間を含めた 3 箇所のインターチェンジ建設部分と現道の拡幅部分が主な調査対象地となる。

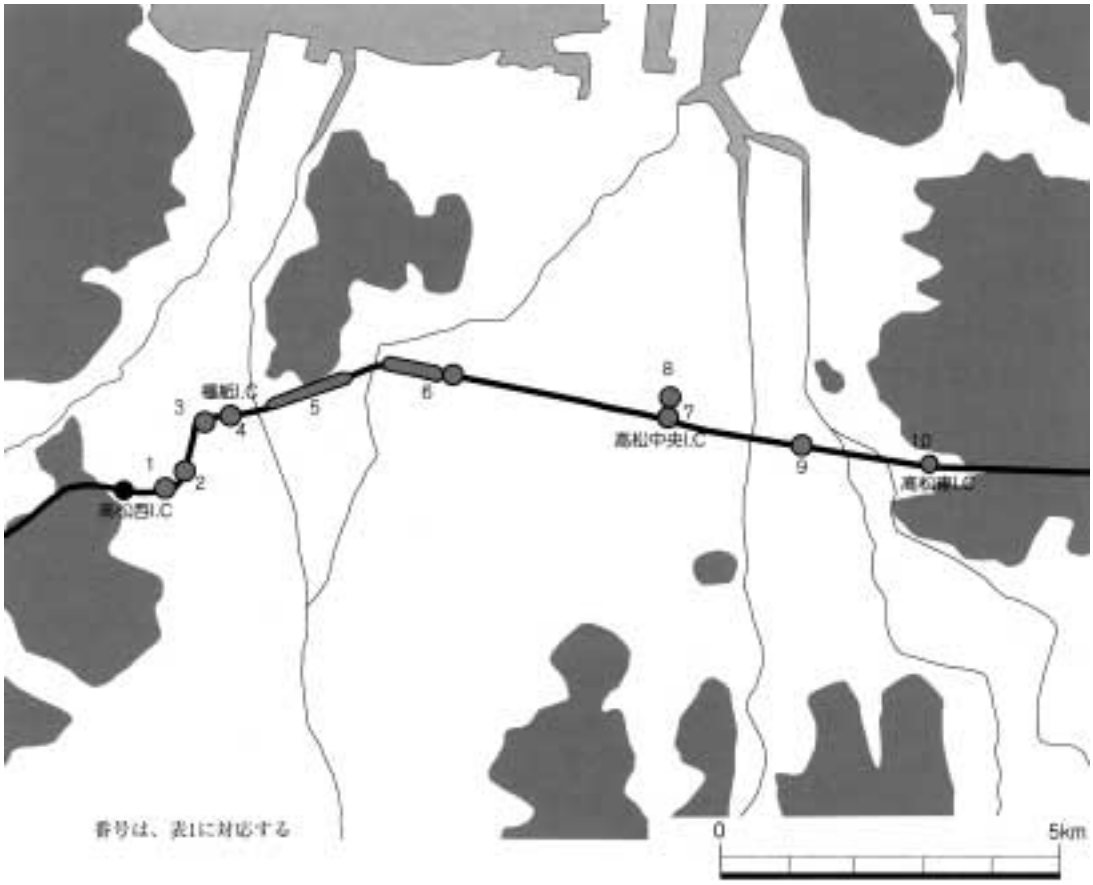
調査の方法は、保護措置が必要と判断された各地区にトレンチ調査（予備調査）を行い、遺跡の内容を把握した後、全面発掘調査を確定するトレンチ調査方式を基本的に採用した。

前田東・中村遺跡に関しては、既往の調査結果から遺跡が対象地全面に広がっていることが推定されたため、当初から全面発掘調査を計画した。ただし、複数ある遺構検出面の確認と自然河川の土量等のデータを調査計画に反映させることを目的として、対象地のほぼ中央部（Ｉ・Ｊ区）で 3 箇所のトレンチ調査（予備調査）を行い、それから全面発掘調査へと展開した。

調査は、平成 9 年10月 1 日から平成11年 6 月30日までの足掛け 3 年で実施した。調査面積は13,146㎡を測るが、複数の遺構面が存在した地区もあり、実掘面積はそれを大きく上回る。

対象地は高松東道路の南北両側に分かれており、東西に細長い形状をしているため、既往の調査にならって、現有道路を基準にして 8 つの大きな調査区に分け、さらにその中を現有の地割りや調査面積などを考慮した小調査区に分けて調査を行った（第 4 図参照）。また、これらの大調査区は既往の調査区番号（東道路調査区はＡ～G区）を継承してＨ～Ｏ区の呼称を使用している。

調査対象地全体に国土座標を基準とした20mのメッシュをかけて、その交点に打設した杭を調査の基



第 2 図　四国横断自動車道高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地

No.	地区名	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積(㎡)	主な遺構	主な遺物	調査報告書
1	香川郡条里A	中間東井坪遺跡	高松市中間町	H8.4.1～H8.5.31 H8.9.1～H8.9.30 H9.1.1～H8.3.31	709	旧石器包含層・柱穴	ナイフ形石器	第49冊
2	正　　箱	正　箱　遺　跡	高松市檀紙町	H11.1.1～H11.3.31	800	掘立柱建物・溝・土器溜まり	弥生土器・旧石器・須恵器・土師器	第49冊
3	香川郡条里B	八　幡　遺　跡	高松市檀紙町	H11.2.1～H11.3.31 H11.7.1～H11.9.30 H12.4.1～H12.5.31	200 4,315 1,542	溝・柱穴・粘土採掘坑	須恵器・土師器・陶器・染付	第49冊
4		中　森　遺　跡	高松市檀紙町	H10.6.1～H10.8.31 H11.10.1～H11.12.31 H12.8.1～H12.10.31	3,015 1,563 752	掘立柱建物・溝・井戸・古墳の周溝	弥生土器･旧石器･サヌカイト･須恵器･土師器･中世陶磁器･鋳型･鉄滓	第53冊
5	香川郡条里C		高松市勅使町	H10.4.1～H10.5.31 H11.3.1～H11.3.31 H11.10.1～H11.10.31	770 126	溝	弥生土器・黒色土器	第53冊
6	香川郡条里D	(田村遺跡)	高松市田村町	H12.10.1～H12.10.31	2,500	中世包含層	土師器	第53冊
		上天神遺跡	高松市上天神町	H9.8.1～H9.9.30	190	溝	弥生土器	
7	林・坊城	林・坊城遺跡	高松市林町	H8.10 1～H8.10.31 H9.10.1～H9.11.30 H10.9.1～H10.12.31	481 490 2,000	竪穴住居跡・土坑・円形周溝墓・自然河川・溝	縄文土器・弥生土器・須恵器	第53冊
8	山田郡条里A	林・浴遺跡	高松市林町	H8.10.1～H9.1.31	2,626	溝	勾玉・ガラス玉	
9	東山崎・水田	東山崎･水田遺跡	高松市東山崎町	H10.7.1～H10.9.30 H11.2.1～H11.2.28	1,978	溝・柱穴・土坑	須恵器・土師器・陶磁器・瓦	第53冊
10	前田東・中村	前田東･中村遺跡	高松市前田東町	H9.10.1～H10.3.21 H10.4.1～H11.3.31 H11.4.1～H11.6.30	4,040 7,206 1,900	掘立柱建物・溝・井戸・柱穴・土坑・煙管窯	弥生土器・黒色土器・須恵器・土師器・陶磁器・瓦・陶印	第55(本書)･56(予定)冊

第1表　高松市内区間の埋蔵文化財包蔵地

準杭とし、既往の調査との対応を図り、今後の周辺開発に備えた。

平成9年度は、直営方式2班体制をとり、下半期からI①・②区、J①区、L①・②・③区、M①・②区の4,040㎡の調査を実施した。平成10年度は、直営方式2班体制で通年の調査を行い、H①・②・③区、I③・④区、J②・③・④・⑤・⑥・⑦区、K①・②区、N①・②区、O①・②区の7,206㎡の調査を実施し、未買収地部分と未退去家屋部分を除く、対象地のほとんどの調査を終えた。平成11年度は、残っていた用地取得が進展したため前年度から連続した調査となった。直営方式1班体制でM③区、N③区、O③区の1,900㎡の調査を6月までの3ヶ月間で実施し、縄文時代から中世にかけての大規模な複合遺跡である前田東・中村遺跡の調査が完了した。

発掘調査は、県教委文化行政課の指導のもと、下表の体制で実施した。

	平成9年度		平成10年度		平成11年度		平成16年度	
香川県教育委員会事務局文化行政課								
総括	課　長	菅原　良弘	課　長	小原　克己	課　長	小原　克己	課　長	北原　和利
	課長補佐	北原　和利	課長補佐	北原　和利	課長補佐	小国　史郎	課長補佐	森岡　修
			副主幹	渡部　明夫				
			副主幹	西村　隆史				
総務	係　長	山崎　隆	係　長	中村　禎伸	係　長	中村　禎伸	主　任	香川　浩章
	主　査	星加　宏明(～5.31)	主　査	三宅　陽子	主　査	三宅　陽子	主　査	橋本恵三子
	主　査	松村　崇史(6.1～)	主　査	松村　崇史	主　査	松村　崇史	主任主事	八木　秀憲
	主　事	打越　和美						
埋蔵文化財	副主幹	渡部　明夫	係　長	西村　尋文	副主幹	廣瀬　常雄	課長補佐	大山　眞充
	文化財専門員	木下　晴一	主任技師	塩崎　誠司	係　長	西村　尋文	主　任	山下　平重
	技　師	塩崎　誠司			文化財専門員	森　格也	文化財専門員	佐藤　竜馬
					主任技師	塩崎　誠司	主任技師	松本　和彦
財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター							香川県埋蔵文化財センター	
総括	所　長	大森　忠彦	所長	菅原　良弘	所　長	菅原　良弘	総括	所　長　中村　仁
	次　長	小野　善範	次長	小野　善範	次　長	川原　裕章		次　長　渡部　明夫
総務	参　事	別枝　義昭	参事	別枝　義昭	副主幹兼係長	六車　正憲	総務課	課　長　野保　昌弘
	副主幹	田中　秀文(6.1～)	副主幹兼係長	田中　秀文	副主幹兼係長	田中　秀文		係　長　松崎日出穂
	係　長	前田　和也(～5.31)	主査	新　一郎	係　長	新　一郎		主　査　塩崎かおり
	主　査	西川　大						
調査	参　事	近藤　和史	参　事	長尾　重盛	参　事	長尾　重盛	資料普及課	課長(次長兼務)　渡部　明夫
	主任文化財専門員	大山　眞充	主任文化財専門員	大山　眞充	主任文化財専門員	大山　眞充		文化財専門員　宮**崎**　哲治
	主任文化財専門員	藤好　史郎	主任文化財専門員	藤好　史郎	主任文化財専門員	藤好　史郎		担　当　市川　孝子
	文化財専門員	喜岡　永光	文化財専門員	喜岡　永光	文化財専門員	宮**崎**　哲治		佐々木博子
	文化財専門員	山元　素子	文化財専門員	宮**崎**　哲治	文化財専門員	増井　泰弘		馬場　聡子
	文化財専門員	宮**崎**　哲治	主任技師	溝渕　大輔	調査技術員	糸山　晋		久保真由美
	技　師	住野　正和	技　師	住野　正和				木下基公美
	調査技術員	森川　歩	調査技術員	佐々木明子				池内　妙子
	調査技術員	藤澤　正則	調査技術員	秋山　亮				上原　慶子

第2表　発掘調査と整理作業の体制

整理作業は、平成15年度末をもって財団センターが解散したため、それを受けて香川県埋蔵文化財センター（以下、「センター」と呼称）が実施した。整理作業は平成16・17年度の２ヵ年にわたる予定で実施しているが、検出した遺構・遺物の量が多いこともあり、対象地を二分して西半分（Ｈ・Ｉ・Ｊ・Ｌ・M区の５地区）を平成16年度に、東半分（Ｋ・Ｎ・Ｏ区）を平成17年度に実施することとし、報告書もそれぞれ前田東・中村遺跡Ⅱ・Ⅲとして報告することとした。

今回、前田東・中村遺跡Ⅱとして報告する部分の整理作業は、平成16年４月から平成17年３月までの、12ヶ月間で実施した。整理作業の体制は第２表、作業の工程は第３表のとおりである。

	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
遺物の注記												
遺物の接合、石膏復元												
報告遺物の抽出												
遺物の実測												
遺物図面のチェック												
遺物挿図原稿の作成												
遺構整理												
遺構挿図原稿の作成												
付図、表原稿の作成												
遺物写真撮影												
原稿作成												
編集												
遺物の収納、台帳整備												

第３表　整理作業工程表

発掘調査に携わった人々は、以下のとおりである。（五十音順、敬称略）

池添正行、大森　正智、上西　弘、河田秀司、川野　清、北迫高男、国宗敏一、澤井　清、篠原蜜夫、高木輝男、竹井康弘、多田敏夫、塚原　進、富岡晴美、富田英三、中川恒夫、中津喜代年、林　俊雄、松本一郎、松本康弘、宮武直人、八十川　登、山地輝吉、山下静雄、吉田　実、渡辺喜彦

穴吹みどり、網谷チズ子、飯間高子、池添キヌエ、石川悦子、伊勢恵子、井手上　操、稲垣啓子、稲垣ミサエ、上原光世、大上節子、小笠原千恵子、葛城美香、上西キミ子、川田市子、木下祐美、久我多喜子、日下千鶴子、櫛田英子、国宗民子、佐々木恵美子、諏訪芳美、十河恵子、高木ミチ子、高橋豊子、多田節子、田中美由紀、筒井幸子、中川経子、中川真理子、中野良枝、中村芳子、長山キミエ、林　テル子、東川真希子、百歩静子、藤井桂子、藤沢博美、藤沢洋子、藤本恵子、藤本容子、堀上幸子、松本和子、松本恭子、松本三枝、三宅至名子、宮地恵美子、宮武和子、村尾律子、森　恵美子、森口すえの、山内ウメ子

第２章　立地と環境

第１節　地理的・歴史的環境

前田東・中村遺跡は、高松市前田東町140番地外に所在する。香川県のほぼ中央部に位置する高松平野の東端部にあたり、北は立石山から西に伸びた尾根（通称前田山）、東は立石山の末端となる低丘陵、南はその低丘陵と連続した芳岡山によって囲まれた、西に開けた緩傾斜の扇状地上に立地している。その扇状地が高松平野と接する部分には､新川・吉田川や春日川などの河川氾濫原が幅広く広がっている。標高は調査対象地東端で25.3m、西端では17.3mを測り、約440mで約８mの比高を有している。詳細は後述するが、現地表には現われていないような埋没河川も存在しており、現在も伏流水の地下水位は高く、扇状地でも扇端部に近い地形といえよう。

前田東・中村遺跡の周辺には、さまざまな時代の周知の埋蔵文化財包蔵地が点在あるいは密集して存在している。当遺跡に関連する時代の遺跡を中心に概観する。

旧石器時代の遺物は少ないながらも、ナイフ形石器などが当遺跡南東の低丘陵上など（池戸八幡神社遺跡など）で出土しているが、住居跡などの明確な遺構は確認されていない。

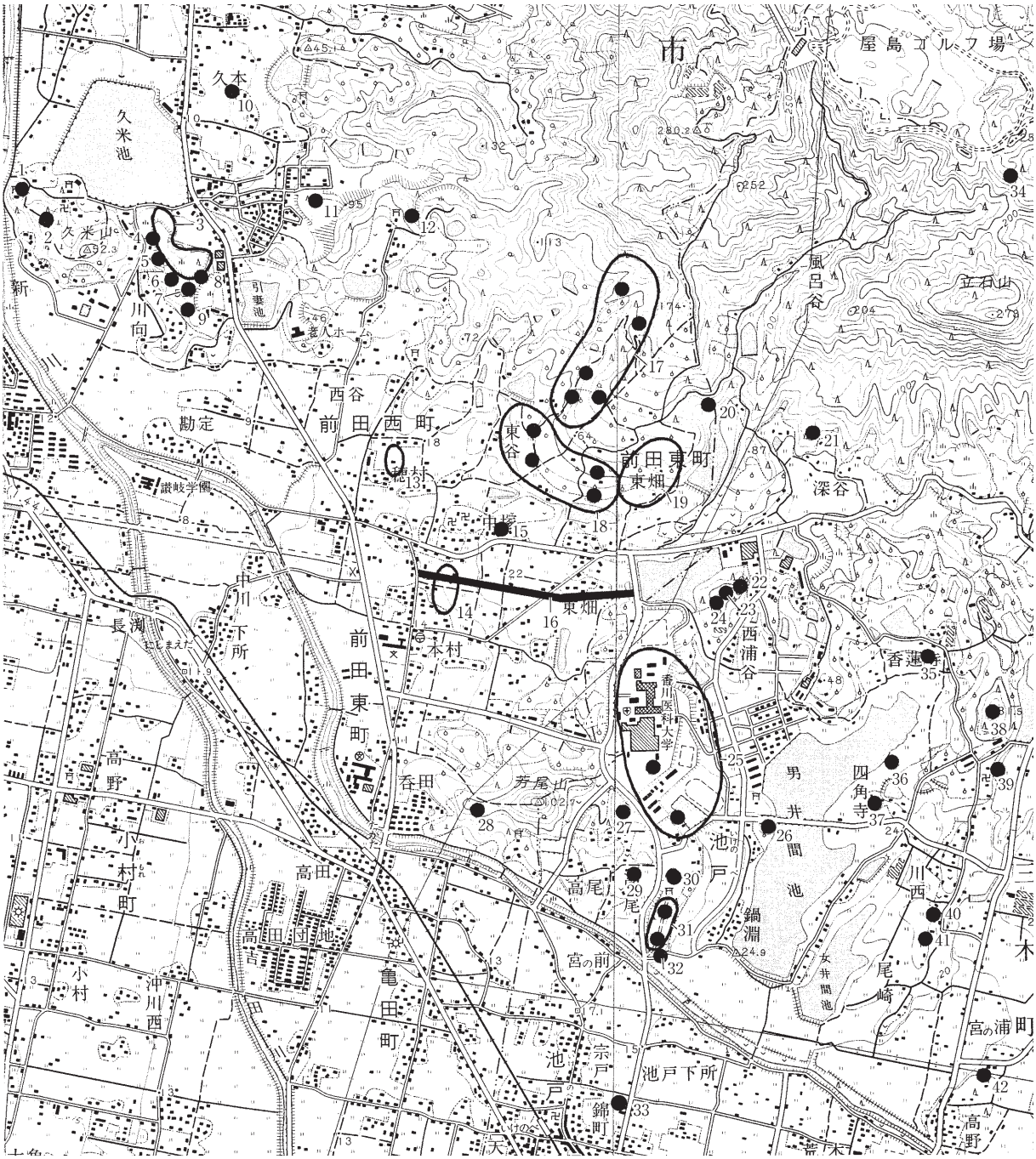
縄文時代も明確な集落等の調査例は知られておらず、当遺跡の既往の調査で有舌尖頭器や後期の土器が出土している程度である。

弥生時代には、前期の環濠状の溝に続いて、中期後半の鉄製工具を伴った住居跡などが検出された諏訪神社遺跡や、中期後半の墳墓群である久米山遺跡群などが当遺跡の北西方向に所在する。遺跡の東方には後期初頭の集落である西浦谷遺跡が営まれており、さらにその南方には弥生後期末から古墳時代初頭の墳墓群である権八原遺跡・古墳群が所在する。当遺跡においても、住居遺構こそ確認してはいないものの中期後半から古墳時代初頭にかけての土器群が自然河川内などから一定量出土しており、調査対象地周辺に集落の存在が推定できる。東方の遺跡とは指呼の間であり、何らかの関連が想定される。

古墳時代には、高松平野を代表する前期の前方後円墳である高松茶臼山古墳が北西方向に所在する。２基の竪穴住居式石槨を有し、画文帯神獣鏡や碧玉製鍬形石などの副葬品が出土している。後期古墳としては、県下唯一の石棚を有した巨大な横穴式石室墳である久本古墳、Ｔ字形の横穴式石室を持った滝本神社古墳など特徴的な古墳が所在する。当遺跡北方の山上から山麓にかけては金石山古墳群、平尾古墳群、平尾小古墳群などの小円墳で構成される古墳群が営まれている。

古代には、７世紀代の創建が伝えられる宝寿寺や、始覚寺などが所在する。とりわけ宝寿寺は当遺跡と100mほどしか隔たっておらず、その寺域の一部が当遺跡に含まれている可能性も指摘されている。当遺跡でも７～８世紀にかけての総柱構造を含んだ掘立柱建物跡とともに、当該期の土器群・瓦などが確認されている。これらの土器群の須恵器の中には、当遺跡東方の小谷窯跡、志度・末窯跡の製品が含まれていることが分析結果から導き出されており、消費地における須恵器の搬入状況等の一端が明らかにされてきている。また、当遺跡一帯は『和妙抄』にも記される山田郡内11郷のひとつ宮処郷にあたり、天平勝宝４年（752年）に讃岐国に設置された奈良・東大寺の封戸150戸のうち50戸が山田郡宮処郷に置かれたことが『造東大寺司牒』に記されている。

中世には、15世紀後半の文明年間に前田頼母助宗在が築造した前田城が、当遺跡の北西500mに所在している。



1	諏訪神社古墳	15	宝寿寺跡	29	高尾権現社古墳
2	久米山遺跡群・久米山墓地地区	16	前田東中村遺跡	30	池戸八幡社裏古墳
3	久米池南遺跡	17	金石山古墳群	31	池戸八幡社古墳群
4	西茶臼山１号墳	18	平尾古墳群	32	恵徳寺跡
5	西茶臼山２号墳	19	平尾小古墳群	33	池戸城跡
6	高松茶臼山西古墳	20	椿社古墳	34	風呂谷古墳
7	高松茶臼山古墳	21	深谷古墳	35	香蓮寺跡
8	高松茶臼山東古墳	22	西浦谷１号墳・西浦谷遺跡	36	七ツ塚古墳
9	高松茶臼山南古墳	23	池戸西浦古墳	37	四角寺古墳群
10	久本古墳	24	五輪塔	38	富士の城山頂遺跡
11	北山古墳	25	権八原古墳群	39	始覚寺跡
12	滝本神社古墳	26	権八原遺跡	40	(墓)
13	前田城跡	27	高尾遺跡	41	尾崎塚
14	根子堂遺跡	28	吉尾山古墳	42	高野八幡

第３図　周辺の遺跡(1/25,000)

第２節　既往の調査成果

今回の調査は高松東インターチェンジ建設に伴って実施したもので、高松東道路の南北両側を対象とした。その高松東道路建設に伴う調査対象地は東西約800ｍにも及ぶ長大なもので、西からＡ～Ｇ区に７区分して調査を実施している。以下、調査成果を調査区ごとにまとめる。

Ａ区では、包含層から出土した縄文後期土器、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の土壙墓、古代の掘立柱建物跡群がみられた。特に、８～９世紀を中心とした掘立柱建物跡群は建物方向を揃えるなど規則的に配置されたものであり、それに伴う溝などもみられる。

Ｂ区では、検出された遺構は希薄であったが、北西部分で８～９世紀の掘立柱建物跡や溝を確認している。８世紀の掘立柱建物跡は総柱構造を有している。このほか、縄文時代後期と考えられる自然河川を検出している。

Ｃ区では、縄文後期・晩期土器を含んだ自然河川、円形周溝墓の可能性のある弥生時代の溝、弥生時代後期の井戸、８～12世紀にかけての掘立柱建物跡群、井戸や柵列などがある。自然河川の上位には弥生時代末～古墳時代初頭の土器群とともに鍬や斧の柄、容器、杭といった木製品が出土している。掘立柱建物跡群は調査区西半に集中し、複数時期の重なりが認められる。井戸には曲げ物や板材が井戸枠として使用されている。出土遺物の中には、軒丸瓦を含む多量の瓦片、銅製帯金具、硯、墨書土器などがみられる点は特筆されよう。

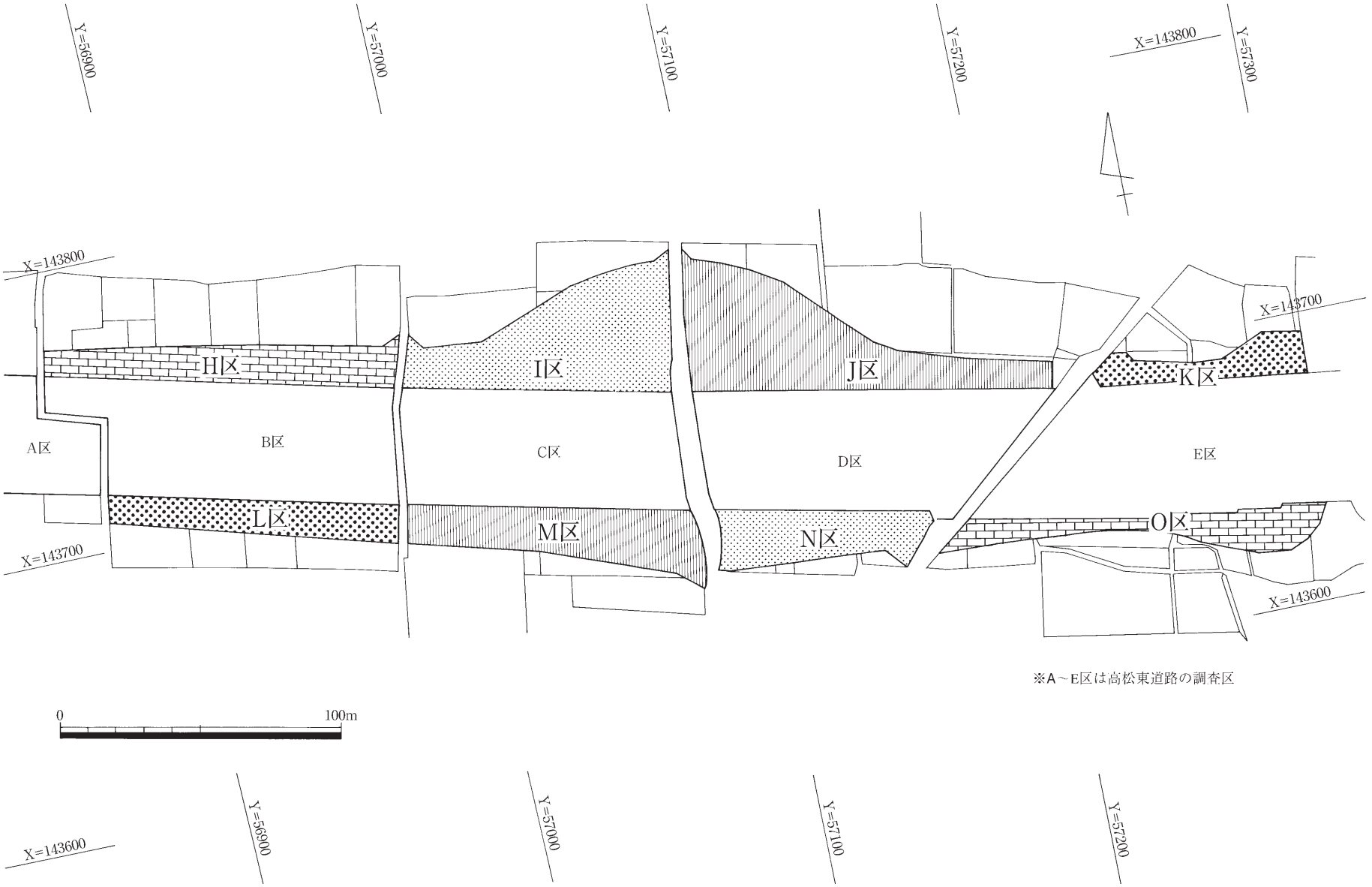
Ｄ区は複数の遺構面が確認されている。下位では縄文時代後期や弥生時代中期から後期の土器を多数含んだ自然河川や溝を検出した。上位では８～10世紀にかけての掘立柱建物跡群、中近世の掘立柱建物跡や溝などがある。古代の掘立柱建物跡群は調査区東寄りに集中しており、Ｅ区から連続するものである。包含層からの出土ではあるが、多量の奈良時代の土器や瓦が認められ、その中には赤色顔料を塗った土師器も含まれていた。

Ｅ区では、弥生時代後期の竪穴住居跡１棟と掘立柱建物跡２棟、古墳時代の方墳の周溝の可能性のある溝、７～８世紀を中心とする掘立柱建物跡群や竪穴住居跡、井戸、10～11世紀にかけての掘立柱建物跡、炭焼き窯などを検出している。10～11世紀の多量の土器群や、包含層からの出土ではあるが軒丸瓦を含んだ多量の瓦片などが出土している。

Ｆ区は、縄文時代晩期の土坑、弥生時代中期の竪穴住居跡や製塩土器のみが出土した土坑、弥生時代後期の多量の土器を含んだ自然河川、７世紀の軒丸瓦を含んだ落ち込み状遺構、10～11世紀の土器焼成をしたとみられる平窯などを検出した。落ち込み状遺構から出土した軒丸瓦は百済系の単弁瓦で、宝寿寺出土と同文である点は注目される。

Ｇ区では、自然河川５条を検出したのみであるが、弥生後期の土器を多量に含んだものや、７～９世紀の斎串や人形、刀形などの木製模造品を含んだものなどがみられる。斎串等は集中して出土しており、祓所的な公的施設の存在が指摘される。

今回の調査地との対応関係をみてみると、東道路調査区のＢ～Ｅ区の南北両側が調査対象地となっている。今回の調査で検出した遺構の中には、東道路調査区の遺構と連続するものも少なからず認められたため、調査区名を継承することも考えたが、南北両側に分断されていることもあり、かえって煩雑になることが想定されたため、連続した調査区名を使用することとした。東道路調査区Ｂ～Ｅ区の区画はそのまま使用し、北側調査区を西からＨ・Ｉ・Ｊ・Ｋ区、南側調査区を西からＬ・Ｍ・Ｎ・Ｏ区とした。詳細な対応は第４図に示している。



第4図　調査区割図(1/2,000)

第３章　調査の成果

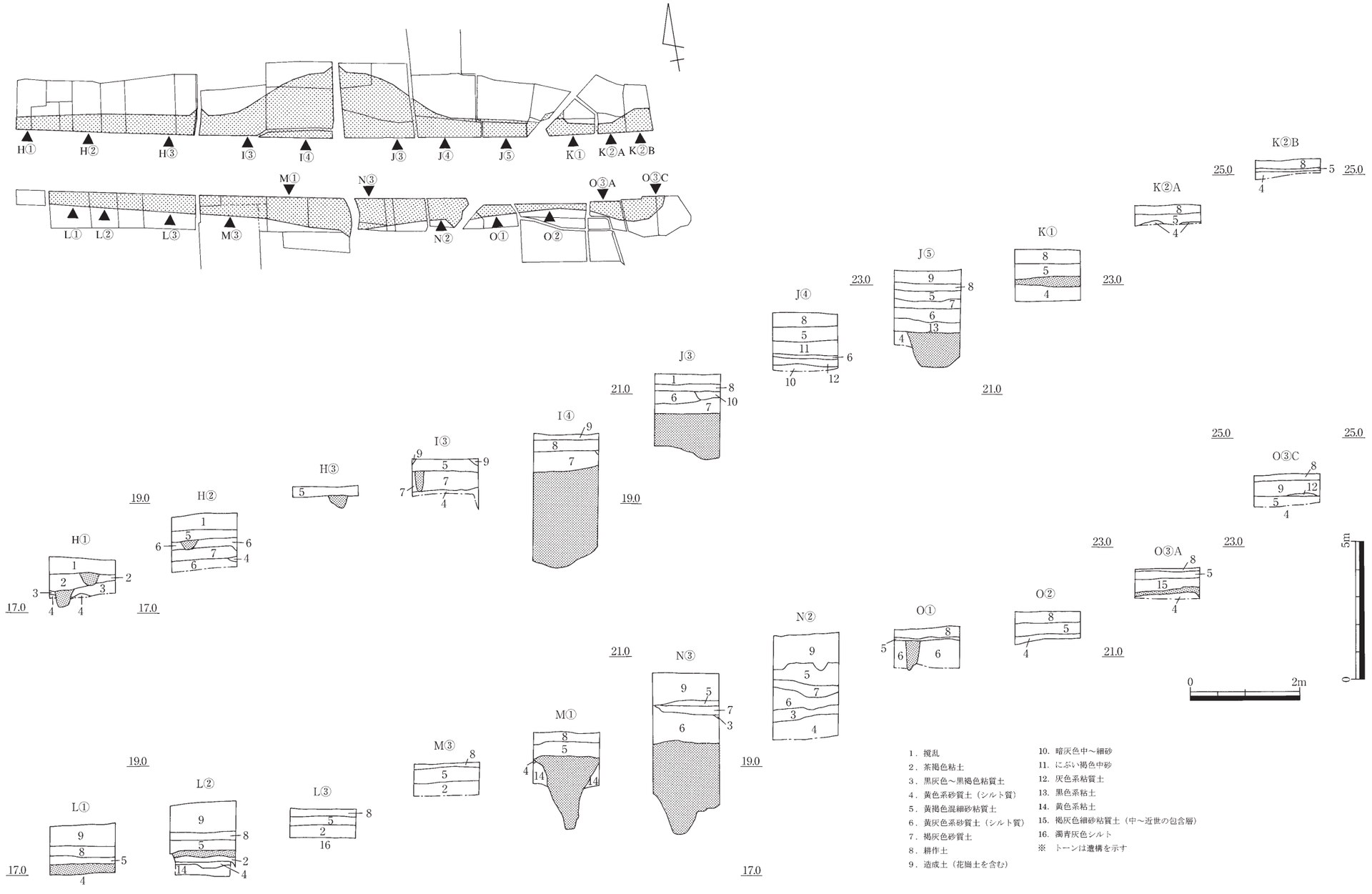
第１節　土層序

調査対象地は扇状地の緩傾斜面に立地しており、現地形は東から西へ（厳密には北東から南西へ）向かって傾斜している。現地形における東西両端の比高は約８ｍを有している。調査の結果、調査区内には複数の自然河川の形成した埋没小谷地形が存在しており、そのあたりにおいては遺構検出面が２面（Ｊ④区西のように部分的には３面存在する小調査区もある）存在する以外は、基本的に１面となっていることを確認した。これらの遺構検出面や土層の堆積関係に基づいて、調査区北半・南半における基本土層序模式図をそれぞれ作成した。

調査区北半を概観してみると、調査区東端のＫ区には安定した地盤である黄色系粘質土層が分厚い堆積をみせている。これは尾根状の高まりに相当し、この粘土層は西に向かうに従って深く潜り込みながら、上面は粘性を失いシルト質に変化していく。この土層上面が遺構検出面となっているのは、調査区東端付近（Ｊ区の一部～Ｋ区）だけであり、それ以外はその上位に堆積した土層中に遺構検出面が存在している。この黄色系粘質土層が再び上がってくるのは調査区西半付近（Ｉ区）で、その間が谷地形となっている。この谷地形を形成した自然河川は、黒色粘土層と灰白色中～粗砂層の堆積の繰り返しが複数みられることから、滞水と流水を繰り返しつつ埋没していったことが判断できる。その埋没層の上位には褐灰色砂質土やにぶい褐色中砂層が堆積しており、それらの土層の上面に古代以降の遺構が認められることから、遅くとも古代以前には埋積作用は終了していたようである。調査区西半（Ｈ区～Ｉ区の一部）にかけても、小規模な自然河川が複数存在しており、自然河川の埋没層の上位には褐灰色砂質土～茶褐色粘質土などが堆積しているが、河川規模の小ささが反映しているからだろうか、中央の河川上の堆積層よりは土が固く締まっている。また、調査区北半ほぼ全面を中～近世の希薄な遺物包含層である黄褐色～褐灰色混細砂粘質土が堆積していたと思われるが、後世の開墾等によって部分的に削平されてしまっている部分がみられる。

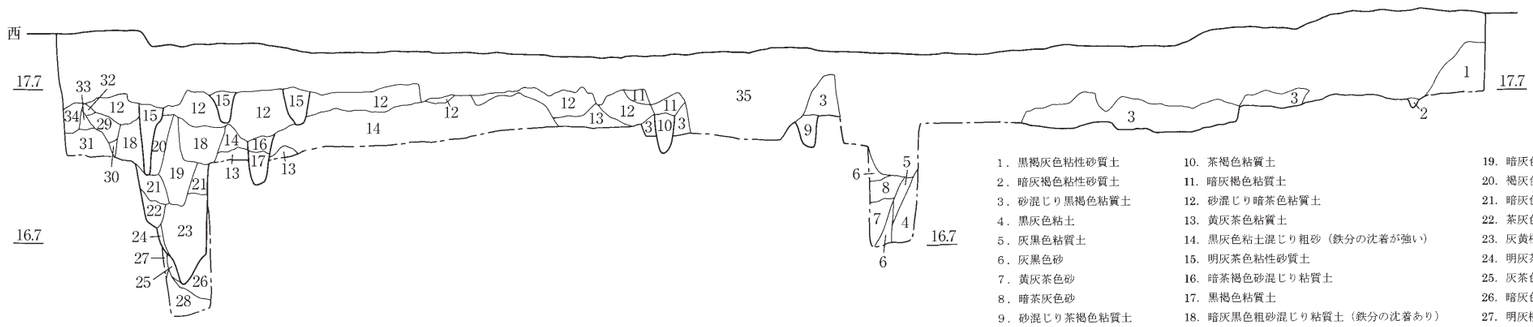
一方、調査区南半の状況を見てみると、北半と基本的には同じ堆積状況を示している。調査区東端（Ｏ区）には北半（Ｋ区）から伸びてくる尾根状の高まりである安定した黄色系粘質土があり、その西方には大きな谷地形が存在している。南半においても中～近世の包含層である黄褐色～褐灰色混細砂粘質土が覆っているが、こちらのほうが後世の開墾等の影響が少なかったためか、ほぼ全面に渡ってみることができる。

土層序等から旧地形を復元してみると、調査区東端には北から南へ延びる尾根状の微高地（Ｊ④東区～Ｋ・Ｏ区）が存在し、その西側は比較的大きな谷地形（Ｉ④区～Ｊ④西区・Ｍ①区～Ｎ区）となり、さらにその西側はやや安定した地盤の扇状地（Ｈ区～Ｉ③区・Ｌ区～Ｍ③区）ということになろう。



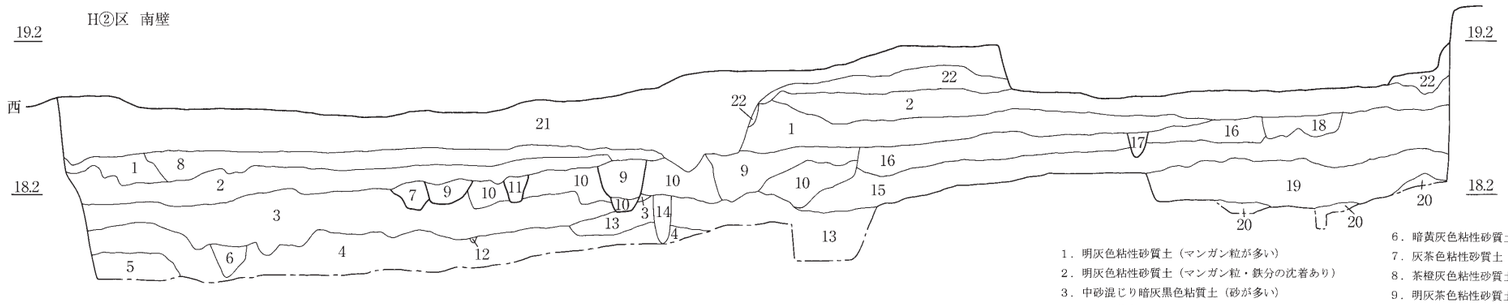
第5図　基本土層序模式図（天地1/80、左右1/160）

H①区　南壁



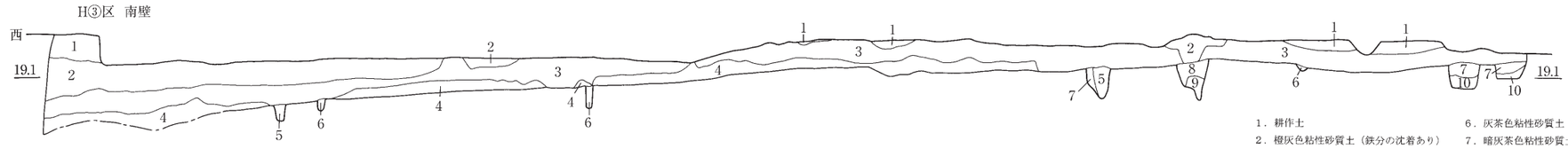
1．黒褐灰色粘性砂質土
2．暗灰褐色粘性砂質土
3．砂混じり黒褐色粘質土
4．黒灰色粘土
5．灰黒色粘質土
6．灰黒色砂
7．黄灰茶色砂
8．暗茶灰色砂
9．砂混じり茶褐色粘質土
10．茶褐色粘質土
11．暗灰褐色粘質土
12．砂混じり暗茶色粘質土
13．黄灰茶色粘質土
14．黒灰色粘土混じり粗砂（鉄分の沈着が強い）
15．明灰茶色粘性砂質土
16．暗茶褐色砂混じり粘質土
17．黒褐色粘質土
18．暗灰黒色粗砂混じり粘質土（鉄分の沈着あり）
19．暗灰色粘性砂（鉄分の沈着あり）
20．褐灰色粘性砂質土
21．暗灰色粘性砂
22．茶灰色粘性砂
23．灰黄褪色砂
24．明灰茶色（粘性）細砂
25．灰茶色細砂
26．暗灰色細砂
27．明灰橙色シルト
28．灰色砂
29．黒褐色砂混じり粘質土
30．砂混じり黒灰茶色粘質土
31．砂混じり茶黄色粘質土
32．茶褐色粘質土
33．明灰茶色粘性砂質土
34．暗褐茶色粘質土
35．撹乱

H②区　南壁



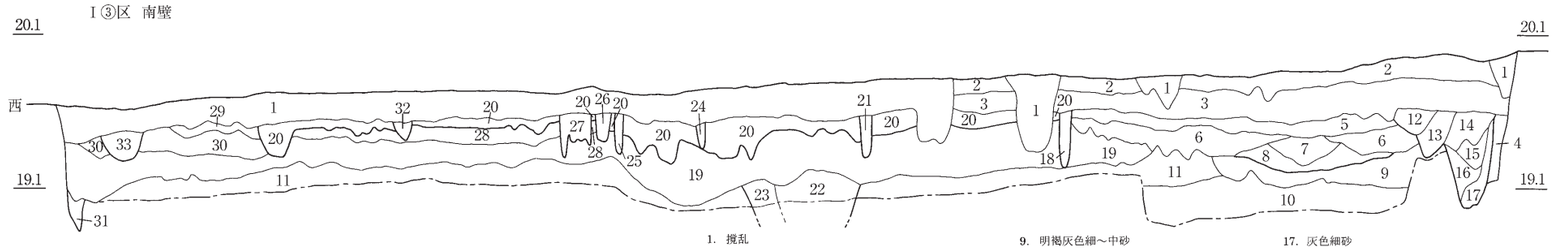
1．明灰色粘性砂質土（マンガン粒が多い）
2．明灰色粘性砂質土（マンガン粒・鉄分の沈着あり）
3．中砂混じり暗灰黒色粘質土（砂が多い）
4．暗灰茶黄色粘性砂質土
5．中砂混じり暗灰色粘質土
6．暗黄灰色粘性砂質土
7．灰茶色粘性砂質土
8．茶橙灰色粘性砂質土
9．明灰茶色粘性砂質土
10．褐灰色粘性砂質土（砂が多く混じる）
11．褐灰色粘性砂質土
12．灰黄色粘性砂質土
13．砂混じり灰黄色粘質土
14．砂混じり暗褐灰色粘質土
15．褐灰色粘性砂質土（10層より砂の含有がより多い）
16．暗灰褐色粘性砂質土（わずかに砂を含む）
17．暗褐灰色粘性砂質土
18．灰褐色粘性砂質土
19．暗黄灰白色粘性シルト
20．暗灰色粘性砂
21．撹乱
22．耕作土

H③区　南壁



1．耕作土
2．橙灰色粘性砂質土（鉄分の沈着あり）
3．茶灰色粘性砂質土（マンガン粒を含む）
4．暗灰褐色粘性砂質土
5．褐灰色粘性砂質土
6．灰茶色粘性砂質土
7．暗灰茶色粘性砂質土
8．暗灰茶色粘性砂質土（マンガン粒を含む）
9．褐灰色粘性砂質土
10．茶灰色粘性細砂質土

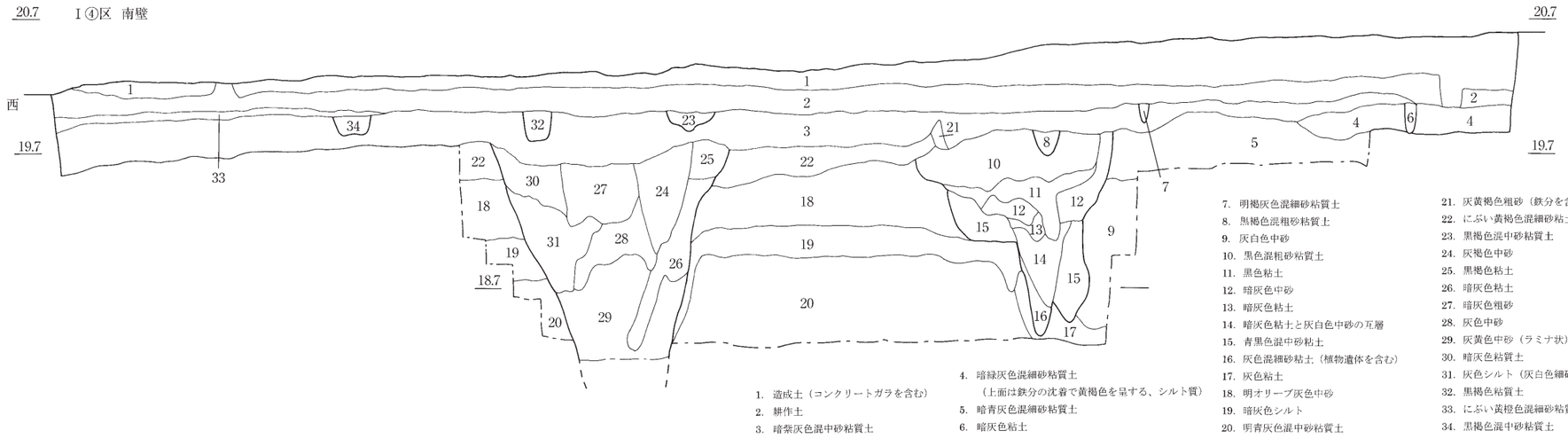
I③区　南壁



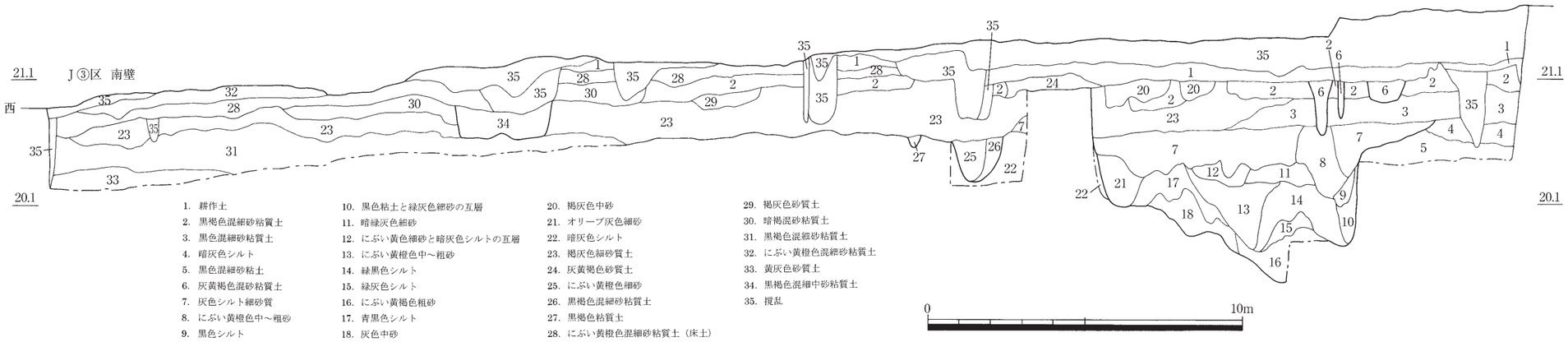
1．撹乱
2．浅黄色混細砂粘質土（鉄分・マンガンが多い）
3．暗赤褐色混細砂粘質土
4．暗赤灰色粘質土
5．褐灰色混細砂粘質土
6．明褐灰色細砂
7．灰色混細砂粘質土（上面は鉄分で黄褐色を呈する）
8．暗青灰色シルト
9．明褐灰色細～中砂
10．灰白色細砂（部分的にグライ化する）
11．黄灰色シルト
12．暗紫灰色混細砂粘質土
13．灰色混細砂粘質土
14．褐灰色シルト
15．灰白色細砂
16．黒褐色混細砂粘質土
17．灰色細砂
18．黄灰色混細砂粘質土
19．褐灰色中砂質土（マンガンが多い）
20．褐灰色混細砂粘質土
21．褐灰色混細砂粘質土
22．暗青灰色混細砂粘土（シルト質、上面は鉄分で黄褐色を呈する）
23．暗青灰色シルト
24．褐灰色混細砂粘質土
25．褐灰色混細砂粘質土（マンガンが多い）
26．明褐灰色中砂
27．褐灰色混細砂粘質土
28．紫黒色混細砂粘質土
29．褐灰色混細砂粘質土（マンガンが多い）
30．褐灰色混細砂粘質土
31．にぶい黄褐色粗砂
32．明褐灰色混細砂粘質土
33．褐灰色粘質土（シルト質）

0　10m

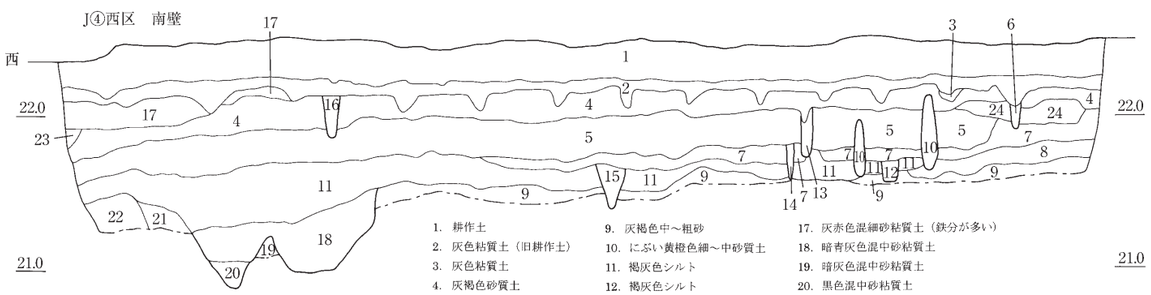
第 6 図　土層断面図①（天地1/40、左右1/160）



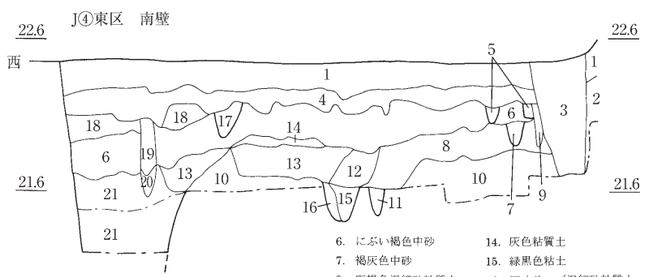
1. 造成土（コンクリートガラを含む）
2. 耕作土
3. 暗紫灰色混中砂粘質土
4. 暗緑灰色混細砂粘質土（上面は鉄分の沈着で黄褐色を呈する、シルト質）
5. 暗青灰色混細砂粘質土
6. 暗灰色粘土
7. 明褐灰色混細砂粘質土
8. 黒褐色混粗砂粘質土
9. 灰白色中砂
10. 黒色混粗砂粘質土
11. 黒色粘土
12. 暗灰色中砂
13. 暗灰色粘土
14. 暗灰色粘土と灰白色中砂の互層
15. 青黒色混中砂粘土
16. 灰色混細砂粘土（植物遺体を含む）
17. 灰色粘土
18. 明オリーブ灰色中砂
19. 暗灰色シルト
20. 明青灰色混中砂粘質土
21. 灰黄褐色粗砂（鉄分を含む）
22. にぶい黄褐色混細砂粘土
23. 黒褐色混中砂粘質土
24. 灰褐色中砂
25. 黒褐色粘土
26. 暗灰色粘土
27. 暗灰色粗砂
28. 灰色中砂
29. 灰黄色中砂（ラミナ状）
30. 暗灰色粘質土
31. 灰色シルト（灰白色細砂がラミナ状に入る）
32. 黒褐色粘質土
33. にぶい黄橙色混細砂粘質土（床土、鉄分が多い）
34. 黒褐色混中砂粘質土



1. 耕作土
2. 黒褐色混細砂粘質土
3. 黒色混細砂粘質土
4. 暗灰色シルト
5. 黒色混細砂粘土
6. 灰黄褐色混砂粘質土
7. 灰色シルト細砂質
8. にぶい黄橙色中～粗砂
9. 黒色シルト
10. 黒色粘土と緑灰色細砂の互層
11. 暗緑灰色細砂
12. にぶい黄色細砂と暗灰色シルトの互層
13. にぶい黄橙色中～粗砂
14. 緑黒色シルト
15. 緑灰色シルト
16. にぶい黄褐色粗砂
17. 青黒色シルト
18. 灰色中砂
20. 褐灰色中砂
21. オリーブ灰色細砂
22. 暗灰色シルト
23. 褐灰色細砂質土
24. 灰黄褐色砂質土
25. にぶい黄橙色細砂
26. 黒褐色混細砂粘質土
27. 黒褐色粘質土
28. にぶい黄橙色混細砂粘質土（床土）
29. 褐灰色砂質土
30. 暗褐混砂粘質土
31. 黒褐色混細砂粘質土
32. にぶい黄橙色混細砂粘質土
33. 黄灰色砂質土
34. 黒褐色混細中砂粘質土
35. 撹乱



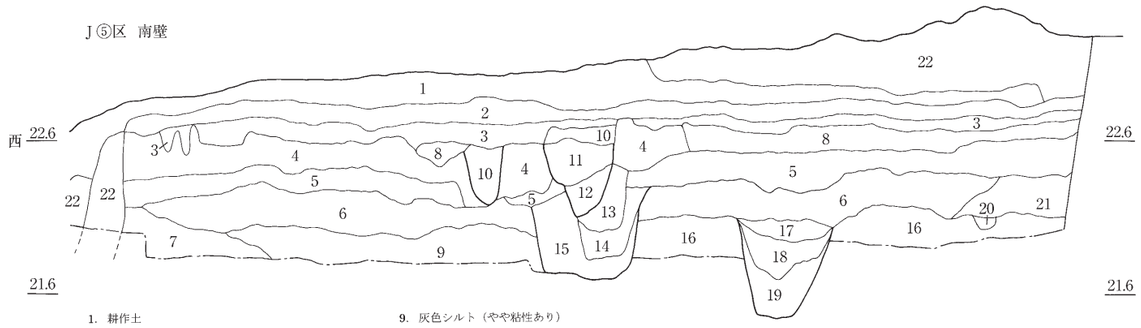
1. 耕作土
2. 灰色粘質土（旧耕作土）
3. 灰色粘質土
4. 灰褐色砂質土
5. 黒褐色粗砂
6. 褐灰色砂質土（細砂質）
7. 灰褐色細砂質土
8. 褐灰色混細砂粘質土
9. 灰褐色中～粗砂
10. にぶい黄橙色細～中砂質土
11. 褐灰色シルト
12. 褐灰色シルト
13. 褐灰色細砂
14. 褐灰色細～中砂質土
15. 褐灰色混中砂粘質土
16. 灰黄褐色混細砂粘質土
17. 灰赤色混細砂粘質土（鉄分が多い）
18. 暗青灰色混中砂粘質土
19. 暗灰色混中砂粘質土
20. 黒色混中砂粘質土
21. 緑黒色砂質土
22. 暗青灰色細～中砂
23. 褐灰色混細砂粘質土
24. 黒褐色粗砂（マンガンを含む）



1. 耕作土
2. 撹乱
3. 撹乱
4. 灰白色混細砂粘質土（床土）
5. 褐灰色細砂
6. にぶい褐色中砂
7. 褐灰色中砂
8. 灰褐色混細砂粘質土
9. 灰色混細砂粘質土
10. 黒褐色混細砂粘質土
11. 青黒色粘土
12. 暗灰色中砂
13. 暗褐色砂質土
14. 灰色粘質土
15. 緑黒色粘土
16. 灰オリーブ混細砂粘質土
17. 浅黄色細砂
18. 灰色中砂
19. 灰色粘質土
20. 灰白色粗砂
21. 灰白色中～粗砂

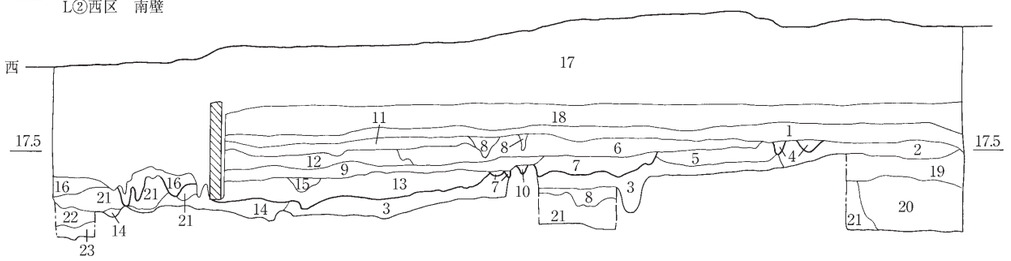
第７図　土層断面図②（天地1/40、左右1/160）

J⑤区　南壁



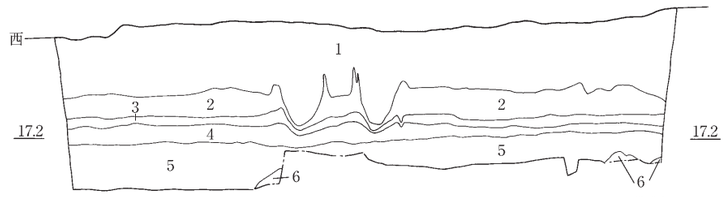
1. 耕作土
2. 灰白色混細砂粘質土（床土、鉄分・マンガンが多い）
3. 灰白色混細砂粘質土（鉄分が少し）
4. にぶい褐色中砂
5. にぶい黄褐色細砂（シルト質）
6. 灰褐色細砂
7. 暗灰色シルト
8. 褐灰色混中砂粘質土（鉄分・マンガンが多い）
9. 灰色シルト（やや粘性あり）
10. 灰色中砂
11. 灰オリーブ色細砂（マンガンが多い）
12. にぶい褐色中～粗砂
13. にぶい黄橙色粗～中砂
14. 褐灰色中～細砂
15. 暗灰色混細砂粘質土（鉄分が多い）
16. 灰黄色シルト
17. 黒褐色混細砂粘土
18. 暗灰色中砂
19. 暗灰色粘土
20. 灰色中砂
21. 黒色粘土
22. 撹乱

L②西区　南壁



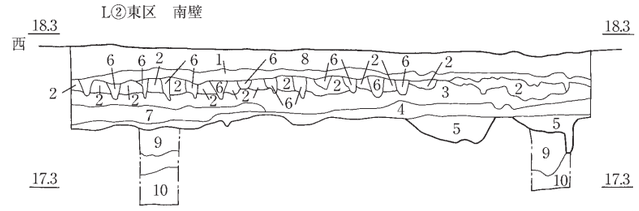
1．明灰色砂質土（鉄分が多い）
2．褐色砂質土
3．褐灰色砂質土
4．灰褐色砂質土
5．褐灰色粗砂混粘質土
6．明褐色砂質土
7．褐色粗砂混粘土
8．灰色砂質土
9．灰色砂混粘質土
10．明褐色砂質土
11．明灰色砂質土（上面に鉄分が混じる）
12．明灰色砂質土
13．暗褐色（粗砂混）粘土
14．灰色粘土（粗砂が混じる）
15．灰褐色粗砂混粘土（砂が多い）
16．明灰色砂混粘質土（鉄分を上面に含む）
17．造成土
18．耕作土
19．灰褐色砂質土
20．褐灰色砂
21．黄灰色砂混粘土
22．灰色砂混粘土（ベース）
23．黄色粘土

L①区　南壁



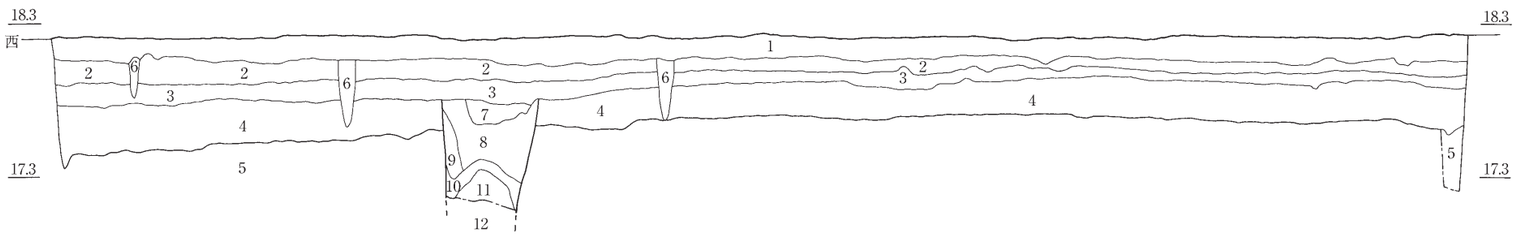
1．造成土
2．耕作土
3．黄褐色粘質土
4．淡灰色粘質土
5．暗茶褐色粘質土
6．濁黄灰色シルト（地山）
7．淡茶褐色粘質土

L②東区　南壁



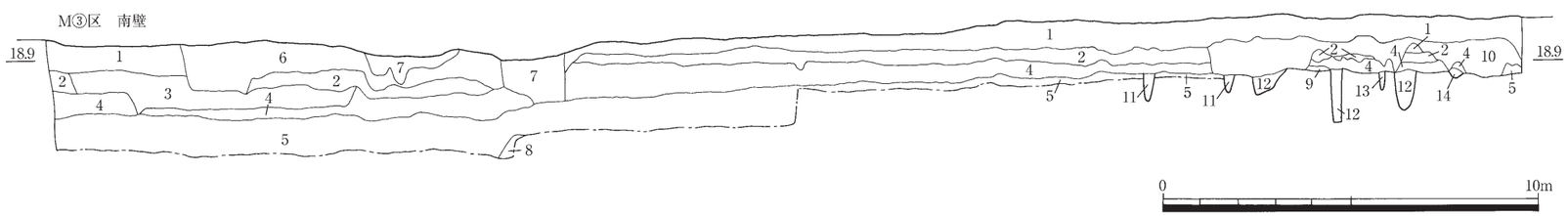
1．灰色砂質土（鉄分と集石がみられる）
2．褐色砂質土
3．明灰色砂質土
4．明褐灰色砂質土（鉄分が混じる）
5．茶褐色砂混粘質土
6．灰褐色砂質土
7．褐色砂
8．耕作土
9．灰色砂質土
10．黄灰色砂質土

L③区　南壁



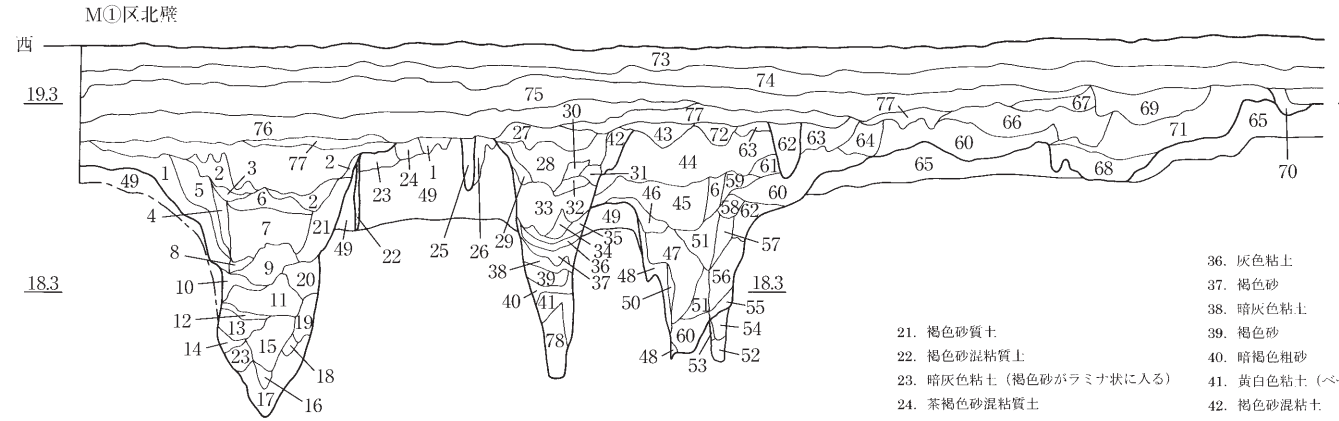
1．耕作土
2．黄褐色粘質土（鉄分が多い）
3．淡黄灰色粘質土
4．暗茶褐色混細砂粘質土
5．濁青灰色シルト（地山）
6．撹乱
7．淡灰褐色混細砂粘質土（マンガンが多い）
8．暗茶褐色粘質土
9．茶褐色粘質土（粘性が強い）
10．濁黄灰色砂質土
11．濁灰青色混細砂粘土
12．暗茶褐色粘質土

M③区　南壁

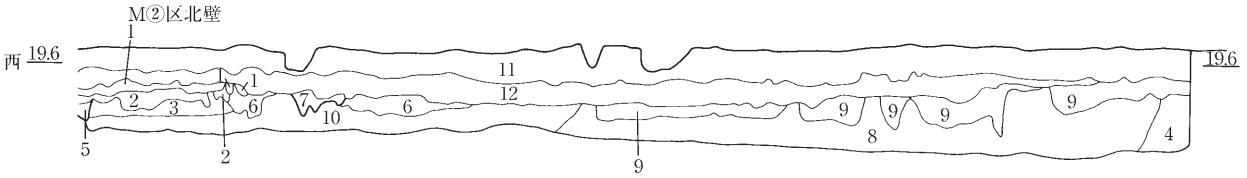


1．耕作土
2．にぶい黄橙色混細砂粘質土（鉄分が少し混じる）
3．にぶい黄橙色混細砂粘質土
（灰褐色・灰色粘質土小塊が混じる）
4．にぶい橙色混細砂粘質土（鉄分が多い）
5．黒色混中砂粘質土
6．灰色混細砂粘質土（灰褐色・黄色粘質土小塊が混じる）
7．花崗土
8．青黒色混細砂粘質土
9．浅黄色粘土
10．赤黒色混細砂粘質土
11．黒褐色混細砂粘質土
12．褐灰色混砂粘質土
13．褐灰色混細砂粘質土
14．黄灰色混細砂粘質土

第８図　土層断面図③（天地1/40、左右1/160）



1．明褐色粗砂混砂質土
2．明褐色粗砂（粘質土が混じる）
3．褐色粗砂
4．褐色細砂（褐色砂が筋状に入る）
5．褐色粗砂混粘質土
6．褐色粗砂
7．褐色砂（暗灰色粘土が筋状に入る）
8．暗灰色粘土
9．褐色粗砂（暗灰色粘土がラミナ状に入る）
10．暗灰色粘土
11．暗褐色粗砂
12．暗灰色粘土
13．褐色砂
14．暗灰色粘土
15．褐色粗砂
16．暗灰色粘土（黄色粘土ブロックが混じる）
17．褐色粗砂
18．暗茶色粘土ブロック
19．暗灰色粘土（赤茶色シルト・褐色砂がラミナ状に混じる）
20．暗灰色粘土（粗砂が混じる）
21．褐色砂質土
22．褐色砂混粘質土
23．暗灰色粘土（褐色砂がラミナ状に入る）
24．茶褐色砂混粘質土
25．明灰色砂質土
26．赤茶色粗砂
27．明褐色砂質土
28．明灰色粗砂
29．明褐色シルト
30．褐色粗砂
31．褐色砂質土
32．褐色シルト
33．赤茶色粗砂
34．暗褐色砂混粘土
35．茶褐色砂
36．灰色粘土
37．褐色砂
38．暗灰色粘土
39．褐色砂
40．暗褐色粗砂
41．黄白色粘土（ベース）
42．褐色砂混粘土
43．茶褐色砂
44．褐色砂混粘土
45．褐色砂混粘土（砂が多い）
46．黄茶褐色砂混粘土
47．暗褐色砂混粘土
48．暗灰褐色粘土
49．黄色粘土
50．灰褐色砂
51．黒灰色粗砂混粘土
52．暗灰褐色砂
53．明茶色粘土ブロック
54．明褐色砂
55．暗灰褐色砂
56．暗灰色粘土
57．暗茶灰色粘土
58．褐色砂質土
59．褐色砂質土
60．暗茶褐色粘土
61．暗茶褐色粘土（砂を少し含む）
62．暗褐色砂混粘質土
63．褐色粗砂混粘質土
64．灰褐色砂質土
65．黄褐色粗砂混粘質土
66．茶褐色粗砂混粘質土
67．茶褐色粗砂混粘質土（砂が多い）
68．暗褐色粘土
69．灰褐色粗砂
70．灰色砂質土
71．茶褐色砂混粘質土
72．褐色粗砂混粘質土
73．耕作土
74．耕作土
75．黄褐色砂質土
76．灰褐色砂質土
77．灰白色中砂
78．暗灰色粗砂



1．明灰色砂質土（鉄分が混じる）
2．灰色粗砂（茶褐色土が混じる）
3．明黄茶褐色粘質土
5．褐灰色粘質土
6．茶灰色砂混粘質土
7．暗茶褐色砂混粘質土
8．灰黄色砂混粘質土
9．灰色砂混粘質土（黄色土が少し混じる）
10．黄灰色砂混粘質土
11．耕作土
12．耕作土

0　10m

第９図　土層断面図④（天地1/40、左右1/160）

第２節　Ｈ区の調査

１．調査区の概要

南北幅10～16m、東西長125mの範囲を占めるＨ区は、3つの小調査区に分けて調査を行った。高松東道路調査Ｂ区の北側に隣接する調査区である。標高はおおよそ18～19.6mで、東西両端で約1.6mの標高差を有する。調査前は田畑や宅地として利用されており、Ｈ①区とＨ②区の境には後世の削平による約60㎝の段差が存在するが、Ｈ②区とＨ③区はほとんど比高差がない。

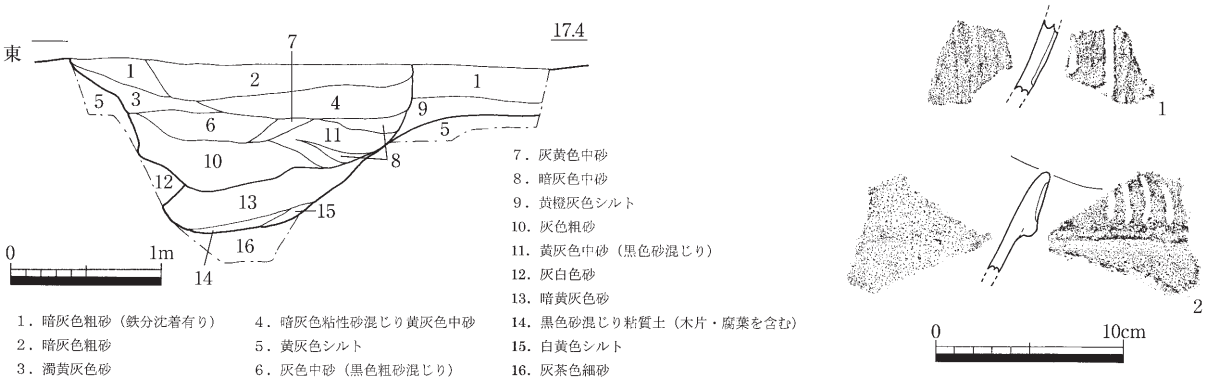
Ｈ区では遺構検出面を１～２面確認している。Ｈ①区およびＨ②区西端付近では上から第１面が概ね古代以降、第２面が概ね古代以前で、それ以外は１面である。Ｈ①区は宅地などに伴う現代の撹乱が第２面まで及んでいる箇所も認められる。

２．調査の成果

（１）縄文時代の遺構・遺物

Ｈ①SR01（第10図）

Ｈ①区西端、第２面で確認した。検出長6.4m、幅3.3m、深さ1.3mの規模を有する。埋土はほとんどが中～粗砂で、いくどかの流水によって埋没したことが想定できる。最下層に堆積している黒色砂混じり粘質土中には小さな木片と木の葉が含まれていた。埋土中から縄文後期土器１・２が出土している。１は深鉢の体部下半で太い沈線文が施されている。２は低い山形口縁を持つ縁帯文土器の深鉢で口縁部外面には太い沈線文が施されている。いずれも縄文後期前半の永井Ⅰ式に相当する。



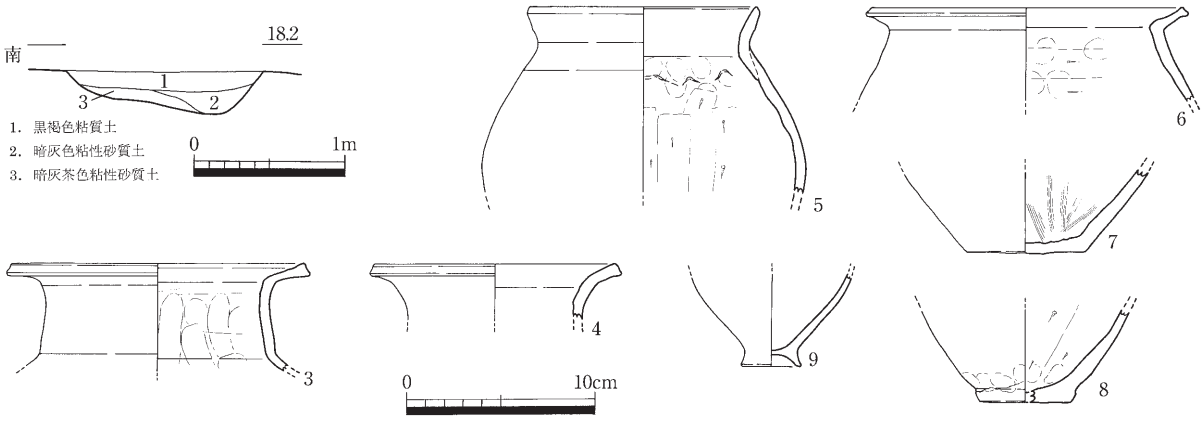
第10図　Ｈ①SR01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

（２）弥生時代の遺構・遺物

Ｈ②SD25（第11図）

Ｈ②区西半、第２面で確認した。検出長15.8m、幅2.2m、深さ0.28mの規模を有する。北東から南西方向に調査区内を横切り、Ｈ①SD20と連続するとみられる溝状遺構である。断面形状は浅いＵ字形を呈する。

出土遺物は３～９の弥生土器がある。３・４は壷で、直行する頸部に大きく外反する口縁部をもつ。５～８は甕で、５はなで肩の体部上半に直立気味の口縁部が付く。９は台付小型鉢で、口縁部を欠損している。いずれの土器も磨滅しており、上流から流されてきたものとみられる。３や６の形態から、弥生時代後期後半に位置づけられる。

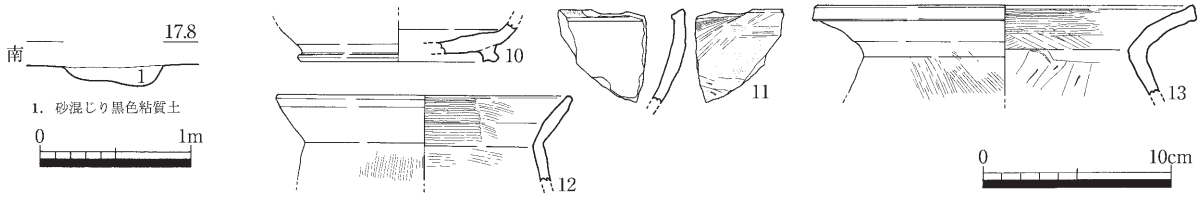


第11図　H②SD25断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SD20（第12図）

H①区東半、第２面で検出した、検出長21.5m、幅0.68m、深さ0.13mの規模を持つ溝状遺構である。概ね東西方向を有し、先述したH②SD25と連続するものとみられる。断面形状は浅いU字形を呈している。

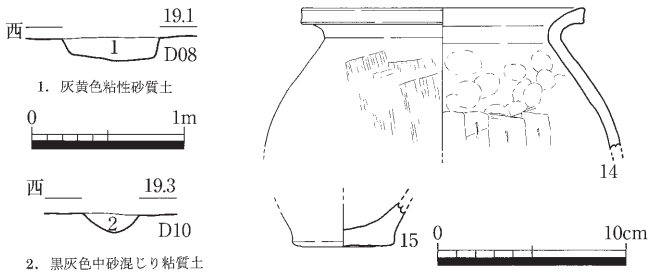
出土遺物として、10～13の土器が取り上げられていた。10は須恵器椀の底部、11は赤彩を施した痕跡の残る土師器小片、12・13は土師器甕である。これらは８～９世紀の土器で、明らかに後出する資料と理解でき、混入と判断できる。H①SD20を検出したH①区東半は後世の削平が著しく、また撹乱を受けているため、後世の遺物が混入したものであろう。



第12図　H①SD20断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SD08（第13図）

H③区、南東付近で検出した。検出長2.1m、幅0.68m、深さ0.16mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は浅い逆台形を呈する。埋土中から弥生土器甕の口縁部14と底部15が出土している。14の形状から弥生時代後期後半に位置づけられる。



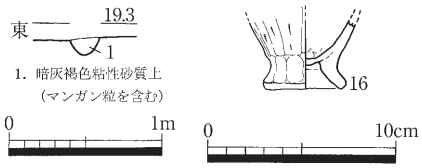
第13図　H③SD08･10断面図(1/50)、SD08出土遺物(1/4)

H③SD10（第13図）

H③SD08の東隣で検出した。検出長2.2m、幅0.45m、深さ0.13mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈する。図化することはできなかったが、弥生時代後期とみられる土器小片が出土している。

H③SD11（第14図）

H③区東南隅で検出した、検出長1.8m、幅0.3m、深さ0.11mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状はU字形を呈しており、H③SX01の埋没後に掘られている。16は埋土から出土した製塩土器の脚部である。弥生時代後期と位置づけられよう。

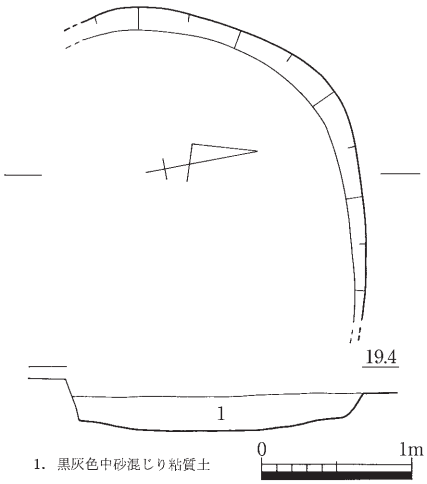


第14図　H③SD11断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

H③SX01（第15図）

H③区の東南隅で検出したが、一部は調査区外へ続いているため、全体の形状等については判明していない。長径2.1m、短径1.9m、深さ0.23mの規模を持つ土坑のような形状を呈していると推定される。

土器細片がわずかに出土したのみで、遺物からの年代の特定は困難だが、H③SD11との先後関係から、弥生時代後期以前の遺構と判断できる。

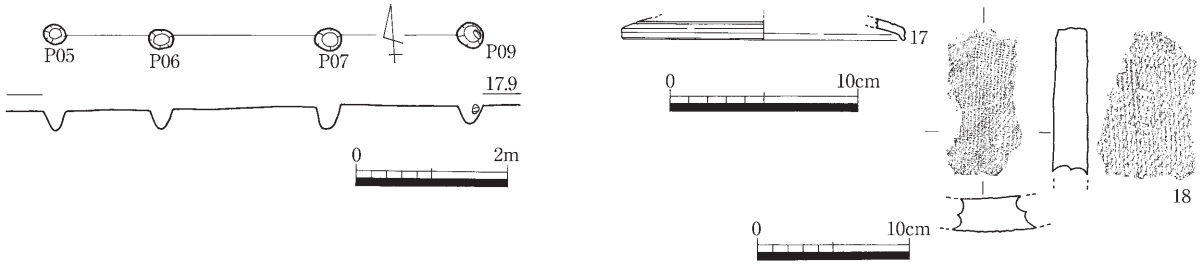


第15図　H③SX01平・断面図（1/50）

（3）古代の遺構・遺物

H①SA01（第16図）

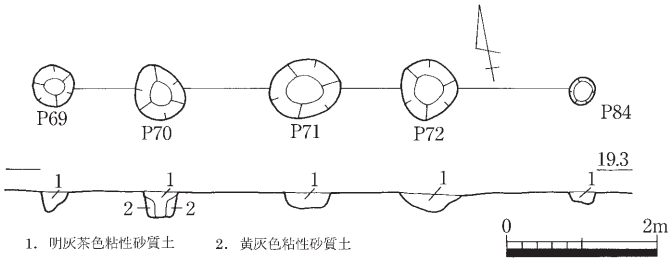
H①区西半、第1面で検出した3間の柵列である。長さ5.5mを測り、方位はN86.5°Wの方向を有している。南に近接して掘立柱建物跡H①SB01が存在しているが、方向が異なることから、それに伴う柵列ではないと判断できる。SP09から須恵器蓋17が、SP06から須恵質の平瓦18が出土している。17の口縁端部形状から9世紀代と考えられる。



第16図　H①SA01平・断面図（1/100）、出土遺物（1/4、1/5）

H③SA01（第17図）

H③区中央やや東寄りで検出した。現状では4間の柵列として復元したが、周囲には多数の柱穴が存在しており、掘立柱建物跡の一部に相当する可能性もある。長さは7.1mで、N79°Wの方向を持つ。図化できなかったが、9～10世紀頃と思われる土器片少量が出土している。

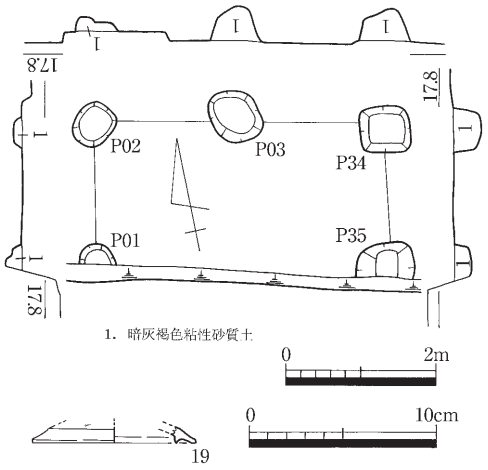


第17図　H③SA01平・断面図（1/100）

H①SB01（第18図）

H①区第１面の南西隅付近で確認した２間×１間以上の掘立柱建物跡である。調査区外南方へ続いているために、全容は判明していないが、柱穴の間隔から判断すると、桁間を南北にもった南北棟の建物と思われる。東道路調査のＢ区SB01（総柱構造）の北方に存在していた柱穴と組み合って２間×３間の建物を構成する可能性が高い。東片の柱穴２基は方形の柱穴掘り方を有している。建物主軸はＮ10.5°Ｅの方向を有し、床面積は7.41㎡以上を測る。

19はSP03から出土した須恵器蓋の口縁部である。かえりの形状から７～８世紀の年代が想定される。



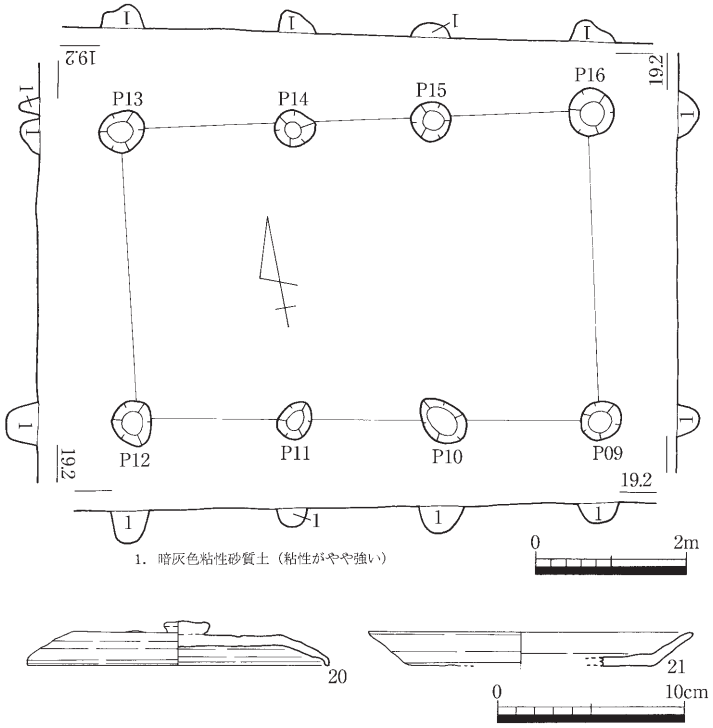
第18図　H①SB01平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4）

H③SB02（第19図）

H③区ほぼ中央で確認した１間×３間の東西棟である。東辺の梁間が西側に比べてやや広いために、全体的にやや台形に近い形状を示す。6.2ｍ×3.9ｍの規模で、床面積は24.2㎡を測る。建物主軸はＮ81.5°Ｗの方向を有している。

H③SB04と西側1/3が重なっているが、両建物の先後関係を示すような状況は確認できない。

20はSP10から出土した須恵器蓋である。21はSP16から出土した須恵器皿である。いずれも９世紀代のものと考えられる。

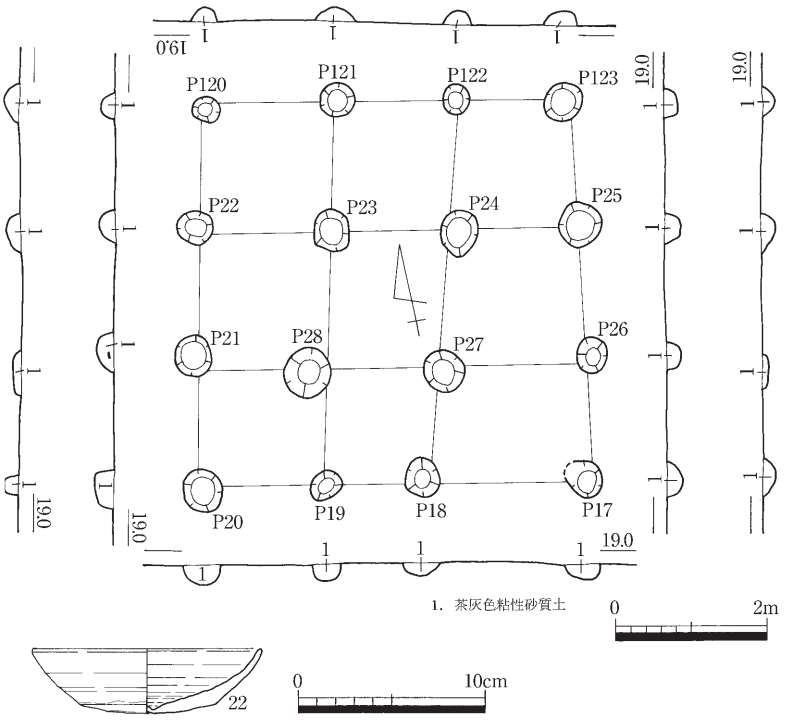


第19図　H③SB02平･断面図（1/100）、出土遺物（1/4）

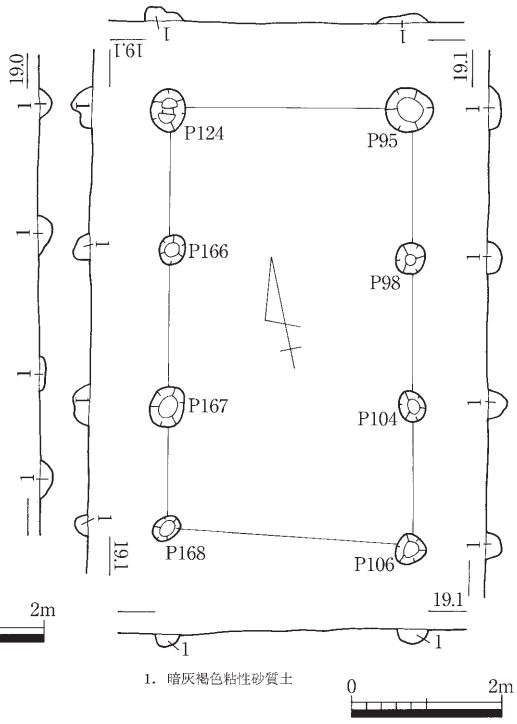
H③SB03（第20図）

H③区中央やや西寄りで確認した３間×３間の総柱構造を持つ掘立柱建物跡である。5.1ｍ×5.1ｍの規模で、床面積は26.01㎡を測る。建物の東西辺（南北方向）を建物主軸とした場合、Ｎ11°Ｅの方向を有する。全体の平面形は正方形に近いが、内部を区画する柱穴列が斜めに歪んでいるため、視覚的な印象としては、不整な感じを受ける。東辺の一部がH③SB04と重複しているが、H③SB03東南隅の柱穴SP17がH③SB04南西隅の柱穴SP168と一部重なっている点を根拠にすれば、H③SB03がH③SB04に先行する建物と判断できる。

22はSP21から出土した須恵器杯で、形状から８世紀のものと考えられる。



第20図　H③SB03平･断面図(1/100)、出土遺物(1/4)



第21図　H③SB04平･断面図(1/100)

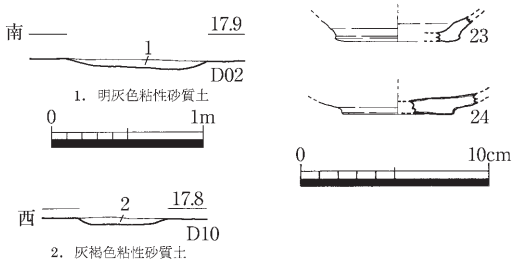
H③SB04（第21図）

H③区ほぼ中央、先述したH③SB02・03と重なって検出した1間×3間の南北棟である。3.3m×5.8mの規模で、床面積は19.14㎡を測る。建物主軸はN12°Eの方向を有する。

図化することはできなかったが、9～10世紀頃と考えられる土器片少量が柱穴から出土している。

H①SD02（第22図）

H①区西半、第1面で確認した、検出長14.4m、幅0.96m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿状を呈し、N82°Wの方向を有する。埋土から土師器皿23と京都産の可能性がある緑釉陶器杯24が出土しており、9世紀の年代が想定される。



第22図　H①SD02･10断面図(1/50)、SD02出土遺物(1/4)

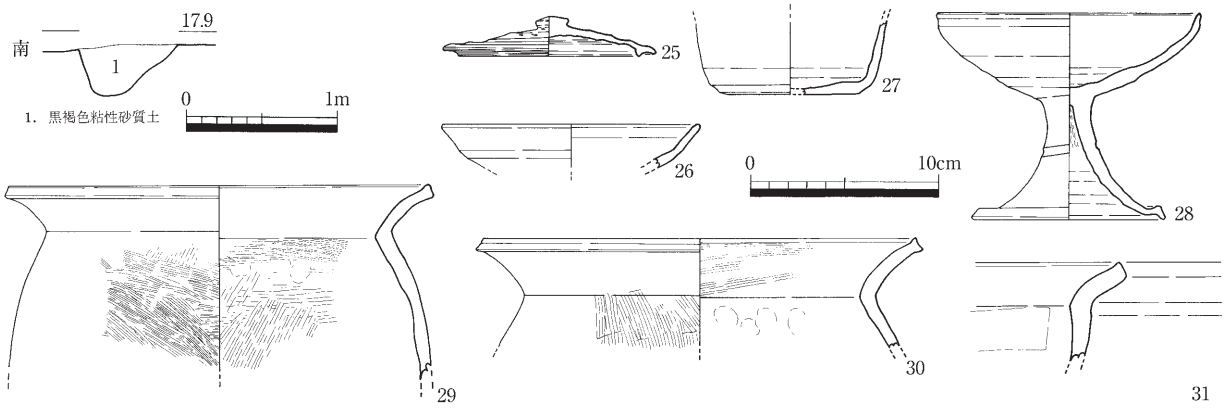
H①SD10（第22図）

H①区第1面、中央付近で確認した、検出長3.6m、幅0.58m、深さ0.04mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿状を呈し、N14°Eの方向と、先述したH①SD02とはほぼ直角の方向を有する。調査区南方に続いており、東道路調査B区の溝状遺構に連続する可能性がある。図化できなかったが、9～10世紀とみられる須恵器片等が出土しており、H①SD02とほぼ同年代が想定される。

H①SD12（第23図）

H①区第1面東半で検出した、検出長7.4m、幅0.7m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。緩やかに弧を描いており、調査区南壁と接する付近で鈍角に南方へ角度を変えて、調査区外へ伸びている。

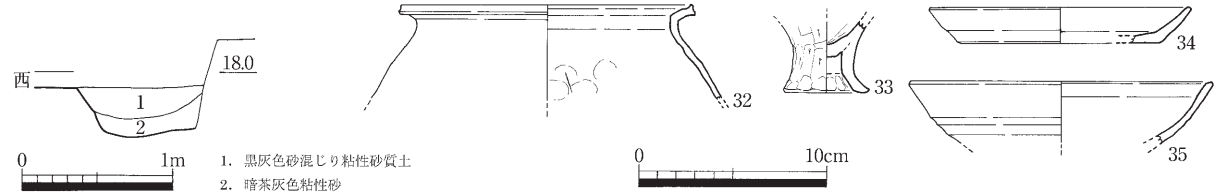
埋土中からは25～31が出土している。25は須恵器蓋でかえりが口縁よりも下方に突出している。26・27は須恵器杯、28は須恵器高杯である。29・30は調整に細かいハケメを多用した土師器甕である。31は土師器土鍋の口縁部である。時期的に後出する31は混入品と理解できるので、この溝状遺構は25～30の形状などから７～８世紀の年代が想定される。



第23図　H①SD12断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SD14（第24図）

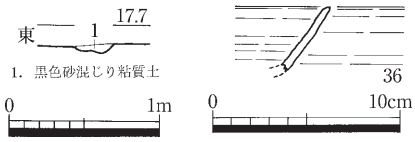
H①区第１面、東端付近で検出した、検出長6.2m、検出幅0.9m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は逆台形を呈し、N10°Eの方向を有する。底面の高さは北のほうが浅いため、後世の削平により途中で途切れているが、南方は調査区外へと連続している。埋土中からは32～35が出土した。混入したと判断できる弥生土器甕32と製塩土器33を除く、須恵器皿34・須恵器杯35の形状から、９～10世紀の年代が想定できる。



第24図　H①SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SD17（第25図）

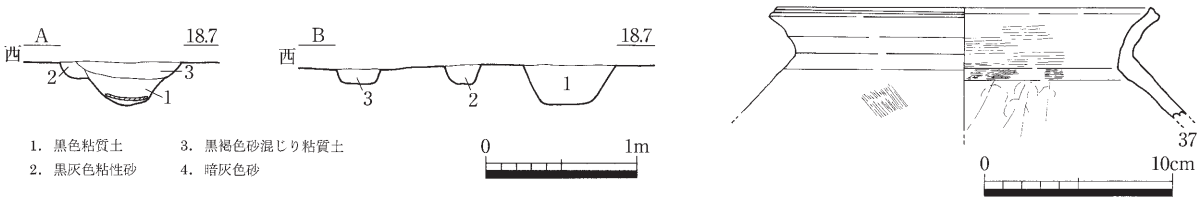
H①区第２面、中央付近で検出した、検出長3.7m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。わずかに弧を描いており、中央をH①SX03によって壊されている。36は須恵器杯で、８～９世紀の年代が想定される。



第25図　H①SD17断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SD18（第26図）

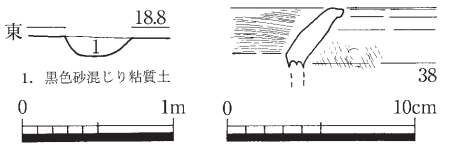
H①区第２面中央で確認した、検出長5.3m、北端の幅2.7m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。北端は撹乱によって乱されているため詳細は判明しないが、中央から南にかけては３条に分かれている。いずれも断面形状は逆台形に近い。37は外面にハケメ調整を残した土師器甕で、８～９世紀の年代が想定される。



第26図　H①SD18断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD05（第27図）

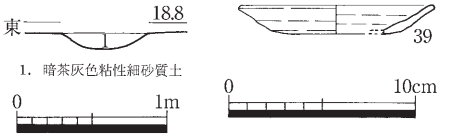
H②区第１面東端で検出した、検出長4.3m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。わずかに蛇行しているが概ねN18°Eの方向を有し、断面形状は浅いU字形を呈している。38は土師器甕である。



第27図　H②SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD06（第28図）

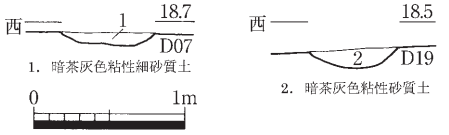
H②区第１面東端で検出した、幅0.8m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。H②SD05の埋没後に掘られ、H②SD07とは連続していた可能性が高い。39は土師器小皿で、11世紀代のものとみられる。



第28図　H②SD06断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD07（第29図）

H②区第１面東端で検出した。出土遺物はみられないが、H②SD06との連続性が考えられることから、同時期に機能していたと想定できる。



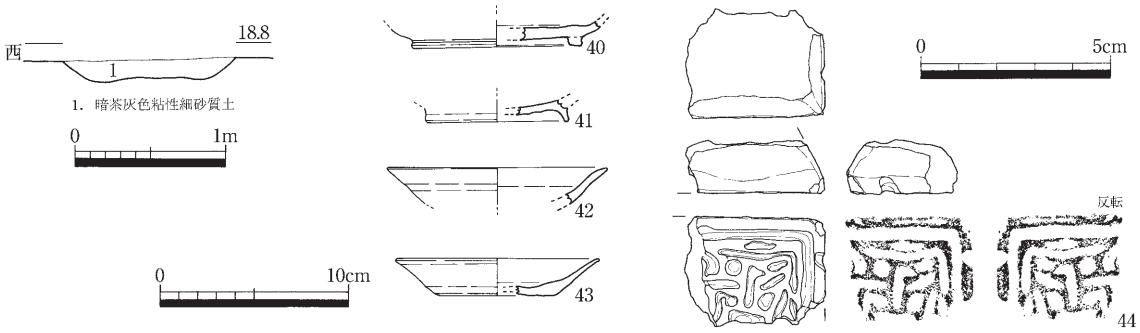
第29図　H②SD07･19断面図(1/50)

H②SD19（第29図）

H②区第１面西半で検出した、検出長9.5m、幅0.8m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面は浅いU字形を呈し、N９°Eの方向を有している。東道路調査B区の溝状遺構に連続する可能性がある。図化できなかったが、10～11世紀の範囲と想定のできる遺物がわずかに出土している。

H②SD08（第30図）

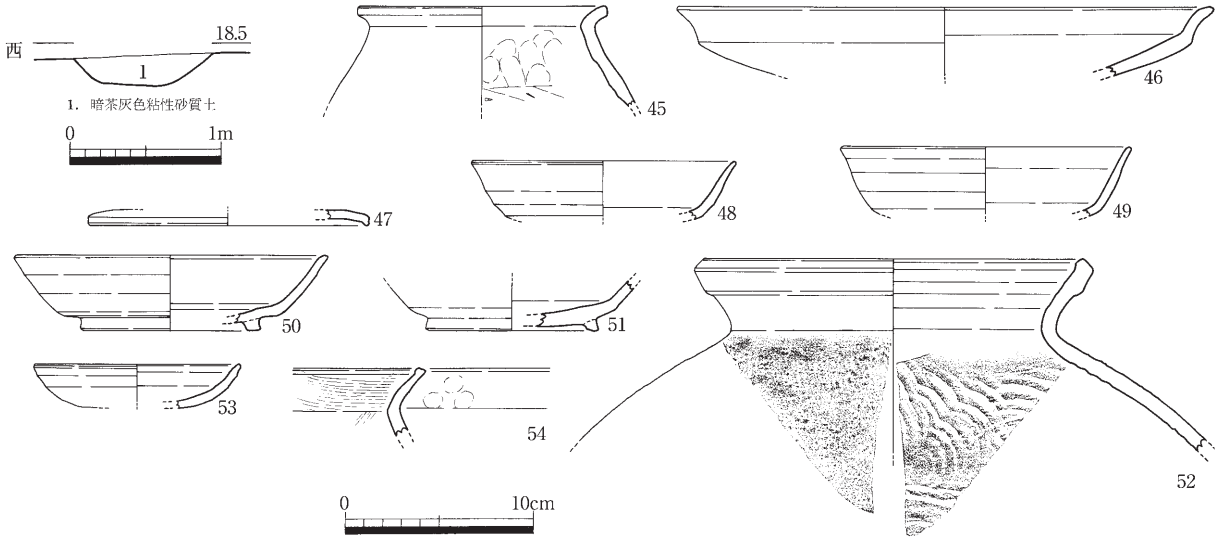
H②区第１面、調査区東半で確認した、検出長9.2m、幅1.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は丸みを帯びた逆台形を呈し、N８°Eの方向を有する。埋土中から40～44の遺物が出土している。40は須恵器椀、41は土師器椀、42・43は土師器小皿である。40は９～10世紀の年代が、42・43は11世紀代の年代が想定されるが、ここでは後者を溝状遺構の年代と想定しておきたい。44は陶印の一部である。紐を欠損するなどしているが、焼成は良好で硬い須恵質のため、印面はさしたる磨滅も受けずに、ヘラなどで刻まれた文字がはっきりと残っていた。全体が残っていないという資料的な制約が大きいため確定できないが、「寳」（註１）の一部である可能性がある。なお、陶印の年代については、整理作業で初めて認識されたこともあり、伴出遺物が不明であるため、溝状遺構の年代より古いもの、というところまでしか絞り込めない。



第30図　H②SD08断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

H②SD20（第31図）

H②区中央やや西寄り、第１面で確認した、検出長9.9m、幅1.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆台形を呈し、Ｎ８°Ｅの方向を有する。埋土中から45～54が出土している。45は弥生土器甕、46は弥生土器高杯で、弥生時代後期後半のものである。これら２点は磨滅が著しく、混入したものと判断される。47は須恵器蓋で口縁端部を折り曲げてかえりとしている。48・49は須恵器杯、50・51は須恵器椀である。52は須恵器甕で口縁端部を肥厚させ、体部内面には当て具痕が明瞭に残る。53は土師器の椀か杯、54は土師器甕で明瞭なハケメ調整がある。形状から、概ね８世紀代の範囲で考えることができよう。

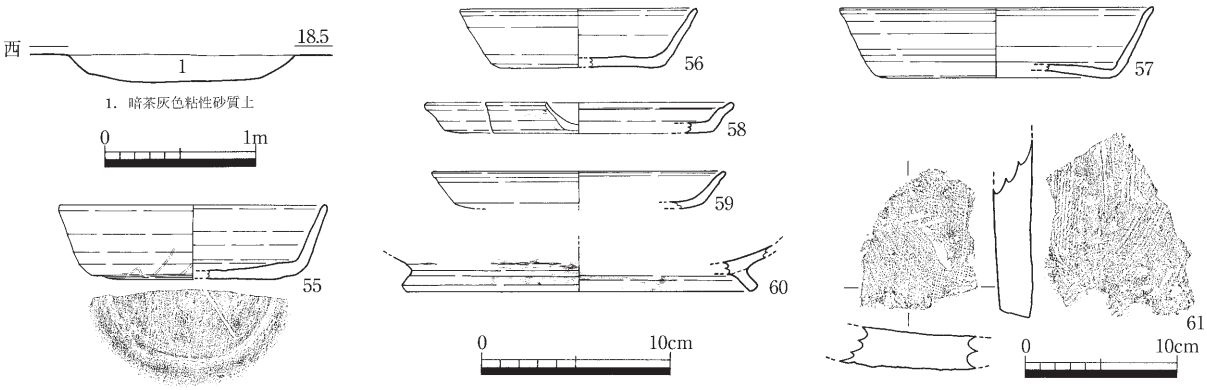


第31図　H②SD20断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD21（第32図）

H②区中央付近、第１面で確認した、検出長9.4m、幅1.9m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い台形を呈し、Ｎ８°Ｅの方向を有する。この方向はH②SD20と同じであり、両者は約１mの間隔をもって並行している。東道路調査Ｂ区の溝状遺構に連続する可能性がある。

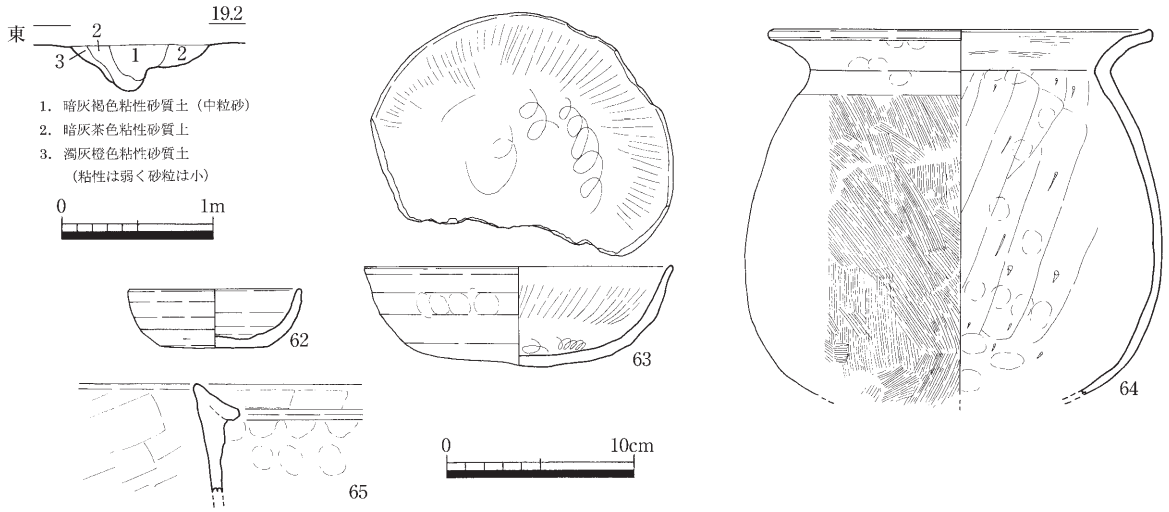
55～61は埋土から出土した遺物である。55～57は須恵器杯である。55は底面に直線のヘラ記号の一部が遺存している。58・59は土師器皿で、ともに内外面に赤彩の痕跡が残る。60は高台の付いた土師器皿と思われ、内外面に赤彩の痕跡が認められる。61は須恵質の平瓦である。これらの資料からH②SD21も８世紀の年代が与えられ、H②SD20・21は同時期に併存していたことがわかる。



第32図　H②SD21断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)

H③SD03（第33図）

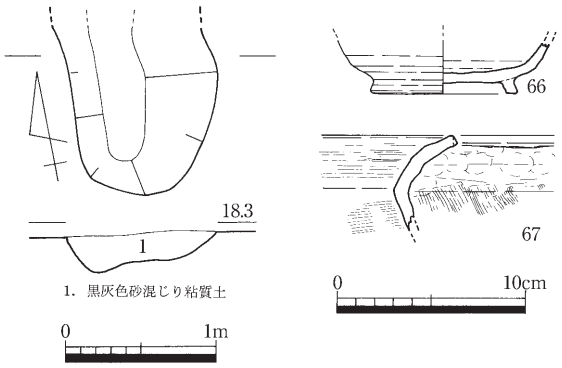
H③区東半で検出した、検出長11.1m、幅1.1m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は歪な三角形を呈しており、Ｎ９°Ｅの方向を有する。東道路調査Ｂ区SD06に連続する可能性がある。埋土中から62～65が出土した。62は須恵器杯で内面に自然釉が付着している。63は土師器杯で内面に暗文が認められる。64は土師器甕で、煮炊きで付着したススが認められる。65は土師器足釜で混入したものである。65以外の形状から７世紀後半～８世紀を中心とした年代が想定できる。



第33図　H③SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SK04（第34図）

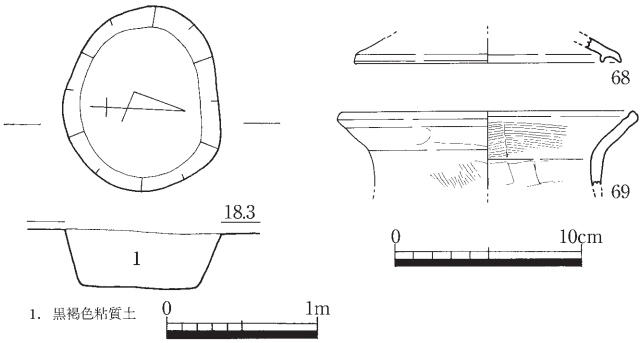
H②区西半北壁沿い、第１面で検出した長楕円形の土坑で、調査区北側へ連続している。1.1m以上×1.0mで深さは0.3mを測る。断面は浅い皿状を呈している。埋土中からは、66の須恵器椀と67の土師器甕が出土している。これらの形状から８～９世紀の年代が想定できる。



第34図　H②SK04平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SK05（第35図）

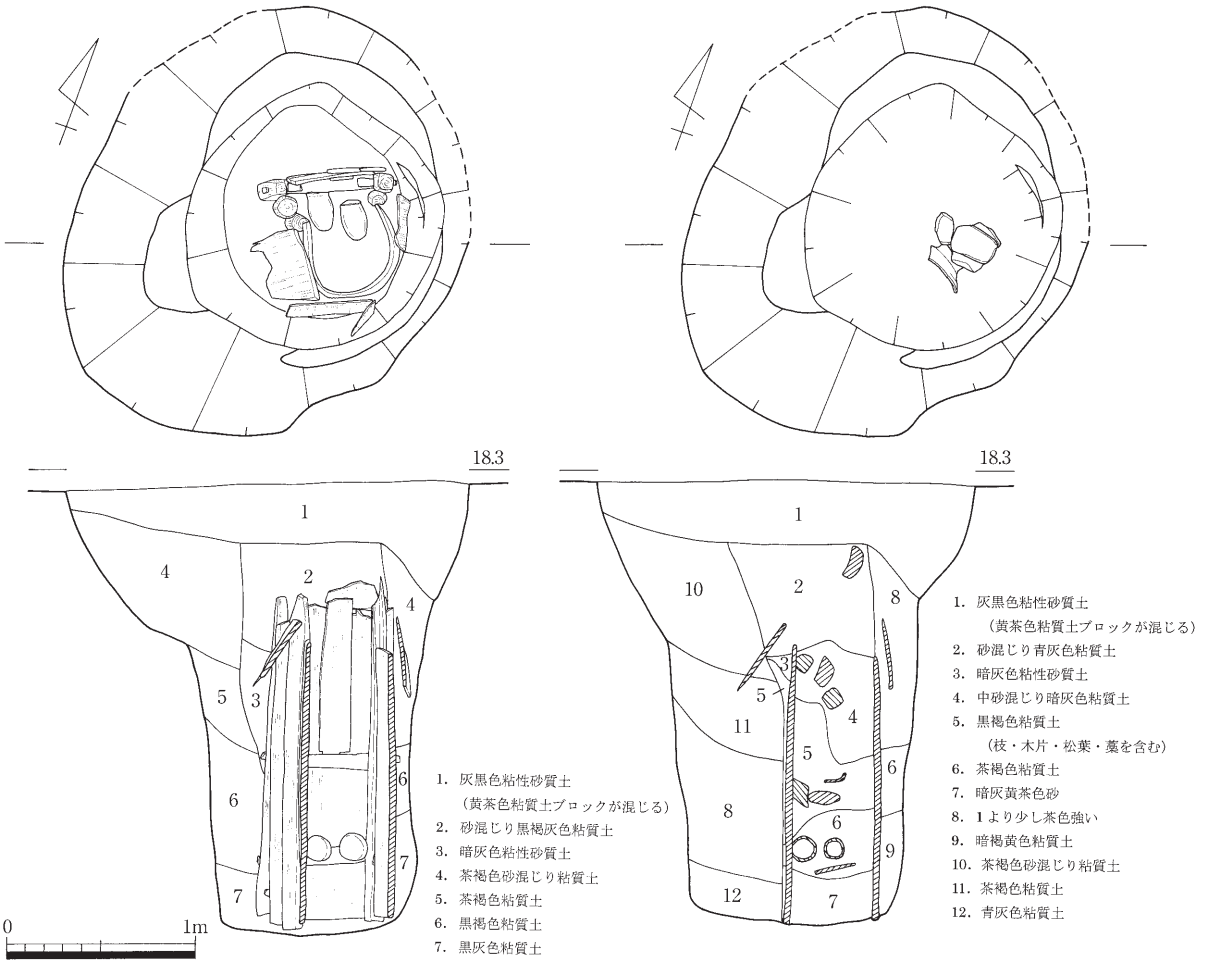
H②区西半、第１面で検出した楕円形の土坑である。1.2m×1.1mで深さは0.4mを測る。断面形状は逆台形を呈している。68は８世紀頃の須恵器蓋、69は土師器甕で10世紀頃のものであろうか。やや根拠としては弱いが、10世紀代の年代を付与しておく。



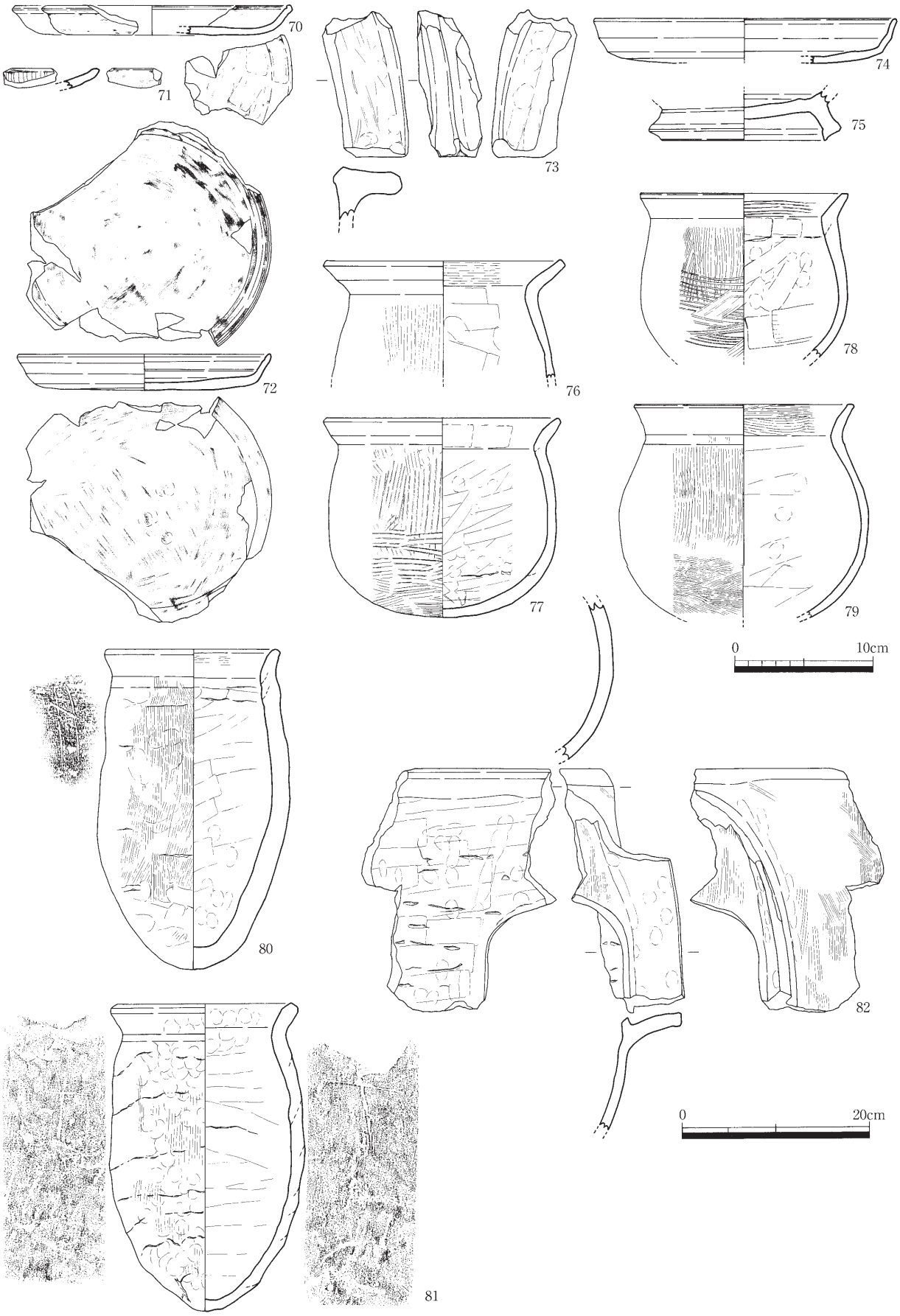
第35図　H②SK05平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SE01（第36～38図）

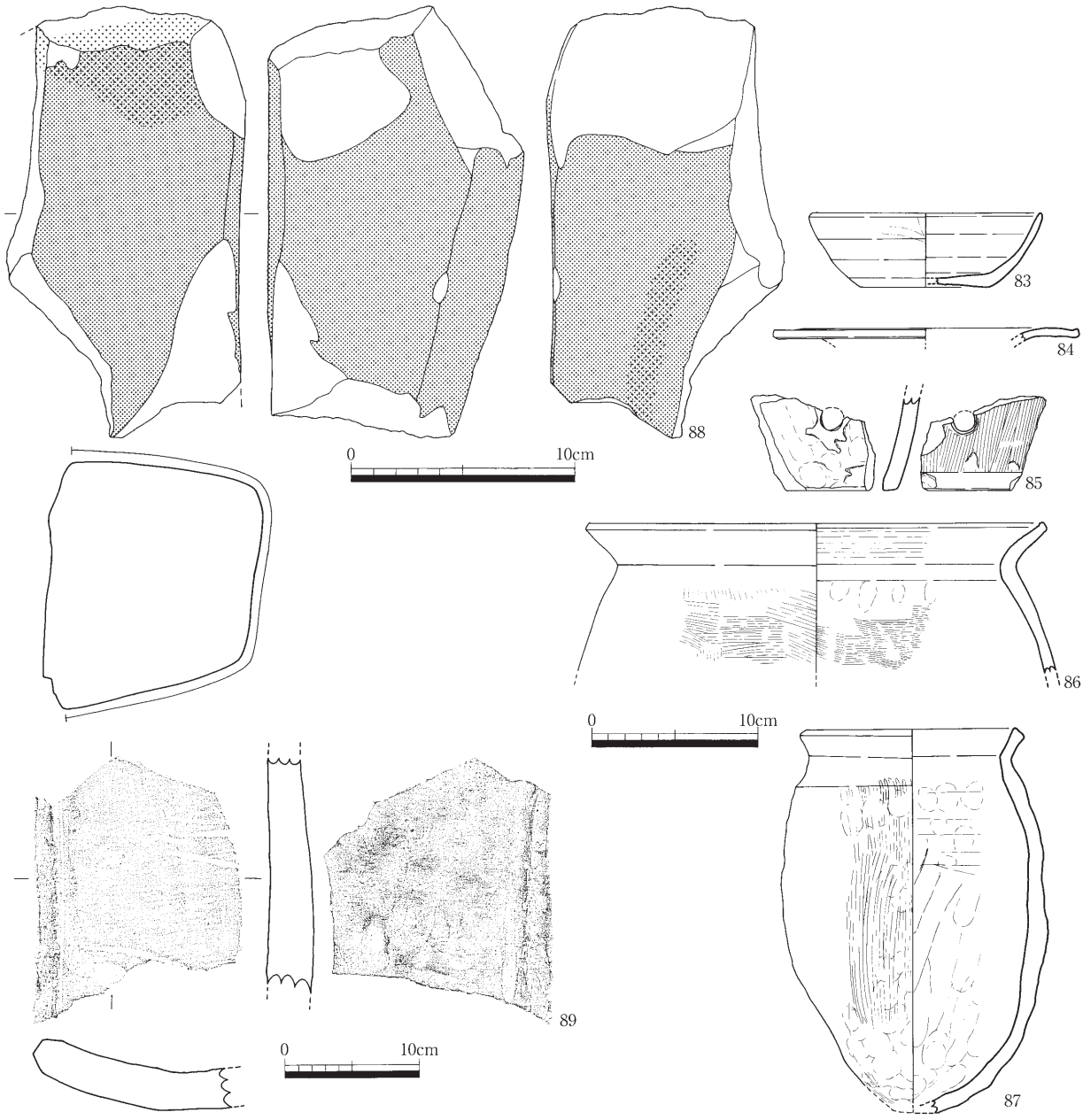
H②区西半、第１面で検出した井戸である。掘り方形状は楕円形を呈しており2.4m×2.0mで深さは2.4mを測る。掘り方下部には木材による井戸枠が組まれており、曲げ物や石組みは使用されていない。井戸枠は、掘り方中央やや北寄りに角材と板材を組み合わせた縦1.6m、横0.8mの壁を作り、そのすぐ南側に直径20㎝程度の丸太材を50㎝の間隔で２本打設し、そこに直径約50㎝の木材を刳り抜きその一端を切り取って長さ約1.1mの樋管状にしたものを縦にはめ込むようにして井戸枠を作り上げている。北壁の高さに足りない約20㎝分については、西・南・東の三方向に板材を立てかけるようにして補っていた。使用された角材や樋管状の刳り抜き材には、桟を組み合わせるための穴以外にも複数の穴が認めら



第36図　H②SE01平･断面図(1/40)



第37図　H②SE01出土遺物①(1/4、1/6)



第38図　H②SE01出土遺物②(1/3、1/4、1/5)

れ、また、井戸枠構築には直接関係しない不自然な刳り込みや面取り等が確認されることから、建物の柱など建築部材や木樋を転用して井戸枠に使用した可能性がきわめて高いと判断できる。いわば「古代のリサイクル」をこの井戸には見ることができると言えよう。

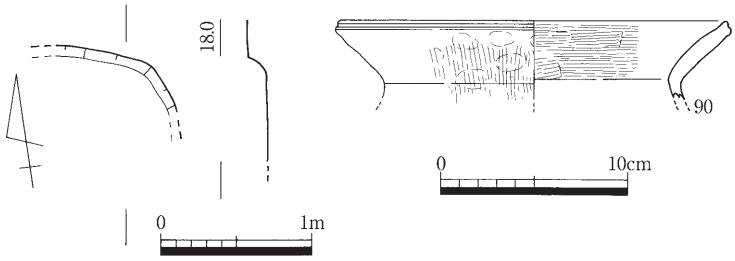
70～73は井戸枠の上部の埋土から出土した遺物である。70～72は土師器皿で、いずれも赤彩の痕跡が残る。73は土師器竈で、焚口部横の脚部である。74～82・88・89は井戸枠内部から出土した遺物である。74は須恵器皿、75は須恵器高台付盤、76～79は土師器甕である。甕にはススが付着したものがみられ実際に使用されていたものである。80・81は井戸枠下部で並んで出土した土師器真蛸壺である。ほぼ同じ大きさで同部外面にヘラ記号を施しており、一定の規格に基づいて製作されたとみられる。82は土師器竈である。88は緑色片岩製の砥石。３面を使用しており、一部にススが付着しているのは火を受けたためだろうか。89は須恵質の平瓦である。83～87は井戸枠の裏込土から出土した遺物である。83は須恵器

杯、84は須恵器壷、85は土師器甑、86は土師器甕で外面に細かいハケメ調整を施している。87は土師器真蛸壷でヘラ記号こそみられないものの、大きさは80・81とほぼ同じである。

以上の遺物の年代観から、H②SE01の掘削・廃棄は８世紀代の範囲で行われたと考えられる。

H①SX02（第39図）

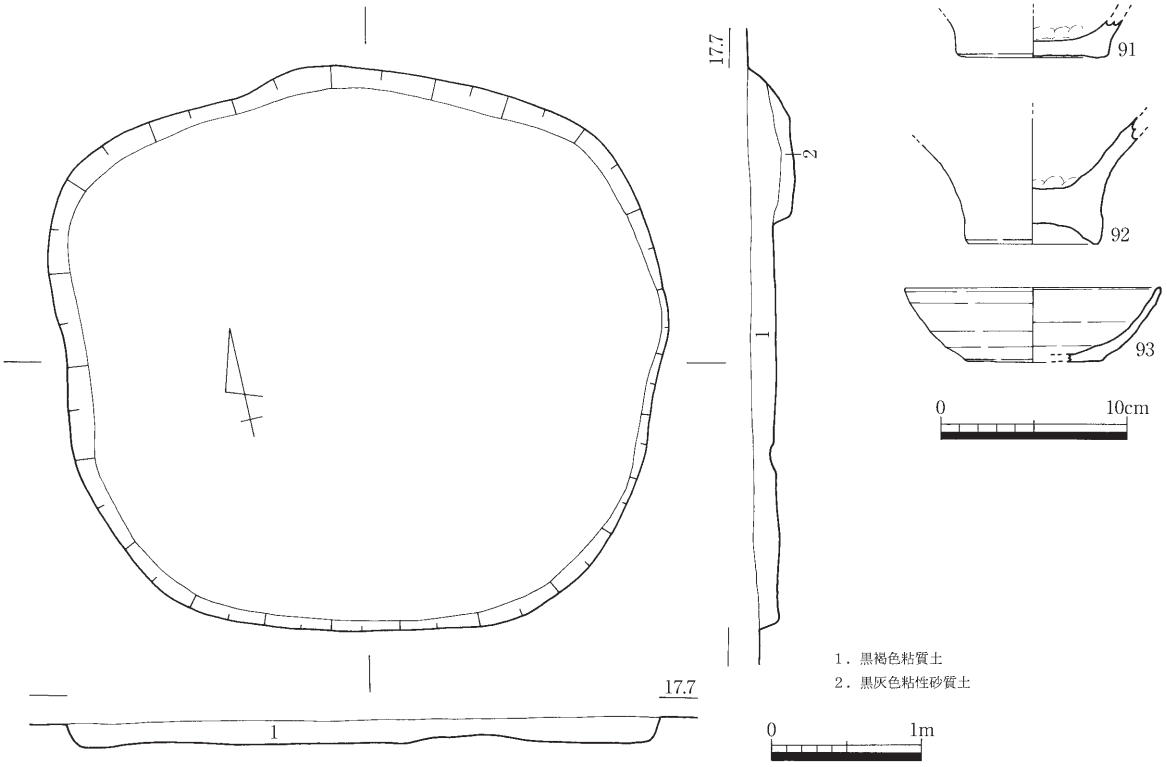
H①南東隅付近、第１面で検出した土坑状を呈した遺構である。撹乱等によって全容は判明しないが、長径1.0ｍ前後の楕円形を呈していたと推定される。90は土師器甕で、８世紀頃のものと想定される。



第39図　H①SX02平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SX03（第40図）

H①区ほぼ中央、第２面で確認した遺構である。3.9ｍ×3.8ｍの円形で深さは0.3ｍを測る。底面は平坦になっているが、壁溝や柱穴等はみられないことからも、積極的に住居跡と判断するには躊躇がある。また、遺物の出土量は極めて少ないことも、この遺構の性格の判断を困難にしている一因となっている。91・92は弥生土器甕の底部で、胎土中に粗い砂粒を多量に含んでおり弥生時代前期に属する可能性がある。93は8世紀代の須恵器杯である。あまりにも時期差のありすぎる遺物であるが、一応ここでは93の年代を採り、この遺構の下限を８世紀代と判断しておきたい。

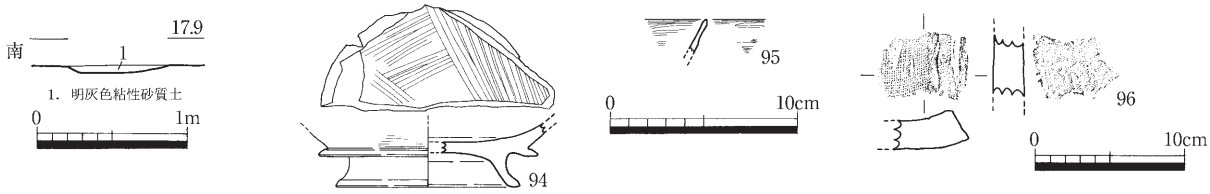


第40図　H①SX03平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

（４）中世の遺構・遺物

H①SD03（第41図）

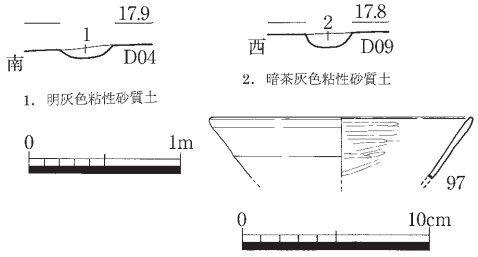
H①区西半、第１面で検出した、検出長15m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形態は浅い皿状を呈し、N79°Wの方向を有する。すぐ北側に隣接してH①SD04が位置しており、後世の著しい削平を考慮すると、この２条の溝は本来１つの溝状遺構であった可能性が高い。埋土中から94～96の遺物が出土している。94は黒色土器椀で、立ち上がり部外面に鍔状突帯を１条貼りめぐらせている。95は和泉型瓦器椀、96は焼成の甘い平瓦である。



第41図　H①SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)

H①SD04（第42図）

H①SD03のすぐ北隣で検出した、検出長13.4m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。年代を判別できるような遺物は出土していないが、H①SD03と1つの遺構であった可能性から、同時期と判断した。



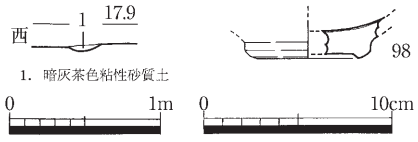
第42図　H①SD04･09断面図(1/50)､SD09出土遺物(1/4)

H①SD09（第42図）

H①区西半、第１面で検出した、検出長1.8m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。断面は浅いU字形を呈し、N７°Eの方向を有する。埋土中から97の黒色土器椀が出土しているが、H①SD03が埋没後に掘られていることから、12世紀代の年代を想定しておく。

H①SD11（第43図）

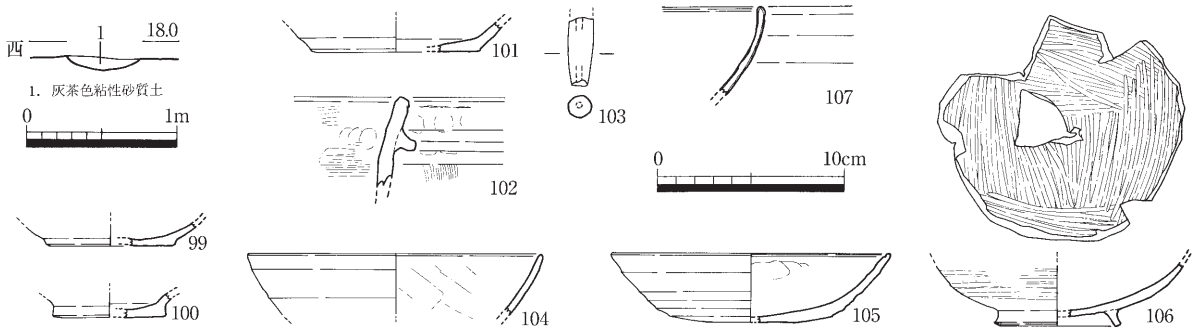
H①区ほぼ中央、第１面で検出した、検出長4.8m、幅0.3m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。N12°Eの方向で、H①SD03等とはほぼ直行する方向を有する。埋土中から白磁椀98が出土している。



第43図　H①SD11断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

H①SD13（第44図）

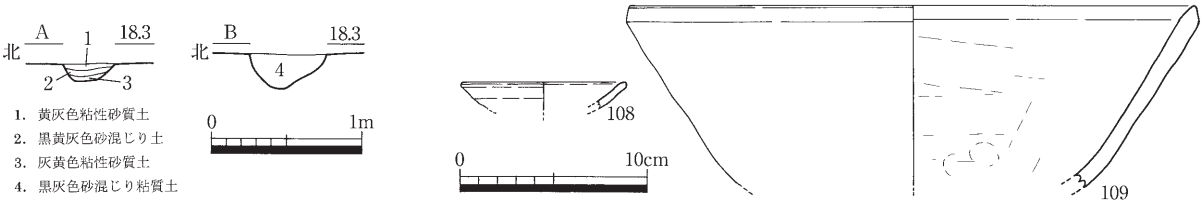
H①区東半、第１面で検出した、検出長7.9m、幅0.6m・北端付近で1.9m、深さ0.1mの規模を有する溝である。断面形状は浅い皿型を呈し、N15°Wの方向を有して調査区を斜行している。北端はH①SE01によって壊されているが、そのすぐ南方で円形に幅が広がる部分を持つ。埋土中から99～107が出土した。99は須恵器杯で回転ヘラ切りの底部、100・101・105は土師器杯で、100は円盤状高台である。102は土師器羽釜、104・106は黒色土器椀で106は内面を4分割ミガキ調整している。107は白磁椀、103は管状土錘である。106の形状などから12～13世紀に位置づけられよう。



第44図　H①SD13断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD01（第45図）

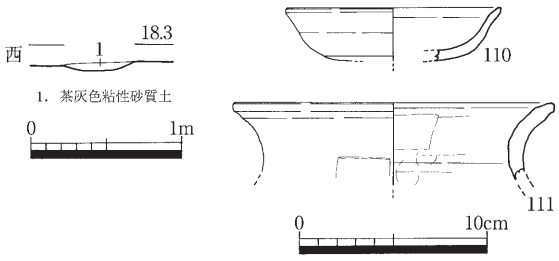
H②区北西隅付近、第１面で検出した。検出長7.8m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状はU字形を呈し、途中で小さく屈曲しながら蛇行している。須恵器小皿108、土師器こね鉢109などが出土しており、109の形状から12世紀代の年代が想定できる。



第45図　H②SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD14（第46図）

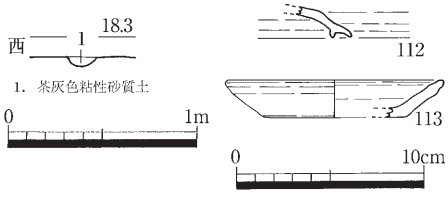
H②区西端付近第１面で検出した、検出長8.6m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を有する直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿型を呈し、N11°Eの方向を有する。埋土中からは110の土師器杯や111の土師器甕などが出土しているが、これらは９世紀代のもので混入品と理解できる。H②SD01より後出して掘られており中世頃の年代と想定できよう。



第46図　H②SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SD15（第47図）

H②区西半、第１面で検出した、検出長8.6m、幅0.2m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。N11°Eの方向を有し、H②SD14と平行している。断面形状は浅いU字形を呈する。埋土中からは遺物の出土はきわめて少なく、図示した須恵器蓋112、土師器杯113などがあるが、これらは混入品とみられる。遺構の先後関係などからH②SD14と同年代に位置づけられる。

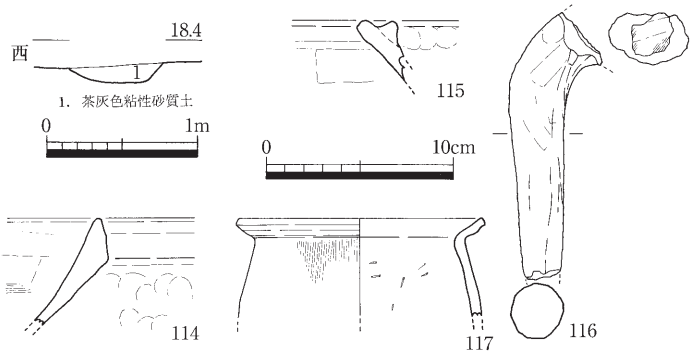


第47図　H②SD15断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

なお、H②SD15付近には同じ方向・規模を持った溝状遺構が複数認められるが、ほぼ同じ年代が想定できることから、これらの溝状遺構群は畑作に伴う鋤溝であった可能性がある。

H②SD18（第48図）

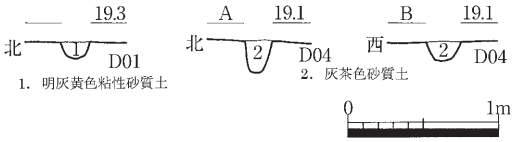
H②区西半、第１面で検出した、検出長9.7m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆台形を呈し、Ｎ８°Ｅの方向を有する。埋土中から114～117の土器が出土した。114は須恵器こね鉢、115・116は土師器足釜、117は土師器甕である。115の鍔の形状などから14世紀代のものと想定される。



第48図　H②SD18断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SD01（第49図）

H③区東端で検出した、検出長6.0m、幅0.2m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面はいＵ字形で、N79°Wの方向を有している。中世の土器細片がわずかに出土している。



第49図　H③SD01･04断面図(1/50)

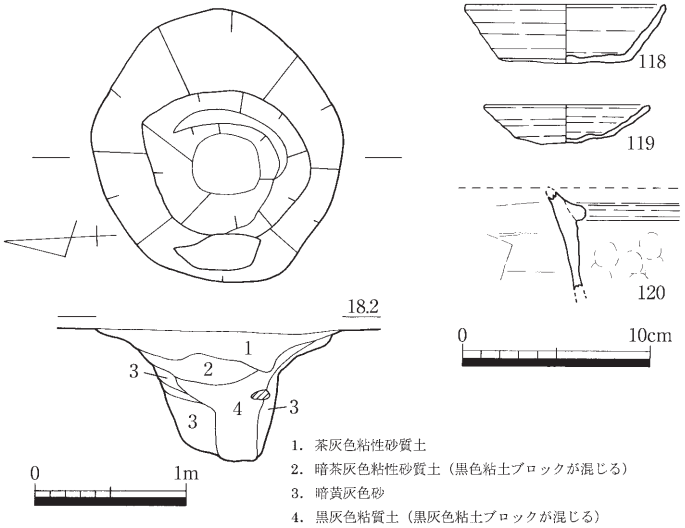
H③SD04（第49図）

H③区中央北寄りで検出した、検出長4.6m、幅0.2m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。断面はＵ字形を呈し、N10°Ｅの方向からほぼ直角に東へ屈曲している。中世の土器細片がわずかに出土している。

H②SK03（第50図）

H②区西半、第１面で検出した不正円形の土坑である。1.8m×1.7mで、深さ0.9mの規模を持つ。性格は不明だが、現在でも微量の湧水が認められることから、素掘りの井戸であった可能性も捨て切れない。井戸であったとすれば、H②SD01はこの遺構に伴う排水目的の溝状遺構であった可能性がある。

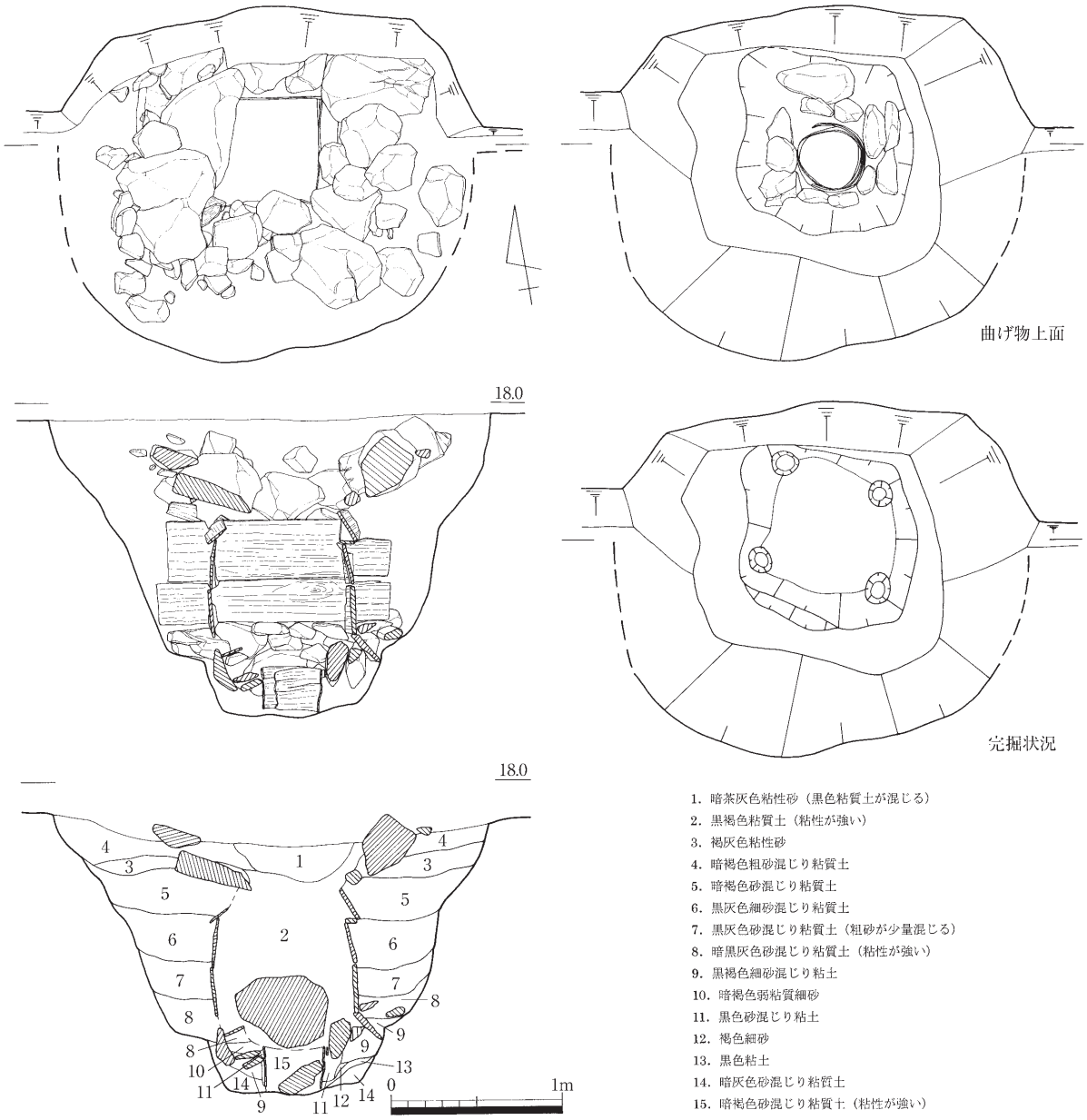
埋土中から118～120の遺物が出土した。118・119は土師器杯でいずれも底部は回転ヘラ切り調整である。120は土師器足釜で鍔にススの付着が認められる。118・119の形状から12～13世紀に位置づけることができる。



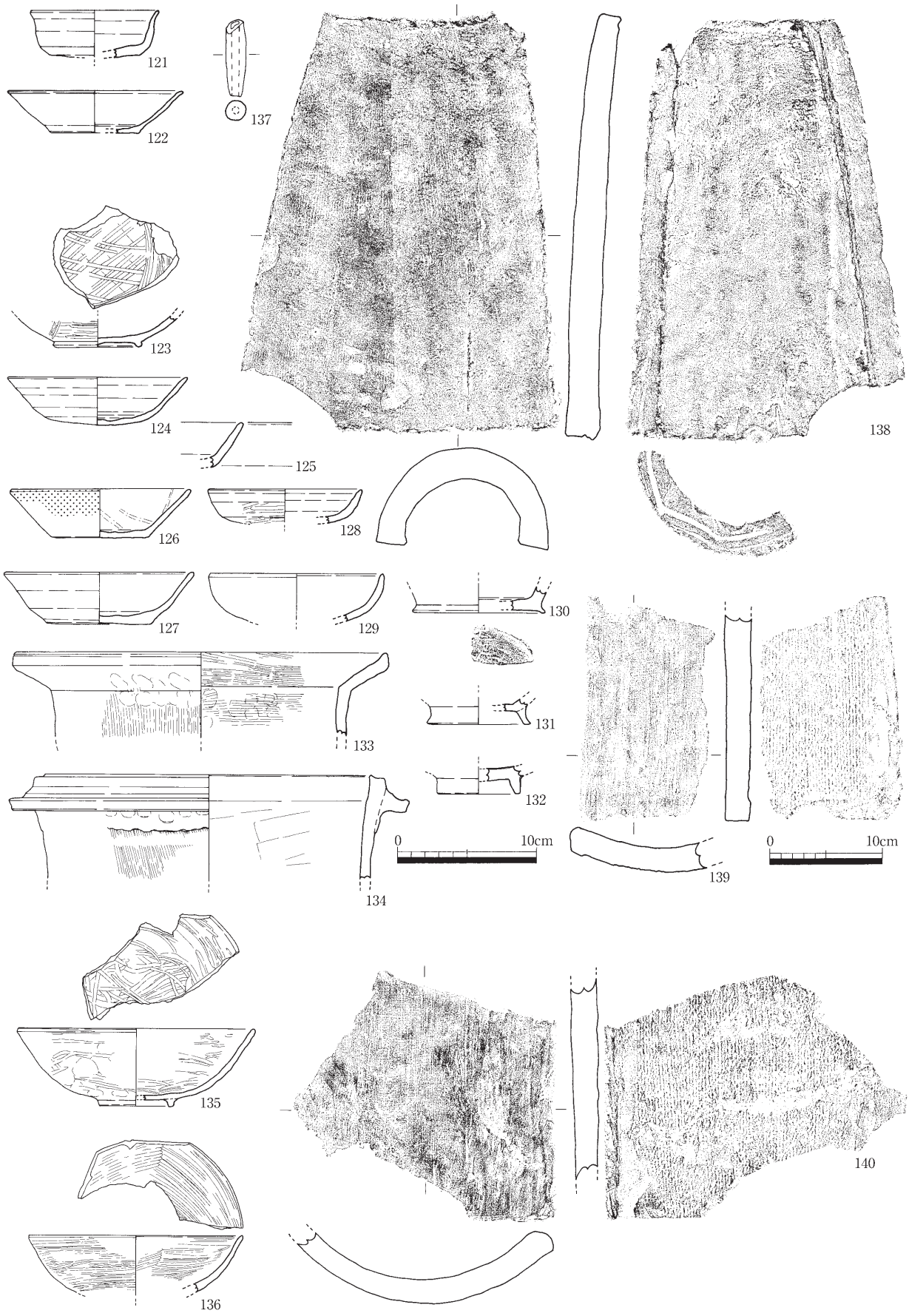
第50図　H②SK03平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SE01（第51～54図）

H①区北東隅付近、第１面で検出した井戸である。一部は調査区北方に続いており、全体の形状は確認できていないが隅丸方形状の平面形を呈しており、2.4m四方で深さ1.5mの規模を有していると推測される。最下部に曲げ物を置き、その上部に井戸枠、さらにその上に石組みを築いている。掘り方は断面逆台形を呈しており、底面にはテラス状の段を設け、中央に１m四方の隅丸方形をした掘り込みを有している。この掘り込みの四隅には浅い柱穴状の穴が穿たれていた。中央に曲げ物を設置して掘り込みを裏込め土で埋め戻した後、拳大～小児頭大の安山岩亜角礫・亜円礫を方形に組み並べ、平坦面を作る。この平坦面上面のレベルは掘り方のテラス状のレベルと一致する。その上位には横幅約1.3mの板材の両側に抉りを入れたものを4枚組み合わせた正方形の木枠を２段積んでいる。木枠は内側で80㎝四方、２段分の高さは約60㎝を測る。この井戸枠の上部まで裏込め土を積んで埋め戻した後、人頭大程度の安

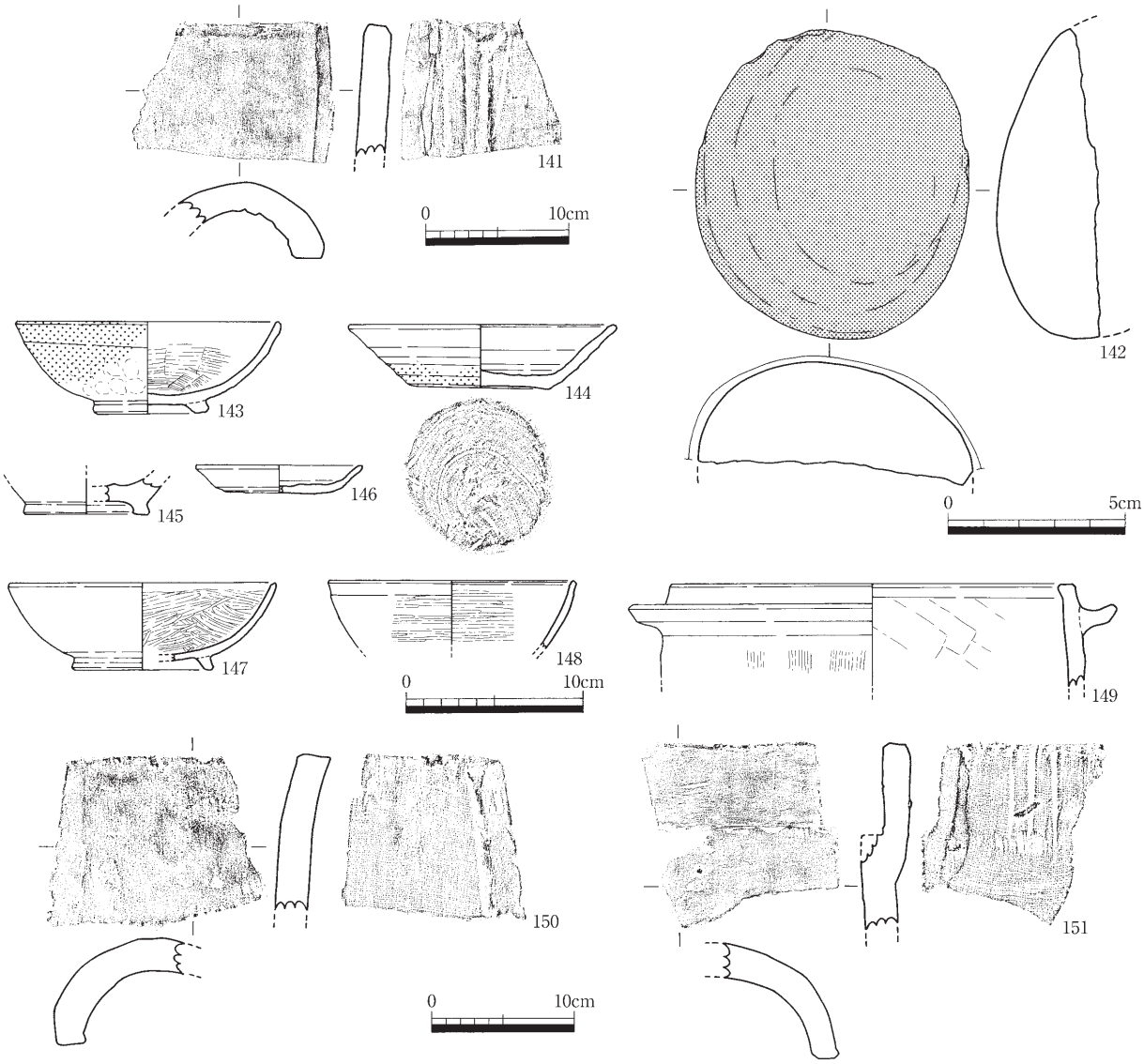


第51図　H①SE01平･断面図(1/40)



第52図　H①SE01出土遺物①(1/4、1/5)

山岩を方形に組んでいる。石組みは１～２段しか検出していないが、井戸の周囲に同様の石材が散在しており、また井戸枠内部にも転落した石が多数みられたことから、あと数段分ほど上に詰まれていたものと推測される。転落石のうち最下部のものは、あたかも曲げ物に蓋をした如くの状態で検出した。しかし、曲げ物とは接しておらず、曲げ物上部も石の重みによる傷などは認められなかったことや、井戸枠内部の埋土に人為的に埋め戻した痕跡が認められなかったことから、埋没途中段階での転落と判断している。井戸の廃絶時には人為的に埋め戻す例が知られているが、この井戸は自然埋没したものと思われる。ただし、上位の石組み部分の埋土はブロック土が認められることから、人為的に埋め戻された可能性が高い。



第53図　H①SE01出土遺物②(1/2、1/4、1/5)

井戸の内外からは多数の遺物が出土している。121～123・137～139・143は井戸枠内部から出土した井戸存続中と想定される遺物である。121は須恵器杯である。122は土師器杯で直線状に伸びる口縁部を持つ。123は曲げ物内部から出土した瓦器椀で、和泉型の特徴を持つ。137は土師器管状土錘である。138は丸瓦、139は平瓦でともに須恵質の良好な焼成品である。138は凸面の縄目タタキを丁寧にナデ消したもので、ほぼ全面にススが付着している。139は明瞭な縄目タタキを残す。143は土師器椀で内外面

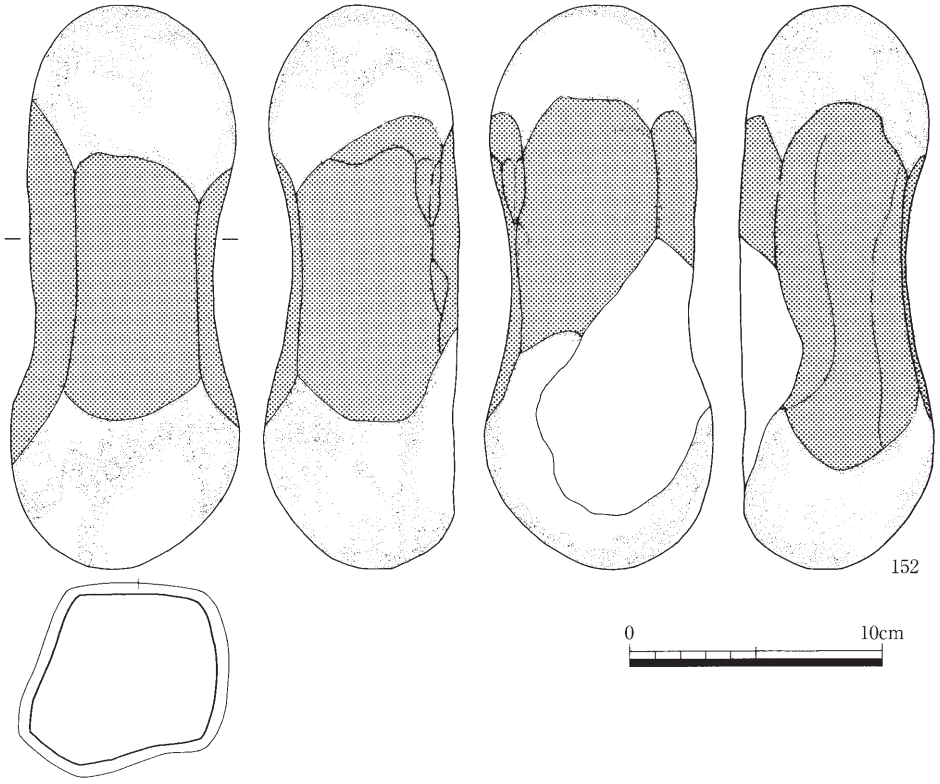
にススが付着している。124は曲げ物の裏込め土から出土した土師器杯である。

125～136・140～142は掘り方の裏込め土から出土した遺物である。125は瓦器杯、126は須恵器杯で内外面に火襷痕がみられ、外面はススがついている。127～129は土師器杯である。127は円盤状高台状の底部を持つ。128・129は大きく内弯する口縁部を持つ。130は土師器壷で底部外面にヘラ記号の一部が認められる。131は土師器椀で高さのある高台を貼り付けている。黒色土器の可能性がある。132は白磁椀である。133は土師器甕で内外面に粗いハケ調整を施している。134は土師器羽釜でしっかりした鍔を有する。135は和泉型の瓦器椀で鈍い銀灰色を呈する。136は内外面とも黒く燻した黒色土器椀で、内面は 6 分割ヘラミガキ調整を施している。140は布目タタキを残した平瓦、141は丸瓦である。142は安山岩製の磨り石であろう。

144・146・149～152はH①SE01の周囲で出土した遺物である。144・146は土師器杯である。144の底部は回転糸切りで、外面にススが付着している。149は土師器羽釜で鍔は斜め外方に張り出している。150・151は丸瓦である。151は有段式で凸面の縄目タタキをナデ消している。152は砂岩製の砥石で 4 面の中央部を砥面として使用している。

145・147・148は掘り方底に穿たれた柱穴状の穴から出土した遺物である。145は須恵器壷、147・148は内外両面を燻した黒色土器椀である。147の内面は 6 分割ミガキ調整、148の口縁内面には沈線が 1 条めぐる。

以上見てきた遺物の出土状況とその年代観から、この井戸は11世紀後半～12世紀初め頃に掘られ、12世紀いっぱい存続し、12世紀末～13世紀初め頃に破棄されたものと想定できる。



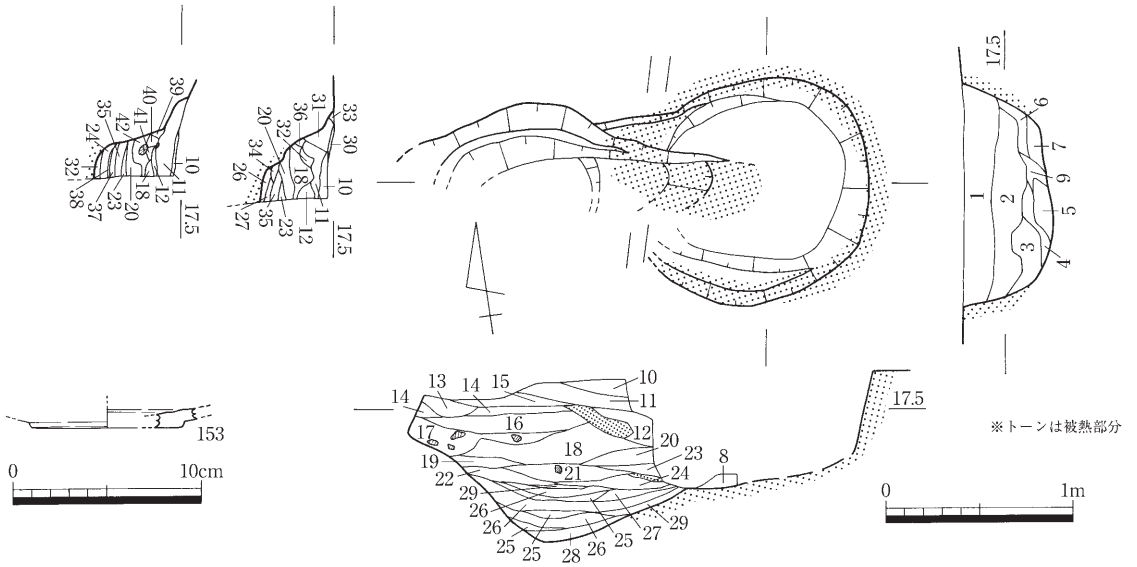
第54図　H①SE01出土遺物③(1/3)

H①SF01（第55図）

H①区中央南寄り、第１面で検出した煙管状土器焼成窯である。調査着手時は現代の撹乱土坑と誤認しており、調査途中から土器焼成窯と認識したために、遺構南西付近の焚口部周辺のデータを採ることができなかった。ただし、この部分近辺には現代の撹乱が多数存在しており、遺構上部に影響が及んでいる箇所も認められる。窯は西方へ下る緩傾斜面に主軸方向を合わせるように築かれており、周囲に傾斜変換点等は認められない。窯の西側には土坑状の作業スペース部が連続しているものと思われ、全体としては長軸2.4mほどの縦長のだるま形を呈したようである。窯体部は内径1.2mの円形で、深さは0.8mを測る。作業スペース部の幅は推定１m弱で、深さは１mを測り、窯体部よりもやや深く窯体部底面に向かって傾斜している。

窯体部の底面に被熱の痕跡はほとんどなく、現存する壁面の中位付近から上方に被熱痕がみられ、周囲の土もオレンジ色に変色して硬く焼け締まっている。壁面上位付近には土を掘り込んで作った段が認められる。煙管状土器焼成窯の場合、窯体中位に「間仕切り」と称される火格子を設けるタイプが存在することが指摘されている。間仕切りは石や土などで支えられ、その上に製品が窯詰めされ、焼成されるわけだが、本遺構の場合は、間仕切りを段にはめ込んで支えたものとみられる。

焚口部分から作業スペース部にかけての土層の堆積状況を観察すると、土層中位にオレンジ色に変色した粘土塊があり、これが崩落した焚口部の天井部分とみられる。その下位には炭化物や松葉を含んだ層があり、さらにその下には灰層と炭層の互層が存在する。灰層と炭層のセットは５つ確認されることから、５回以上の土器焼成が行われたものと想定できる。窯本体部分からの遺物の出土はなく、焚口付



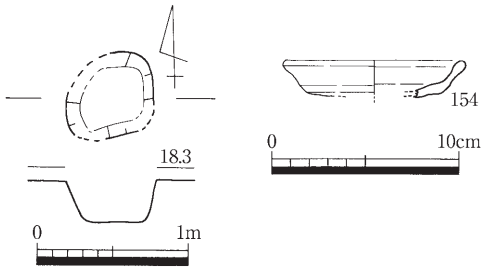
1. 濁灰色粘性砂質土
2. 暗灰茶色粘性砂質土
3. 橙黄色粘性砂質土
4. 暗灰橙色粘性砂質土
5. 黒灰色粘性砂
6. 濁橙黄色粘性砂質土
7. 暗青灰色粘性砂質土
8. 暗灰茶色粘性砂質土（硬く締まる）
9. 暗灰茶色粘性砂質土
10. 濁茶灰褐色粘性砂質土（赤橙色の焼土塊含む）
11. 濁茶灰褐色粘性砂質土（シルト質）
12. 灰茶色砂混じりシルト（焼土塊を多く含む）
13. 濁灰色粗砂混じりシルト（焼土・炭を多く含む）
14. 濁暗灰色砂混じりシルト（焼土・炭を含む）
15. 濁橙黄色粘性砂質土
16. 暗赤灰色多砂混弱粘質土
17. 暗灰茶色中砂混粘質土（焼土塊を含む）
18. 暗灰茶色中砂混粘質土
19. 黒灰色砂質土（松葉が多く混じる）
20. 黒灰色粘質土（炭化物と焼土多く含む）
21. 濁暗灰色粘性砂質土（炭化物が混じる）
22. 暗灰色粘性砂質土
23. 暗灰茶色中砂
24. 白色灰混じり暗灰色粘性砂質土（灰が多く混じる）
25. 黒灰褐色粗砂～細砂
26. 暗灰茶色粘性砂（やや粘性がある）
27. 黒色粘質土
28. 暗灰橙色粘性砂質土
29. 黒色粘性砂質土（炭が混じる）
30. 赤黄色粘性砂質土（焼土）
31. 暗灰茶色砂混じり粘質土
32. 茶灰色粘性砂質土（焼土を含む）
33. 暗灰褐色砂混じり粘質土
34. 黒灰色粘質土（白い灰が混じる）
35. 灰黒色粘性シルト（白い灰と炭化物が混じる）
36. 黒灰色砂混じり粘質土（炭化物が混じる）
37. 灰白色粘性シルト
38. 灰茶色粘性シルト
39. 灰茶色粘性砂質土
40. 灰黒色粘性シルト
41. 黄灰色粘性砂質土
42. 暗灰茶色粘性シルト

第55図　H①SF01平･断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

近でわずかな土器小片を確認している。153は土師器杯で、円盤状高台をもつ。この窯の年代を示す資料は皆無に等しいが、同様の構造を持った窯跡との比較や、半地下構造であることなどから、消極的ではあるが12～13世紀の範囲で考えておきたい。

H②SX03（第56図）

H②区西半、第１面で検出した土坑状を呈する遺構である。0.7m×0.6mの隅丸方形状で、深さは0.3mを測る。H②SE01が埋没後に掘られているが、その性格については不明である。154は土師器小皿である。12世紀頃とみられる土器片が少量出土しており、その頃の年代が想定できる。

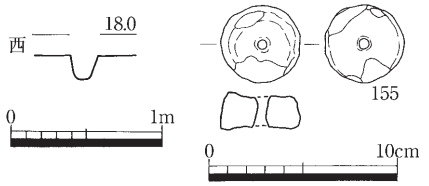


第56図　H②SX03平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

（５）H区の柱穴・遺物

H①SP31（第57図）

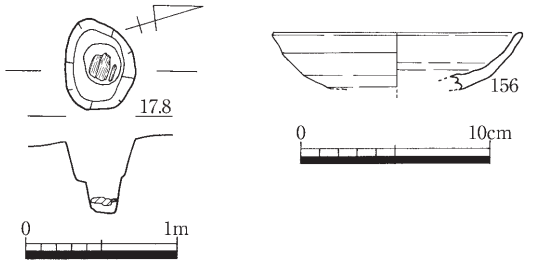
H①区東南隅付近、第１面で検出した。直径20cm、深さ20cmの円形を呈する。弥生時代の土製紡錘車155が出土しているが、古代の溝状遺構H①SD15埋没後に掘られており、古代以降のものである。



第57図　H①SP31断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SP56（第58図）

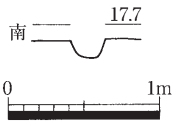
H①区中央付近、第２面で検出した。62cm×48cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。柱穴底面付近に置かれた礎板が遺存しており、掘立柱建物跡を構成していた可能性がある。埋土中から156の須恵器椀が出土しており、９～10世紀のものと想定される。



第58図　H①SP56平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H①SP57（第59図）

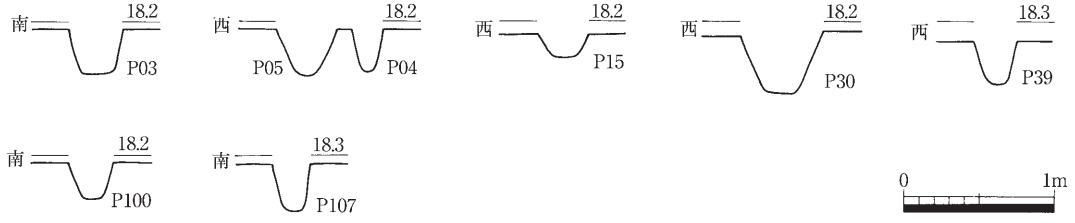
H①区中央付近、第２面で検出した。直径約30cmの円形で、深さ12センチを測る。遺物の量は少ないが、９～10世紀に比定できる土器片が出土している。



第59図　H①SP57
断面図(1/50)

H②SP03（第60図）

H②区北西隅、第１面で検出した、直径30cmの円形を呈する柱穴である。中世に属するとみられる。



第60図　H②SP03･04･05･15･30･39･100･107断面図(1/50)

H②SP04（第60図）

H②区北西隅、第１面で検出した、直径25㎝の円形の柱穴である。９世紀代の土器が出土している。

H②SP05（第60図）

H②区北西隅、第１面で検出した、直径35㎝の円形の柱穴である。中世土器片が出土している。

H②SP15（第60図）

H②区西端、第１面で検出した、75㎝×35㎝の長楕円形の柱穴である。中世土器片が出土している。

H②SP30（第60図）

H②区南西隅、第１面で検出した、直径60㎝の円形の柱穴である。９～10世紀の土器片がある。

H②SP39（第60図）

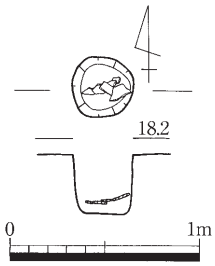
H②区南西隅、第１面で検出した、直径30㎝の円形の柱穴である。９～10世紀の土器片がある。

H②SP100（第60図）

H②区西端、第１面で検出した、直径30㎝の円形の柱穴である。中世土器片が出土している。

H②SP107（第60図）

H②区西端北寄り、第１面で検出した、直径25㎝の円形の柱穴である。８世紀代の土器がある。



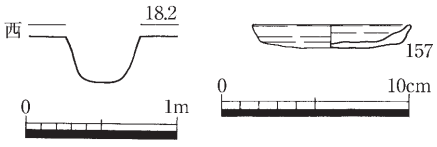
第61図　H②SP20
平･断面図(1/40)

H②SP20（第61図）

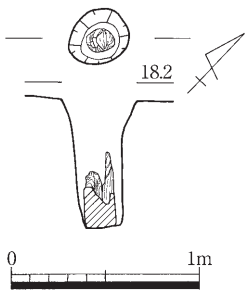
H②区西端、第１面で検出した、直径32㎝の円形の柱穴である。柱穴の底面付近で土師器甕の体部が出土しており、柱痕抜き取り後に入れられたものである。

H②SP34（第62図）

H②区南西隅、第１面で検出した、直径50㎝の円形の柱穴である。157は12世紀代の土師器小皿である。



第62図　H②SP34断面図(1/50)、出土遺物(1/4)



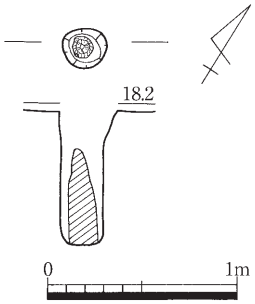
第63図　H②SP38
平･断面図(1/40)

H②SP38（第63図）

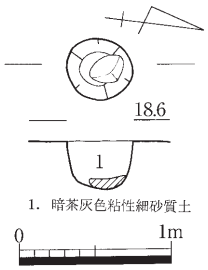
H②区南西隅、第１面で検出した、直径32㎝の円形の柱穴である。深さは67㎝を測る。柱穴底部に柱痕が残されていた。柱痕の上部は朽ち果てていた。出土した土器から、10世紀頃の年代が想定される。周囲にも同時代と想定される柱穴が存在することから、掘立柱建物跡を構成していたものとみられる。

H②SP40（第64図）

H②区北西隅、第１面で検出した、直径20㎝の円形の柱穴である。深さは70㎝を測る。柱穴底部には柱材が残っていた。柱材上部は朽ち果てており、自然に腐食したものとみられる。９～10世紀頃の年代が想定される土器片がわずかに出土している。H②SP38同様、掘立柱建物跡を構成していた柱穴のひとつであろう。



第64図　H②SP40
平･断面図(1/40)



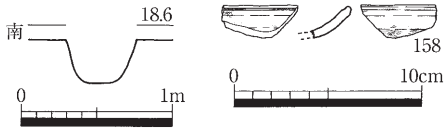
第65図　H②SP45
平･断面図(1/50)

H②SP45（第65図）

H②区中央付近、第１面で検出した、直径46㎝の円形の柱穴である。柱穴の底面には小児頭大の板石が1個入れられていた。柱を支える礎石として使用されたものとみられる。図化しなかったが８世紀とみられる土器片が出土している。

H②SP50（第66図）

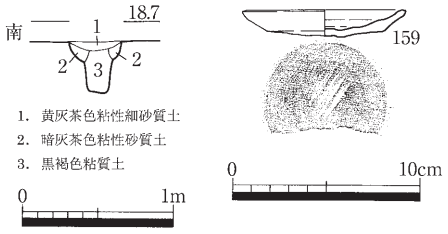
H②区中央、第１面で検出した、直径50㎝の円形の柱穴である。158は内外面に赤彩の痕跡が残る土師器皿である。８世紀の年代が想定できる。



第66図　H②SP50断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP57（第67図）

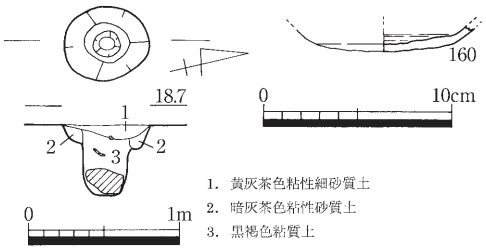
H②区中央北寄り、第１面で検出した、直径40㎝の円形の柱穴である。159は柱穴埋土から出土した土師器小皿で、底面には板状圧痕が認められる。11世紀代のものであろう。周囲には多数の柱穴が認められ、本遺構も掘立柱建物跡を構成していた可能性が高い。



第67図　H②SP57断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP59（第68図）

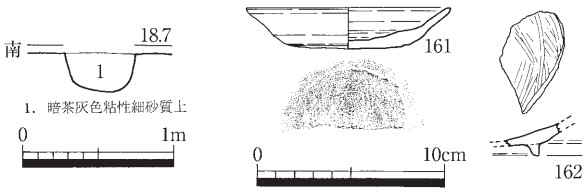
H②区中央北寄り、第１面で検出した、直径58㎝の円形の柱穴である。底面には小児頭大の亜円礫が礎石として入れられていた。埋土中からは160の土師器杯が出土しており、10～11世紀代の年代が想定される。



第68図　H②SP59平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP62（第69図）

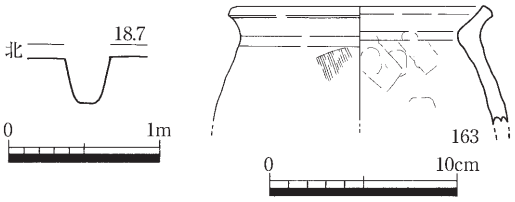
H②区中央付近、第１面で検出した、直径48㎝の円形の柱穴である。埋土中から161土師器杯と162黒色土器椀が出土した。162は高台内面に赤彩の痕跡が残る。10世紀代のものであろう。



第69図　H②SP62断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP69（第70図）

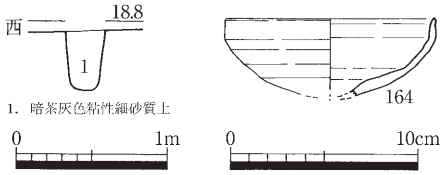
H②区中央南より、第１面で検出した、直径30cmの円形の柱穴である。埋土中から163の土師器甕が出土した。10～11世紀代の範疇でとらえられよう。



第70図　H②SP69断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP82（第71図）

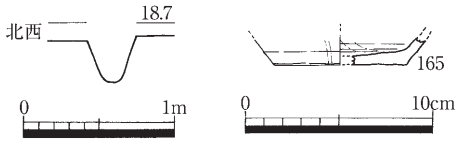
H②区東半北寄り、第１面で検出した、40cm×30cmの楕円形の柱穴である。埋土中から164の須恵器杯が出土している。本遺構の東西両側には時期は特定できないが柱穴列が並んでおり、調査区北方へ続く建物の可能性がある。



第71図　H②SP82断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP94（第72図）

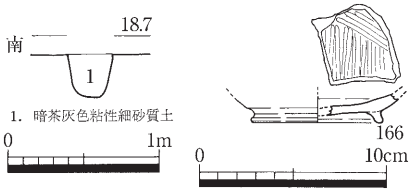
H②区東半北寄り、第１面で検出した、直径35cmの円形の柱穴である。H②SD08の埋没後に掘られている。165は須恵器杯で、内外面に火襷が認められる。11世紀頃のものか。



第72図　H②SP94断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H②SP96（第73図）

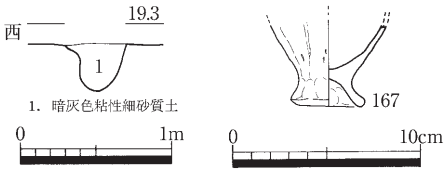
H②区中央、第１面で検出した、45cm×31cmの円形の柱穴である。埋土中から166の黒色土器椀が出土している。先述したH②SP57・59とほぼ等間隔の直線状に並んでおり、建物か柵列を構成していた可能性が高い。



第73図　H②SP96断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP39（第74図）

H③区東半で確認した、71cm×41cmの楕円形の柱穴である。埋土中から167の製塩土器が出土している。弥生時代後期の年代が想定できる。



第74図　H③SP39断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP46（第75図）

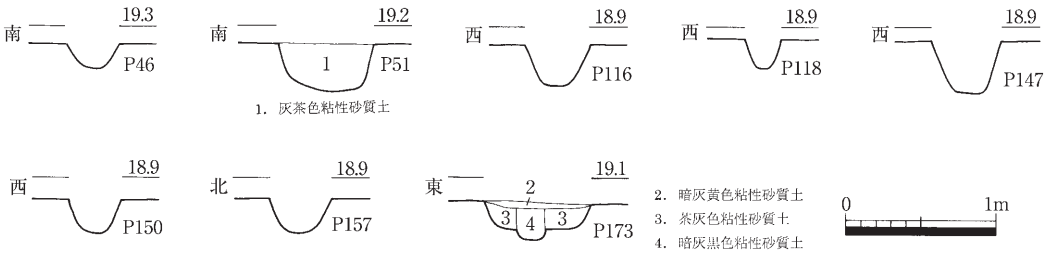
H③区南東隅付近で検出した、直径35cmの円形の柱穴である。９～10世紀の土器片がある。

H③SP51（第75図）

H③区東半で検出した、直径64cmの円形の柱穴である。13世紀の土器が出土している。

H③SP116（第75図）

H③区西半、H③SB03の南側で検出した、直径44cmの円形の柱穴である。13世紀の土器が出土している。



第75図　H③SP46･51･116･118･147･150･157･173断面図(1/50)

H③SP118（第75図）

H③区西半で検出した、直径24cmの円形の小柱穴である。13世紀代の土器が出土している。

H③SP147（第75図）

H③区西半で検出した、直径47cmの円形の柱穴である。９～10世紀代の土器片が出土している。

H③SP150（第75図）

H③区西端で検出した、直径35cmの円形の柱穴である。10世紀代の土器が出土している。

H③SP157（第75図）

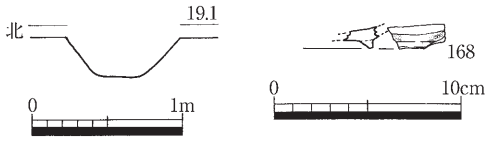
H③区南西隅付近で検出した、直径40cmの円形の柱穴である。９～10世紀代の土器が出土している。

H③SP173（第75図）

H③区西半南寄りで検出した、73cm×55cmの楕円形の柱穴である。中世土器片が出土している。

H③SP66（第76図）

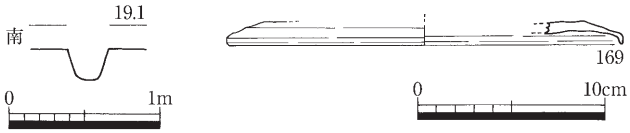
H③区中央付近で検出した、直径80cmの円形の柱穴である。埋土中から168の土師器椀が出土している。168は外面高台より上に赤彩の痕跡が残る。９世紀代のものであろう。



第76図　H③SP66断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP89（第77図）

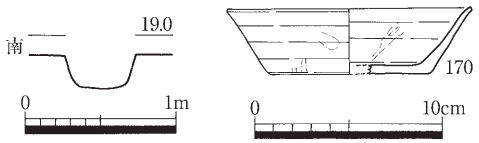
H③区中央付近で検出した、直径30cmの円形の柱穴である。埋土中から169の須恵器蓋が出土した。端部の形態から９世紀のものと想定される。



第77図　H③SP89断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP101（第78図）

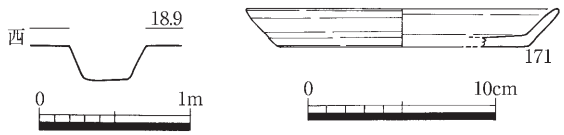
H③区中央で検出した、直径50cmの円形の柱穴である。埋土中から170の須恵器杯が出土した。内外面に火襷が残る。９世紀の年代が想定される。



第78図　H③SP101断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP159（第79図）

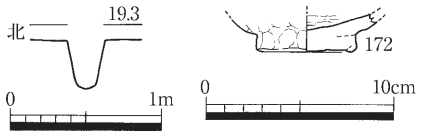
調査区南西隅付近で検出した、直径50㎝の円形の柱穴である。埋土中から171の須恵器皿が出土した。形状から９世紀のものとみられる。



第79図　H③SP159断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

H③SP176（第80図）

H③区南東隅で検出した、直径30㎝の円形の柱穴である。H③SX01の埋没後に掘られている。172は土師器椀で、円盤状高台を有する。10世紀代のものとみられる。

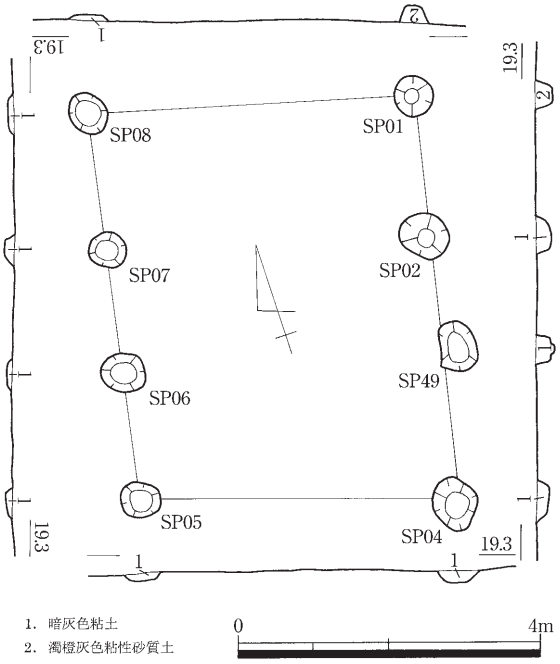


第80図　H③SP176断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

（６）時期不明の遺構

H③SB01（第81図）

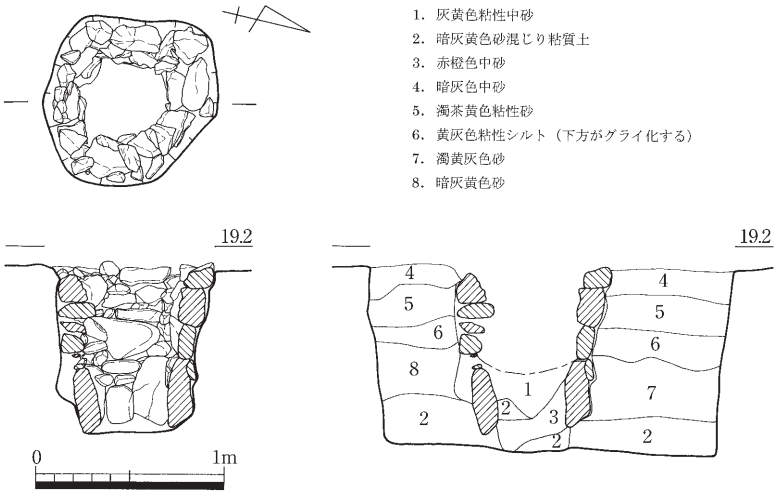
H③区東半中央で確認した１間×３間の南北棟である。4.3ｍ×5.5ｍの規模で、床面積は23.7㎡を測る。建物主軸はＮ11°Ｅの方向を有する。溝状遺構H③SD03や井戸H③SE01と重複しているが、それらの遺構との先後関係を直接示すような遺構のあり方はみられないため、不明である。桁間方向の柱穴の間隔はH③SB02やH③SB04などと似ているようにもみえる。



第81図　H③SB01平･断面図(1/100)

H③SE01（第82図）

H③区東半で検出した、石組みの井戸である。後世の削平を受けて、上部を失っているものとみられる。110㎝×80㎝のやや楕円形を呈しており、深さは84㎝が遺存していた。掘り方最下部にはやや大振りの石材を縦方向に並べて基底石とし、その上位には小児頭大の石材を積み上げている。石積みは４段分が確認できる。本遺構に南接して溝状遺構H③SD02が存在するが、これを排水目的の溝状遺構とみれば、石積みは５～６段であった可能性がある。

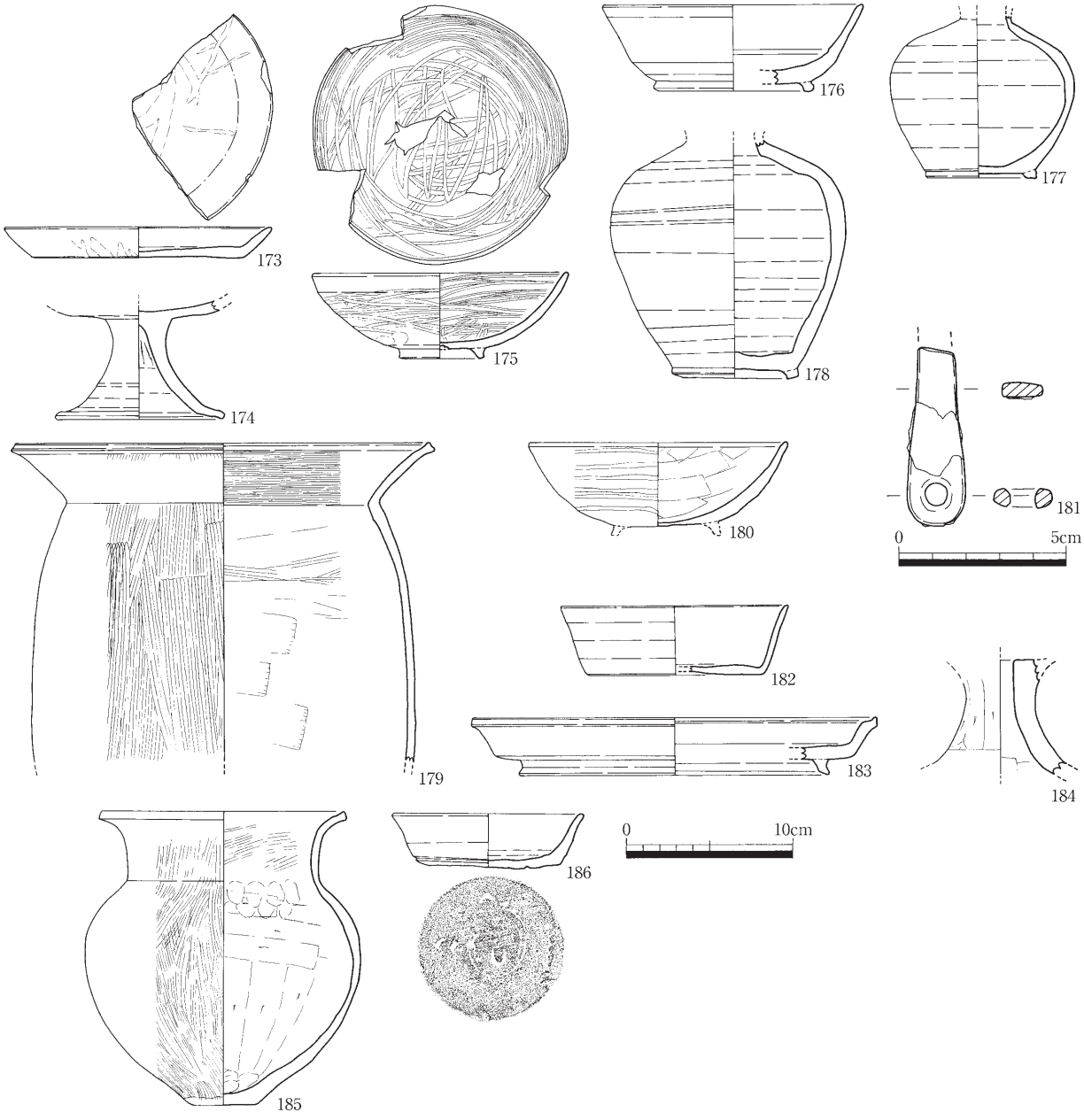


第82図　H③SE01平･断面図(1/40)

（7）包含層出土遺物（第83図）

173～181はH①区出土の遺物である。173は須恵器皿で内外面に火襷の痕跡が残る。9世紀代のものだろう。174は短脚の須恵器高杯で、杯部内面見込み部に仕上げナデを施している。7世紀に比定されよう。175は須恵器椀であるが内面約1/3に炭素を吸着させている。12世紀代に比定できる。176は須恵器椀で8世紀のものだろう。177・178は須恵器壷である。ともに肩部が強く張った形状をしており、9世紀代に比定できよう。179は土師器甕で、長胴でハケメ調整を多用しており、7世紀のものか。180は須恵器椀としたが、内外面に炭素の吸着がみられ、内面に重ね焼きの痕跡が残る。12世紀代に位置付けられよう。181は用途不明の鉄製品で基部に穴が開く。刀子の基部であろうか。

182～184はH②区出土の遺物である。182は須恵器杯で9世紀のものだろう。183は土師器盤で、短く屈曲させた口縁端部を持つ。184は土師器高杯である。脚部に面取りを施し、ほぼ全面に赤彩がみられ



第83図　H区包含層出土遺物(1/2、1/4)

る。ともに8世紀頃に比定できる。

185・186はH③区出土の遺物である。185は弥生土器壷である。球形の体部に外傾して立ち上がる太い頸部が付く。底部は平底である。弥生時代後期に位置づけられる。186は土師器杯で、底部外面に回転ヘラ切り後の板状圧痕が残る。13世紀後半頃のものか。

（8）小結

H区は縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代はH①区で、自然河川内から後期の遺物を確認した。後述するⅠ区やJ区、高松東道路C区やD区などでも自然河川内の堆積層から後期の遺物が出土しており、周辺に同時代の住居跡などが存在している可能性を示唆しているものといえよう。

弥生時代はH①・②・③区で弥生時代後期の遺構・遺物を検出したが、遺構は散在しており、遺物量も少ない。いずれも後期に属するものであった。

古墳時代は明瞭な遺構・遺物は確認していない。

古代になるとH区ほぼ全面に遺構が展開をみせる。H②区中央付近の溝状遺構群を境に、東側には掘立柱建物跡を含めた多数の柱穴が集中して存在しており、長期間にわたって居住域として土地利用されたことがわかる。これに対し、西側では掘立柱建物跡もみられるが柱穴の数は極端に少ない状況を示す。H①区の削平状況を勘案しても、東とは明瞭な差が認められる。特筆すべき遺構としては、H②SE01がある。建築材などを再利用した井戸枠は「古代のリサイクル」をうかがい知ることができ、当時の人々の「使えるものはとことん使う」といった意識が垣間見える資料である。遺物では、H②SD08から出土した陶印がある。この陶印は識字層の人々の存在をうかがわせるもので、ひいては当該地が一般的な集落とは異なる性格を持った集落であることを示唆するものといえよう。

中世の遺構は、H②区に溝状遺構が集中し、H①・③区はわずかに散在する程度である。H①・②区には井戸が掘られ、H①区には土器焼成窯が築かれるなど、近接した位置に集落が存在することが推測される。

第３節　Ⅰ区の調査

１．調査区の概要

南北幅14～50m、東西長96mの範囲を占めるⅠ区は４つの小調査区に分けて調査を行った。高松東道路調査Ｃ区の北側に隣接する調査区である。標高はおおよそ19.2～21.3mで、東西両端で約0.7m、Ⅰ区東辺の南北で約1.5mの標高差を有する。調査着手前はすべて田畑として土地利用されていた。Ⅰ①・②区とⅠ③区、Ⅰ④区の境には後世の削平に起因するとみられる約0.5m、約0.9mの段差が各々存在しているが、Ⅰ①区とⅠ②区は２筆の水田にかかるため、調査区内に約0.5mの段差が存在する。

Ⅰ区では遺構検出面を１～２面確認している。Ⅰ①・②区では上から第１面が概ね古代以降、第２面が弥生時代以前である。Ⅰ①区ではこの２面の区分ができず、１面で検出している。Ⅰ③・④区でも同様に２面を確認しており、上から第１面が古代以降、第２面が弥生時代以前となっている。

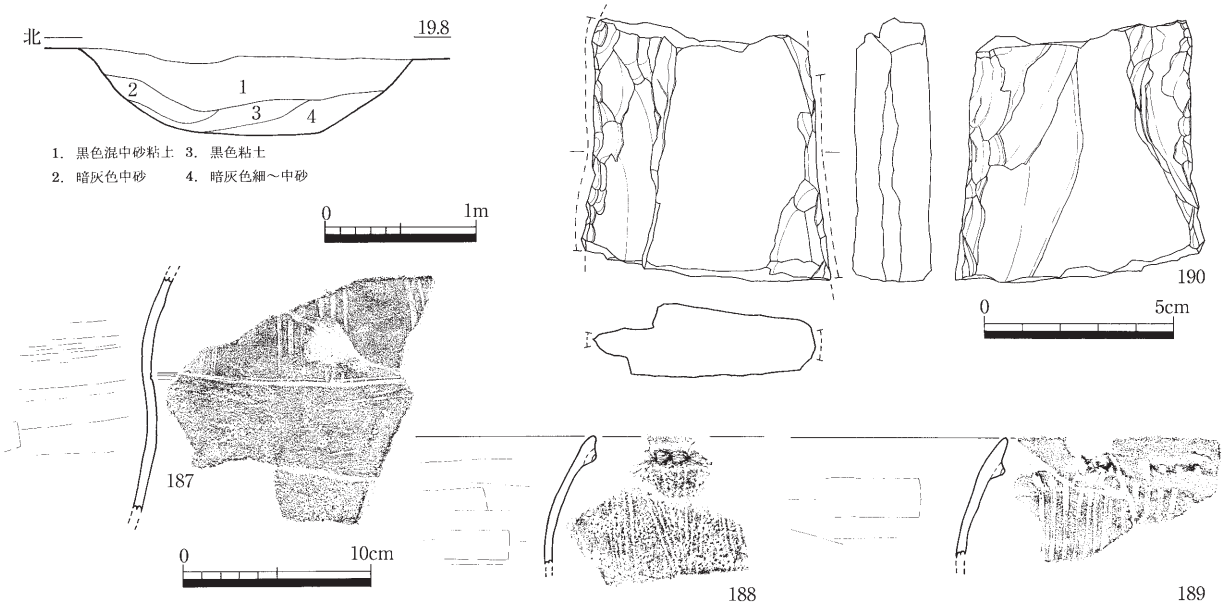
２．調査の成果

（１）縄文時代の遺構・遺物

Ⅰ④SX04（第84図）

Ⅰ④区東半、第２面で検出した土坑状の遺構である。4.0m×2.0mの長楕円形の平面形を持ち、深さは0.5mを測る。断面形態は角の取れた逆台形を呈しており、砂層と粘土層の堆積状況から、滞水状態で埋没していったものと推測される。

埋土の下位を中心に187～190の遺物が出土している。187～189は凸帯文土器の深鉢である。187は頸部～体部の破片で、屈曲した頸体部の境に１条の沈線を、また頸部には縦方向に沈線文を施している。188・189は口頸部で、口縁端部やや下に１条の刻目突帯をめぐらしている。頸部にはヘラ描きの沈線文を施している。187と189は直接接合しなかったものの、同一個体である可能性が高い。190は安山岩製の打製石斧で、先端部と基部を欠損している。深鉢の形態から、縄文時代晩期後半の年代が想定できる。



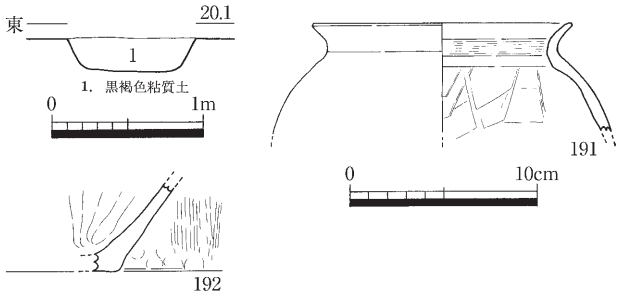
第84図　Ⅰ④SX04断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

（２）弥生時代の遺構・遺物

Ⅰ④SD15（第85図）

Ⅰ④区中央南寄り、第１面で検出した検出長0.8m、幅0.3m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は逆台形を呈する。

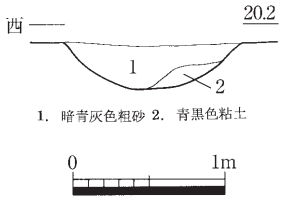
埋土中から191・192が出土した。191は弥生土器壷としたが甕の可能性がある。192は弥生土器甕の底部である。どちらも弥生時代後期に属するもので、磨滅が著しい。



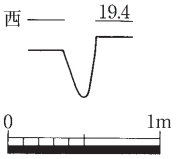
第85図　Ⅰ④SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ④SD16（第86図）

Ⅰ④区東半、第２面で検出した、検出長12.9m、幅1.2m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。北東から南西方向にカーブしている。断面形状は皿形を呈し、埋土はほとんどが粗砂であることから、河川氾濫等の営力で一気に埋没したものと思われる。図化できなかったが、弥生時代後期に属すると想定される土器片が出土している。



第86図　Ⅰ④SD16断面図(1/50)



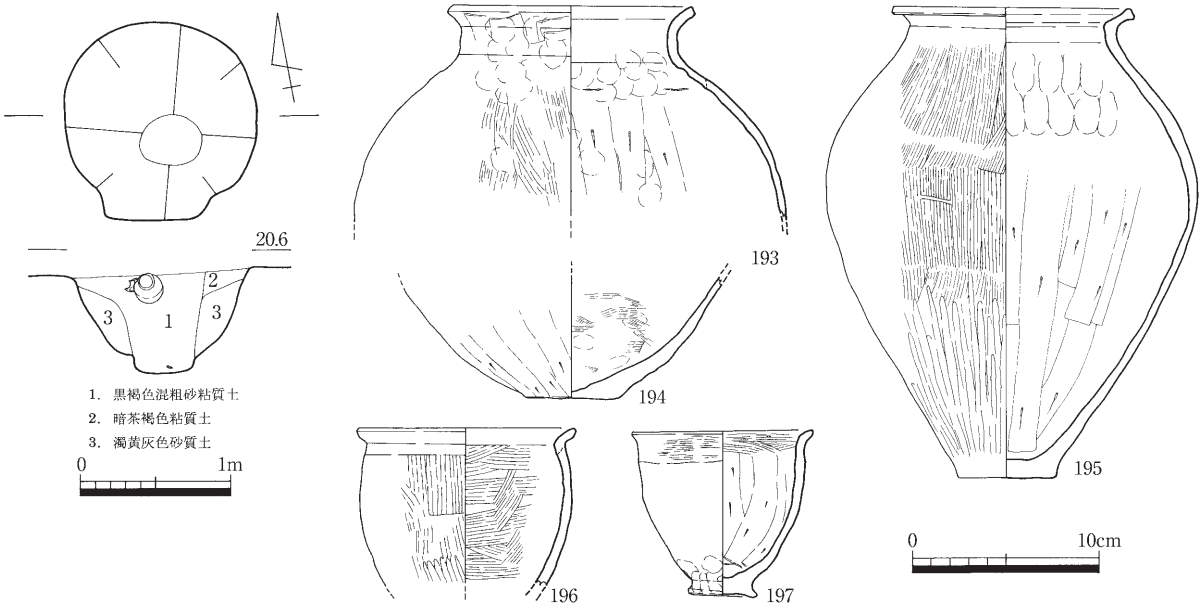
第87図　Ⅰ④SD17
断面図(1/50)

Ⅰ④SD17（第87図）

Ⅰ④区東南隅、第２面で検出した、検出長3.9m、幅0.3m、深さ0.4mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は深いＶ字形を呈している。図化できなかったが、弥生時代後期に属すると判断される土器片が出土しており、当該期の溝状遺構と想定した。

Ⅰ①SK01（第88図）

Ⅰ①区北東隅、第１面で検出した円形の土坑である。直径1.3m、深さ0.7mの規模を持つ。断面形状



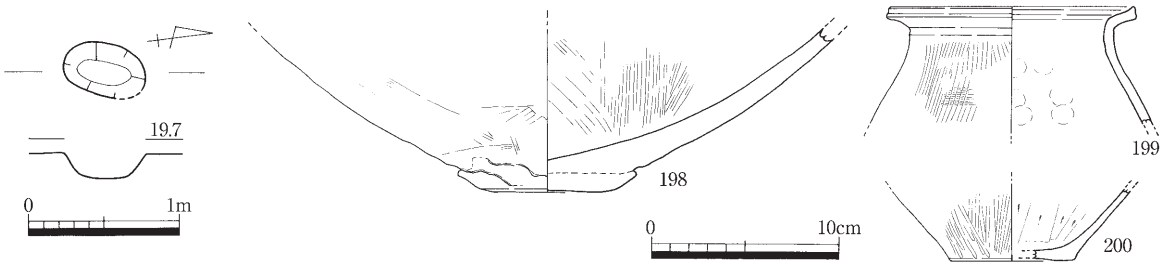
第88図　Ⅰ①SK01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

はすり鉢状を呈している。当該地周辺の地下水位は比較的高く、底面付近では現在でも水が染み出てくる状況であった。このことから、この土坑は井戸を目的として掘られた可能性も捨てきれない。

埋土上位から193～197の土器がまとまって出土した。横に倒した195の口縁部付近に193が逆さに置かれ、その上に197が横倒しになっていた。195の体部横には194・196が上下に重なって置かれていた。一括して入れられた土器群と捉えることができる資料である。193・194は弥生土器壷である。193は球形の体部から頸部が短く直立し外反する口縁部を有する。195・196は弥生土器甕である。195は倒卵形の体部に強く屈曲する口縁部を持つ。底部は平底である。胎土に角閃石や雲母を含んだいわゆる「下川津Ｂ類」土器である。196は砲弾形の体部に屈曲する口縁部を持った小型品である。197は弥生土器台付鉢で、外面には土器乾燥時に生じた粘土のひび割れが著しい。195の形状などから、弥生時代後期後半に位置づけられる土器群である。

Ⅰ③SX01（第89図）

Ⅰ③区中央、第１面で検出した土坑状を呈する遺構である。中世の遺構を掘り抜いたときに確認しており、本来は第２面に属するものだと思われる。50㎝×35㎝の長楕円形で、深さ20㎝の規模を持つ。断面形状は浅い皿形を呈している。198～200は埋土中から出土した遺物である。198は弥生土器壷の底部である。胎土中には粗い砂粒をたくさん含んでおり、弥生時代前期の胎土に酷似している。199・200は弥生土器甕である。199はなで肩の体部に強く外方へ屈曲する口縁部を有する。口縁端部の面は強いナデ調整に起因する凹線状を呈している。胎土中に角閃石や雲母を含み、茶褐色を呈する「下川津B類」土器である。200は底部で内面のヘラケズリ調整で、器壁を薄く仕上げている。これらの土器の形状から弥生時代後期後半に位置づけられる。



第89図　I③SX01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ①SR01東・01西（第90～92図）

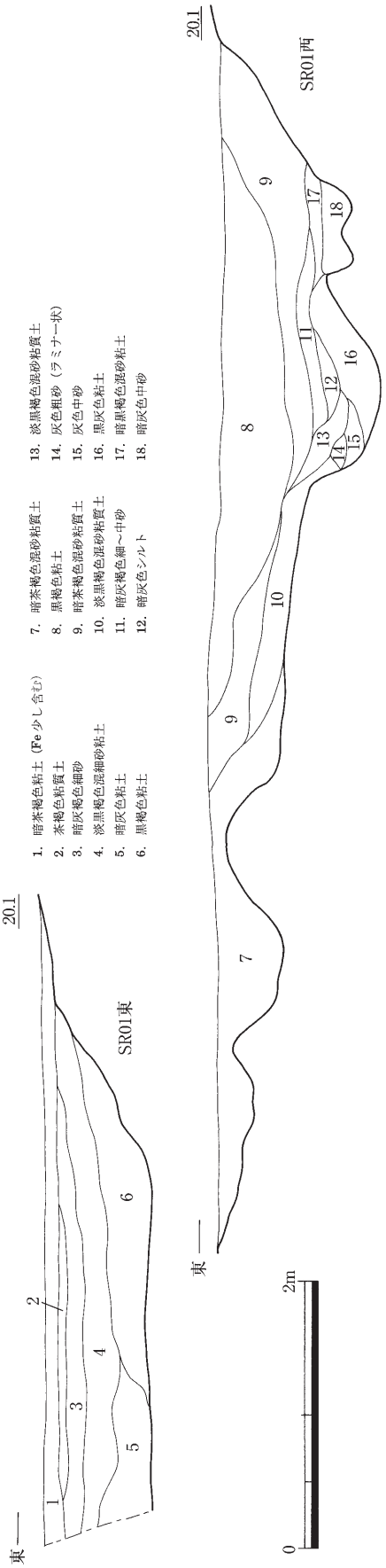
Ⅰ①区東南隅付近で検出した自然河川の一部である。Ⅰ①SR01東は、東側でⅠ②SR02・03と連続し、南側でⅠ④SR01流路と連続し、さらにⅠ④SR01西と合流している。なおこの自然河川は、高松東道路調査Ｃ区の自然河川と同一のもので、南側調査区のM①SR01へとつながるものである。あくまで自然河川の本流はⅠ②区からⅠ④区を流れる部分で、大雨等による大量の水流が出た際にバイパス的に流れ込む流路に相当するものと理解できよう。普段は水流もなく湿地状を呈していたようで、暗灰色や黒褐色の粘土が主な埋土となっている。

Ⅰ①SR01西は、南側でⅠ④SR01西と連続し、南の高松東道路調査Ｃ区の自然河川、横断道調査M区のM①SR01へつながって南西方向へ流下していく自然河川の一部である。Ⅰ①SR01西は平面形が土坑状を呈しており、川の始まりとでも言えるような状況にある。泉のような目立った湧水はみられないが、

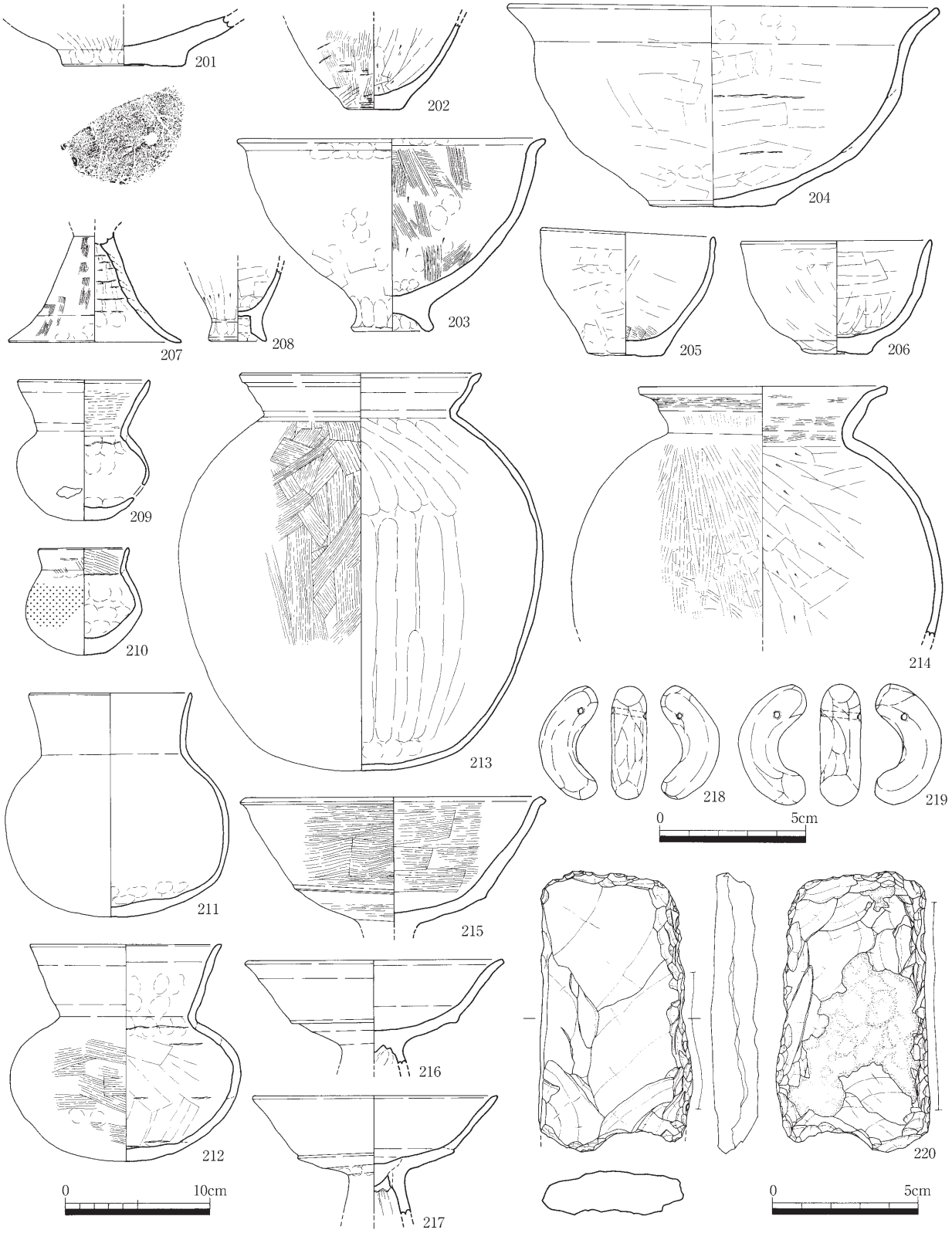
じわじわと水が染み出してきている。本来は北西方向にまだ続きがあったが、後世の削平で失われてしまったものであろうか。土層観察では砂層と粘土層の互層が数回単位でみられることから、流水・滞水を繰り返しつつ埋没した様子がうかがえる。

本来なら、遺構も遺物もまとめて報告すべきところではあるが、調査区単位でまとめて報告しているため、検出単位ごとに報告するものとする。

201～220はⅠ①SR01東部分から出土した遺物である。埋土は概ね上下に二大別することができるが、上下各々の層から出土した破片が接合した遺物も含まれるなど年代を反映したものとはなっていないため、一括して報告する。201は弥生土器壷である。底部には土器製作時に下に敷いた木の葉の葉脈がスタンプとして遺存している。202は弥生土器甕の底部である。外面はタタキ調整のあとハケ調整で仕上げている。203～206は弥生土器鉢で、203は屈曲した口縁部と、突出した上げ底気味の底部を持つ。204は屈曲した口縁部と、平底を持つ。205・206は直口口縁に平底の小型鉢である。207は弥生土器高杯の脚部で、開き具合は小さめである。208は製塩土器の脚部である。外面にヘラケズリ調整が良好に残る。これらは平底を有していることから、弥生時代後期のものと想定できる。209～212は土師器小型丸底壷である。扁球型をした体部のつぶれ具合や、口頸部の長短などの違いがみられる。210は体部外面と底部内面にススが付着している。213・214は土師器甕である。ともに球形に近い体部に強く屈曲する口縁部が付くものだが、213の口縁部が内弯している布留系の甕であるのに対して、214は外方へ屈曲しているという違いがみられる。215～217は土師器高杯である。杯部の屈曲部が突帯状にはみ出す形態をしている点では共通するが、口縁端部をわずかに外方につまみ出すもの（215）、外反気味のもの（216）、直線的なもの（217）などの差異がみられる。これらは古墳時代初頭に属する土器である。218・219は土製勾玉である。寸法は長さ約４㎝、幅約1.5㎝前後、厚さ約1.2㎝を測るほぼ同サイズのものである。片側に穿たれた穴も約２㎜と同じで、ひとりの人物の手によって同時に作られたものとみられる。弥生時代後期から古墳時代初頭の範疇で捉えることができる。220はサヌカイト製の石器である。打製



第90図　Ⅰ①SR01東・01西断面図（1/50）



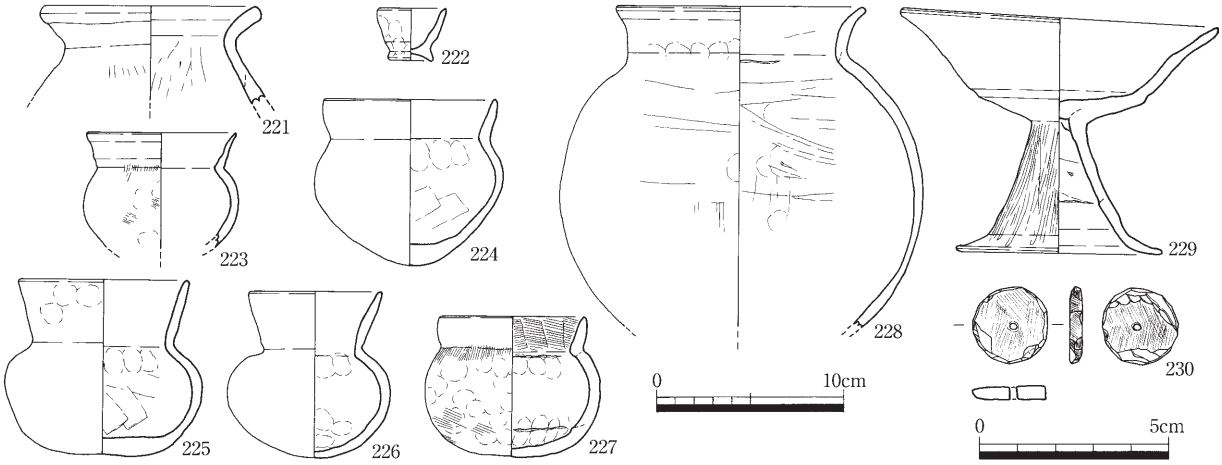
第91図　I①SR01東出土遺物(1/2、1/4)

石斧として図化したが製作途上の石庖丁の可能性もある。片面に自然面を残している。

221～230はⅠ①SR01西部分から出土した遺物である。221は弥生土器甕で、全体に磨滅が著しいが内面はヘラケズリ調整である。弥生時代後期のものであろう。222はミニチュア土器鉢で全体に指頭痕が明瞭に残る。223～227は土師器小型丸底壷である。口縁部の長短や底部の尖り具合などに差異が認めら

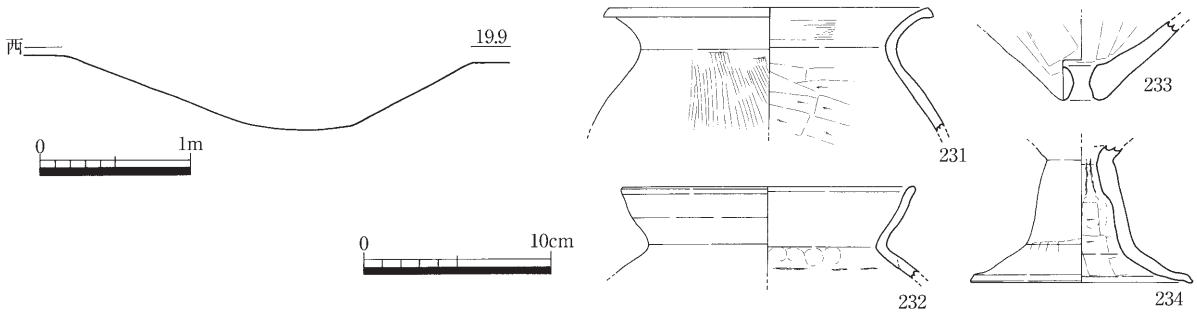
れるが、古墳時代初頭頃に位置づけられる。228は土師器甕で球形の体部に外反する短い口縁部が付く。229は土師器高杯で、杯部の屈曲部に段を有し大きく外反する口縁部を有する。228・229もその形態から古墳時代初頭のものであろう。230は滑石製の有孔円盤である。

Ⅰ④SR01流路（第93図）



第92図　I①SR01西出土遺物(1/2、1/4)

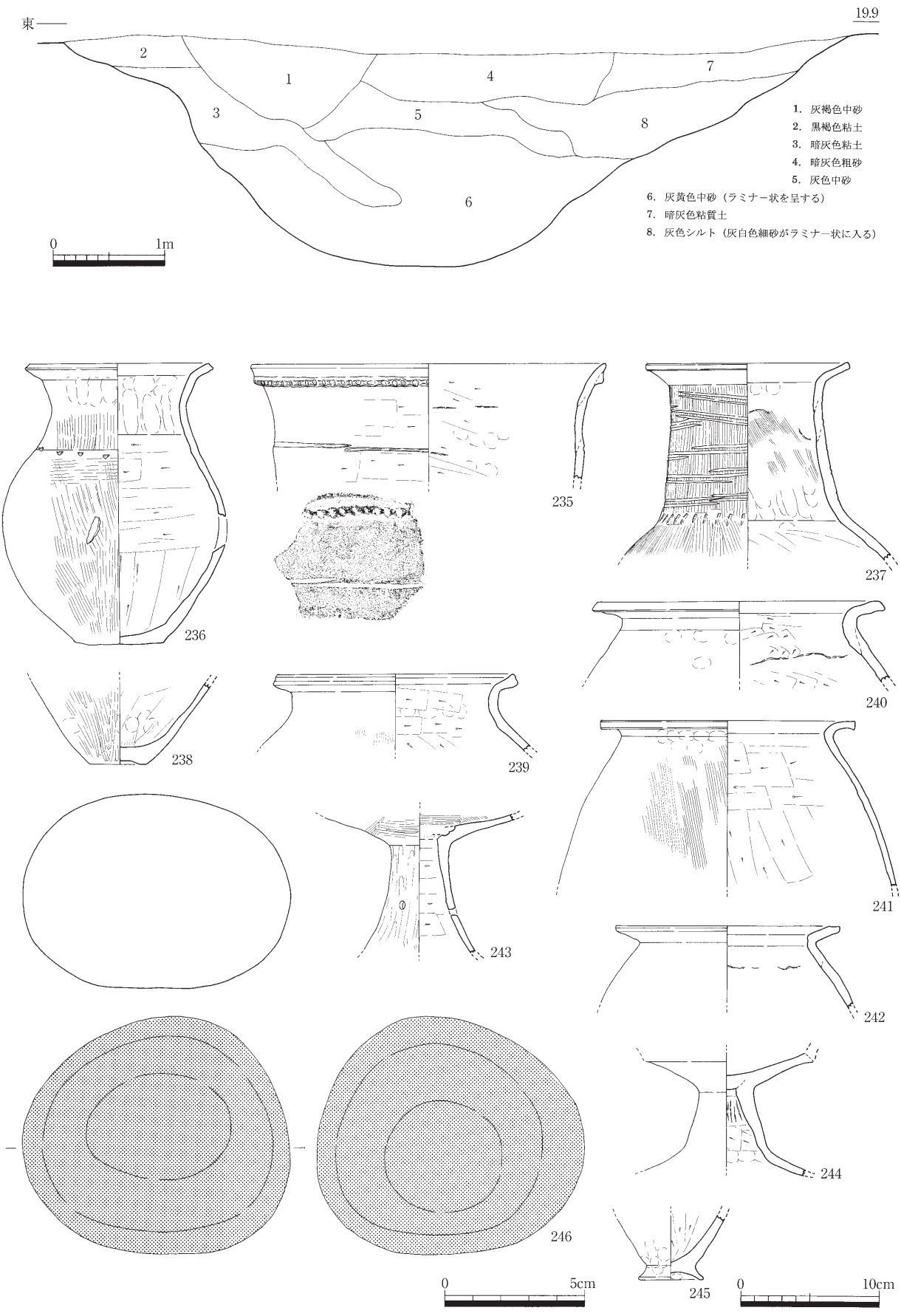
Ⅰ④区中央付近、第2面で確認した自然河川の一部である。Ⅰ①SR01東に連続して、南ではⅠ④SR01西に合流する。断面形状は浅い皿形を呈し、幅2.7m、深さ0.5mの規模を測る。Ⅰ①SR01東と同様に黒褐色粘土が堆積しており湿地状を呈していたものと想定される。埋土から231～234の遺物が出土した。231は弥生土器甕で口縁端部をわずかに肥厚させる。粗いハケ調整で仕上げている。232は土師器甕で内弯する口縁部を有する布留系である。233は弥生土器甑である。尖底気味の底部中央に穴を穿つ。234は土師器高杯で裾部が屈曲して大きく開く。弥生時代後期～古墳時代初頭の年代が想定できる。



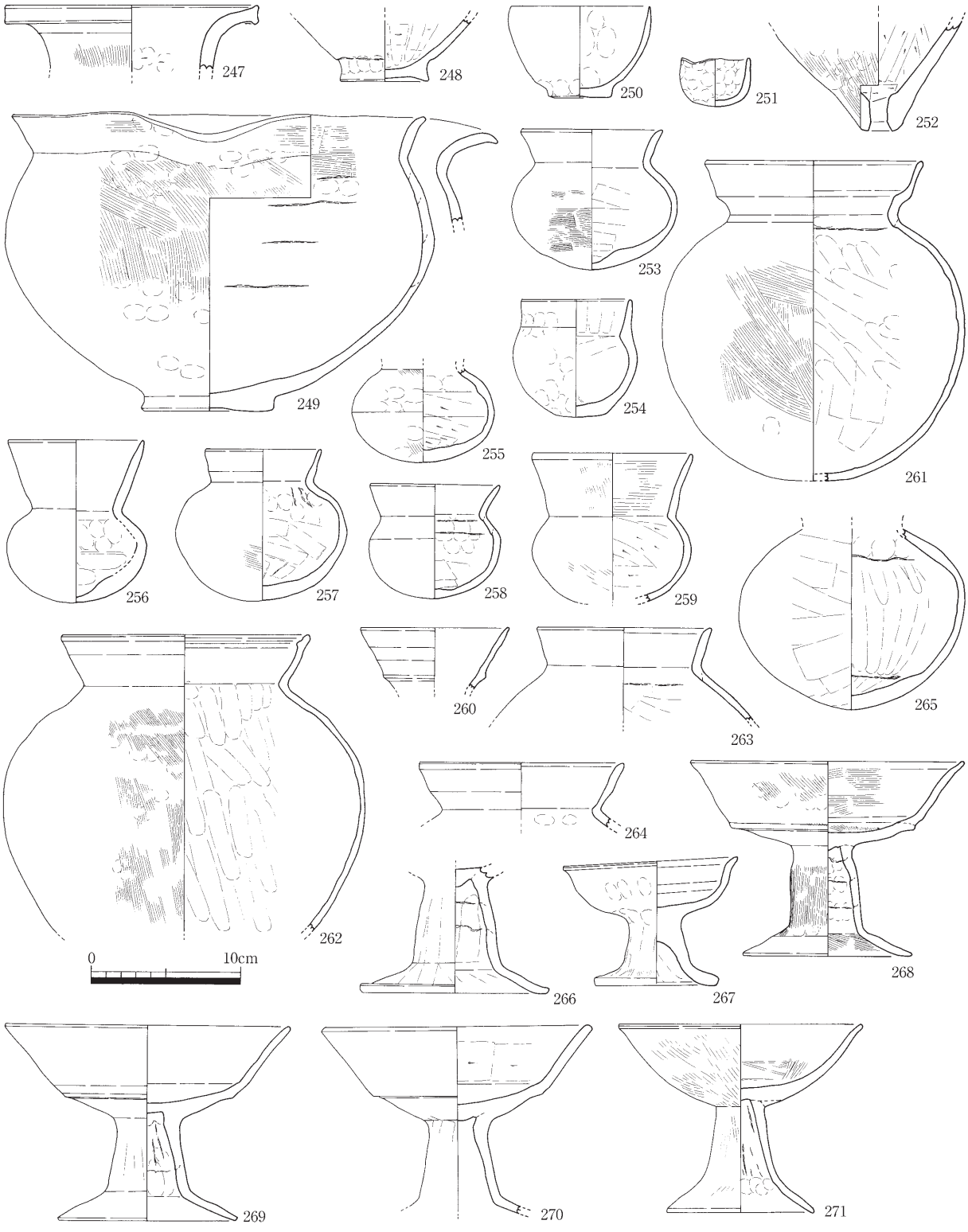
第93図　I④SR01流路断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ④SR01西（第94図）

Ⅰ④区西半、第2面で検出した自然河川で、Ⅰ①SR01西に連続する。幅4.4m、深さ1.9mの規模で屈曲して南へ伸びる。土層観察から流水・滞水を繰り返したことがわかる。下層として235～246を取り上げている。235は凸帯文土器深鉢で、口縁部に刻み目突帯1条をめぐらし頸胴部の境に沈線を施している。縄文時代晩期後半に属する。236～238は弥生土器壷である。236は球形の体部に大きく開く口縁部を持ち、肩部に刺突文をめぐらせる。237は長頸壷で刺突文と半裁竹管様の工具による2条1単位の沈線文5条をめぐらせる。239～242は弥生土器甕で、239は肥厚した口縁端部に凹線1条を施す。

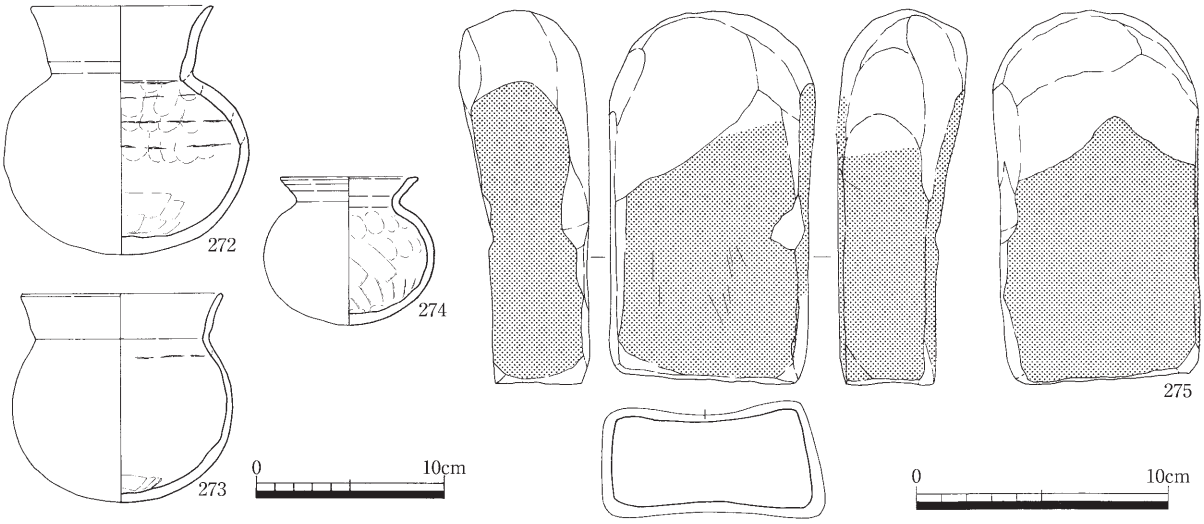


第94図　I④SR01西断面図(1/50)、出土遺物①(1/2、1/4)



第95図　I④SR01西出土遺物②(1/4)

240～242はなで肩の体部に強く屈曲する口縁部がつく。243は弥生土器高杯で脚部と杯部は円盤充填となっている。244は土師器高杯で屈曲して開く裾部をもつ脚部である。245は形態が製塩土器に似るが内面に丁寧なナデ調整がみられたことから弥生土器鉢と判断した。246は全面を使用した安山岩の磨り石。244のみ古墳時代初頭のもので上層に属する遺物であろう。その他は弥生時代後期後半～末頃に位置づ

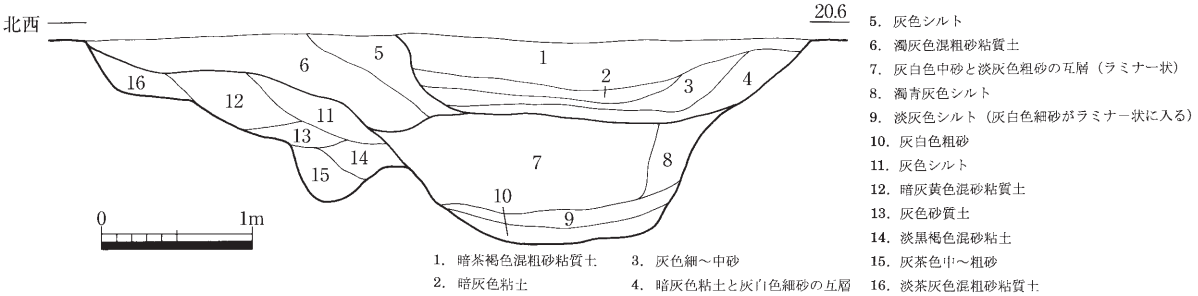


第96図　I④SR01西出土遺物③(1/3、1/4)

けられる。247～271は上層として取り上げた遺物である。247は弥生土器壷で大きく外反する口縁端部には擬凹線がみられる。248～250は弥生土器鉢である。249は屈曲する口縁部で片口を持つ。251はミニチュア土器で鉢を模したものだろうか。252は弥生土器甑。尖底気味の底部の中央に穴を穿つ。これらは弥生時代後期の遺物で下層に属するものであろう。253～260は土師器小型丸底壷である。扁球型の体部に上方に開く口縁部を有しているが、口縁部の長短や体部の扁球の度合いに差異が認められる。253は体部内外面に炭化物の付着が認められ、煮炊きに使用している。261～264は土師器甕で、261は二重口縁で吉備系ないし山陰系の影響が想定される。262・264は内弯する口縁部をした布留系の甕である。263は短く直立する口縁部である。265は土師器壷でやや尖り気味の底部を持つ。266～271は土師器高杯である。杯部の屈曲部形態が突帯状（268・269)、稜線（270)、丸み（267)、内弯（271）などがある。脚部は屈曲して開く裾部を持つ。これらは古墳時代初頭に属する。272～275は最上層として取り上げている。272～274は土師器小型丸底壷で扁球型の体部に上方に開く口縁部を持つ。275は砂岩（註２）製の砥石で４面を使用している。

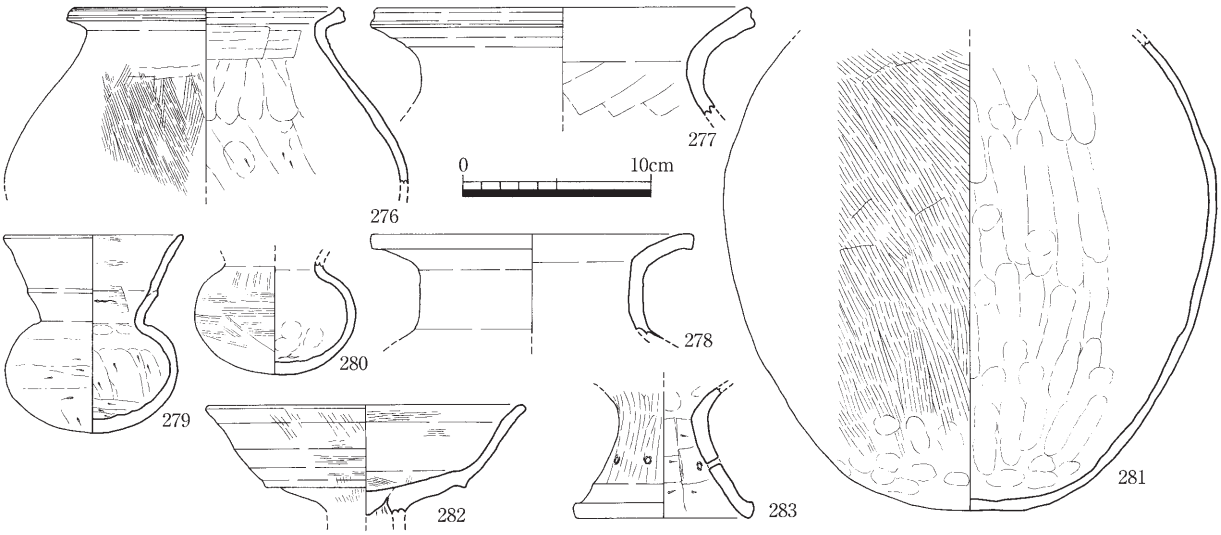
Ⅰ②SR03（第97図）

Ⅰ②区北東隅付近、第２面で検出した自然河川でⅠ②SR02と合流する。土層観察では両者の先後関係は判明しなかったため、調査時は北西から直線的に続くものをⅠ②SR02、合流地点から北東隅部分をⅠ②SR03として遺物の取り上げ等も分けて調査した。ここで報告するⅠ②SR03は北東隅から合流地



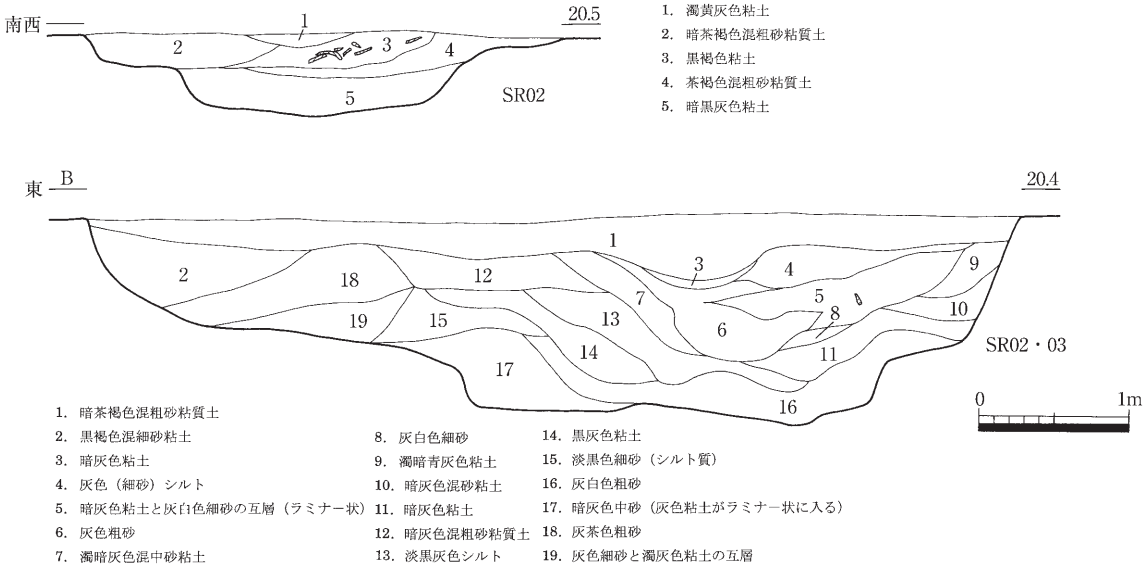
第97図　I②SR03断面図(1/50)

点までの検出長14.2m分で、幅5.7m、深さ1.4mの規模で底面は水流の作用で抉られ凹凸が著しい。土層観察から度重なる流水・滞水があった状況が復元できる。埋土中から276～283の遺物が出土した。276は弥生土器甕である。なで肩の体部から強く屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は肥厚させて凹線2条を施したいわゆる「下川津B類」土器である。277・278は弥生土器壷である。277は大きく外反する口縁部で、肥厚させた端部に凹線1条を施す。278は短く直立する頸部から外方へ開く口縁部を持つ。279・280は土師器小型丸底壷である。ともに扁球形の体部を有するもので、279は二重口縁風の長めの口縁部を持つ。281は土師器甕で、やや縦長気味の球形の体部で底部は丸底をした、布留系の甕である。282は土師器高杯で、杯部の屈曲部が突帯状になっている。283は弥生土器高杯である。外方に開く裾部を持ち、端部を肥厚させて面を有する。形態の特徴から、276～278・283は弥生時代後期、279～282は古墳時代初頭に比定できる。



第98図　I②SR03出土遺物(1/4)

I ②SR02（第99～103図）



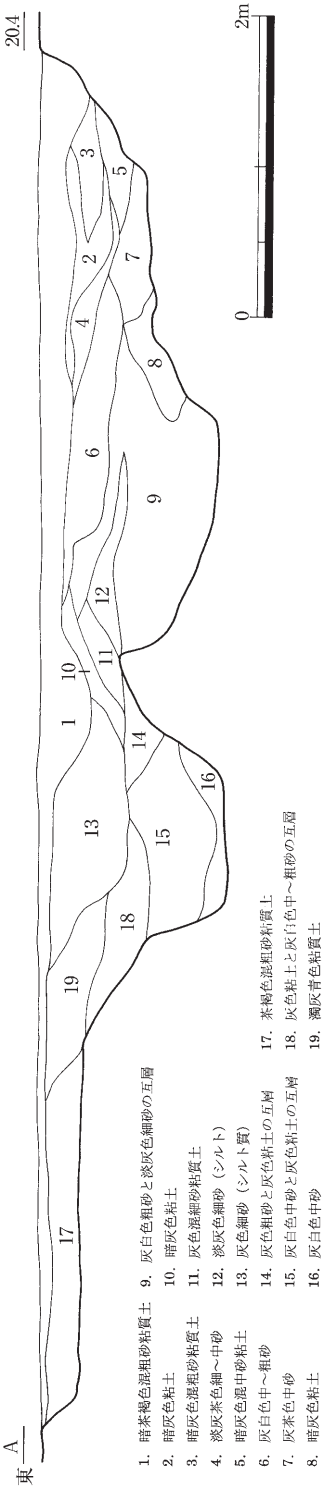
第99図　I②SR02、SR02･03断面図①(1/50)

Ⅰ②区の第２面で検出した自然河川の一部で、北西隅から合流地点を経由して南壁まで続く部分、検出長27.5m部分である。このうち北西隅から合流地点までの部分は、幅3.2m、深さ0.6mの規模を有し、合流地点以南と比較すると底面の標高が0.8mほど高い。一方のⅠ②SR03の底面は合流点以南とほぼ同じ高さをしている。また、北西隅から合流地点までの埋土に注目すると、この箇所は基本的に粘質土であり、砂層との互層は認められない。Ⅰ②SR03ではそれが顕著に認められる。以上の点を根拠にすれば先行する北西からの浅い流れが存在し、そこに北東から来た強い流れが合流地点以南をその営力によって深く抉っていったものと想定できる。合流地点の土層堆積に両者の関係が見えないことも説明がつくといえよう。

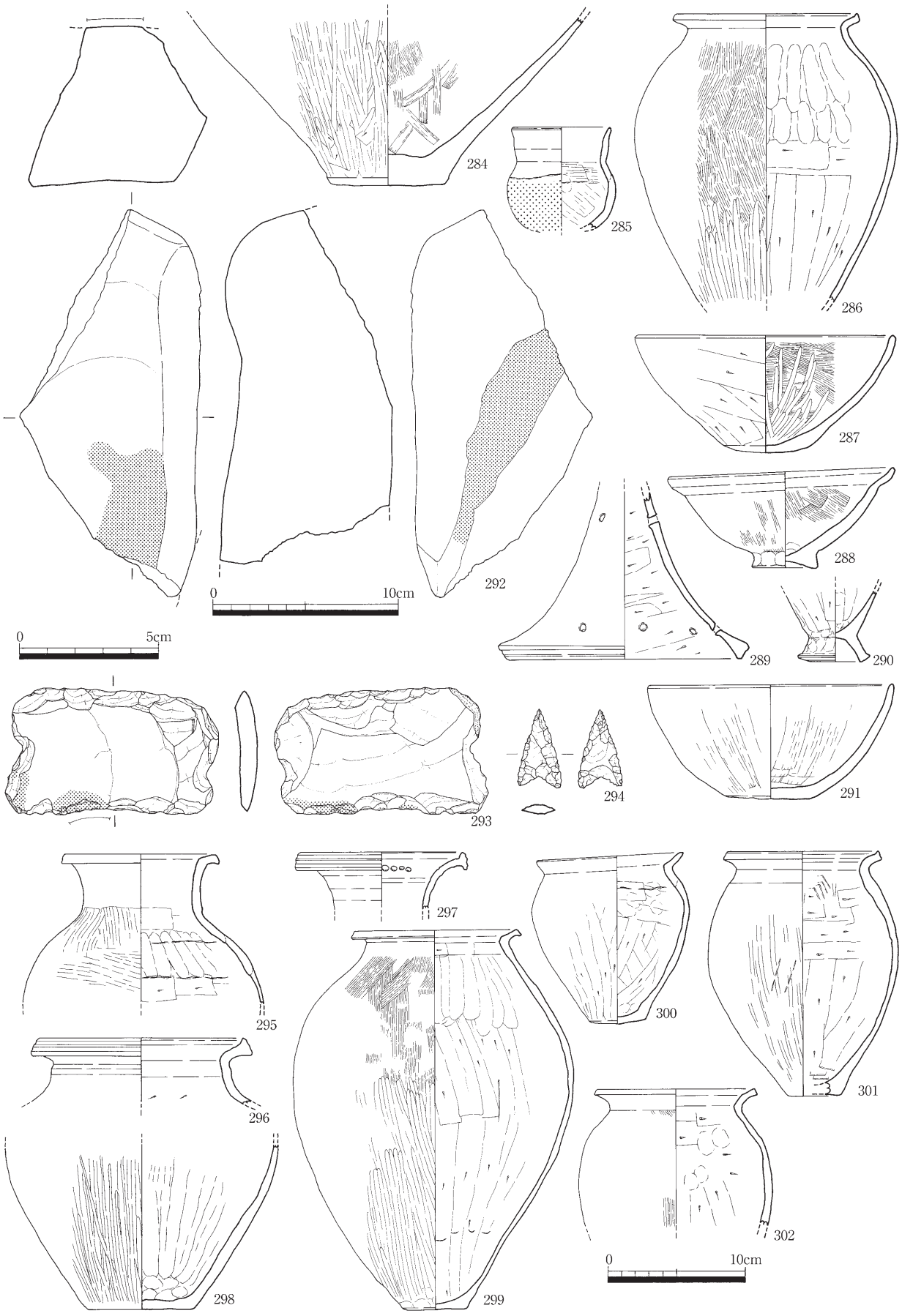
合流点以南すべてをⅠ②SR02として調査を行い、遺物を取り上げているため、ここで報告する遺物には本来Ⅰ②SR03に属するべき遺物も混ざっていることを断っておく。合流点以南の土層は上下に二大別して遺物を取り上げたので、その順で遺物を報告する。

284～294は下層として取り上げた遺物である。284は弥生土器壷の底部で、胎土中に粗い砂を含んでおり弥生時代前期の可能性もある。285は古墳時代初頭の土師器小型丸底壷で、外面と底部内面にススが付着している。286は弥生土器甕で倒卵形の体部に強く屈曲する口縁部を持った「下川津Ｂ類」土器である。287・288・291は弥生土器鉢である。287・291は内弯気味の直口口縁をもち、288は途中で屈曲する口縁部をもつ。289は弥生土器高杯の脚部で上下２段に小さな円形の透かし穴を穿つ。290は製塩土器の脚部である。285を除くこれらは弥生時代後期に属するものである。292は砂岩製の砥石である。欠損が著しいが砥面として２面を使用している。293はサヌカイト製の打製石庖丁で、刃部の一部に使用による磨滅がみられる。294はサヌカイト製の打製石鏃で、凹基式である。これらの石器も弥生時代後期に属するものと想定される。

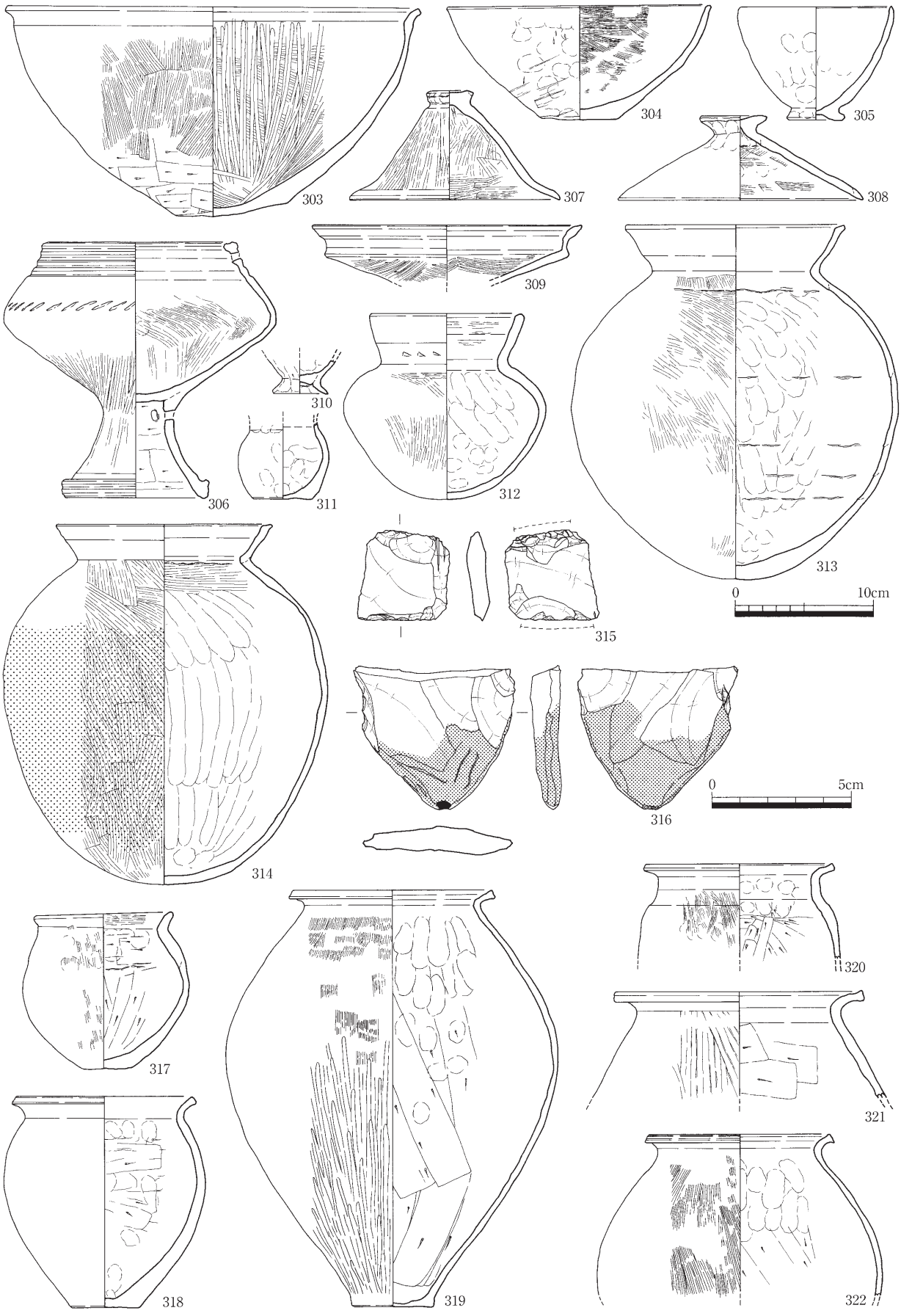
295～316は上層として取り上げた遺物である。295～298は弥生土器壷である。295は球形の肩部から軽く外反気味の頸部を持ち、口縁部は強く外方に屈曲させている。296は内傾する口頸部から強く外方に屈曲する口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張して、凹線２条を施している。甕の可能性がある。297は大きく外反しながら開く口頸部を持ち、口縁端部を上下に拡張して端部に凹線３条を施している。口縁部内面には円形浮文を貼り付けている。298は弥生土器壷の底部で、平底で外面のヘラミガキ調整が顕著である。299～302は弥生土器甕である。299は倒卵形の体部に強く屈曲する口縁部を有しており、口縁端部は肥厚している。いわゆる「下川津Ｂ類」土器である。300は肩



第100図　Ⅰ②SR02・03断面図②(1/50)



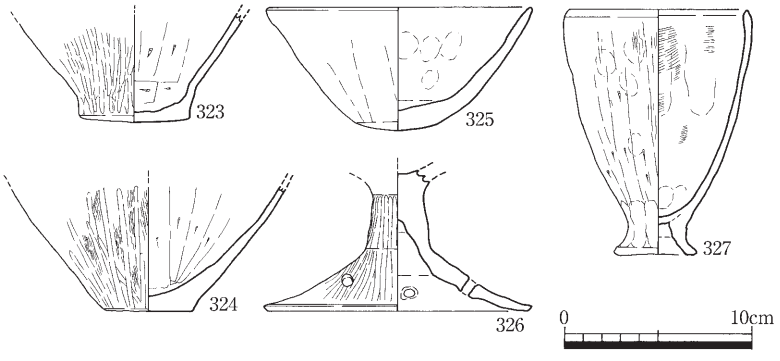
第101図　I②SR02出土遺物①(1/2、1/3、1/4)



第102図　I②SR02出土遺物②(1/2、1/4)

部がやや張った体部に内弯気味に立ち上がる口頸部が屈曲する形態をしている。内外面のヘラケズリ調整が著しい。301は倒卵形の体部を呈するが肩の張りは弱い。肥厚気味の口縁部と平底をもつ。302も同様の形態を呈するが口縁部に肥厚はみられない。303～306は弥生土器鉢である。303は口縁部を外方に屈曲させているが304・305は直口口縁である。305は小さな脚台が付いている。306は扁球形の体部に内傾する口頸部が連続する形態をしている。口縁端部は拡張させており、口頸部外面には凹線4条を施している。口縁部直下には焼成前の穿孔1個が認められる。脚部は端部に面を設けて凹線2条を施している。脚部と椀部の接続には円盤充填である。307・308は弥生土器蓋である。307は器高が高いが308は器高の低い笠形をしている。ともに甕の蓋である。309は弥生土器高杯である。屈曲部から外反する短めの口縁部を持つ。杯部内外面は4分割のヘラミガキ調整を施している。「下川津Ｂ類」土器である。310は製塩土器底部である。311は手捏ねのミニチュア土器である。口縁部を欠くが壷をイメージしたものであろうか。312は土師器壷である。肩の強く張った体部に内弯気味に立ち上がる口頸部を持つ。頸部外面に製作時の爪圧痕が残る。313・314は土師器甕で、球形で丸底の体部に内弯する口頸部がついている。口縁端部はわずかに外方につまみ出されている。314は外面下半と内面下半に炭化物・ススの付着がみられる。315はサヌカイト製の楔形石器である。両端につぶれが認められる。316はサヌカイト製の打製石斧である。先端部の両面には稜線が丸まるほど顕著な使用痕が認められ、長期間の使用後、破損したために廃棄されたものであろう。これらの土器のうち306の弥生時代中期後半、312～314の古墳時代初頭の以外のものは弥生時代後期に属するものである。

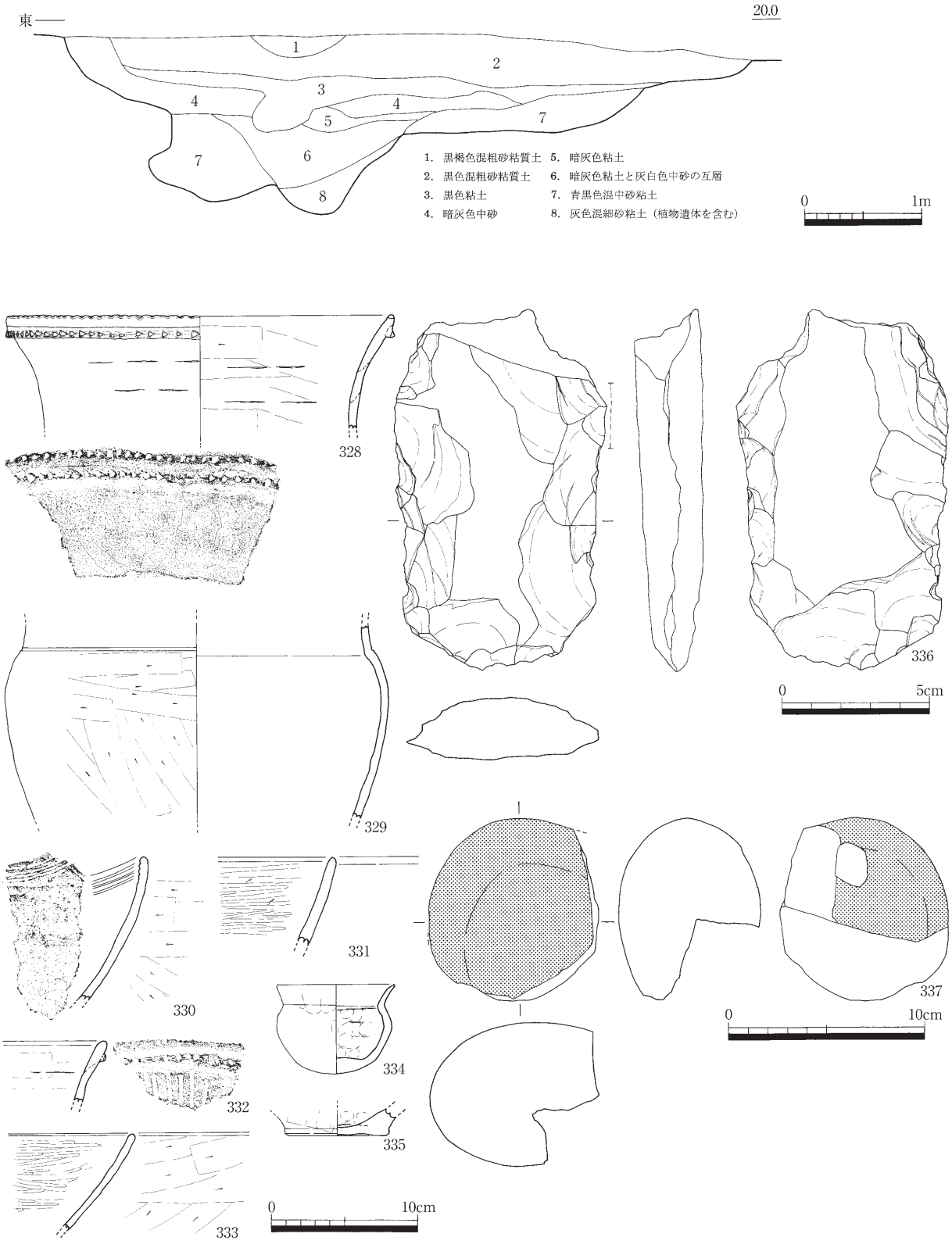
317～327は北東隅から合流地点までの部分で出土した遺物である。317～324は弥生土器甕である。317・318は平底で球形に近い体部に短く外反する口縁部を持ち、318は口縁端部をわずかに肥厚させている。319は倒卵形の体部に強く屈曲する口縁部の付くもので口縁端部を肥厚させている。体部下半のヘラミガキ調整が顕著である。320はなで肩の体部に屈曲する口縁部を持つ。壷の可能性もある。321は直線的な肩部を呈する。322は丸みを帯びたなで肩の胴部を持ち、口縁端部は拡張して凹線2条を施している。323・324は甕の底部で平底である。325は直口口縁の弥生土器鉢である。326は土師器高杯で、円筒状の脚部で裾部が大きく開く。5個の穿孔が施されている。327は製塩土器である。古墳時代初頭の326以外はいずれも弥生時代後期に属するものである。



第103図　Ⅰ②SR02出土遺物③(1/4)

Ⅰ④SR01東（第104図）

Ⅰ④区東半、第2面で検出した自然河川の一部で北方のⅠ②SR02と連続する。Ⅰ④区での検出長は12.4mで、幅5.7m、深さ1.5mの規模を有する。埋土の堆積状況や水流によって抉られた底面などⅠ②SR02・03と同じ状況である。埋土から328～337が出土した。328は凸帯文土器深鉢で、口縁部下に1条の刻み目突帯をめぐらせ口縁上面にも刻み目を施す。外面にはススや炭化物が付着しており煮炊きをしたことがわかる。329も凸帯文土器深鉢で、頸胴部の境にはヘラ描き沈線1条をめぐらせている。外面に炭化物・ススが付着している。328と同一個体の可能性がある。330・331は黒色磨研土器浅鉢である。



第104図　I④SR01東断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/3、1/4)

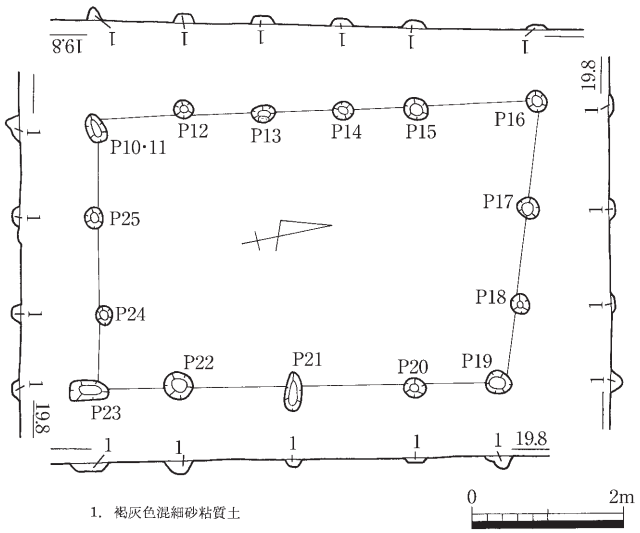
330は波状口縁で内面に3条の沈線をめぐらせている。332は凸帯文土器深鉢で口縁部下に1条の刻み目凸帯をめぐらせている。頸部にはヘラ描き文がみられる。333は直口口縁の浅鉢、335は浅鉢の底部であろう。334は土師器小型丸底壷である。336は安山岩製の打製石斧である。風化が進み表面が脆い。337

は安山岩製の磨り石である。全面にわたって使用による磨滅痕が認められる。以上の遺物は、334を除いてすべて縄文時代晩期後半に属するものである。

（3）古代の遺構・遺物

Ⅰ③SB02（第105図）

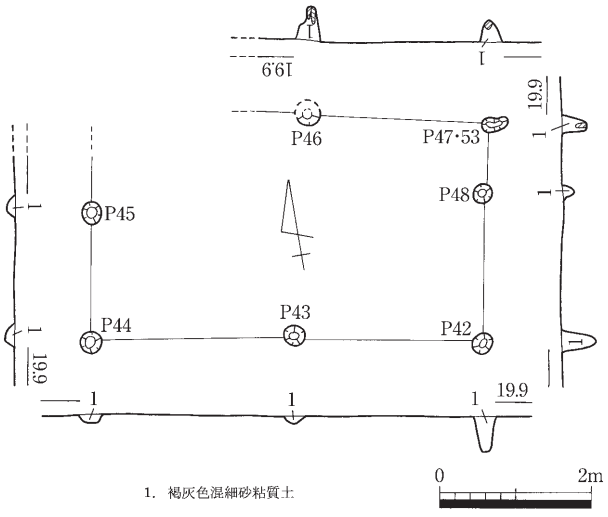
Ⅰ③区西半、第1面で確認した3間×4間の掘立柱建物跡である。西辺の桁間は5間を数えるが、補助的な柱穴（SP15）があるとみれば4間で捉えられよう。全体としては台形に近い形状を示す。3.4m×5.8mの規模で、床面積は19.5㎡を測る。建物主軸はＮ3°Ｅの方向を有している。Ⅰ③SB01とは一部重複しているが先後関係を示す状況はない。建物を構成する柱穴のいくつかから、9～10世紀代と想定される遺物が出土しており、この建物の年代として捉えておく。



第105図　Ⅰ③SB02平·断面図（1/100）

Ⅰ③SB03（第106図）

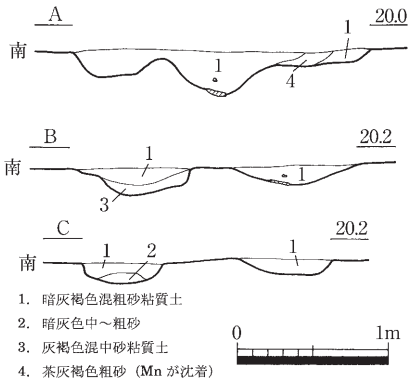
Ⅰ③区西半北寄り、第1面で確認した掘立柱建物跡である。北西隅の柱穴を失っているが、2間×2間の建物として復元した。柱穴の間隔は桁間方向が広いため、2.9m×5.2m、床面積は15.1㎡の規模を持つ東西棟である。建物主軸はN80°Wの方向を有している。東辺の梁間を構成する柱穴は間隔が不揃いであり、この建物自体はさらに大きな南北棟で、調査区外へ続いている可能性もある。9～10世紀に想定される遺物が出土している。



第106図　Ⅰ③SB03平·断面図（1/100）

Ⅰ①SD02（第107・108図）

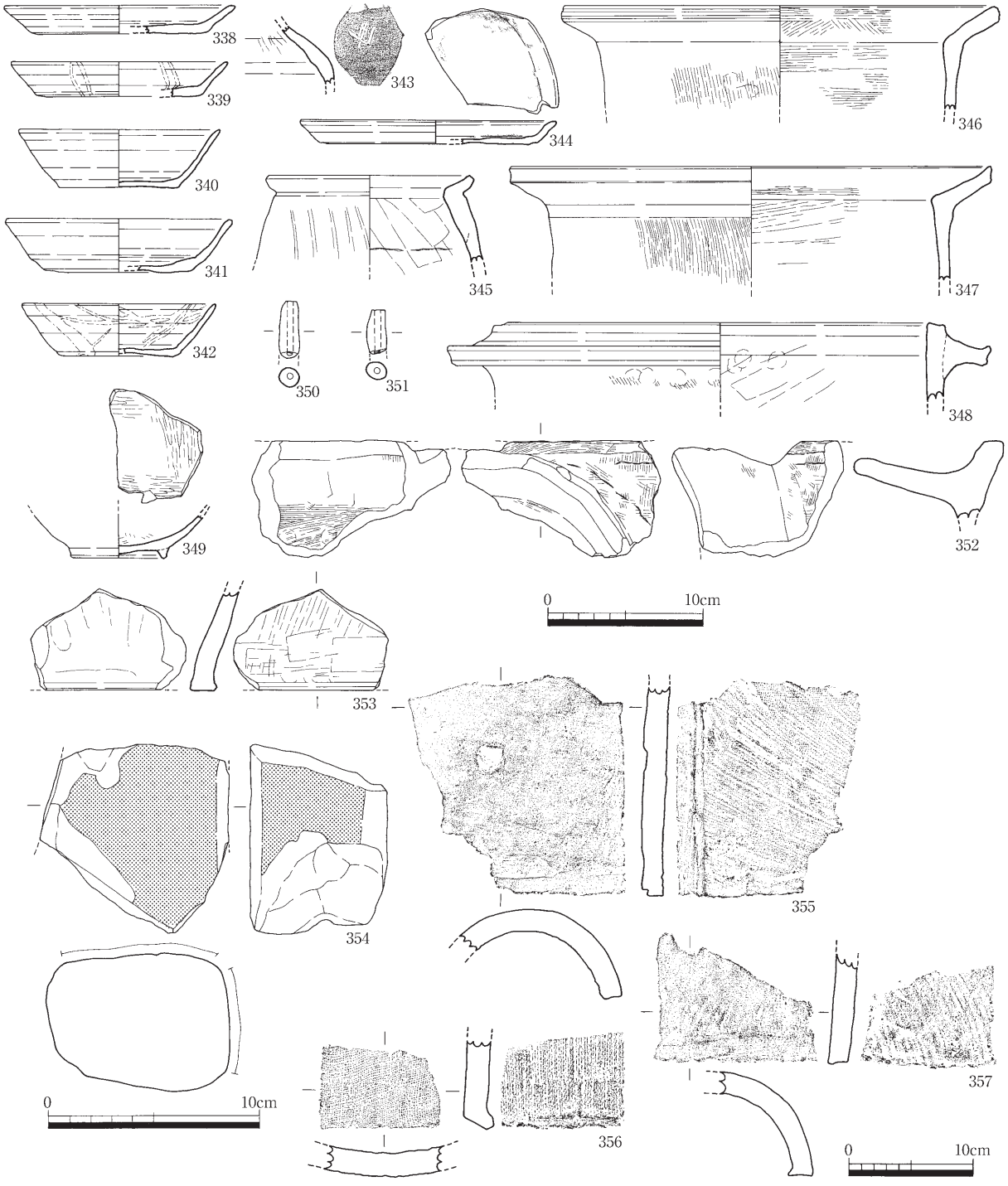
Ⅰ①区中央付近、第1面で検出した検出長26.4m（Ⅰ①区部分のみ）の溝状遺構である。東方のⅠ②SD02と連続する溝状遺構である。検出状況は幅0.3m、深さ0.3mの小規模な溝状遺構が2条平行していたが、これは後世の著しい削平を受けた結果であり、本来は幅2.0m前後の1つの溝状遺構で、底面に2条のやや深い部分があったものと思われる。2条の小溝間の高まり部分には、杭や盛土等の痕跡は確認できなかった。西端はⅠ①SD01によって壊されているが、Ⅰ①SD01の下層とは同時期に機能していた



第107図　Ⅰ①SD02断面図（1/50）

ものとみられる。断面形状は浅い皿形を呈しN80°Wの方向を有する。

338～357は埋土から出土した遺物であるが、ほとんどが底面に貼りついた状況での出土であった。338・339は須恵器皿である。339は内外面に火襷痕がみられる。340～342は須恵器杯である。342は内外面に火襷痕を残す。343は須恵器壷の肩部である。外面にヘラ記号を施している。344は土師器皿である。内面に赤彩が残る。345～347は土師器甕である。345は分厚い器壁の胴部に短く屈曲する口縁部が付く。外面は粗いハケ調整で仕上げている。346・347は長胴形のもので、屈曲する口縁部を持つ。ハケ調整が顕著である。348は土師器羽釜である。水平方向によく張り出した鍔部を持つ。349は黒色土器椀である。



第108図　I①SD02出土遺物（1/3、1/4、1/5）

外面に赤彩の痕跡がみられる。350・351は管状土錘である。352・353は竈の破片である。354は砂岩製の砥石で2面を砥面として使用している。355・357は丸瓦、356は平瓦である。

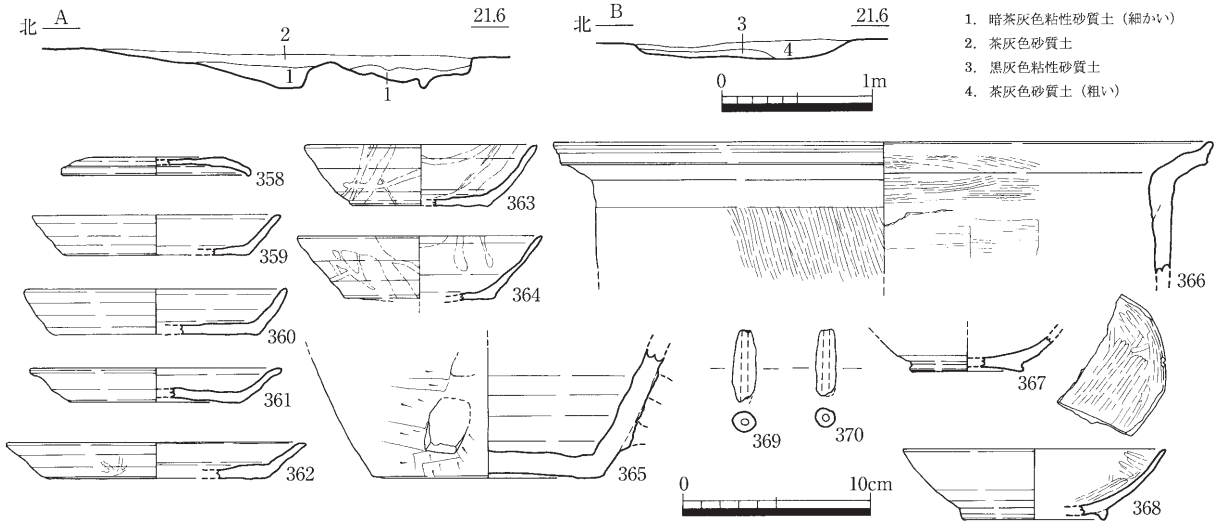
これらの遺物の年代は、その形状から9～10世紀に属するものと判断できる。図化した以外の瓦類が一定量存在していることは、この溝状遺構の特徴として挙げられよう。

Ⅰ②SD02（第109図）

Ⅰ②区南半、第1面で検出した検出長20m、幅2.1m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。Ⅰ①SD02と連続し、N80°Wの方向を有する。Ⅰ①SD02同様に底面に2条の小溝を持つ部分もみられるが、東半では1つになり浅い皿形の断面形状を呈する。

埋土中から358～368が出土した。358は須恵器蓋である。端部を折り曲げてかえりとしている。359・360・362は須恵器皿、361は土師器皿である。363・364は須恵器杯で内外面に火襷痕を残す。365は須恵器壷で外面下半に取手の痕跡が残る。366は土師器甕、369・370は管状土錘である。367は全面に施釉をした緑釉陶器椀で、京都産だろうか。368は黒色土器椀である。外面に赤彩の痕跡が残る。

図化しなかったがここでも瓦類の出土がみられた。これらは9～10世紀に属するものである。

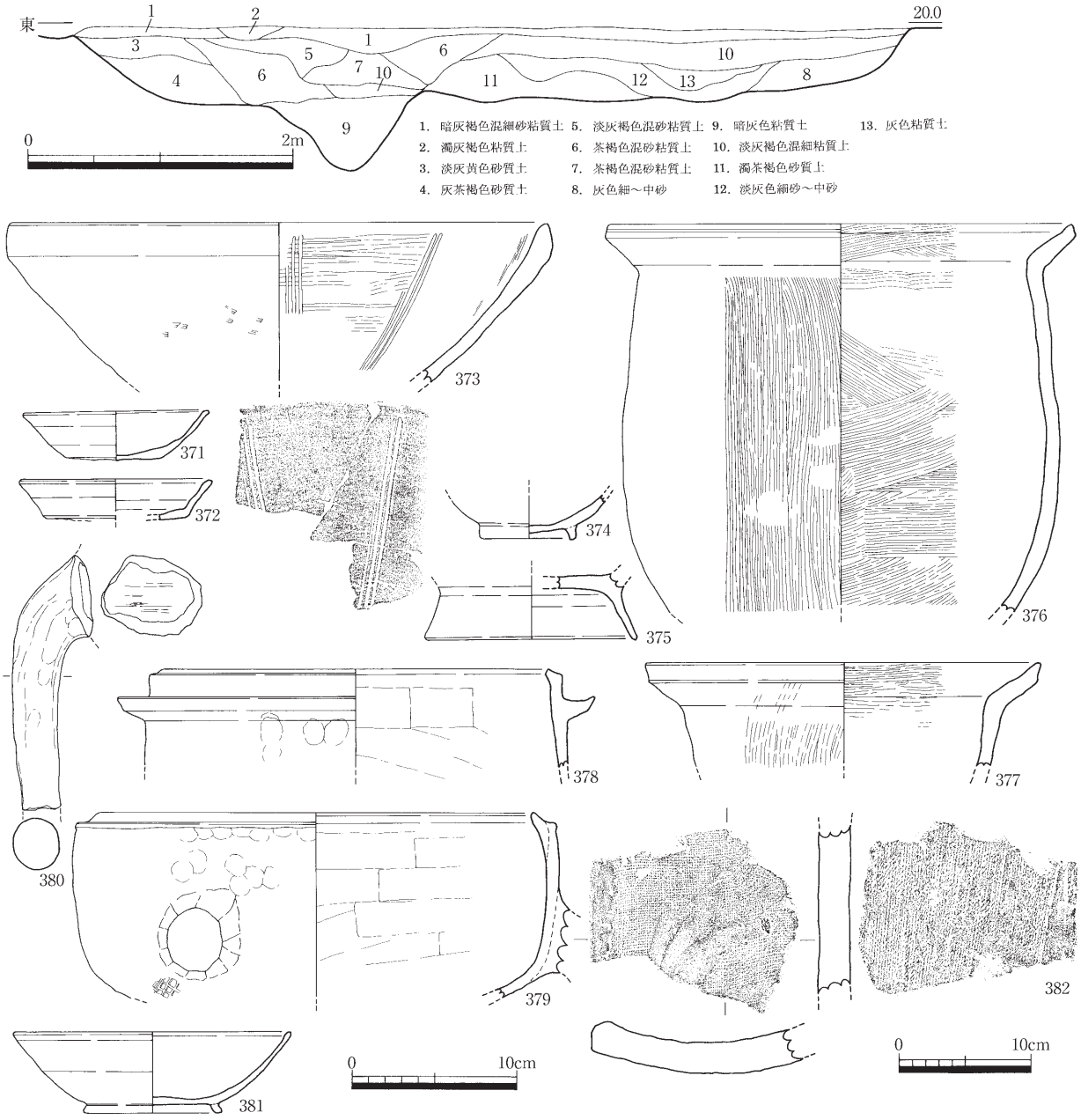


第109図　I②SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ①SD01（第110・111図）

Ⅰ①区西端付近、第1面で検出した検出長6.4m（Ⅰ①区部分）、幅6.4m、深さ1.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。Ⅰ③SD19と連続し、さらに高松東道路調査C区SD09と連続してほぼ直角に西方へ方向を変えている。断面形状は浅い皿型を呈し、N12°Eの方向を有する。底面やや東よりの位置に断面三角形の小溝部があり、これはⅠ①SD02に接続する可能性がきわめて高い。両溝の同時性を示す傍証といえよう。断面観察からは複数回数の溝さらえがあったことがわかる。

371～388は埋土中から出土した遺物である。厳密に上下層に対応しているわけではないが、概ね上位に中世の土器が、下位に古代の土器がみられる傾向がある。371～382は上位で検出した遺物である。371・372は土師器杯で、どちらも底部は回転ヘラ切りである。373は須恵質のすり鉢で内面に3条1単位の卸し目がみられる。374・375は土師器椀。375は長い高台を持つ。376は土師器甕で、長い胴部にハケメ調整が顕著に残る。377も土師器甕としたが、鍋の可能性もある。378は土師器羽釜である。やや上

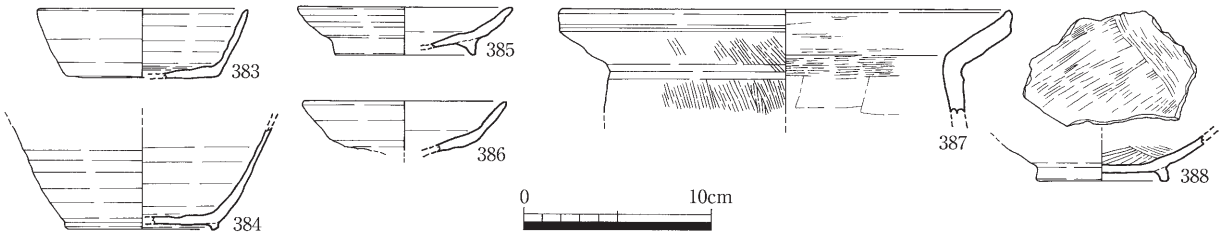


第110図　I①SD01断面図(1/50)、出土遺物①(1/4、1/5)

方に向いた鍔を持つ。379・380は土師器足釜。379の鍔はかなり退化している。381は黒色土器椀、382は平瓦である。これらの土器には10～11世紀に属する遺物もみられるが、379や373などの形状から13～14世紀の年代が想定される。

383～388は下位で出土した遺物である。383は須恵器杯、384は須恵器壷である。385・386は土師器皿で、385は高台が付く。どちらも小型の杯ともとれよう。387は土師器甕である。内外面のハケメ調整が著しい。388は黒色土器椀である。これらの遺物はその形状から、9～11世紀の年代が付与されよう。

以上の遺物の年代観からは、Ⅰ①SD01は9世紀頃に築かれた後、溝さらえを繰り返しながら使い続けられ、14世紀代に埋没したことが想定される。遺物の年代観においても、Ⅰ①SD02との同時代性が想定されるのである。



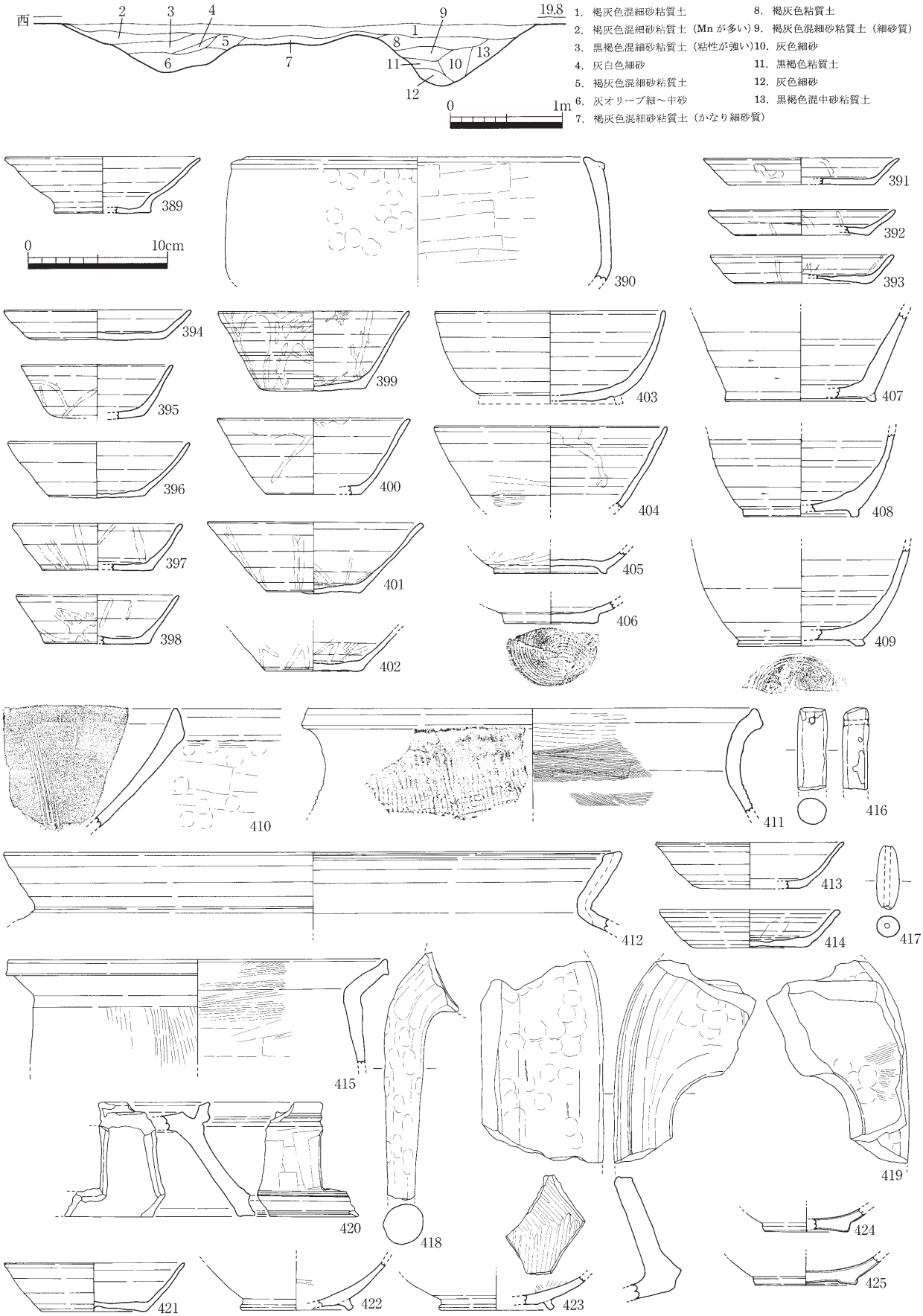
第111図　I①SD01出土遺物②(1/4)

Ⅰ③SD19（第112・113図）

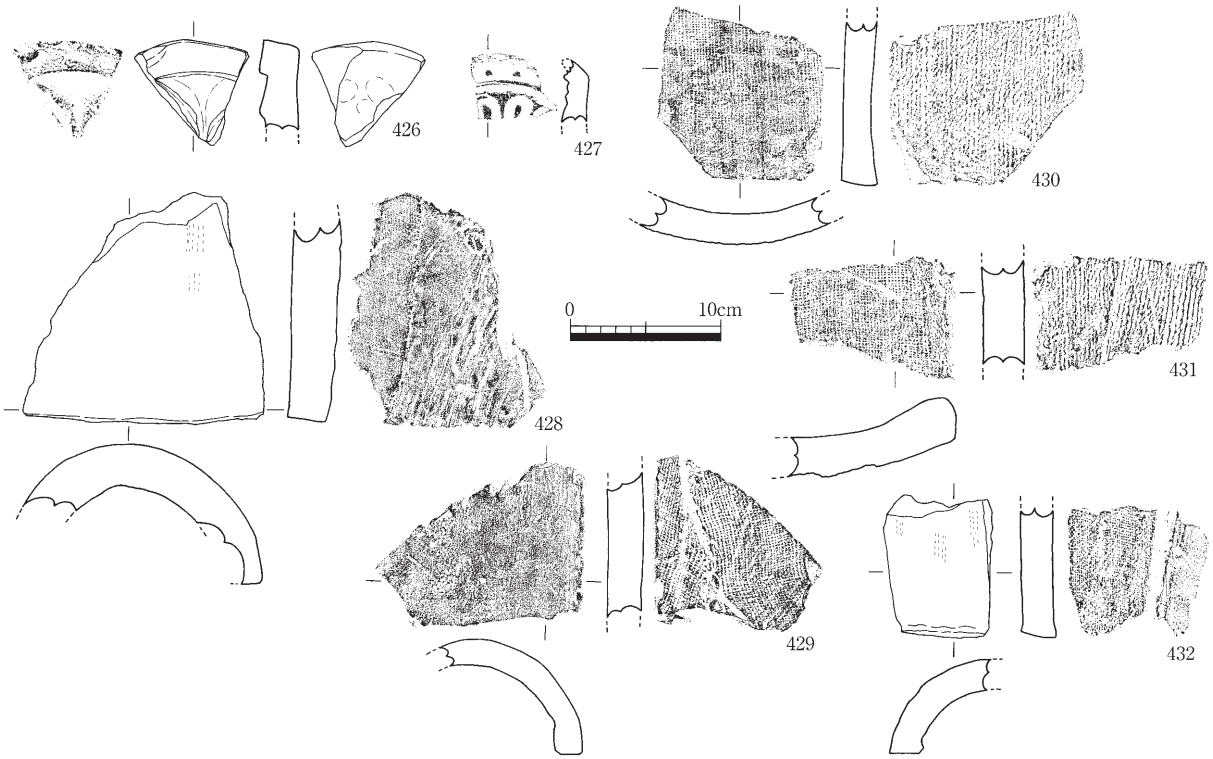
Ⅰ③区東端付近、第１面で検出した、検出長14.3m、幅4.7m、深さ0.6mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。北はⅠ①区SD01と、南は高松東道路Ｃ区SD09に連続する。断面形状は２つの角の丸い逆三角形が1.2mの間隔でつながったような形状を呈し、Ｎ12°Ｅの方向を有する。後世の削平によって上部を失っているが、Ⅰ①SD01の状況からみると天幅の広い規模の大きな溝状遺構であったことが推測される。溝底では幅1.2m程度（西側）と幅1.5m程度（東側）の２条の小溝状に別れている。このうち東側の小溝はⅠ①SD02の延長上にあたる可能性が高い。土層断面観察からも、西側のほうが後出するような堆積状況を示しているが、遺物の取り上げは一括で取り上げたため分離できていない。

389～432が埋土中から出土している。389は土師器杯で円盤状高台状の底部を有する。390は土師器足釜である。口縁部外面の鍔は退化してわずかな高まりを残す程度である。391～394は須恵器皿である。391～393は内外面に火襷痕を残す。395～402は須恵器杯である。外方へ直線的に立ち上がる器形で、火襷痕を残すものが多い。403～406は須恵器椀である。403・404は大きく内弯ないし内弯気味に立ち上がる器形である。403は底部外面にヘラ記号状のごく一部が残る。406は円盤状高台を有する。407～409は須恵器壷で、いずれも胴部上半以上を欠損している。409は底部外面にヘラ記号の一部が残る。410は須恵器すり鉢で内面に４条１単位の卸し目がみられる。国分寺楠井遺跡産の可能性がある。411は須恵器甕で、頸部外面に細かな格子タタキ調整が顕著である。亀山焼ないし国分寺楠井遺跡産とみられる。412は須恵器甕である。413・414は土師器杯である。415は土師器甕である。416は棒状の土錘で一端に小穴１つを設けている。417は管状土錘である。418は足釜の脚部、419は竈で焚口の鍔の破片である。420は須恵器円面硯である。大きく開く裾部を持ち方形の透かし穴を穿っている。全体に自然釉が付着している。421は須恵器杯であるが焼成が不完全なためか瓦質となっている。422・423は黒色土器椀で内面にのみ炭素を吸着させている。いずれも外面に赤彩の痕跡がわずかに残る。424・425は緑釉陶器椀である。軽く窪めただけの424と削り出し高台の425という底部の差異はあるが、全面に施釉をしており京都産とみられる。426・427は軒丸瓦である。426は周縁と間弁の一部が遺存している。周縁は幅約２㎝の素弁で、間弁は蓮弁の先端に揃えられている。高松東道路調査時にも出土した単弁六葉蓮花文軒丸瓦と推定できよう。427は幅0.5㎝程の細い素縁の外区外縁と幅1.3㎝程の連珠文を配した外区内縁をもち、外区と内区の境には圏線を１条めぐらしている。内区の蓮弁は幅約２㎝と細めで、間弁は隣のものと上部がつながっている。高松東道路調査時にも出土した単弁17葉蓮花文軒丸瓦である可能性が高い。428・429・432は丸瓦である。いずれも凹面には布圧痕を明瞭に残し、凸面は縄目タタキを丁寧にナデ調整で消している。430・431は平瓦である。

以上の遺物は、その形状から９～10世紀代と13～14世紀代に属するものに大別することができ、Ⅰ①SD01と同様の経過を経て埋没したものと想定できる。

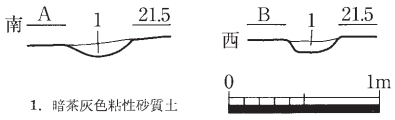


第112図　I③SD19断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)



第113図　I③SD19出土遺物②(1/5)

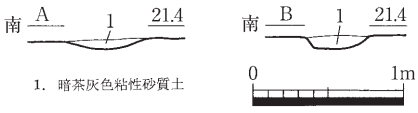
Ⅰ②SD01（第114図）



第114図　I②SD01断面図(1/50)

Ⅰ②区中央南寄り、第１面で検出した、検出長８m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ溝である。N11°Eの方向からほぼ直角に西に屈曲して北に隣接するⅠ②SD02とほぼ平行する。断面形状は浅い皿形で、９～10世紀頃の土器片がわずかに出土した。

Ⅰ②SD04（第115図）

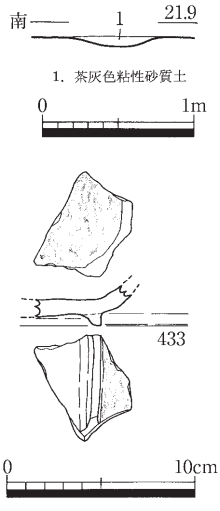


第115図　I②SD04断面図(1/50)

Ⅰ②区南西隅付近、第１面で検出した、検出長5.9m、幅0.6m、深さ0.1mの直線的な溝状遺構である。先述したⅠ②SD01に本来は連続していたものであろう。断面形状は浅い皿形を呈しており、N76°Eの方向を有する。９～10世紀頃の土器片がわずかに出土している。

Ⅰ②SD09（第116図）

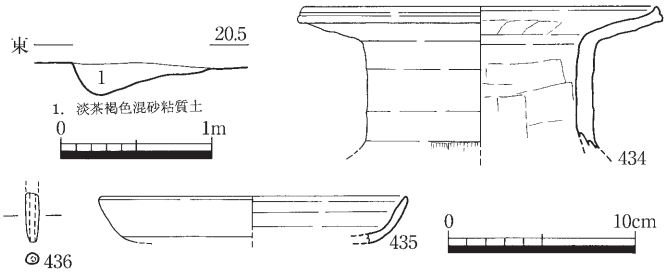
Ⅰ②区北壁付近、第１面で検出した、検出長５m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ直線状の溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、N82°Wの方向を有する。埋土中から433が出土した。433は土師器皿で、内面と外面高台より上の部分に赤彩の痕跡が残る。８世紀代に位置づけることができよう。



第116図　I②SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ②SD12（第117図）

Ⅰ②区南西隅付近、第１面で検出した、検出長8.7m、幅1.4m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。東端でほぼ直角に南に屈曲して、Ⅰ④SD07に連続するものと思われる。断面形状は不正三角形を呈し、N83°Eの方向を有する。埋土から434～436が出土した。434は弥生土器壷、435は須恵器皿、436は管状土錘である。435の年代から、８～９世紀頃と想定される。

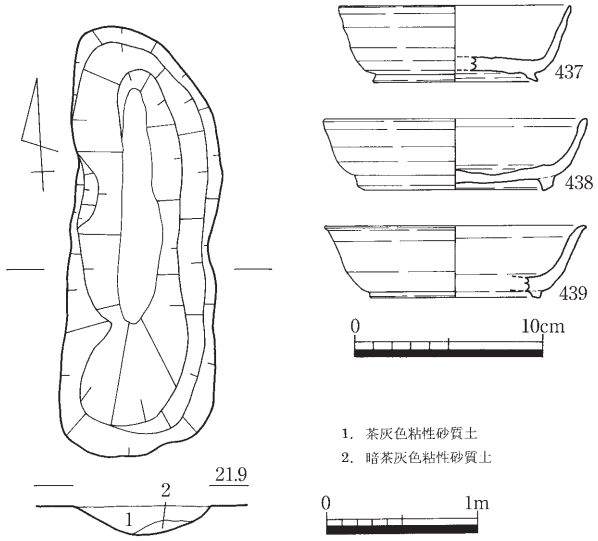


第117図　I②SD12断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ②SK02（第118図）

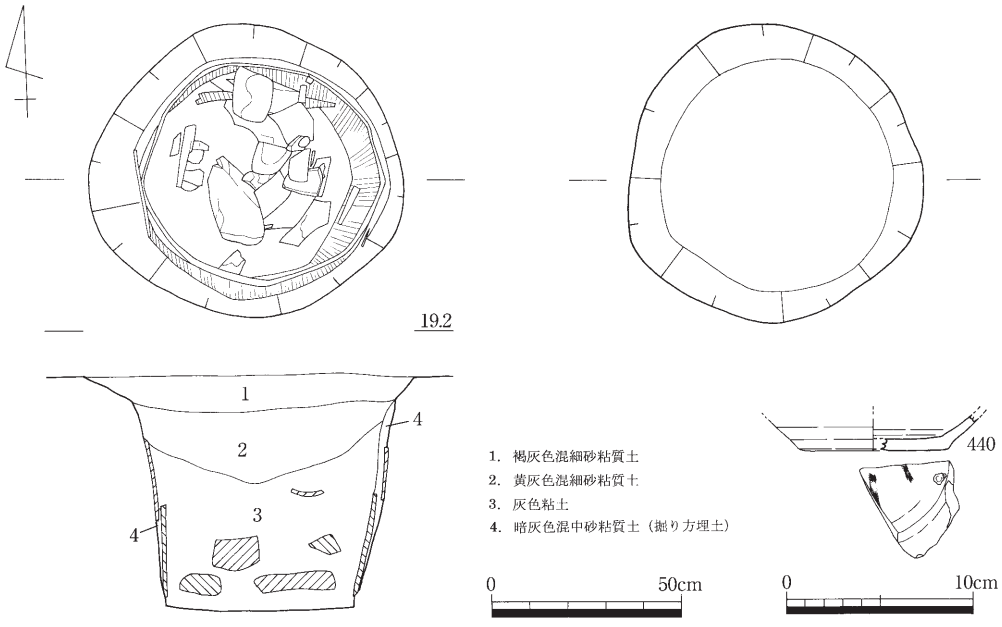
Ⅰ②区中央北壁付近、第１面で検出した長楕円形を呈した土坑である。2.8m×0.9mの規模で、隅丸方形状とみなすこともできる。断面形状は浅い皿形を呈し、主軸はＮ５°Ｅの方向を有する。底面は窪んでおり、棺痕跡等は確認できなかったことから、墓ではないと判断する。

埋土中から437～439が出土している。437・439は須恵器椀である。438は黒色土器椀である。内外両面に炭素を吸着させている。これらの形状から９世紀に位置づけることができる。



第118図　I②SK02平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SK12（第119図）



第119図　I③SK12平･断面図(1/20)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③区西端、第２面で確認した楕円形の井戸である。90㎝×80㎝で、深さ62㎝の規模を測る。掘り方の断面形状は台形を呈しており、内部には曲げ物２段が井戸枠として入れられていた。井戸枠の外部にはほんの僅かな空間しかみられないことから、曲げ物の大きさぎりぎりの掘り方を掘ったものであろう。曲げ物は桜の樹皮で綴じられたもので、底板を抜いて使用している。上位に使用した曲げ物はほんの僅かだが下位の曲げ物よりも直径の大きなもので、下位の曲げ物にはめ込むように設置している。井戸枠内部の堆積土には人為的に埋め戻した痕跡は認められず、自然に埋没していったものと想定される。井戸枠内部には小児頭大の板石状の亜角礫が複数落ち込んでおり、上部に石組みが築かれていた可能性も否定できない。なお、この井戸は、中世のⅠ③SD02の下位に位置しており、本来は第１面に属する遺構と判断される。

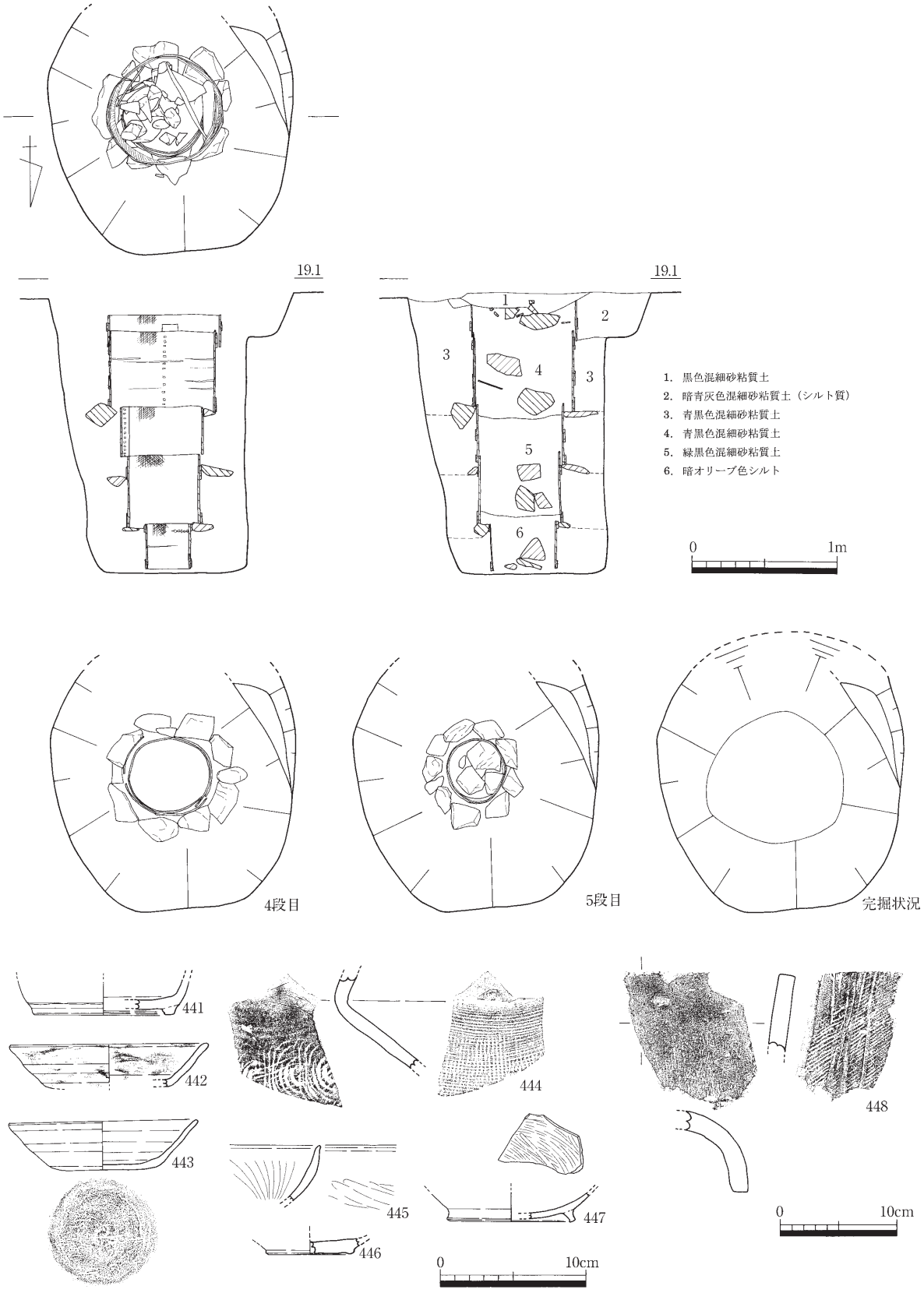
この遺構から出土した遺物は微量である。440は井戸枠内部から出土した須恵器杯である。底部外面に墨書の一部が認められるが、判読するまでは至らない。９～10世紀代の年代が想定でき、この井戸の廃絶期を示すものとみられる。

Ⅰ③SK13（第120・121図）

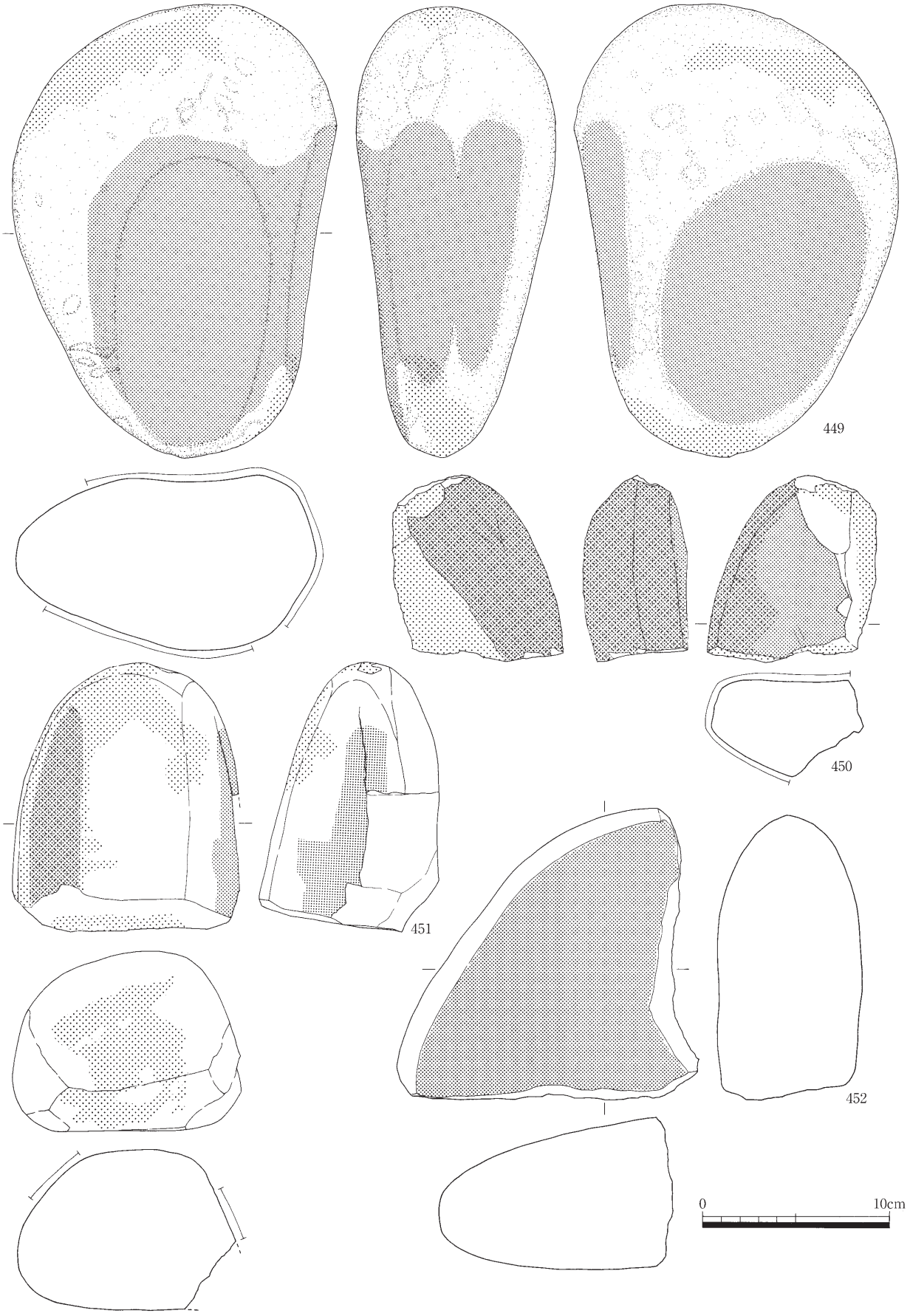
Ⅰ③区中央南壁付近、第２面で検出した楕円形の井戸である。後述する井戸Ⅰ③SK16によって一部を壊されており、さらに南端の一部が調査区外に含まれるが、1.9ｍ×1.7ｍで、深さ1.9ｍの規模を測る。掘り方の断面形状は縦長の台形を呈しており、内部には曲げ物５段が井戸枠として入れられていた。曲げ物は下部に据えたものほど直径が小さいものとなっている。掘り方を掘り込んだ後、最下段の曲げ物を据えて曲げ物上部まで裏込め土を入れ、拳大の板石を曲げ物周囲に敷いている。この板石上に次の曲げ物の底部が乗っており、下位に沈まないように礎石のような役割を果たしている。以下これを繰り返して２段目までを築いているが、２段目と1段目には板石は認められない。曲げ物はすべて底板を抜いており、桜の樹皮によって綴じている。井戸枠内部に堆積した土層には、人為的に埋め戻したような土は認められないことから、自然埋没していった状況が想定される。この井戸やⅠ③SK16も中世のⅠ③SD11の下位で確認しており、本来は第１面に属していた遺構と判断される。

掘り方や井戸枠内の埋土から441～452の遺物が出土している。掘り方埋土からは441・442・444～447・449・451が出土した。それ以外の443・448・450・452は井戸枠内部から出土している。441は須恵器椀である。442・443は土師器杯で、442は内外面に赤彩の痕跡が残る。444は須恵器甕である。445は土師器椀で内面に暗文が施されている。446は緑釉陶器椀で全面に施釉がみられる。京都産であろう。447は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀で、内面のヘラミガキ調整は分割ミガキであろう。448は丸瓦で凹面にはススが付着している。449～452は砥石である。449は安山岩製で３面を砥面に使用している。両端にススの付着がみられる。450は砂岩製で３面を砥面としている。ほぼ全体にススが付着する。451も砂岩製で２面を使用している。やはり全面にススが付いている。452も砂岩製で砥面は１面である。

以上の遺物には若干の混入品がみられるものの、その年代観から、この井戸は９～10世紀代に築かれてしばらく機能した後、10世紀代のうちには埋没したことが想定される。



第120図　I③SK13平･断面図(1/40)、出土遺物①(1/4、1/5)



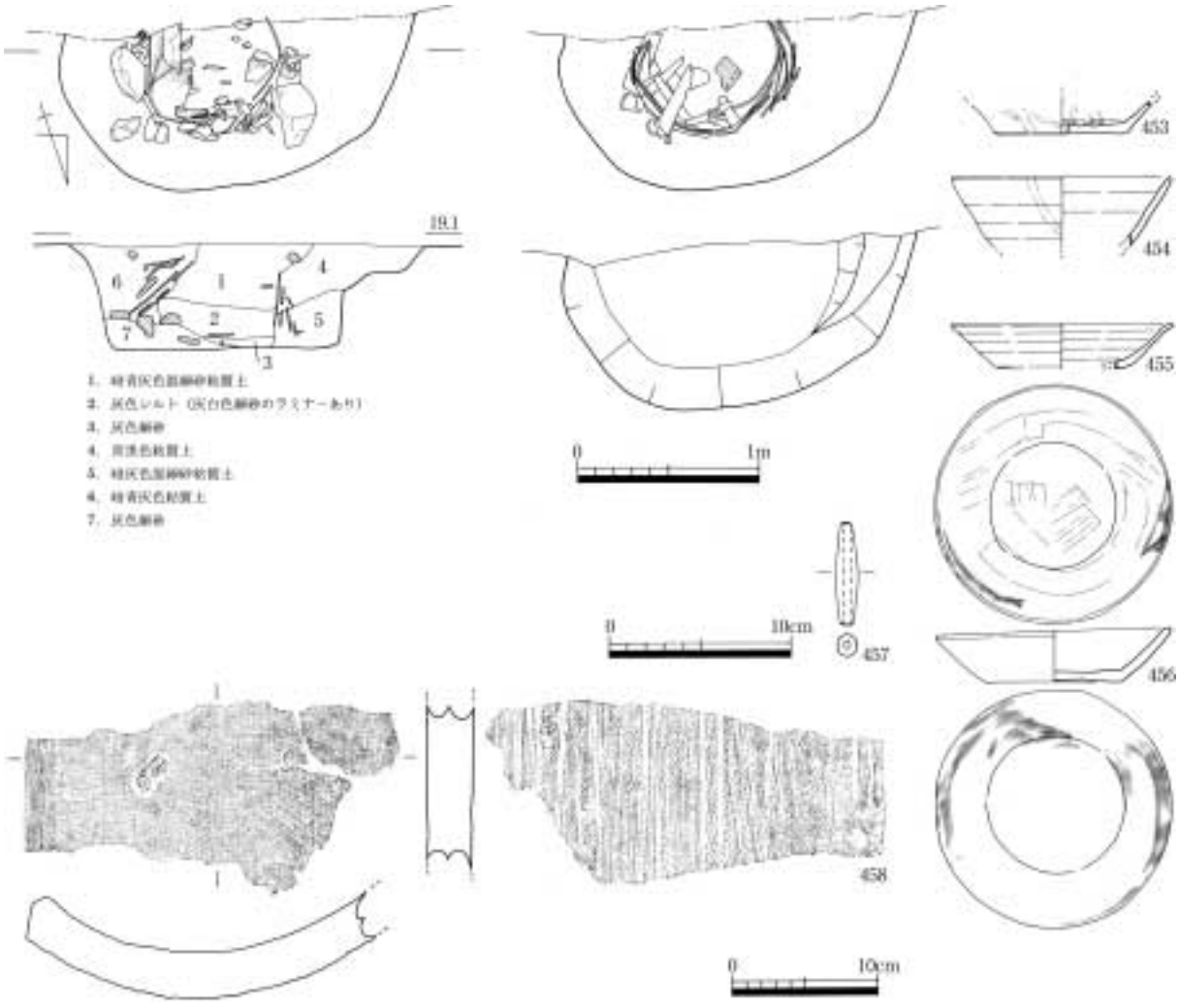
第121図　I③SK13出土遺物②(1/3)

Ⅰ③SK16（第122図）

Ⅰ③区中央南壁寄り付近、第２面で確認した楕円形を呈すると思われる井戸である。南半部分が調査区外へ続いているが、1.9m×0.9mで、深さ0.6mの規模を持つ。Ⅰ③SK13の埋没後に掘り直しされた井戸にあたると想定できる。掘り方の断面形状は逆台形を呈しており、内部には曲げ物２段分が井戸枠として設置されていた。曲げ物の遺存状況は悪く、壊れた曲げ物の断片が井戸枠内に落ち込んでいる状況であった。井戸枠の裏込土には小児頭大の亜角礫も使用していた。Ⅰ③SK13でみられたような板石を敷いた状況は認められない。中世のⅠ③SD11の下位で検出しており、第１面に属していたものと思われる。この井戸からは453～458のほかに、木製の櫛（井戸枠内部）などが出土している。

456が掘り方の裏込土内から出土している以外は、すべて井戸枠内部からの出土である。453・454は須恵器杯で火襷痕が残る。455・456は土師器杯である。外面の口縁部下に赤彩の痕跡のようなものが認められる。456は内外面に赤彩の痕跡があり、内面には赤彩に使用した刷毛の痕跡が認められる。457は管状土錘、458は凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕を明瞭に残す平瓦である。

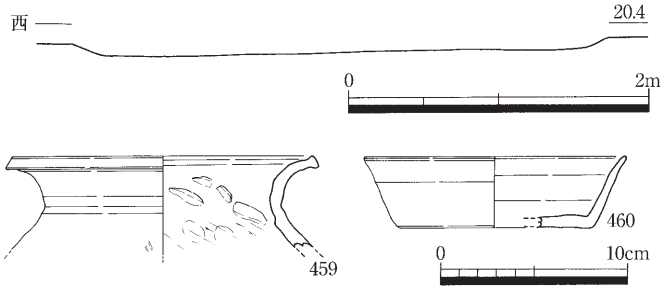
遺物には古い遺物の混入も多々認められるが、それらの年代観から、Ⅰ③SK13埋没後に築かれ、11世紀中には埋没したものと思われる。



第122図　I③SK16平･断面図(1/40)、出土遺物(1/4、1/5)

Ⅰ④SX02（第123図）

Ⅰ④区東半、第２面で検出した不定形な浅い土坑状を呈した遺構である。北端は調査区外へ続いているが、Ⅰ②区では確認していない。8.1ｍ×4.7ｍで、深さ0.1ｍの規模を有する。断面形状は浅い皿形を呈しており、底面は平坦になっている。埋土中から459・460が出土している。459は弥生土器壷で、弥生時代後期に属する。磨滅が著しく混入したものであろう。460は須恵器杯で９世紀の年代が想定される。この遺構の時期を示すものといえよう。

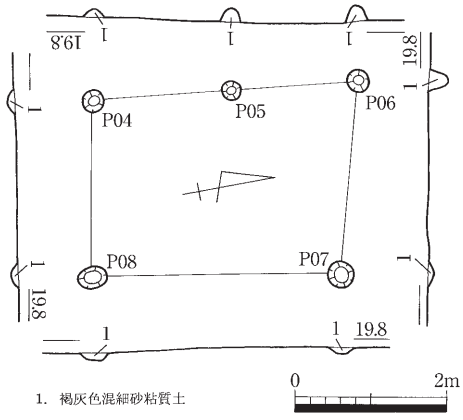


第123図　Ⅰ④SX02断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

（４）中世の遺構・遺物

Ⅰ③SB01（第124図）

Ⅰ③区西半、第１面で確認した１間×２間の掘立柱建物跡である。2.3ｍ×3.5ｍの規模を持つ南北棟で、床面積は8.1㎡を測る。建物主軸はＮ10°Ｅの方向を有している。東辺中央の柱穴を欠損しているが、東辺の柱穴は遺存状況が悪く、後世の削平で消失してしまったものであろう。遺物の出土量はきわめて少ないが、13～14世紀に位置づけられる土師器杯の破片があり、当該期の建物と理解しておく。



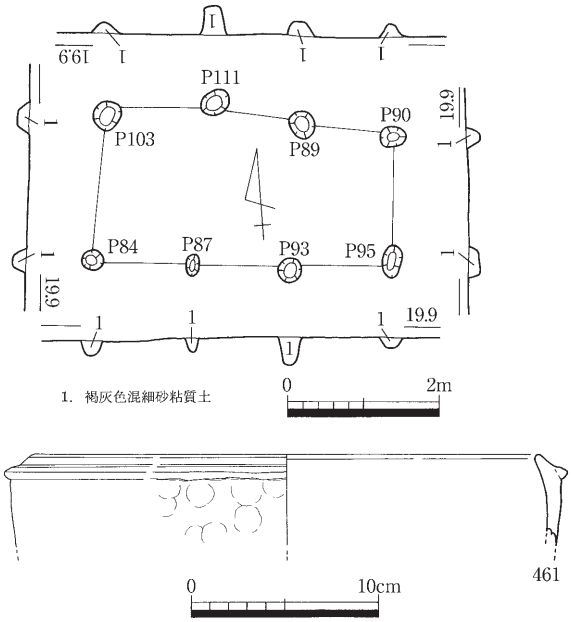
第124図　Ⅰ③SB01平･断面図(1/100)

Ⅰ③SB04（第125図）

Ⅰ③区中央やや北寄り、第１面で確認した１間×３間の掘立柱建物跡である。1.7ｍ×4.0ｍの規模を持つ東西棟で、床面積は6.8㎡を測る。西辺の梁間が東辺よりもやや長いために全体としては歪な台形を呈している。建物主軸はＮ83°Ｗの方向を有する。

柱穴SP95から461の遺物が出土している。461は土師器足釜である。口縁部外面の鍔は退化しており、鍔というよりは低い突帯をめぐらせたような形状をしている。13～14世紀代の年代が想定できる。

なお、このⅠ③SB04の周囲、南・東・北の一部を取り巻くように小規模な溝Ⅰ③SD28が存在している。雨落ち溝の可能性も考えたが、建物との間隔が一定ではなく、全体を取り巻いていないなど別の目的を想定したほうがよいと思われる。時期的には同じ頃であり、何らかの関係はあるのだろう。

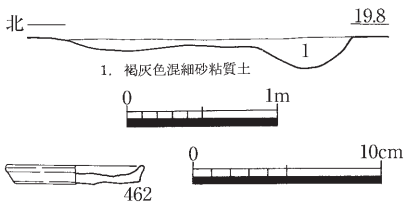


第125図　Ⅰ③SB04平･断面図(1/100)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD01（第126図）

Ⅰ③区北西隅付近、第１面で検出した検出長8.2m、幅1.9m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。後世の削平でそのほとんどを失っているが、溝内のやや深い部分が２条の小溝上に遺存している。N80°W方向を有している。

462は土師器小皿で、底部は回転ヘラ切りのままである。13世紀代に位置づけることができる。



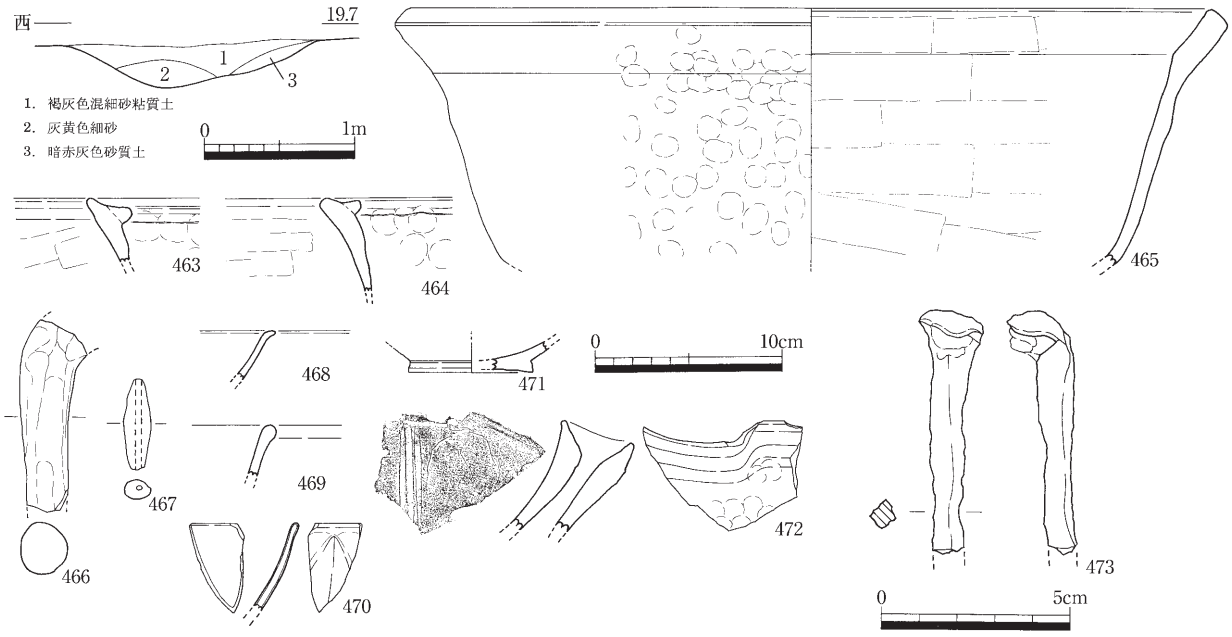
第126図　Ⅰ③SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD02（第127図）

Ⅰ③区西端、第１面で検出した検出長11.8m、幅2.0m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。Ⅰ③SD01やⅠ③SD30・31とはほぼ直交して接続している。断面形状は浅い逆三角形を呈し、N14°Eの方向を有する。

埋土中から463～473の遺物が出土している。463・464は土師器足釜である。どちらも口縁部外面の鍔は退化傾向にあり、短いものである。465は土師器土鍋で口縁部が肥厚している。外面に指頭圧痕が明瞭に残る。466は土師器足釜の脚部である。467は管状土錘。468は白磁椀、469・470は青磁椀である。470は鎬蓮弁が認められる竜泉窯産のものであろう。471は緑釉陶器椀である。底部以外に施釉がみられる。京都産であろう。472は片口を有する土師器すり鉢で、内面の卸し目は３条１単位である。国分寺楠井遺跡産とみられる。473は鉄製の釘である。頭部を折り曲げて形成している。

これらの形状から、13～14世紀の年代が想定できる。

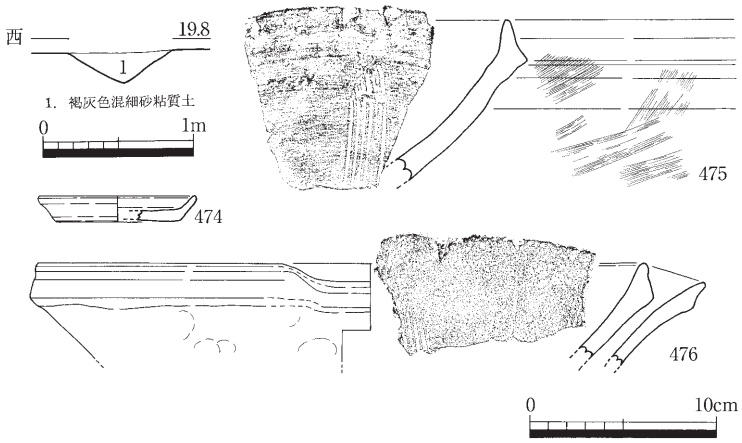


第127図　Ⅰ③SD02断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

Ⅰ③SD03（第128図）

Ⅰ③区西半、第１面で検出した検出長12.6m、幅0.9m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は逆三角形を呈し、主軸方向はN12°Eの方向で、Ⅰ③SD02とほぼ平行している。

埋土中から474～476の遺物が出土している。474は土師器小皿で、底部は回転ヘラ切りのままである。475は陶器すり鉢で、内面の卸し目は６条１単位である。備前焼であろうか。476は須恵器すり鉢である。焼成があまく瓦質を呈する。内面の卸し目は４条１単位で、片口を有している。これらの遺物から14世紀代の年代が想定される。

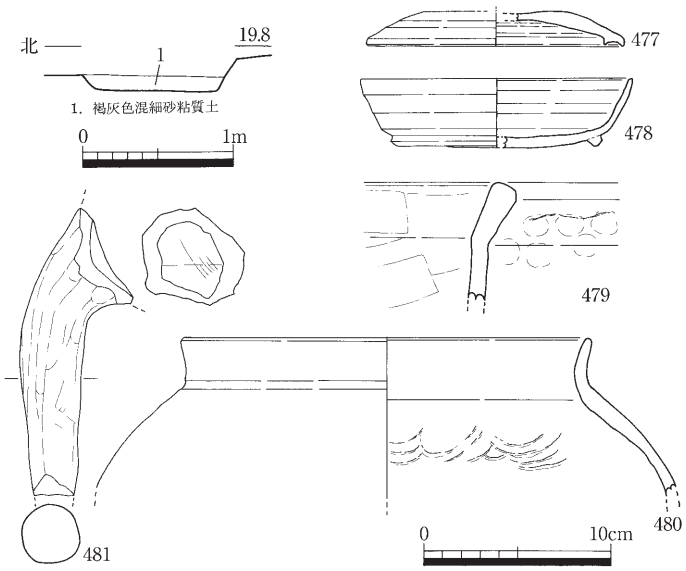


第128図　I③SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD11（第129図）

Ⅰ③区南壁沿い、第１面で検出した検出長22.0m、幅1.1m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は逆台形を呈するようで、主軸方向はN77°Wの方向を有している。

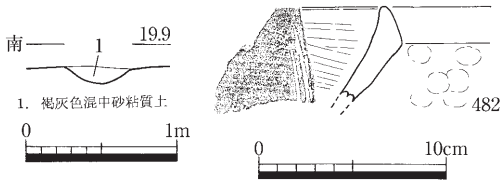
埋土中から477～481の遺物が出土している。477は須恵器蓋、478は須恵器椀である。高台よりも底部の方が下に張り出している。479は土師器土鍋、480は須恵器甕である。481は土師器足釜の脚部である。須恵器などに古い時代の混入がみられるが、おおむね14世紀代に位置づけられる。



第129図　I③SD11断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD16（第130図）

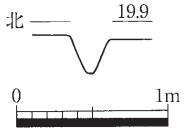
Ⅰ③区東半、第１面で検出した検出長21.2m、幅1.0m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。西端付近でほぼ直角に北方へ屈曲する。断面形状は浅いU字形で、主軸方向はN79°Wの方向を有する。埋土中から482の土師器すり鉢が出土している。内面の卸し目は３条以上で、形状から14世紀代に位置づけられよう。



第130図　I③SD16断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD18（第131図）

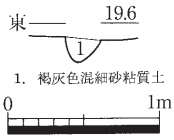
Ⅰ③区中央付近、第１面で検出した検出長2.8m、幅0.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。遺物の出土量はごく僅かであるが、14世紀代に比定できる土器片が出土しており、当該期に位置づけられよう。



第131図　I③SD18
断面図(1/50)

Ⅰ③SD22（第132図）

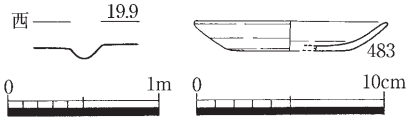
Ⅰ③区中央付近、第１面で検出した検出長8.5m、幅0.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。北端でⅠ③SD28と接続している。断面形状はU字形を呈し、N12°Eの方向を有する。14世紀代に比定できる土器小片が出土している。



第132図　I③SD22
断面図(1/50)

Ⅰ③SD27（第133図）

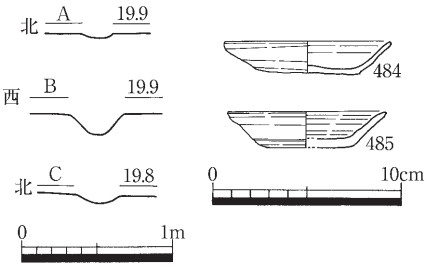
Ⅰ③区中央、第１面で検出した幅0.3m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。途中で北方へ屈曲する。埋土から483の土師器皿が出土した。12～14世紀代の年代が想定される。



第133図　I③SD27断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD28（第134図）

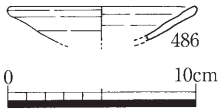
Ⅰ③区中央、第１面で検出した幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、N11°Eの方向からほぼ直角に北方へ屈曲し、さらに再びほぼ直角に西方へ屈曲している。Ⅰ③SB04を取り巻くように存在していることから、何らかの関連が想定されるが、雨落ち溝ではないようである。埋土から土師器皿484・485が出土している。12～13世紀代に位置づけることができようか。



第134図　I③SD28断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD29（第135図）

Ⅰ③区中央付近、第１面で検出した検出長2.6m、幅0.7m、深さ0.05mの規模を持つ溝である。西端でⅠ③SD03と接続しているが、削平により消滅しかかっている。486の土師器皿が出土している。12世紀代の年代が比定できようか。



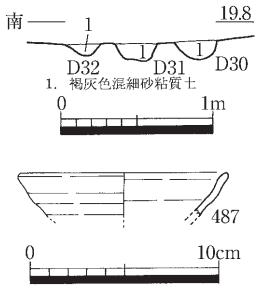
第135図　I③SD29
出土遺物(1/4)

Ⅰ③SD30（第136図）

Ⅰ③区北西隅付近、第１面で検出した小規模な溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.1mを測り、Ⅰ③SD02に接続している。埋土中から487の土師器杯が出土している。13世紀の年代が想定される。

Ⅰ③SD31（第136図）

Ⅰ③区北西付近、第１面で検出した小規模な溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.1mを測り、Ⅰ③SD02に連続している。土器細片が出土したのみだが、埋土などからⅠ③SD30と同様の時期が想定できる。



第136図　I③SD30･31･32
断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

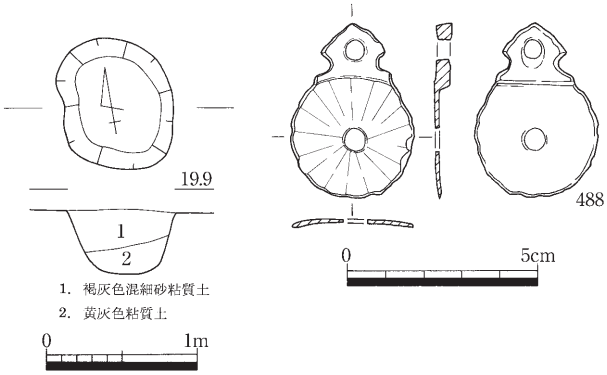
Ⅰ③SD32（第136図）

Ⅰ③区北西付近、第１面で検出した小規模な溝状遺構である。幅0.3m、深さ0.1mを測り、Ⅰ③SD02に連続している。埋土などからⅠ③SD30と同様の時期が想定できる。

Ⅰ③SK01（第137図）

Ⅰ③区中央北寄り、第１面で検出した隅丸方形を呈する土坑である。90㎝×75㎝で、深さ43㎝を測る。Ⅰ③SB04と重複しているが、先後関係を示す状況は認められない。

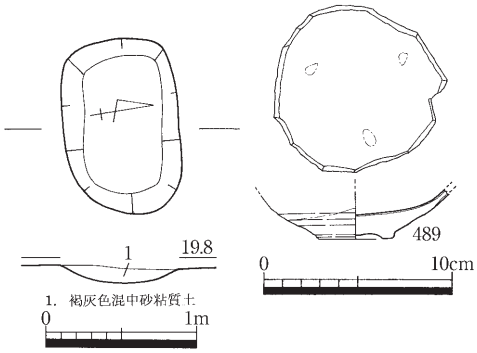
埋土中から中世土器小片とともに、488が出土している。488は青銅製飾金具で、菊の花をモチーフにした彫刻がある。山形の頭部には穴があり、房飾りでも結わえたのだろうか。当該期に属する土坑と判断しておく。



第137図　I③SK01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/2)

Ⅰ③SK04（第138図）

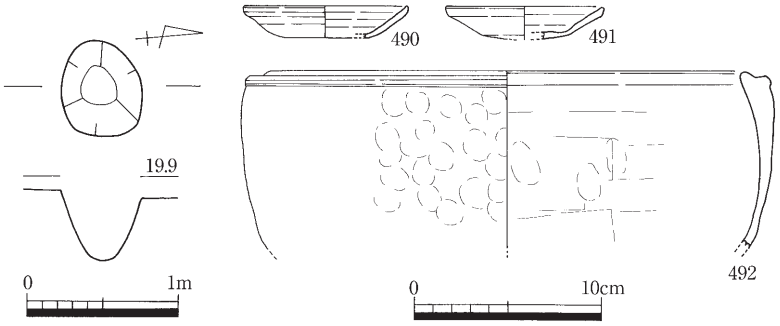
Ⅰ③区東端中央、第１面で検出した隅丸方形を呈する土坑である。1.2ｍ×0.8ｍで、深さ0.1ｍの規模を有する。断面形状は浅い皿形を呈している。長軸方向は北方に位置するⅠ③SD16の方向と近似する。埋土中からは中世土器細片が小量出土した。489は施釉陶器椀である。削り出し高台を有し、内面には施釉と胎土目積みの痕跡３箇所がみられる。18世紀代の年代が想定されることから、混入したものであろう。



第138図　I③SK04平･断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

Ⅰ③SK06（第139図）

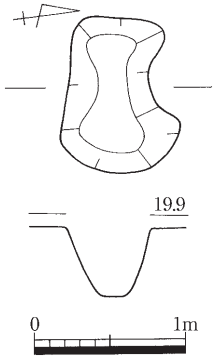
Ⅰ③区中央付近、第１面で検出した楕円形をした土坑である。65㎝×55㎝で、深さ45㎝の規模を測る。断面形状はU字形で、埋土中から490～492の遺物が出土した。490・491は土師器皿である。12世紀代に位置づけられる。492は土師器足釜で口縁部外面の鍔は退化して突帯状を呈している。15世紀代に位置づけられる。



第139図　I③SK06平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SK07（第140図）

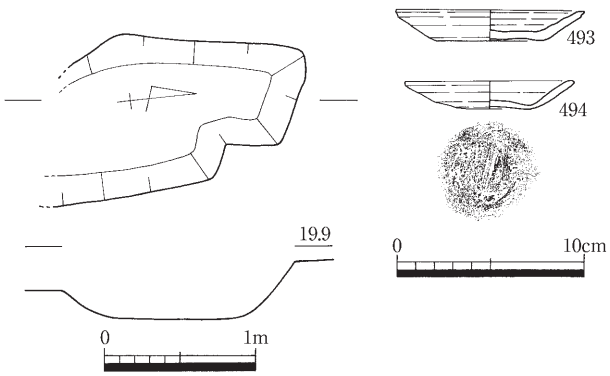
Ⅰ③区中央北寄り、第１面で検出した不定形な形状をした土坑である。長径105㎝×短径60㎝で、深さ45㎝を測る。断面形状はU字形を呈している。図化できなかったが、中世土器と思われる土器小片が僅かながら出土しており、当該期に属するものと判断する。



第140図　I③SK07
平･断面図(1/50)

Ⅰ③SK09（第141図）

Ⅰ③区中央、第１面で検出した不定形な形状をした土坑である。南端をⅠ③SD27によって壊されているが、長径1.6ｍ以上×短径1.0ｍで、深さ0.3ｍの規模を測る。底面には小さな平坦面が認められる。埋土中から土師器皿493・494が出土した。494は口縁端部内面の６～７箇所に小さなススの付着があり、灯明皿として使用されたことがわかる。12～13世紀代に位置づけられる資料であろう。

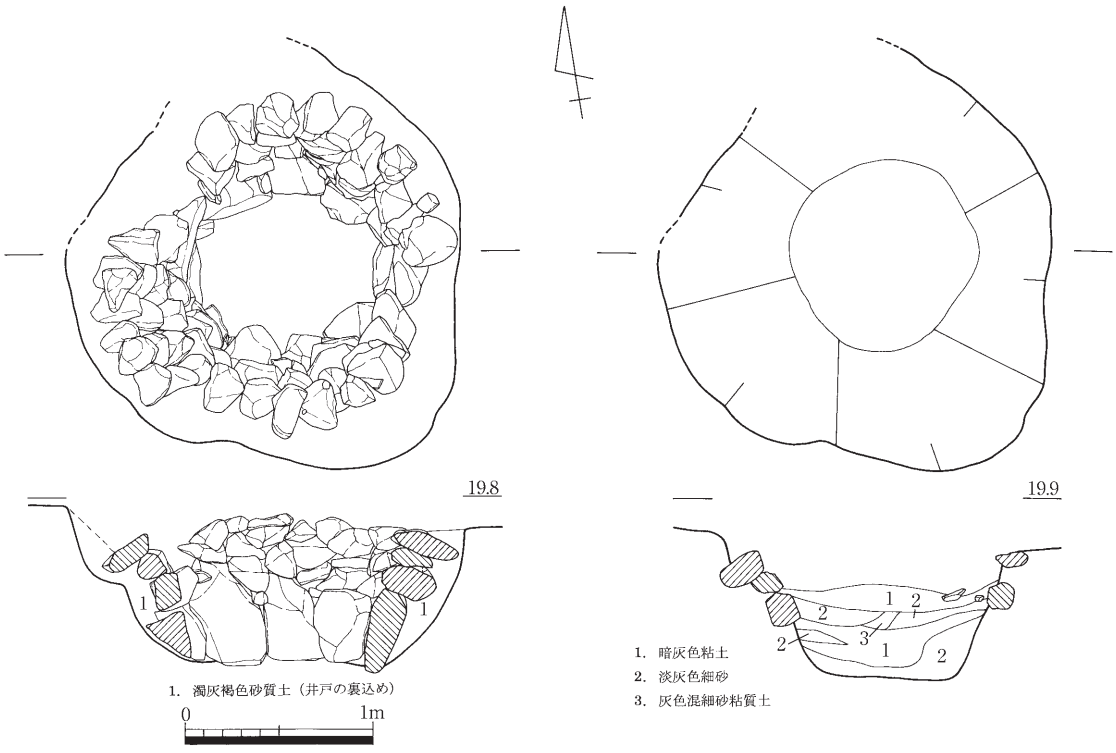


第141図　I③SK09平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ①ＳＥ01（第142図）

Ⅰ①区西端、第１面で検出した井戸である。掘り方の平面形は2.2ｍ×2.0ｍの楕円形を呈しており、深さは95㎝を測る。掘り方の断面形状は逆台形をしており、内部に石組みを築いていた。最下段には小児頭大の板状の石を縦方向に並べて１段を構成し、その上位からは拳大強の亜角礫を小口積みにして、全体で４～５段を築いていた。掘り方の裏込土は少なく、石積みは上方に向かうに従って次第に外開きになっている。

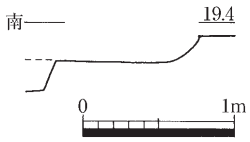
井戸内部からも、掘り方の裏込土からも遺物の出土はみられなかったため、この井戸の年代を直接示す資料はない。ただ、中世の溝状遺構Ⅰ①SD01の埋没後にこの井戸が築かれていることから、14世紀以降の年代を想定しておく。



第142図　I①SE01平･断面図(1/40)

Ⅰ③SX02（第143図）

Ⅰ③区東半南壁付近、第２面で確認した短い溝状を呈する遺構である。調査時のトレンチによって一部を掘り抜いてしまった。長径6.3m×短径1.1m以上で、深さ0.2mの規模を有する。断面形状は浅い皿形を呈している。本来は第１面に属する可能性があり、そうするとⅠ③SD11に連続していた溝状遺構の続きであることも想定される。

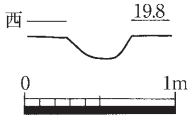


第143図　I③SX02
断面図(1/50)

（５）Ⅰ区の柱穴・遺物

Ⅰ③SP33（第144図）

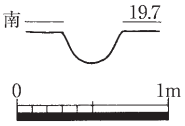
Ⅰ③区西半南壁寄り、第１面で検出した。直径40cm、深さ15cmの円形を呈する。図化できなかったが中世土器細片が出土しており、中世に属するものと想定される。



第144図　I③SP33
断面図(1/50)

Ⅰ③SP56（第145図）

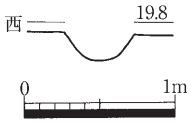
Ⅰ③区中央南寄り、第１面で検出した。直径40cm、深さ21cmの円形を呈する。Ⅰ③SD22に先行するが、柱穴内からは中世土器細片が出土しており、中世に属するものと想定される。



第145図　I③SP56
断面図(1/50)

Ⅰ③SP75（第146図）

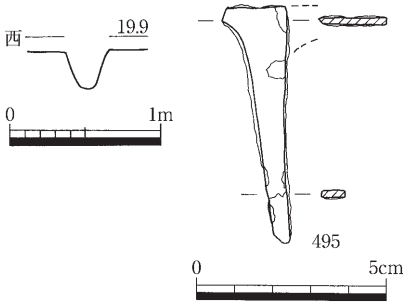
Ⅰ③区中央、第１面で検出した。45cm×40cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。図化できなかったが、中世の範囲に比定できる土器細片が出土している。



第146図　I③SP75
断面図(1/50)

Ⅰ③SP100（第147図）

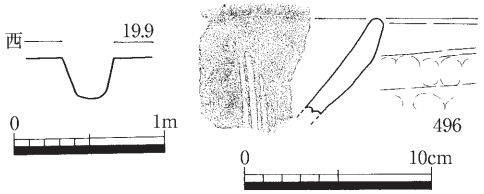
Ⅰ③区中央北寄り、第１面で検出した。55cm×30cm、深さ18cmの瓢箪型を呈する。古代に年代比定できる土器片とともに、495の鉄製品が出土している。495はＴ字形をしていたものと思われるが、右側の突出部を欠損している。用途不明の鉄製品である。



第147図　I③SP100断面図(1/50)、出土遺物(1/2)

Ⅰ③SP119（第148図）

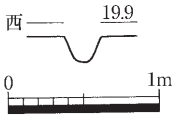
Ⅰ③区中央北壁寄り、第１面で検出した。直径30cm、深さ26cmの円形を呈する。埋土から土師器すり鉢496が出土している。内面には３条１単位の卸し目が施されている。14～15世紀代に位置づけられる。



第148図　I③SP119断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ⅰ③SP125（第149図）

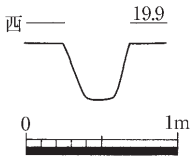
Ⅰ③区中央北壁寄り、第１面で検出した。23cm×20cm、深さ18cmの円形を呈する。９世紀代に位置づけられる土器細片が出土している。



第149図　I③SP125
断面図(1/50)

Ⅰ③SP140（第150図）

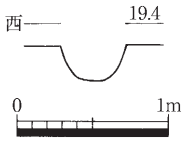
Ⅰ③区中央、第１面で検出した。45㎝×40㎝、深さ38㎝の規模を持ち、円形を呈している。中世に位置づけられる土器小片がわずかに出土している。



第150図　Ⅰ③SP140
断面図（1/50）

Ⅰ③SP181（第151図）

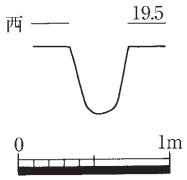
Ⅰ③区中央、第２面で検出した。直径40㎝、深さ23㎝の規模を測る。円形を呈している。弥生時代後期に属する土器小片が出土している。



第151図　Ⅰ③SP181
断面図（1/50）

Ⅰ③SP205（第152図）

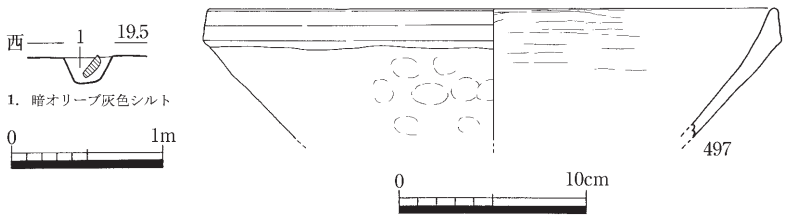
Ⅰ③区中央やや東より、第２面で検出した。直径35㎝、深さ45㎝の円形を呈する。弥生時代後期に位置づけられる土器小片がわずかに出土した。



第152図　Ⅰ③SP205
断面図（1/50）

Ⅰ③SP210（第153図）

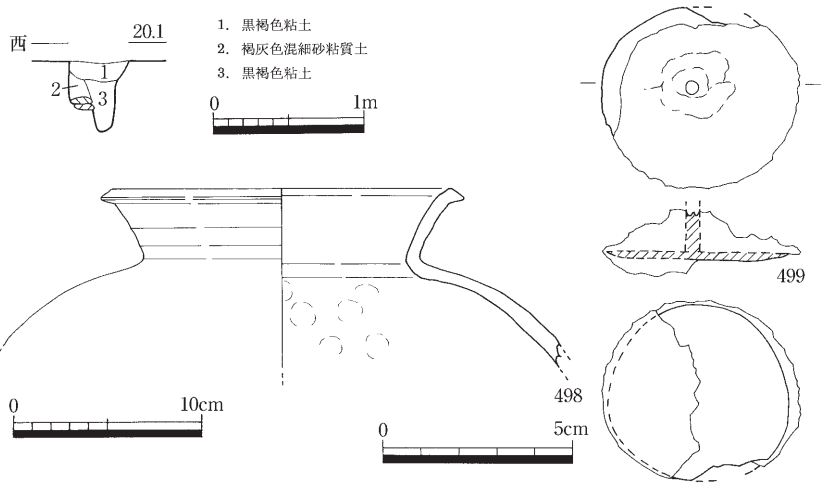
Ⅰ③区中央北壁寄り、第２面で検出した。直径30㎝、深さ16㎝の円形を呈する。柱穴内には拳大の石が入れられていた。497は須恵器こね鉢で、14世紀代に属すると想定できる。



第153図　Ⅰ③SP210断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

Ⅰ④SP21（第154図）

Ⅰ④区西半中央部、第１面で検出した。直径40㎝、深さ43㎝の円形を呈する。柱穴底には板石状の石を入れているが、礎石ではなく横から固定するための詰め石だろう。498の須恵器甕、499の鉄製品が出土した。499は片側に軸の付いた円盤状を呈する鋳造品である。498の年代から９～10世紀に属する柱穴であろう。

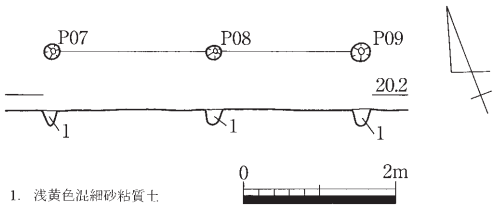


第154図　Ⅰ④SP21断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/4）

（6）時期不明の遺構

Ⅰ④SA01（第155図）

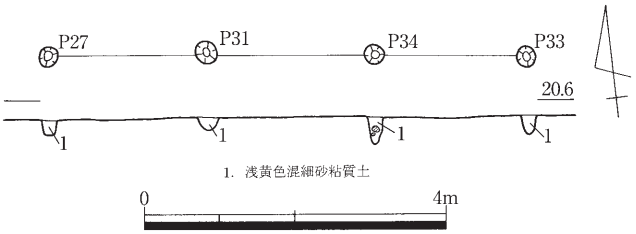
Ⅰ④区西半、第1面で検出した2間の柵列である。長さ4.1mで、N76°Wの方向を有する。



第155図　I④SA01平･断面図(1/100)

Ⅰ④SA02（第156図）

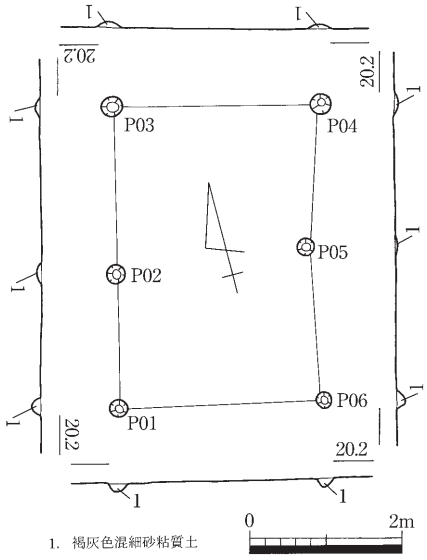
Ⅰ④区北東隅付近、第1面で検出した3間の柵列である。長さ6.4mで、N83°Wの方向を有する。さらに東方へ延びる可能性もある。



第156図　I④SA02平･断面図(1/100)

Ⅰ④SB01（第157図）

Ⅰ④区西端西壁付近、第1面で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。2.7m×4.0m、床面積10.8㎡の規模をもつ南北棟である。建物主軸はN10°Eの方向を有する。建物南辺のほぼ延長上にあるようにⅠ④SA01が東に隣接して存在しているが若干方向が異なっている。建物柱穴の埋土も柵列柱穴の埋土とは違うものである。これらのことから、この掘立柱建物跡と柵列は異なる時期に属する可能性が高い。



第157図　I④SB01平･断面図(1/100)

（7）包含層出土遺物（第158・159図）

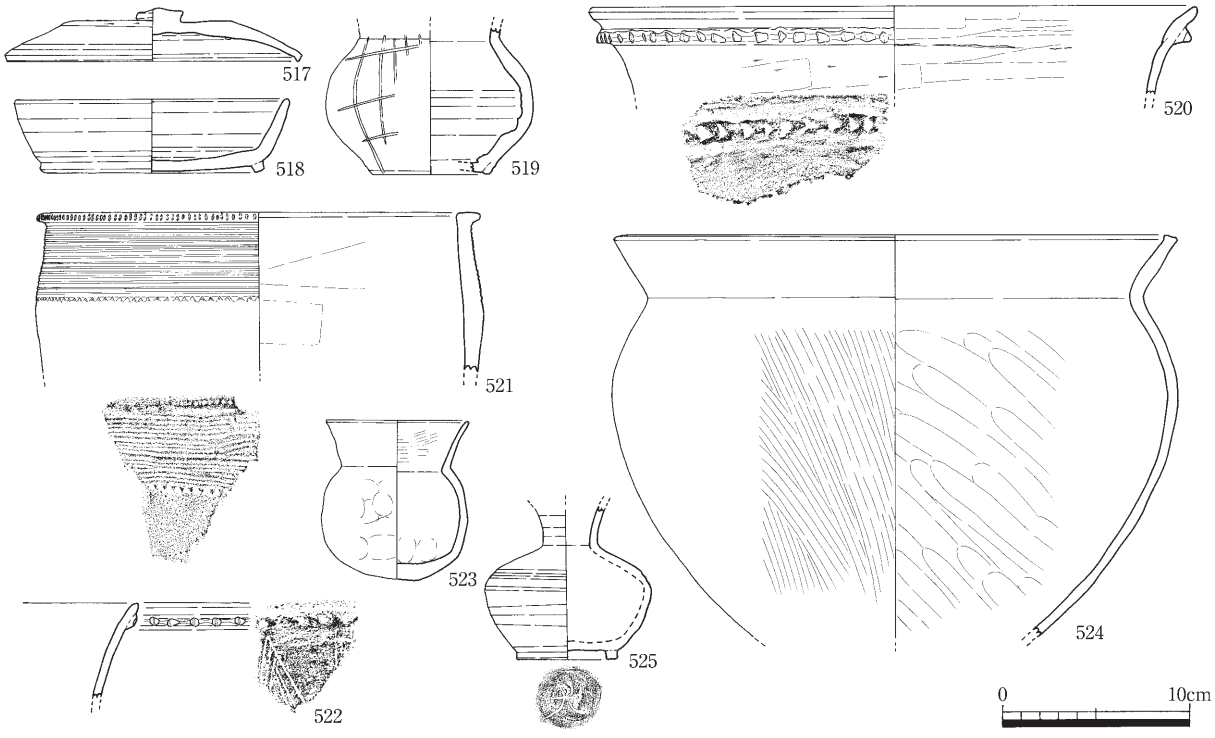
500～514はⅠ①区出土の遺物である。500は弥生土器甕の、501は弥生土器壷の底部で、どちらも平底となっている。502は弥生土器鉢、直口口縁と平底を持つ。これらは弥生時代後期のものである。503は土師器高杯である。杯部の屈曲部は強く突出しており、円筒形で裾の開く脚部である。504・505は土師器小型丸底壷である。ともに胴部内外面に指頭圧痕が明瞭に残る。これらは古式土師器で、古墳時代初頭に位置づけられる。506は土師器高台付皿で、内外面に赤彩の痕跡が残る。507は須恵器浄瓶である。長い頸部を有し口縁部と蓋は一体化している。浄瓶は清らかな水を仏前に供えるための容器であり、仏具である。507の1点だけでは心許無いが、この遺物を積極的に評価すれば、前田東・中村遺跡の一部には仏教関連の建物・施設があったことが推測されよう。506・507は8～9世紀に位置づけられる。508は管状土錘である。509・510は青銅製の刀装具である。509は鞘に用いた口金具と判断したが、柄に付く縁金具の可能性もある。わずかに鍍金が残っており、本来は全体に鍍金していたことがわかる。510は一部を欠損するが、鞘に用いた責金具と思われる。509同様に鍍金の痕跡が残っており、本来は全体に施していたものであろう。511は軒平瓦である。瓦当の文様は唐草文の中心部分が遺存しているものとみられる。一本造りによるものであろうか。9～11世紀の中に位置づけられるものであろう。512

第158図　I区包含層出土遺物①(1/2、1/3、1/4、1/5)

は砂岩製の凹み石である。表裏面中央に敲打痕がみられる。表面と側面の一部には磨滅痕があり、砥石としても使用した可能性がある。513・514は砂岩製の砥石である。513の砥面は1面であるが、514は側面部の3面を砥面に使用している。512・514は手持ちで使用したものとみられる。

515～519はⅠ③区で出土した遺物である。515はサヌカイト製の打製石庖丁である。刃部を欠損しているが両端に抉りが残る。516は銅銭「開元通寶」で、621年に初鋳の唐銭である。517は須恵器蓋で、口縁端部をわずかに折り返してかえりとしている。内面に重ね焼きの痕跡が残る。518は須恵器椀である。内面見込み部に仕上げナデを施している。517・518は8～9世紀に位置づけられる。519は須恵器壷で小型品である。外面にヘラ描きの文様を施している。肩部に自然釉の付着が著しいが胴部下半にも薄く釉がかかっており、緑釉陶器の可能性もある。10～11世紀代のものか。

520～525はⅠ④区で出土した遺物である。520・522は凸帯文土器深鉢で、口縁端部外面に刻み目突帯を1条めぐらせている。522は突帯下にヘラ描きによる文様を施している。ともに縄文時代晩期後半に属する。521は弥生土器甕である。逆L字形口縁を有し、口縁端部には刻み目を施している。外面の口縁部直下には4条1単位の櫛描き沈線を16条施しており、その下位に三角形の刺突文をめぐらせている。弥生時代中期初頭に位置づけられる。523は土師器小型丸底壷である。古墳時代初頭に属する。524は土師器甕である。扁球形の胴部に屈曲して外方に開く口縁部を持つ。8世紀代に位置づけられよう。525は須恵器壷である。底部外面にヘラ描きによる「大」の字が残る。9世紀代に属すると想定される。



第159図　I区包含層出土遺物②(1/4)

（8）小結

Ⅰ区は縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代はⅠ①・②・④区の自然河川内において晩期後半の遺物が出土した。Ⅰ④区では土坑状の不明遺構Ⅰ④SX04を河川の東岸で確認しており、同時代の人々の営みの証しとして認識できる。周辺地に住居跡の存在が期待される。

弥生時代は先述の自然河川内から弥生時代後期から古墳時代初頭を中心とする遺物が出土している。しかし、遺構はⅠ①区のⅠ①SK01、Ⅰ④区のⅠ④SD16・17、Ⅰ③区第2面での少数の柱穴と、数えるほどしか確認できていない。自然河川は滞水と流水を繰り返しており、洪水の危険性も高かったとみえて、意図的にこの近辺を避けたために遺構が少ないものと推測される。

古墳時代は河川から出土した古墳時代初頭の土器以外に明瞭な遺構・遺物は確認していない。

古代になると自然河川はほとんど埋没しており、Ⅰ①・②区にも遺構が広がる。主に居住域となったのはⅠ③区で、掘立柱建物跡Ⅰ③SB02・03のほかに、柱穴、井戸などが認められる。Ⅰ①・③区を南北に貫くⅠ①SD01・Ⅰ③SD19や、それと直交するⅠ①・②区のⅠ①SD02・②SD02などの溝状遺構は通水目的だけではなく、土地の区画をも兼ねたものと思われる。これらの溝の中からは瓦類も多々みられ、周囲に瓦を使用した建物の存在が想定される。Ⅰ①区では包含層資料ではあるが仏具の浄瓶（507）が出土するなど、「寺院」関係の建物・施設を色濃く示唆するものとも理解できよう。

中世もⅠ③区は引き続き居住域として土地利用されている。Ⅰ①SD01・Ⅰ③SD19は前代から引き続き機能しており、それに並行・直交する小溝が多数築かれている。建物を復元できなかった柱穴も多数存在しており、建て替えを行いながら継続して居住し続けたことがわかる。Ⅰ④区では遺物の出土がなかったため時期が判明しなかった多数の鋤溝がみられる。これらは畑作に伴うものであるが、当該期に属するものであれば、Ⅰ①SD01・Ⅰ③SD19を境にして、西に居住域、東に耕作地という土地利用の姿が復元できよう。

第４節　Ｊ区の調査

１．調査区の概要

南北幅15～50m、東西長148mの範囲を占めるＪ区は調査の都合もあり、８つの小調査区にわけて調査を実施した。高松東道路調査Ｄ区の北側に隣接する調査区である。標高はおおよそ21.2～24.2mで、東西両端で約2.1m、Ｊ区西辺の南北で0.8mの標高差を有している。調査着手前は宅地や田畑、資材置き場として土地利用されていた。東西方向ではＪ④西区とＪ③区の境に約0.3m、南北方向ではＪ①・②区とＪ③区の境に約0.4mの段差が存在する。

Ｊ区では遺構検出面を１～３面確認している。Ｊ①・②・③・⑤区では上から第１面が概ね古代以降、第２面が概ね弥生時代以前となっている。Ｊ④西・④東区では上から第１面が中世以降、第２面が概ね古代以降、第３面が概ね弥生時代以前となっている。また、Ｊ⑥区では検出面は１面のみであった。

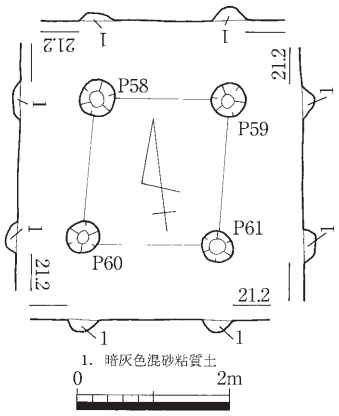
Ｊ①・②・⑦区は家屋の撤去の遅れなどで３つに分割して調査したが、元々は１筆の土地であったためここではまとめて報告するが、遺構の番号は統一していない。また、Ｊ④区は調査の都合によって東西に二分したが、調査区が分かれているため、Ｊ④西区・東区で別々の調査区とみなしている。なお、Ｊ区は縄文時代の遺物のみの出土はみられなかったため、縄文・弥生時代をまとめて報告する。

２．調査の成果

（１）縄文・弥生時代の遺構・遺物

Ｊ②SH01（第160図）

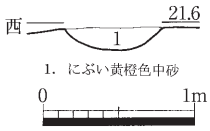
Ｊ②区中央部、第２面で検出した１間×１間の柱穴４基である。1.9m×1.8mのほぼ正方形を構成している。柱穴はすべて深さ10㎝以下と浅く、強い削平を受けていることがわかる。これらの状況や遺構検出面などから、この遺構は削平によって壁溝も中央土坑（炉跡）も焼失してしまった竪穴住居跡と理解しておく。円形ないし隅丸方形を呈していた住居であろう。柱穴から弥生土器小片がわずかに出土しており、弥生時代に所属するものと判断するが、周辺には弥生時代後期の遺構が存在しており、確実にこの建物に伴うものかどうか判断に苦しむ。



第160図　Ｊ②SH01平･断面図(1/100)

Ｊ⑦SD03（第161図）

Ｊ⑦区東半、第１面で検出した検出長6.9m、幅0.7m、深さ0.2mの規模を持つ溝である。断面形状は浅い皿形を呈している。弥生時代後期前半に位置づけられる土器片が出土している。溝状遺構の方向が古代以降のものと似ているが、弥生時代後期のＪ⑦SD07・Ｊ②SD05とも似ているため、一応弥生時代の範疇で捉えておく。



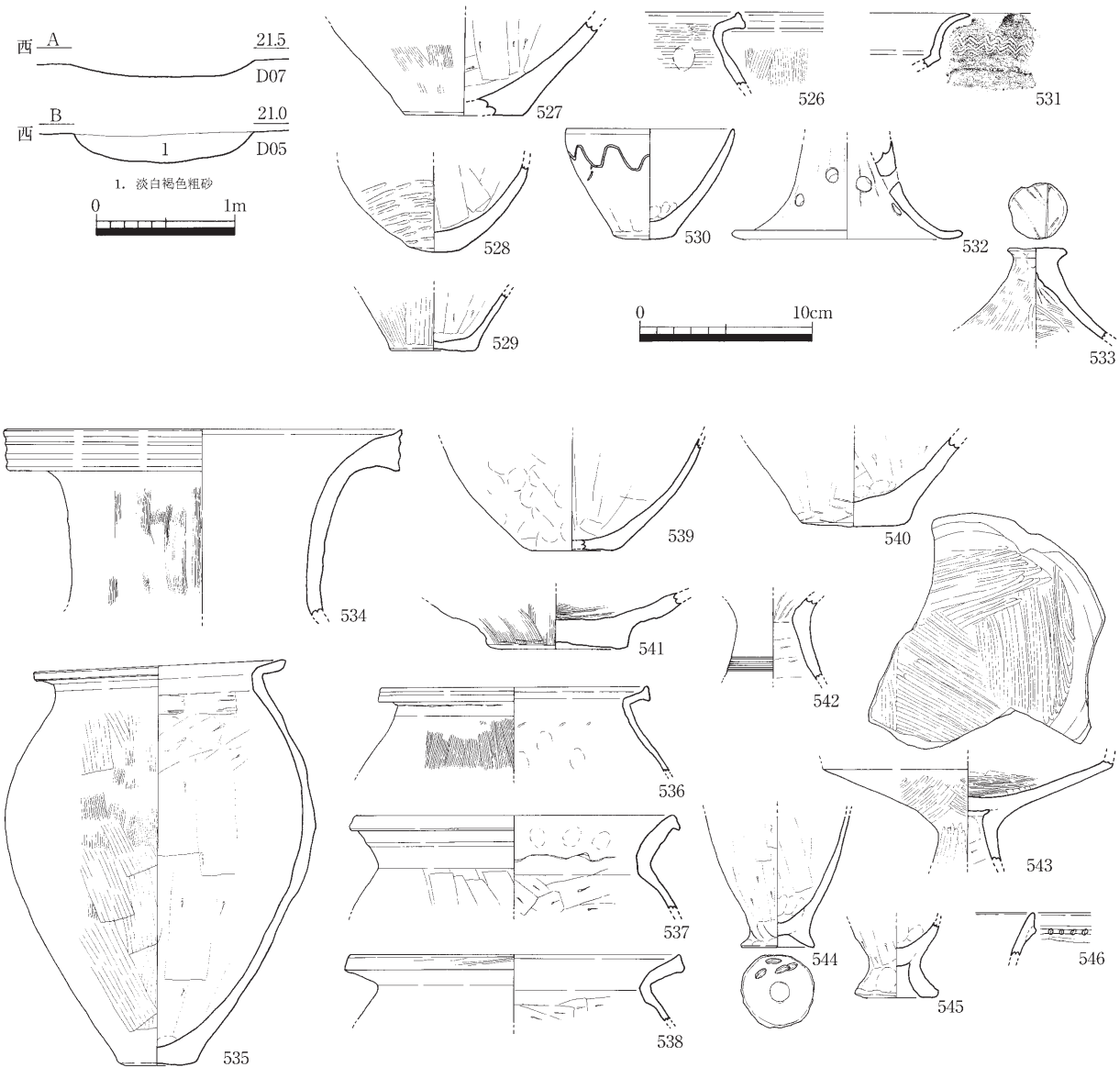
第161図　Ｊ⑦SD03
断面図(1/50)

Ｊ⑦SD07・Ｊ②SD05（第162図）

Ｊ⑦区東端付近とＪ②区中央、第２面で検出した検出長23.6m、幅1.6m、深さ0.2mの規模を持つ溝である。北東から南西方向に向かっており、Ｊ③SD16に接続する可能性もあるが確認できてはいない。

断面形状は浅い皿形を呈しており、埋土は淡白褐色粗砂となっている。洪水砂で一気に埋まった状況が想定される。淡白褐色粗砂の除去時にも遺物は出土したが、さらにその下位の掘り下げ時にも多数の遺物が出土している。周辺のベース土と区別が付かなかったため調査時には確認し切れなかった同溝状遺構の下層部分が、Ｊ②SD05部分には存在した可能性がある。

526～546はこの溝から出土した遺物であるが、このうち526～533は淡白褐色粗砂層から、534～546はその下位（暗茶褐色粘質土）から出土した遺物である。527は弥生土器壷の底部である。526・528・529は弥生土器甕である。526はなで肩の肩部に強く屈曲する口頸部を持つもので、口縁端部は上下に拡張させ凹線１条を施している。528・529は底部である。528は外面にタタキ調整が顕著である。530は平底と直口口縁をもつ弥生土器鉢である。外面上半にヘラ描きによる波状の文様がある。龍をモチーフにしたものだろうか。531は弥生土器高杯で、杯部外面に４条１単位の櫛描き波状文を施している。532は弥生土器高杯の脚部と判断した。竹管状工具による透かし穴がみられるが、うち１つは穿孔途中で終わっているものがある。器台の脚部の可能性もある。533は弥生土器蓋で、甕の蓋であろう。上面の平坦面には木の葉の圧痕が認められる。これらの形状からは弥生時代後期前半の年代が想定される。534は弥



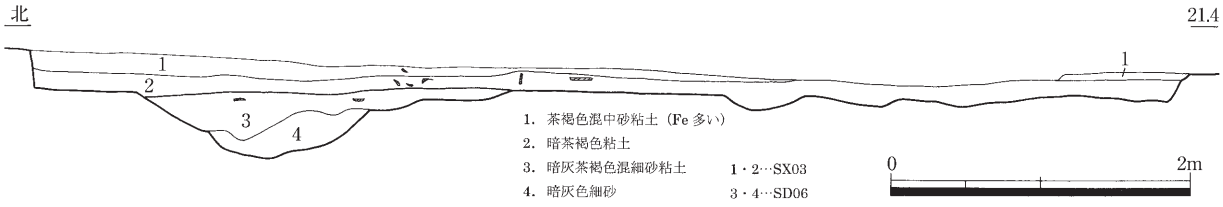
第162図　J⑦SD07･J②SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

生土器壷で、大きく開きながら立ち上がる口頸部を持ち、口縁端部は肥厚させて凹線３条を施している。539～541は弥生土器壷の底部である。540は胎土に粗い砂粒を多量に含んでいる。535～538は弥生土器甕である。535は倒卵形の胴部に強く屈曲する口縁部を有するもので、平底をしている。胎土中に角閃石・雲母を含んだ「下川津Ｂ類」土器である。536は強く屈曲する口頸部で端部は上下に拡張して擬凹線が１条めぐる。537は大きく外反して立ち上がる口頸部を持ち、端部は下方に摘み出している。538は屈曲の強い口頸部で端部を肥厚させている。542は弥生土器高杯脚部である。脚部中位にヘラ描きの沈線４条を施している。543は内外面のヘラミガキ調整がよく残る弥生土器高杯である。内面のヘラミガキは分割ミガキを行っている。「下川津Ｂ類」土器である。544・545は製塩土器である。544は底部外面に４個の籾圧痕を残している。546は弥生土器甕である。口縁部外面下に１条の刻み目突帯をめぐらせているが、胎土・焼成は弥生土器のそれである。弥生時代前期に属する546以外は、その形状から弥生時代後期前半に位置づけられよう。

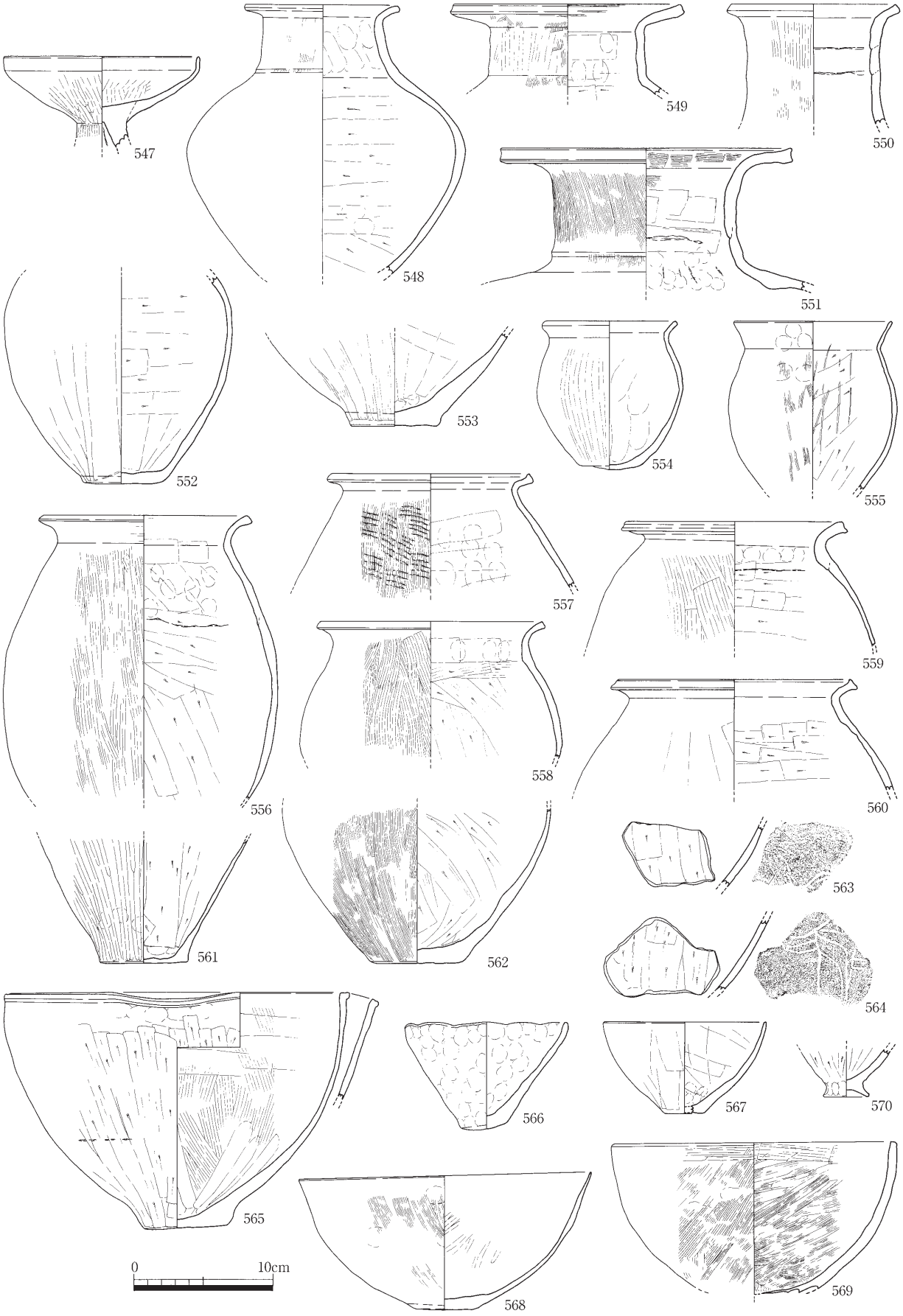
Ｊ②SD06（第163～165図）

Ｊ②南東隅付近、第２面で検出した検出長18.2m、幅2.7m、深さ0.5mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。東はＪ④西SD05と、南はＪ③SD18と連続する可能性が高い。先述したＪ⑦SD07・Ｊ②SD05の淡白褐色粗砂部分は、このＪ②SD06の埋没後に流れているという関係にある。断面形状は浅い椀形を呈している。埋土は２層に分かれるがいずれも粘質土で、滞水状況のまま埋没したものとみられる。なお、後述するＪ②SX03はこの溝が埋没したのちに、Ｊ②SD06から東南隅までを幅広く覆っている。

溝の中からは多量の遺物が出土している。その中から547～579を図化した。547は弥生土器高杯で、短く直立する口縁部を有する。内外面はヘラミガキ調整が顕著で、脚部との接合には円盤充填法を用いている。弥生時代中期末頃の年代が想定できる。548～553は弥生土器壷である。548は扁球形の胴部にやや内傾気味に立ち上がる口頸部から屈曲して外方へ開く口縁部を持つ。「下川津Ｂ類」土器である。549も同様の形態をするが、口頸部は直立気味である。551も同様の形態を呈するが頸部が外反している点が異なる。550は直立気味の長い頸部に屈曲する短い口縁部を持つものである。552は縦長の球形をした胴部に平底が付く。553も平底の壷である。554～564は弥生土器甕である。554・555は縦長の胴部に直線的に大きく開いた口縁部が付く形態をしている。556も縦長の胴部に外反する口縁部が付くもので、甕と壷の中間形態のような感じを受けるが、胴部外面中位に被熱痕があり甕と判断した。557は直線的な肩部から強く屈曲する口頸部を持つ。口縁端部は上方へ摘み出している。外面はタタキ調整ののちハケ調整で仕上げている。558～560はなで肩の肩部に屈曲する口縁部が付くものだが、口縁部の屈曲の度合いに差異がみられる。559は口縁端部に擬凹線１条をめぐらす。560は上下に拡張気味の口縁部を有する。562は壷の下半部とも考えたが、外面に被熱痕がみられることから甕の底部と判断した。563・564は甕の胴部下半破片である。直接接合はしないものの、胎土や焼成から同一個体と判断できる。外面に

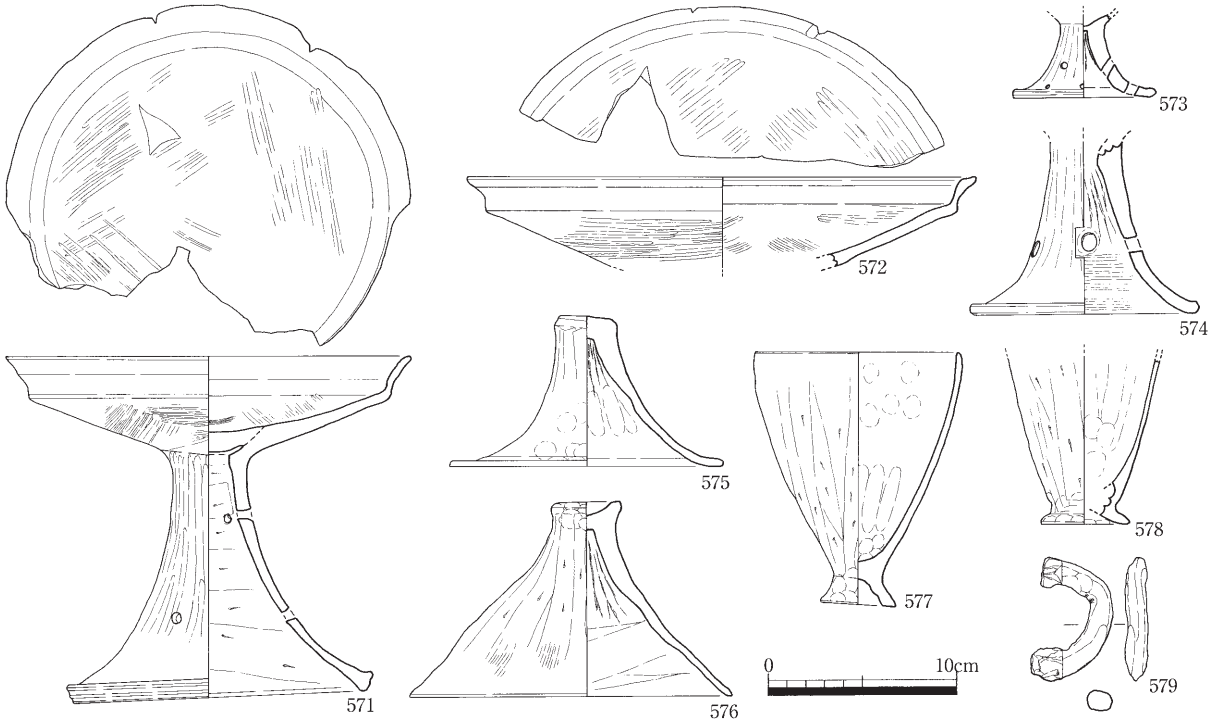


第163図　Ｊ②SD06･SX03断面図（1/50）



第164図　J②SD06出土遺物①(1/4)

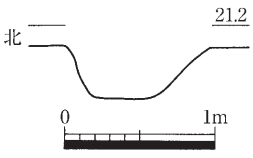
はヘラ描きの文様が描かれている。簡略化された龍の胴体の一部とみなせないこともないが、判断するまでにはいたらない。565～569は弥生土器鉢である。565は平底から内弯気味に立ち上がり、わずかに肥厚させた口縁端部上面に細い沈線１条をめぐらせている。口縁部の歪みと勘違いしそうなわずかな片口を有している。566～569は直口口縁を持つが、胴部の内弯の度合いに差異が認められる。570は小さな脚台が付いている。571～574は弥生土器高杯である。571は大きく外方へ開く裾部を持つ脚部に浅い皿状の杯部が付いた形態の「下川津Ｂ類」土器である。脚端部は面を持ち擬凹線２条がみられる。杯部は屈曲部から短く外反する口縁部が付く。杯部と脚部の接合には円盤充填を用いている。572も同様の杯部であるが口縁端部が肥厚気味である。杯部内面は分割のヘラミガキ調整で仕上げている。573は小型品で上下2段の透かし孔を穿つ。574は脚部中位に３つの透かし穴を持つ。575・576は弥生土器蓋である。外反気味に拡がる575、直線的に拡がる576と形態は異なるが、ともに甕の蓋で、端部付近に使用時の被熱痕が認められる。577・578は製塩土器である。579は土製把手である。コップ形ないしジョッキ形土器の把手が取れたものであろう。コの字状の両端は器壁内に差し込むために平たくつぶしてある。これらの土器は弥生時代中期に位置づけられる547・579を除き、弥生時代後期前半に属するものと想定できる。



第165図　J②SD06出土遺物②(1/4)

J②SD08（第166図）

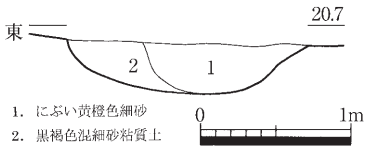
Ｊ②区中央北寄り、第２面で検出した検出長15.6m、幅1.5m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構で、やや蛇行している。Ｊ②SD05と交差する部分はＪ②SD05の淡白褐色粗砂の下位になっているが、Ｊ②SD05の下層との関係は判別できていない。弥生時代後期に位置づけられる土器細片が出土した。



第166図　J②SD08
断面図(1/50)

Ｊ③SD16（第167～169図）

Ｊ③区中央部、第２面で検出した検出長7.3m、幅2.5m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。北端はＪ③SD18と合流しており、南は調査区外で東側を流れるＪ③SR01に合流しているものと推定される。溝の底の高さに注目するとＪ③SD16のほうが20～30㎝ほどＪ③SD18より浅い。また、Ｊ③SD16を北方へ延長するとちょうどＪ②SD05が位置している。Ｊ③SD16の埋土は上層（にぶい黄橙色細砂）と下層（黒褐色混細砂粘質土）に二分されており、上層の砂層はＪ②SD05の淡灰褐色粗砂層に対応する可能性がある。これらの状況からは、Ｊ②SD05とＪ③SD16は本来連続していた溝で、Ｊ③SD18埋没後に北から南へ通水していたと判断できよう。となると、Ｊ②SD06とＪ③SD18が若干の屈曲を持ちながら連続していた可能性も蓋然性を帯びてくる。



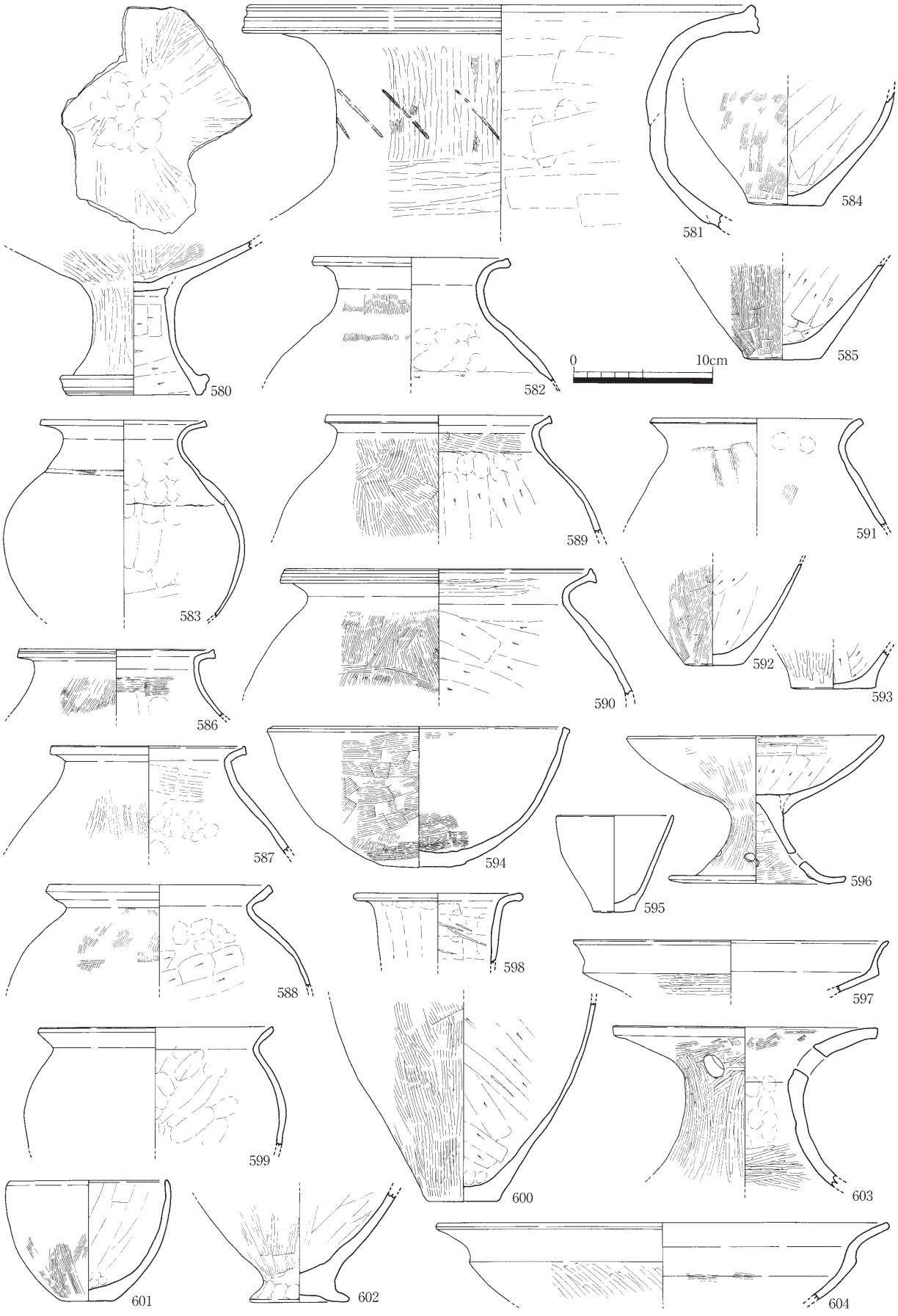
第167図　Ｊ③SD16断面図(1/50)

埋土中からは多量の土器を中心とした遺物が出土している。総じて上層の砂層からの遺物は少なく、ほとんどが下層の粘質土からの出土である。なお、調査時はSD16にトレンチを設定して規模を確認後に全体を掘り下げたため、遺物はトレンチとそれ以外などに分けて取り上げている。ここでも分けて報告するが、トレンチ出土としたものも大半は下層からの出土である。

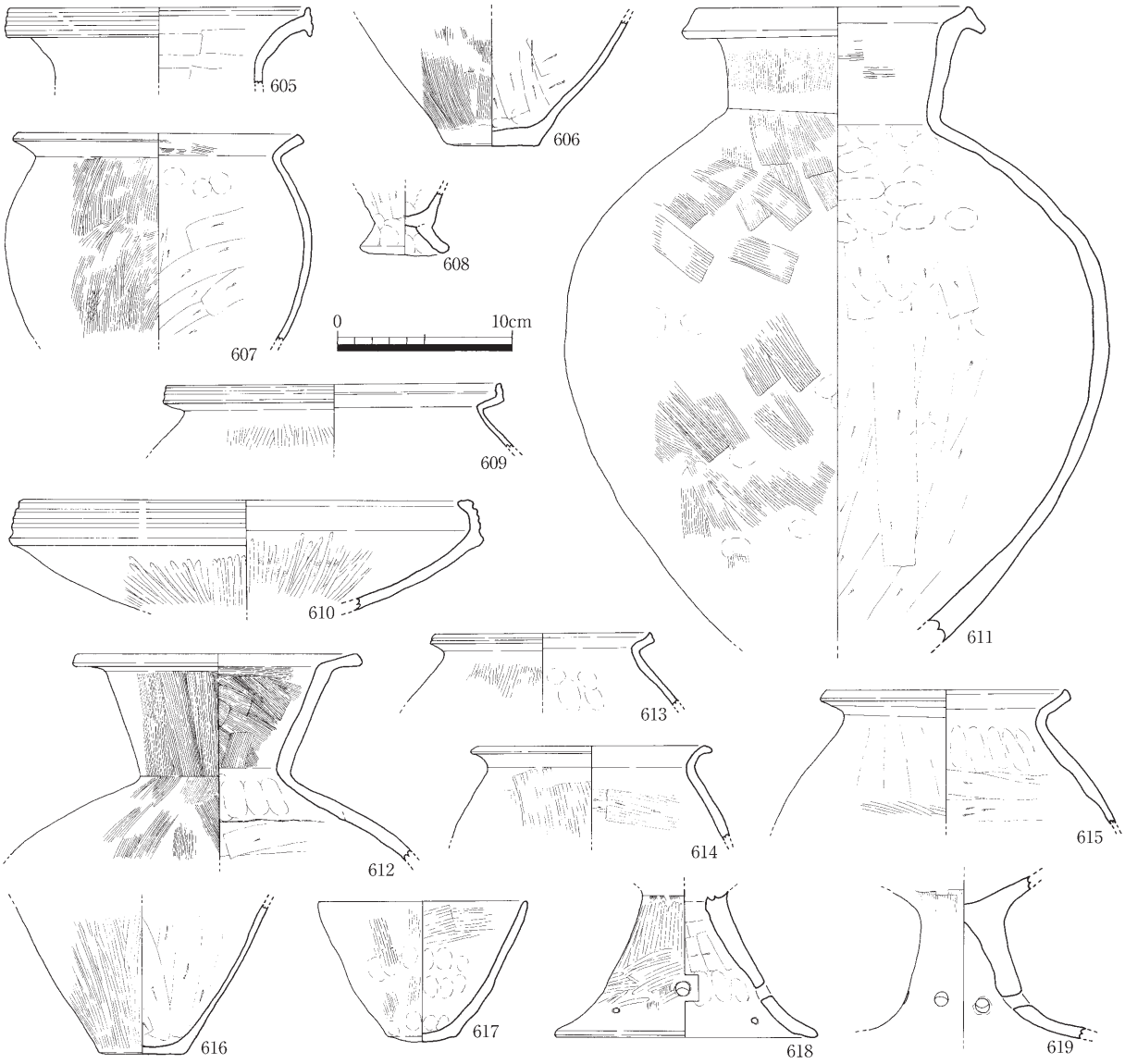
580～604は下層から出土した遺物である。580はやや外反気味に開く脚部をもつ弥生土器高杯である。端部を分厚く肥厚させ凹線２条をめぐらせている。ヘラミガキ調整が顕著で、杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。弥生時代中期末に位置づけられよう。581～584は弥生土器壷である。581は大型品で、直立気味に大きく外反する口頸部を持ち、口縁端部は肥厚させて凹線２条を施している。頸部外面には工具（ハケ原体）による刺突文がみられる。582・583は球形の胴部から大きく外反する口頸部を持つものである。584は平底を持つ底部で底部外面には一定方向のハケ調整がみられる。585～593は弥生土器甕である。586・587・589はなで肩の肩部から強く屈曲する口縁部を持つもので、口縁端部を肥厚させている。586は口縁端部に凹線１条を施す。589は「下川津Ｂ類」土器である。588・590は球形の胴部に強く屈曲する口縁部を持つものである。590は口縁端部を上下に拡張して擬凹線２条をめぐらせている。591は壷と甕の中間形態のような格好をしている。585・592・593は甕の底部である。593は「下川津Ｂ類」土器である。594・595は弥生土器鉢である。ともに直口口縁と平底を有するが、594が内弯しながら立ち上がるのに対して、595は直線的に立ち上がる。596・597は弥生土器高杯である。596は浅い椀状の杯部に大きく広がる脚部を持つ。脚部を杯部に差し込んで接合している。597は屈曲をもつ杯部で、口縁部の立ち上がりは短い。

598～604は断面観察用の畦を掘り下げた際に出土したものである。598は弥生土器壷である。やや開き気味に直立する口頸部に強く屈曲する口縁部が付く。599・600は弥生土器甕である。599は球形の胴部に屈曲して大きく外方に開く口縁部が付く。600は甕底部で平底である。外面のハケメ調整が顕著である。601・602は弥生土器鉢である。601は平底で内弯気味に立ち上がる直口口縁である。602は小振りの脚台が付いている。603は弥生土器器台である。大きく外反する器形で口縁部下に３つの穿孔を有する。604は弥生土器高杯である。屈曲部から大きく外方へ開く口縁部が付くが口縁部は短めである。

605～608は上層の砂層から出土した遺物である。605は弥生土器壷である。大きく外反する器形で口縁端部を上下に拡張して凹線３条を施している。606・607は弥生土器甕である。この２点は直接接合しないが、胎土や焼成、色調などから同一個体の可能性が高い。平底に球形の胴部で強く屈曲する口縁部



第168図　J③SD16出土遺物①(1/4)



第169図　J③SD16出土遺物②(1/4)

を有する。608は製塩土器である。

609～619はトレンチを掘り下げたときに出土した遺物である。609は弥生土器甕である。強く屈曲する口縁部を持ち、端部は上方に折り曲げて外面に凹線2条をめぐらす。610は弥生土器高杯である。外方に突出した屈曲部を持ち、口縁部は内弯気味に短く立ち上がる。端部は拡張気味に面取りして凹線1条をめぐらす。口縁部外面にも凹線3条をめぐらしている。内外面のヘラミガキ調整が顕著である。611・612は弥生土器壺である。611は倒卵形の胴部にやや外方に開き気味に直立する頸部から外方に屈曲する口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張している。612はやや張った肩部に直線的に外方へ開く頸部へと続きさらに屈曲する口縁部が付く。内外面の細かなハケメ調整が顕著である。613～616は弥生土器甕である。なで肩の肩部に屈曲する口縁部を有するが、屈曲の度合いや口縁端部の形状に差異がみられる。613はいわゆる「下川津Ｂ類」土器である。616は平底の甕底部である。617は弥生土器鉢で、丸みを帯びた底部から内弯気味に立ち上がる直口口縁を有する形態をしている。618・619は弥生土器高杯である。618は透かし孔を上部に大きめの穴4個、下部に小さめの穴4個を配している。619は途中から屈曲気味に外方へ開く脚部である。これらの土器のうち、弥生中期末頃の580・609・610や弥生時代末

頃の612などを除いたほとんどが弥生時代後期後半に位置づけることができよう。

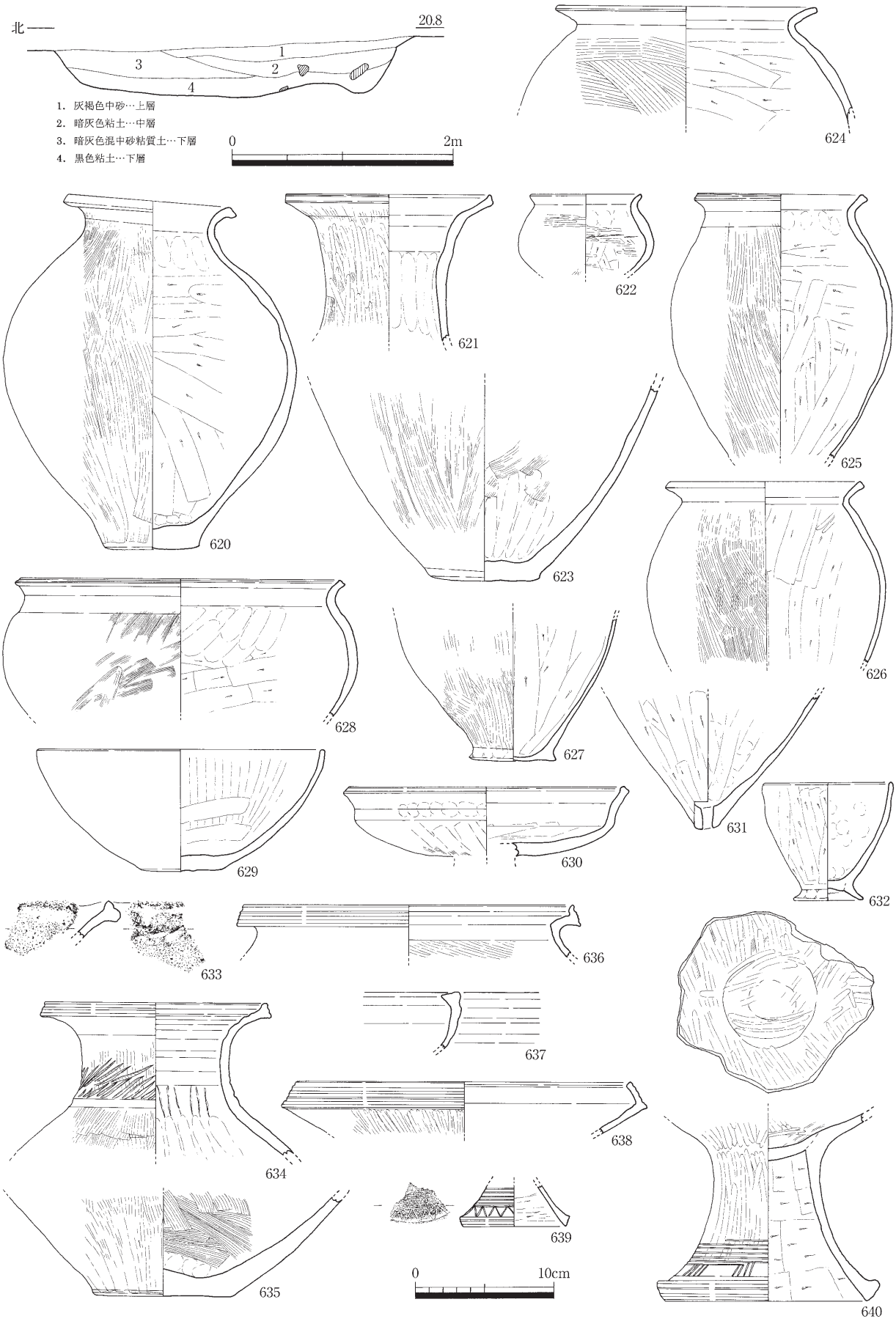
Ｊ③SD18（第170～173図）

Ｊ③区西半、第２面で検出した検出長30ｍ、幅3.3ｍ、深さ0.5ｍの規模を持つ溝状遺構である。緩やかに弧を描きながら東から西へ向かっている。調査時点ではＪ③SD03とは合流する同時期の溝状遺構と理解していたが、再検討の結果、先述の理由によってＪ③SD18が先行するものと判断した。合わせて、Ｊ②SD06とも連続するものと理解している。

断面の形状は幅の広い浅い逆台形を呈している。土層断面の観察からは滞水・流水を繰り返しながら埋没し（下層）、１回の溝さらえを行った後、再び滞水・流水を繰り返して埋没していった（上・中層）状況が想定される。遺物は主に中層・下層から出土しているが、遺物の取り上げは上・中層と下層、Ｊ③SD16との接点以東に分けて行った。Ｊ③SD16との接点以東は分層せず一括で取り上げている。

620～632は下層として取り上げたものである。620～623は弥生土器壷である。620は縦長の胴部に大きく外反する口縁がつくもので平底をしている。口縁端部は肥厚させている。621は外反気味の長い頸部に外方へ開く口縁部を有するもので端部は面取りして擬凹線１条をめぐらせている。622はたまねぎ状の胴部に短く外反する口縁部がつく小型品である。623は平底の壷底部である。624～627は弥生土器甕である。624は球形の胴部に強く屈曲する口縁部が付く。625・626は倒卵形をした胴部に屈曲する口縁部が付くもので、肥厚気味の口縁端部を持つ。625は端部に擬凹線１条をめぐらせている。626は外面にスス・炭化物が付着している。627は端部が外方に突出する平底を持つ甕底部である。外面には被熱痕が認められる。628・629は弥生土器鉢である。628は扁球形の胴部に外反する短い口縁を持つが、629は平底から内弯して立ち上がる直口口縁の鉢である。630は弥生土器高杯である。屈曲する杯部だが、屈曲の度合いは弱めで稜線を残す程度である。口縁部の外反も弱い。631は弥生土器甑で尖り気味の底部中央に１穴を持つ。632は製塩土器である。形状から弥生時代前半に位置づけられよう。

633～643はＪ③SD16接点以東としてまとめて取り上げたものである。633は縄文土器深鉢である。低い山形口縁の縁帯文土器で、沈線文を施している。縄文時代後期前半の永井Ⅰ式に相当する。634・635は弥生土器壷である。634は直立気味の頸部から大きく外反する口縁部を有し、口縁端部は上下に拡張して凹線２条をめぐらせている。頸部外面には調整に使用した工具（ハケ原体）による刺突文が２段に施されている。635は平底の壷底部である。636は弥生土器甕である。強く屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張して細い凹線４条をめぐらせている。637は弥生土器鉢である。内弯しながら立ち上がるもので口縁端部は拡張して平坦面をもつ。口縁部外面には凹線３条をめぐらせるものである。638～641は弥生土器高杯である。638は突帯状を呈する屈曲部から強く内傾する短い口縁部を持つ。口縁部外面には凹線３条をめぐらせる。639は外方に直線的に開く脚部で端部に面を持ち擬凹線２条をめぐらせる。脚部にはヘラ描きによる沈線６条と鋸歯文を施している。640は外反しながら開く脚部で、端部を肥厚させて凹線２条をめぐらす。脚部下半にはヘラ描きによる沈線７条と４条１単位の垂下沈線文を施している。杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。641は浅い皿状の杯部と大きく外反して開く脚部を持つ高杯である。杯部は弱い屈曲を有し短い口縁部がつく。口縁端部は拡張して平坦面を持つ。内外面のヘラミガキ調整が顕著で、杯部内面は４分割のヘラミガキ調整で仕上げる。脚部には上下２段の透かし穴が施されている。642・643は製塩土器である。これらはその形状から弥生時代中期末から弥生時代後期前半にかけての年代が想定できる。Ｊ③SD16接点以東として取り上げたものの中にはＪ③

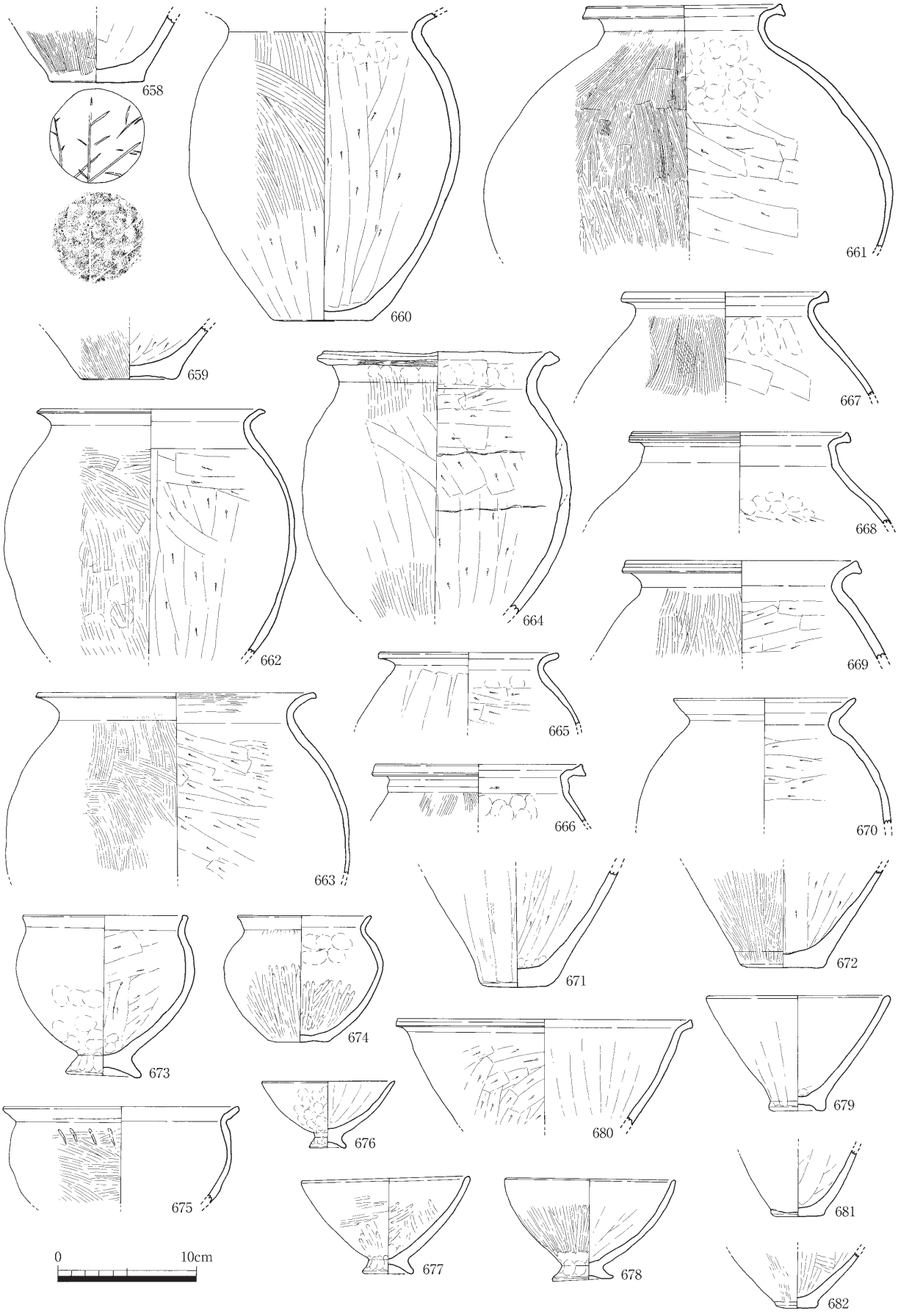


第170図　J③SD18断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)

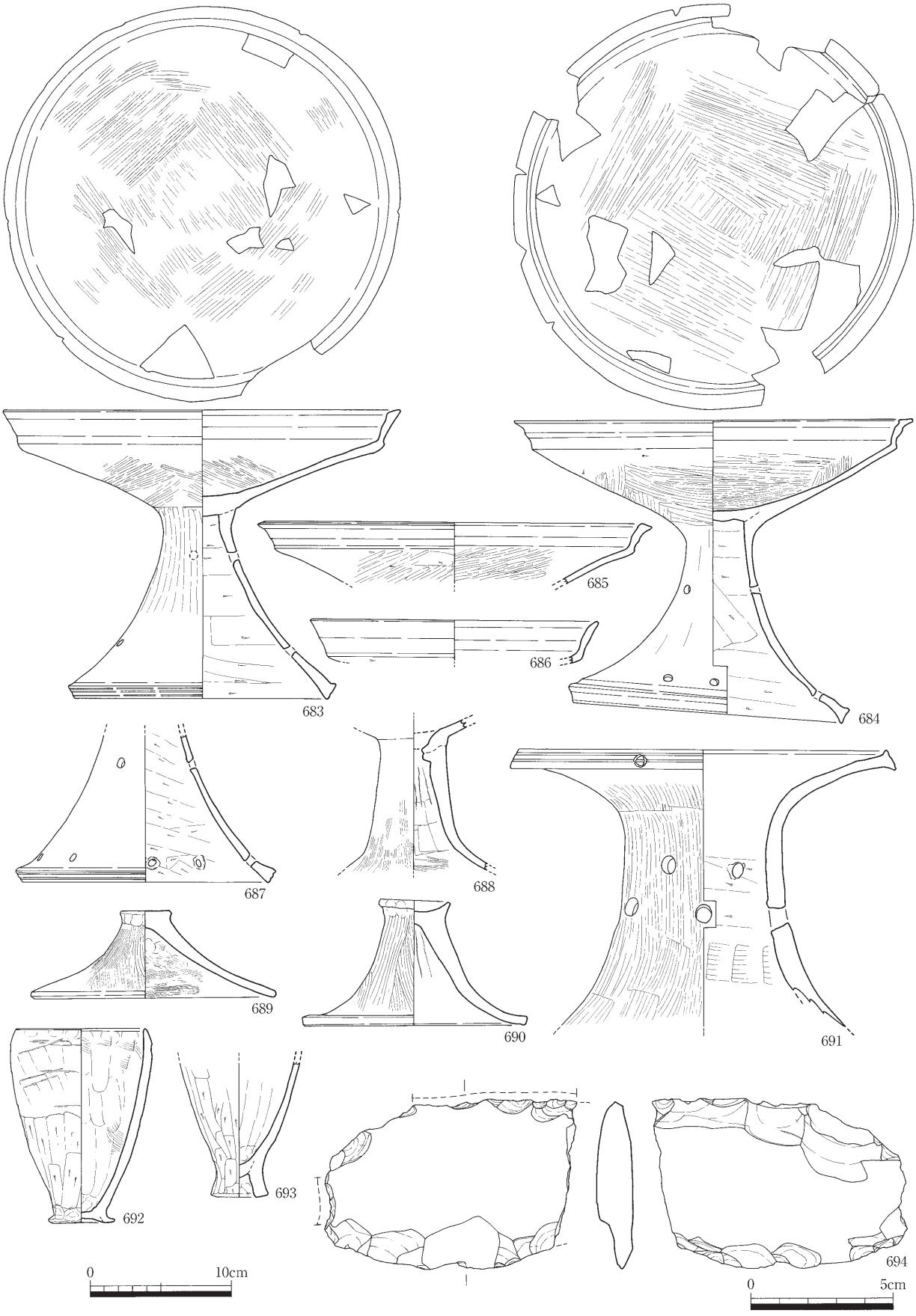
第171図　J③SD18出土遺物②(1/4)

SD16に属する遺物が混入している可能性が高く、取り扱いには注意が必要である。

644～694は上・中層として取り上げたものであるが、そのほとんどは中層からの出土である。644は長い脚台を付した弥生土器鉢と理解した。扁球形の胴部に直立気味に外方へ開く短い口縁部が付き、ヘラミガキ調整が顕著である。長い脚はヘラ描き沈線2条をめぐらせている。壷の範疇で捉えることもできようが、いずれにしても特殊な目的で作られたものであろう。645～659は弥生土器壷である。645は強い扁球形の胴部に大きく開く口縁部がつくものである。3条1単位の櫛描き波状文を口縁部内面に1条と肩部外面に2条施している。口縁端部には竹管状工具による刺突文が施されている。646・647は椎の実形をした縦長の胴部に直立気味の長めの頸部が付き、外方に開く口縁部を持つ形態をしている。平底を有する646は口縁部の外反が強いのに対して647は弱く短い。648・649は縦長の球形をした胴部から外反する短い口頸部がつくものである。口頸部の外反度などに差異がみられるが、どちらも口縁端部に小さな面を持つ。650は壷と判断したが、鉢の可能性もある。651～655は長めの頸部を持った壷であるが、頸部の直立・外反や口縁部の屈曲・外反、端部の拡張などに差異がある。651は口縁端部を上下に拡張して擬凹線3条をめぐらせている。頸部には調整に使用した工具（ハケ原体）による刺突文がみられる。653は口縁端部を肥厚させて凹線1条をめぐらす。654は口縁部の屈曲が強い。655は口縁端部に擬凹線1条がめぐる。656は直立気味で短めの頸部から外方へ屈曲する口縁部を持ち、口縁端部は上下に拡張して凹線3条をめぐらせている。657はなで肩の胴部に内傾気味の長い頸部が付く形態で、頸胴部の境には外面のハケ調整時に強く押さえた工具痕が沈線状にめぐっている。658・659は平底の壷底部である。658は製作時に敷いた木の葉の葉脈がスタンプとなって残っている。660～672は弥生土器甕である。660は縦長の扁球形の胴部に屈曲する口縁部を有する平底の甕である。661は球形の胴部に屈曲する口縁部を持つもので、口縁端部は肥厚させている。形態的には壷の可能性もある。外面のハケメ調整が顕著である。662～665は球形の胴部から口縁部が強く外反する形態の甕である。口縁端部の形態などにわずかな差異がある。664は口縁端部を分厚く肥厚させるもので、他の甕に比べて粗雑な作りの感じを受ける。666～670は強く胴部から口縁部が屈曲する形態の甕である。666は拡張気味の口縁端部で擬凹線が4条程度めぐる。667も拡張気味の口縁端部をもつ。668も同様で擬凹線2条をめぐらす。これら3点は胎土中に角閃石・雲母を含んだいわゆる「下川津Ｂ類」土器である。669は屈曲度がやや弱めで、口縁端部は肥厚して細い凹線1条がめぐる。670は屈曲の度合いが弱く、内弯気味に立ち上がる口縁部を持つ。671・672は平底の甕底部である。673～682は弥生土器鉢である。673～675は球形の胴部から口縁部が外反する形態のものである。673は端部が外方へ突出する脚台が付いている。676～679は脚台を持ち、内弯しながら立ち上がる直口口縁の鉢である。679はやや直線的に立ち上がっている。680は口縁部を折り曲げており端部には擬凹線1条がめぐる。681・682は平底を持つ鉢底部である。683～688は弥生土器高杯である。683・684は浅めの杯部に大きく外反して開く脚部が付く形態で、屈曲する杯部の口縁部は短い。685の杯部、687の脚部も同様の器形を呈していたものと推測できる。683は口縁端部と脚端部に平坦面を持ち、脚端部には擬凹線3条がめぐる。ヘラミガキ調整が顕著で、杯部内外面は4分割のヘラミガキ調整で仕上げている。684も口縁端部と脚端部に平坦面を持ち、脚端部には擬凹線1条がめぐる。杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。杯部内外面は4分割のヘラミガキ調整で仕上げている。685の杯部も口縁端部は面を持つ。687は脚端部に平坦面を持ち擬凹線2条をめぐらす。上下2段に透かし穴を施す。683～687は「下川津Ｂ類」土器である。



第172図　J③SD18出土遺物③(1/4)

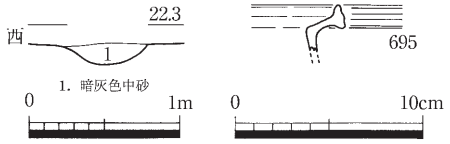


第173図　J③SD18出土遺物④（1/2、1/4）

689・690は弥生土器蓋である。689は扁平な笠形の形態、690は高杯脚部のような形態である。どちらも甕の蓋であり、689は内面に被熱痕が残る。691は弥生土器器台である。大きく外反する口縁部と裾部を有し、中位には複数の透かし穴が施されている。口縁端部は上下にわずかに拡張して凹線２条をめぐらした後に施した竹管文が１つ残る。692・693は製塩土器である。692が扁平な底部であるのに対して、693は上げ底気味の底部をしている。694は安山岩製の打製石庖丁である。一端を欠損しているが、もう一端には抉りがみられる。風化が著しい。これらの遺物はその形状から弥生時代後期前半を中心とした年代が想定できる。

Ｊ⑤SD09（第174図）

Ｊ⑤区東端、第２面で検出した検出長6.8m、幅0.6m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。わずかに弧を描きながら北東から南西方向につづく。断面形状は浅い皿形を呈し、埋土は砂層である。弥生土器甕695が出土している。強く屈曲する口縁部で口縁端部を上下に拡張して凹線２条を施している。弥生時代後期前半に位置づけられる。

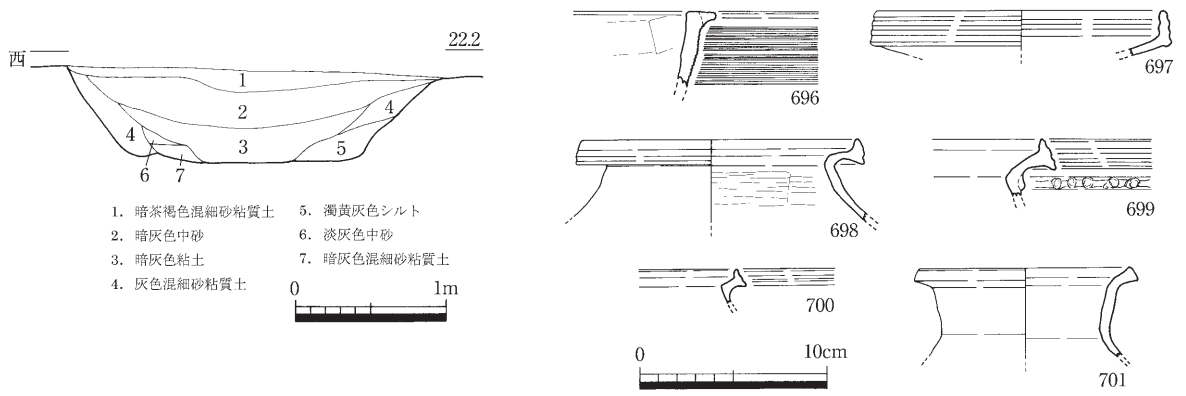


第174図　Ｊ⑤SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｊ⑤SD11（第175図）

Ｊ⑤区中央、第２面で検出した検出長6.9m、幅3.4m、深さ0.7mの規模を持つ溝状遺構である。西に位置するＪ⑤SD12とはほぼ平行している。南側では高松東道路調査Ｄ区SD01に連続するものとみられる。断面形状は逆台形で、土層観察からは２回の溝さらえがあったものとみられる。

埋土からは696～701の遺物が出土しているが、これらは溝さらえ前後のものをまとめて取り上げている。696は弥生土器甕である。逆Ｌ字形口縁で、口縁部外面には６条１単位の櫛描き沈線を16条めぐらせている。弥生時代前期後半に位置づけられる。697は弥生土器高杯である。屈曲して短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁部外面には凹線３条をめぐらせている。698～700は弥生土器甕である。いずれも強く屈曲する口縁部で端部を上下に拡張して凹線をめぐらす。699は屈曲部外面に貼付突帯１条をめぐらし竹管状工具による刺突文を施している。700は「下川津Ｂ類」土器である。701は弥生土器壷である。やや外傾気味に立ち上がる頸部から屈曲する口縁部が付く。端部は肥厚させている。696を除いて、弥生時代中期末から後期前半に属するものと想定される。

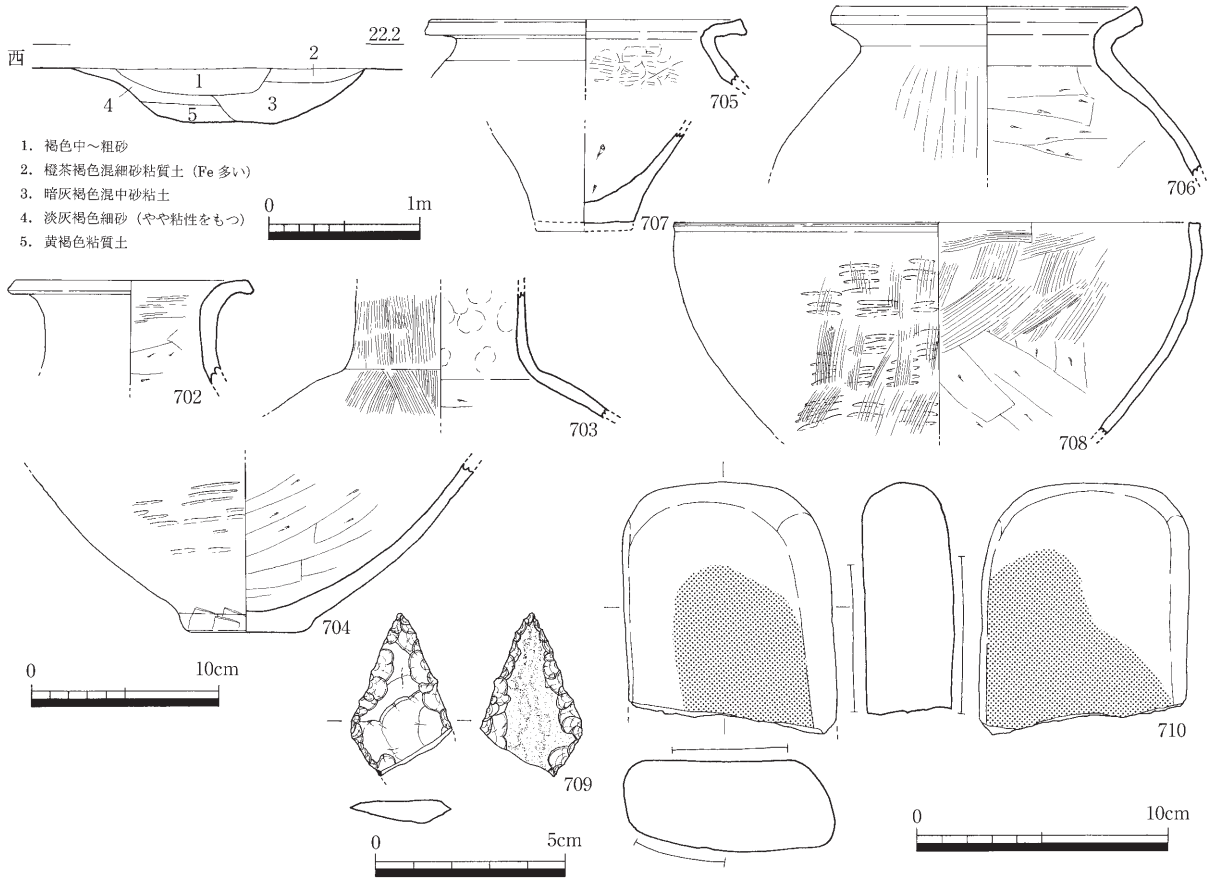


第175図　Ｊ⑤SD11断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｊ⑤SD12（第176図）

Ｊ⑤中央、第２面で検出した検出長7.0m、幅2.5m、深さ0.4mの規模を持つ溝状遺構である。Ｊ⑤SD11とほぼ平行している。調査区外南側では高松東道路調査Ｄ区SD03に連続するものとみられる。断面形状は浅い逆台形を呈し、断面観察からは２回の溝さらえがあったことがうかがえる。

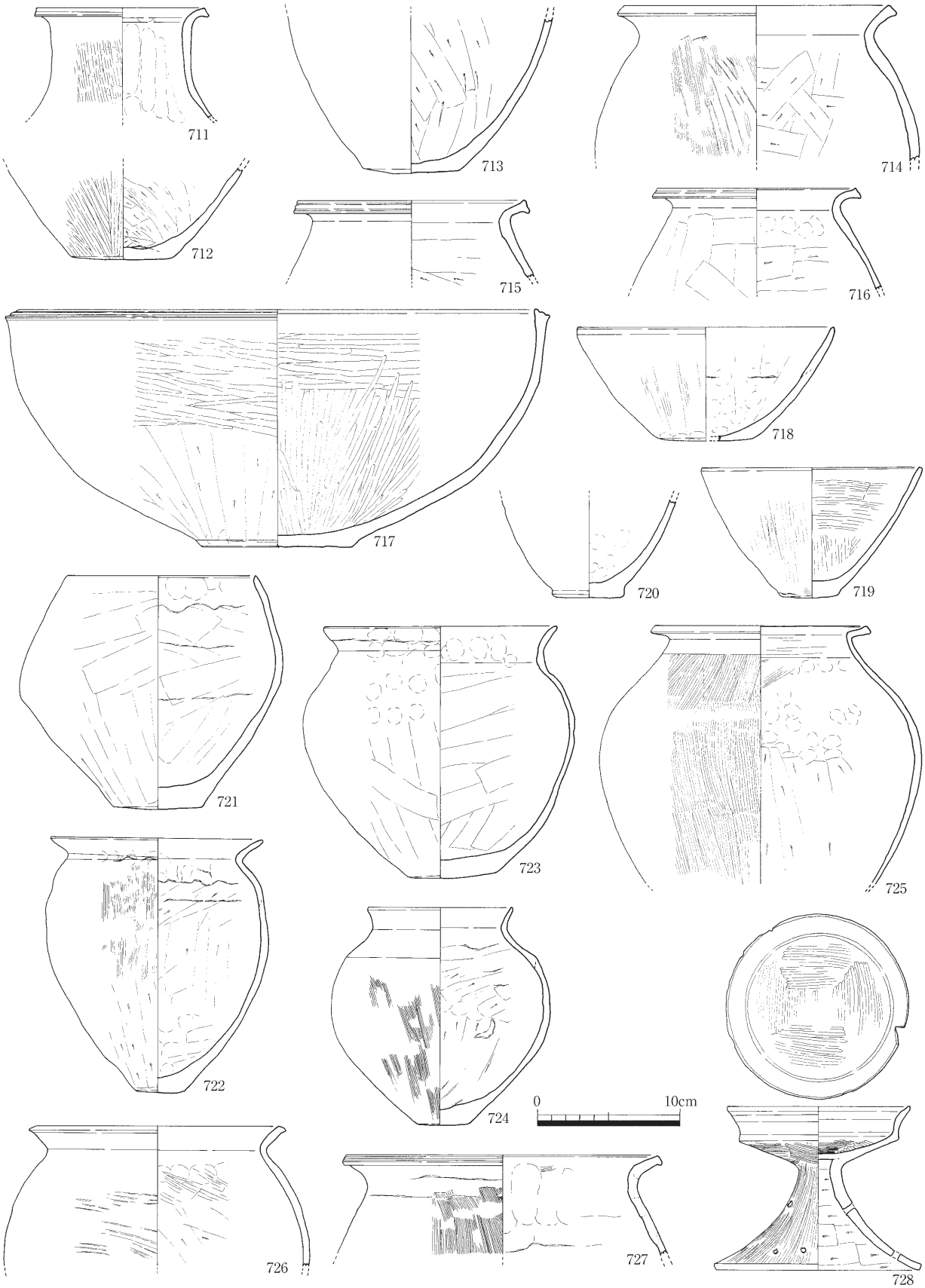
埋土からは702～710の遺物が出土しているが、これらは溝さらえ前後のものを分離できていない。702～704は弥生土器壷である。702は直立気味の頸部から大きく外反する口縁部を持つ。703は張り気味の肩部からほぼ直立する頸部を有するものである。704は平底を持つ壷底部である。705～707は弥生土器甕である。705・706は屈曲する口縁部を持つ甕であるが、屈曲の度合いは705のほうが強い。どちらも口縁端部に面を持つ。707は甕底部であるが、粘土の接合部から剥離してしまっている。708は内弯しながら立ち上がる直口口縁の弥生土器鉢である。外面はタタキ調整ののちハケ調整で仕上げている。709はサヌカイト製の打製石鏃である。基部を欠損するが凸基式と判断できる。710は砂岩製の砥石である。表裏２面を砥面として使用している。これらの形状から弥生時代後期後半の年代が想定される。



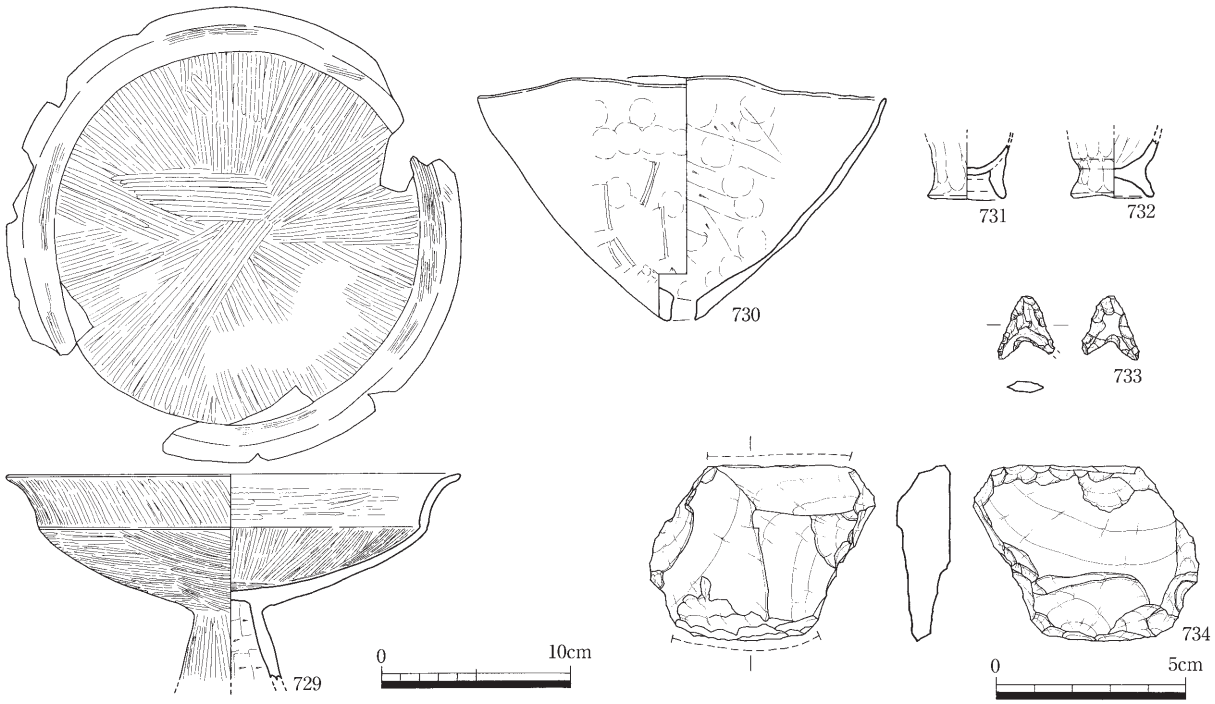
第176図　Ｊ⑤SD12断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/3、1/4）

Ｊ②SX03（第163・177・178図）

Ｊ②区南東隅付近、第２面で検出した不明遺構である。Ｊ②SD06が埋没した後にその上を広く覆うように存在している。深さ0.3mを測り、遺構というよりは包含層に近いような状態を呈している。南側に隣接するＪ③区においては同様の堆積は認められなかった。



第177図　J②SX03出土遺物①(1/4)



第178図　J②SX03出土遺物②(1/2、1/4)

埋土中からは711～734のように多量の土器を中心にした遺物が出土している。遺物の出土状況は、ほぼ満遍なく出土しているが、中央付近で１ｍ×２ｍの範囲で土器溜まり状にやや集中する箇所が存在した。土器片には磨滅がほとんどないことから、付近から投棄された可能性がきわめて高い。

711～720は土器溜まり状の部分から出土した遺物である。711～713は弥生土器壷である。711は直立気味で長めの頸部に大きく外反する口縁部がつく。口縁端部は若干肥厚している。712・713は平底を持つ壷底部であるが胴部の形態は異なる。713には砂粒が土中の鉄分によって固着しており、埋没中に水の影響を強く受けたことが想定される。714～716は弥生土器甕である。なで肩の肩部から屈曲する口縁部を持つものだが、714は外反気味となっている。715・716は強く屈曲しており、口縁端部は拡張して擬凹線をめぐらしている。717～720は弥生土器鉢で、いずれも平底を有し内弯しながら立ち上がる器形を呈する。717は強く内弯する器形で口縁端部には面を持ち、擬凹線２条をめぐらす。718・719は内弯の度合いが弱めで口縁端部は丸く仕上げている。

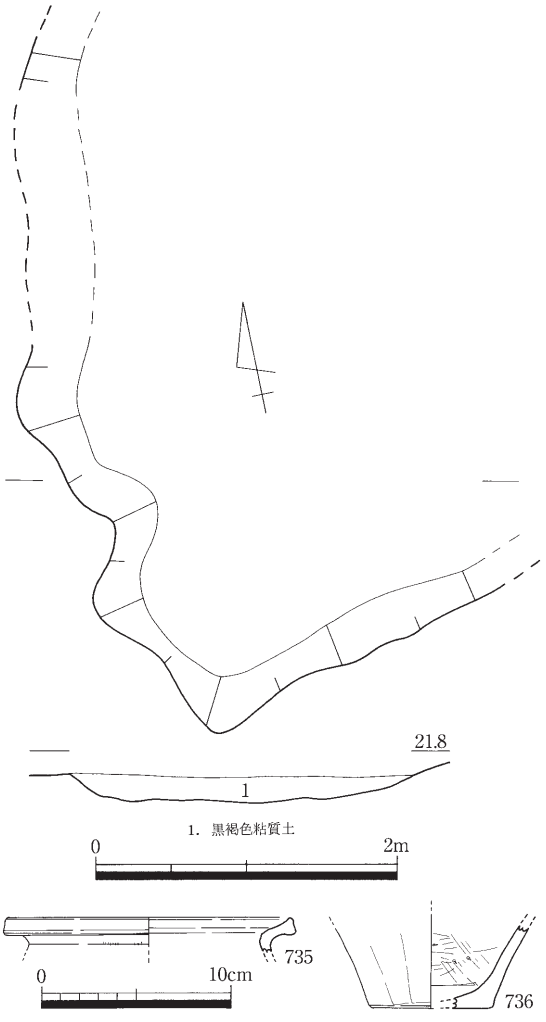
721～734は土器溜まり状以外の出土遺物である。721は弥生土器鉢と理解している。いびつ算盤玉形の胴部をした直口口縁の土器で平底を有する。口縁部はわずかに波を打っているようにも見え、粘土紐の接合部できれいに上部が外れてしまったものとみれば、壷の可能性がある。722～727は弥生土器甕である。725は倒卵形の胴部に強く屈曲する口縁部を有する「下川津Ｂ類」の甕である。外面のハケメ調整が顕著である。それ以外のものは球形に近い胴部に外反する口縁部を持つもので、外反の度合いなどに差異がある。722・726は屈曲気味の口縁部をしている。底部の残るものはすべて平底をしている。727は口縁端部に面を持ち擬凹線がめぐる。728・729は弥生土器高杯で、728は「下川津Ｂ類」土器である。728は屈曲して外反する口縁部を持つ杯部に大きく裾の開いた脚部が付いた形態で、杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。ヘラミガキ調整が顕著で、杯部内外面は４分割のヘラミガキ調整で仕上げている。脚部の透かし穴は上下２段である。729は屈曲部から大きく外反する口縁部を有する杯部である。内外面のヘラミガキ調整が顕著に残る。730は弥生土器甑で、尖り気味の底部の中央に１穴を開

けている。内弯しながら立ち上がる直口口縁の形態である。731・732は製塩土器である。733はサヌカイト製の打製石鏃で、凹基式である。734は両側縁に潰れ痕が認められたためサヌカイト製の楔形石器としたが、破損した打製石斧の可能性もある。これらの土器の形状から弥生時代後期前半を中心とした年代が想定できよう。

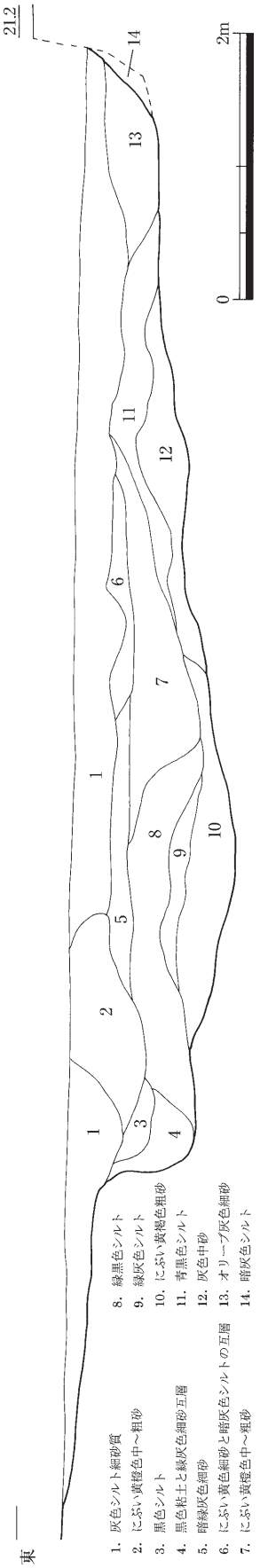
Ｊ④西SX02（第179図）

Ｊ④西区東端、第３面で検出した不定形の不明遺構である。調査区北・東壁にさえぎられて全体の形状は判明していない。断面形状は浅い皿形を呈し、底面は平坦になっており、深さ0.2ｍを測る。埋土は黒褐色粘質土の単層である。

埋土中から735・736の弥生土器甕が出土している。735は強く屈曲する口縁部で端部は上下に拡張気味である。「下川津Ｂ類」土器である。736は平底の甕底部である。形状から、弥生時代後期の年代が想定できる。



第179図　J④西SX02平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)



第180図　J③SR01断面図(1/50)

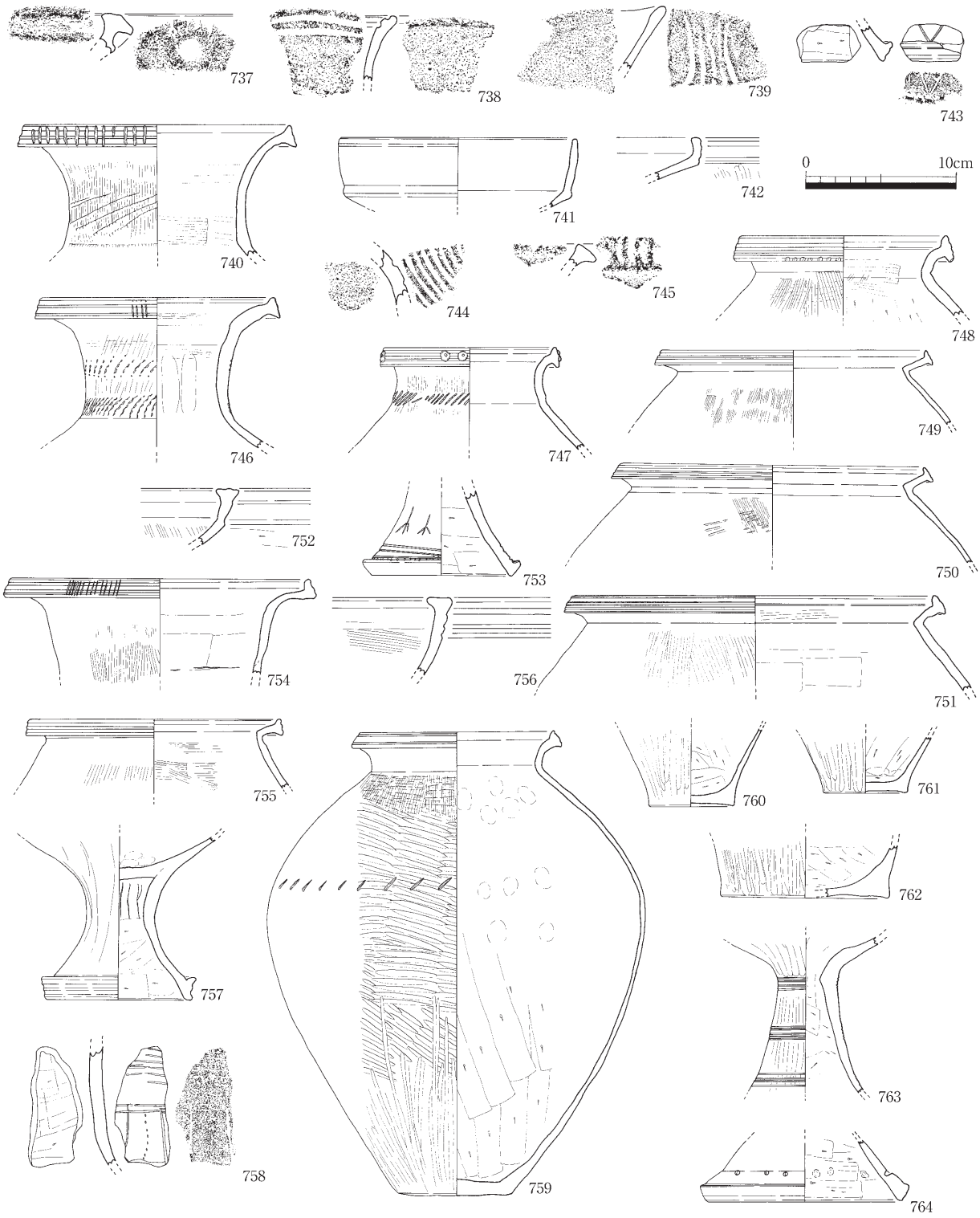
Ｊ③SR01（第180・181図）

Ｊ③区東南隅、第２面で検出した自然河川である。検出長9.0m、幅5.0m、深さ1.2mの規模を測り、北東から南西方向に流下している。東方はＪ④西SR02に連続し、南方は高松東道路調査Ｄ区SR01に連続するものである。土層観察からは砂層と粘土層の堆積の繰り返しが見て取れることから、幾度かの流水と滞水を繰り返しながら埋没していったことが想定される。調査は概ね上中下に三分して遺物を取り上げているので、それに従って報告するが、縄文土器が上層からも下層からも出土していることなどから水流による遺物の攪拌が想定され、遺物の時期差を反映したものとはなっていない。

737～743は下層として取り上げた遺物である。737～739は縄文土器深鉢である。737は分厚い端部を持つ水平口縁の縁帯文土器で、永井Ⅰ式に相当する。738は口縁部内面に沈線２条をめぐらせた水平口縁の縁帯文土器で、永井Ⅱ（～Ⅳ）式に相当する。739は波状口縁を持つ縁帯文土器で外面に縦方向の沈線文がみられる。永井Ⅰ～Ⅱ式相当であろう。これらの深鉢は縄文時代後期前半に位置づけられる。740は弥生土器壷である。大きく外反する口頸部で、口縁端部は上下に拡張して凹線２条をめぐらした後に刻み目を施している。頸部外面には調整時の工具痕が明瞭に残る。741～743は弥生土器高杯である。741は屈曲してほぼ直立する口縁部を持ち、端部下の外面に凹線１条をめぐらす。屈曲部外面も凹線状を呈する。742も屈曲してほぼ直立する口縁部を持つが口縁部は短い。口縁部外面に凹線２条をめぐらす。743は脚部で、端部を拡張して擬凹線２条をめぐらす。外面にヘラ描きの山形文と刺突文を施している。これらの弥生土器は弥生時代中期末～後期前半に位置づけられるものである。

744～753は中層として取り上げた遺物である。744・745は縄文土器深鉢である。744は胴部上半で外面に太い沈線文を持つ。永井Ⅰ～Ⅱ式に相当する。745は水平口縁の縁帯文土器で刻み目状の沈線文を施した、永井Ⅰ式に相当するものである。どちらも縄文時代後期前半に位置づけられる。746・747は弥生土器壷でどちらも「下川津Ｂ類」土器である。746は大きく外反する口頸部で口縁端部を上下に拡張して凹線３条をめぐらせた後に４条１単位の刻み目を施している。頸部外面には調整に用いた工具（ハケ原体）による刺突文が２段に施されている。747は直立気味の頸部から外反する口縁部を有し口縁端部は上下に拡張して凹線を３条施した後に２個１組の円形浮文を貼り付けている。頸部には工具（ハケ原体）による刺突文がめぐらされている。748～751は弥生土器甕である。748は屈曲気味に外反する口縁部で端部は上下に拡張して擬凹線３条がめぐる。口縁端部下端には刻み目を施している。749～751は強く屈曲する口縁部で端部は上下に拡張し擬凹線をめぐらせるものである。口径や擬凹線の数は異なるものの、ハケメ調整を用いるなど共通点が多い。752・753は弥生土器高杯である。752は弱い屈曲を持つもので短い口縁部を持つ。口縁端部は拡張して擬凹線２条がめぐる。弥生時代中期末頃に位置づけられよう。753は裾部が外方へ直線的に開く脚部である。端部を上方へ摘み出している。ヘラ描き沈線３条と刺突文を施す。外面の中ほどにはヘラ描きで鳥の足のような文様を描いている。これらの弥生土器も弥生時代中期末～後期前半の年代が想定される。

754～764は上層として取り上げた遺物である。754は弥生土器壷である。外傾気味の頸部から大きく開く口縁部を持ち、端部は上方に拡張して凹線２条をめぐらせた後に刻み目を施している。755・759～762は弥生土器甕である。755は強く屈曲する口縁部で端部を上下に拡張して凹線２条をめぐらせる。759は倒卵形の胴部から外反する口縁部を持つもので、端部は上下に拡張して凹線２条をめぐらす。外面はタタキ調整ののちに上半はハケ調整で、下半はヘラミガキ調整で仕上げている。底部は平底である。760～762は平底の甕底部である。756は弥生土器鉢である。内弯気味に立ち上がる口縁部の端部を拡張



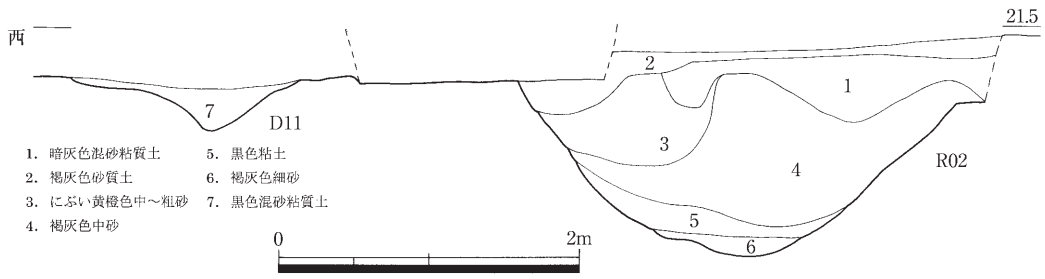
第181図　J③SR01出土遺物(1/4)

して面を持つ。外面に凹線3条をめぐらせている。高杯の可能性もある。757・758・763・764は弥生土器高杯である。757は大きく外反する脚部で端面を拡張して凹線2条をめぐらす。杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。758は脚部で外面にヘラ描き文を施している。763は細長い脚部で外面に複数のヘラ描き沈線を描いている。764は裾が開く脚部で端部は肥厚する。穿孔途中のような未貫通の透かし穴が遺存するが、刺突文であろうか。これらも弥生時代中期末～後期前半に属するものである。

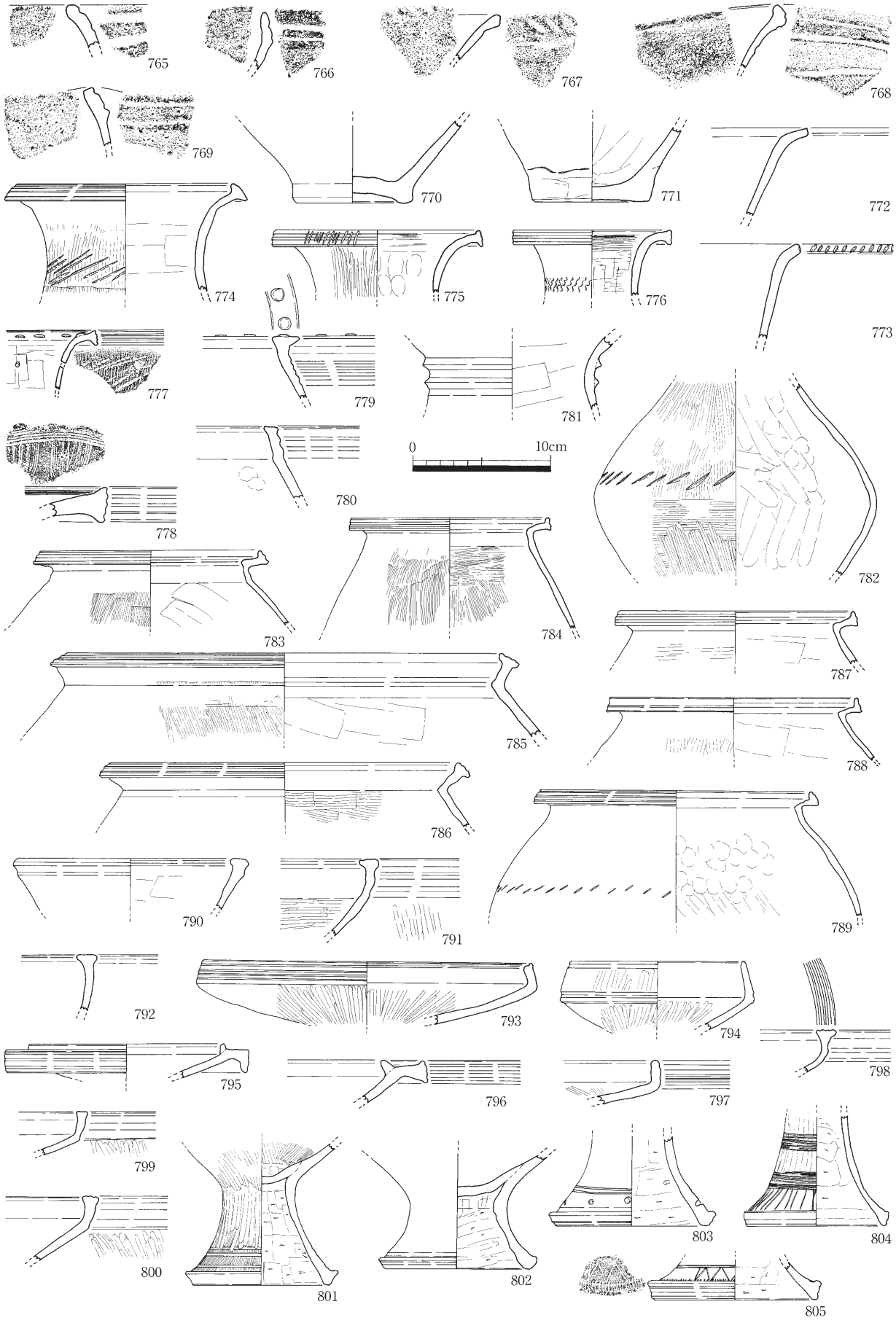
Ｊ④西SR02（第182～184図）

Ｊ④西区の西半、第３面で検出した自然河川である。検出長12.0m、幅3.9m、深さ1.4mの規模を測り、北東から南西に流下する。Ｊ③SR01とは連続する一連の自然河川である。断面観察からは、滞水・流水を繰り返して埋没した状況が復元できる。掘り上げた後で断面図の最下層の下位に約0.2mの厚さで堆積していた青灰色中～粗砂層からも遺物が出土したため、河川はもう一回り大きいものであることを確認したがデータは取れていない。

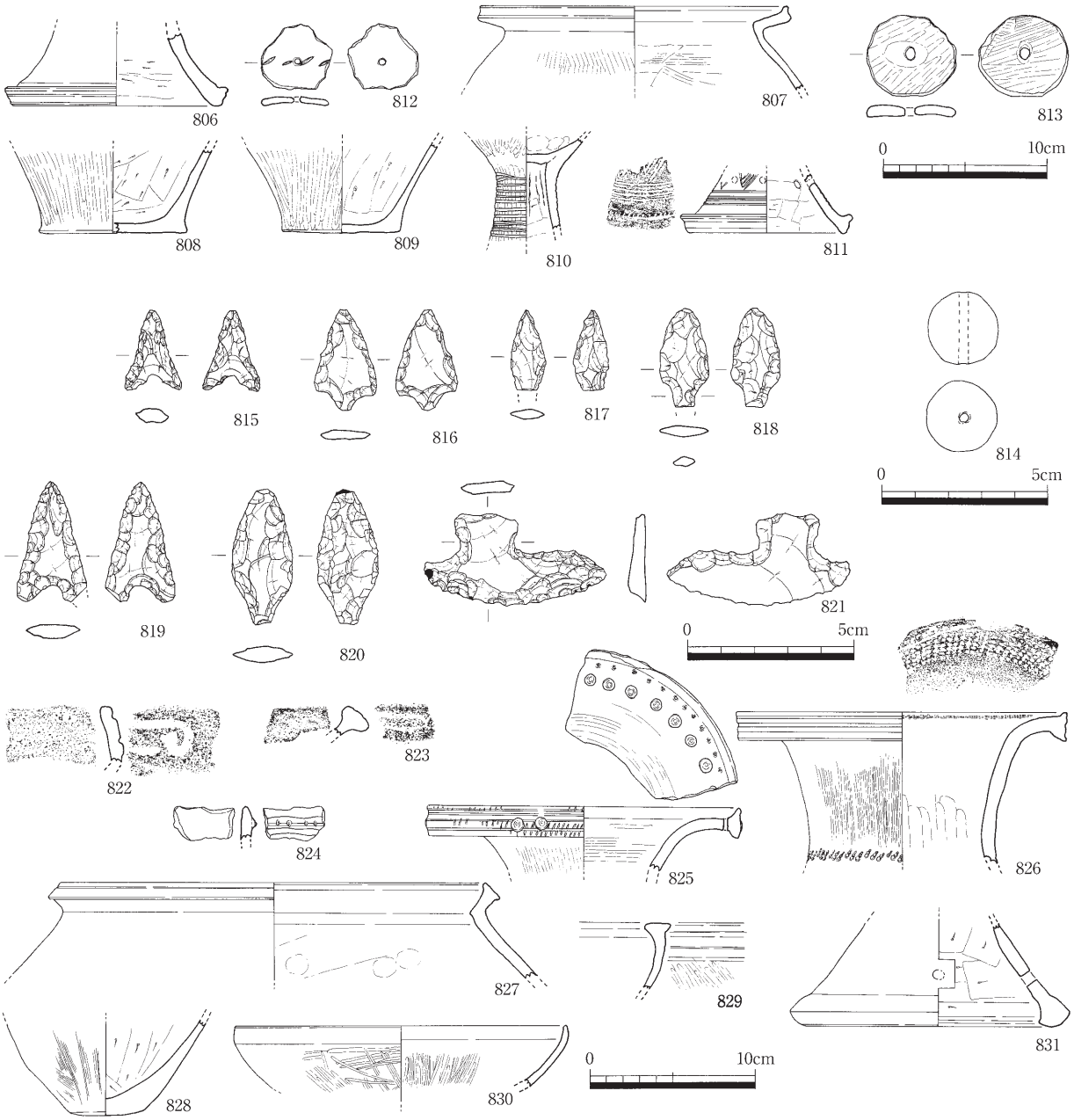
765～821は断面図に掲載した埋土中から出土した遺物である。765～769は縄文土器である。765は浅鉢で沈線２条をもつ。766は山形口縁の深鉢、767は口縁端部に刻み目状の沈線を持つ深鉢である。768は山形口縁の深鉢で沈線文を施す。縄文が残る。769は低い山形口縁の浅鉢である。これらはいずれも永井Ⅰ式に相当するもので、縄文時代後期前半に位置づけられる。770～773は弥生土器甕である。770・771は胎土中に粗い砂粒を多く含む甕底部である。772・773は如意状口縁で、773は端部に刻み目を施す。これらは弥生時代前期に属するものである。774～782は弥生土器壷である。774～778は大きく外反する口頸部を持つもので、口縁端部を拡張し凹線をめぐらせている。774・776・777は頸部に調整の工具（ハケ原体）による刺突文を施す。778は口縁部内面に５条１単位の櫛描き文を施す。779・780は内傾する口頸部を持ち外面に凹線をめぐらした無頸壷である。779は口縁端部を拡張して円形浮文を貼り付けている。781は頸部に２条の貼付突帯を持つ。782は算盤玉形の胴部を持つ壷で、中位に刺突文をめぐらせている。783～789・807～809は弥生土器甕である。783～789はいずれも胴部から屈曲させた口縁部を持ち、端部を拡張して凹線文をめぐらせている。789は肩部に刺突文を施している。808・809は平底の甕底部である。790～792は弥生土器鉢である。内弯しながら立ち上がり口縁部を拡張している。790・791は凹線をめぐらせる。793～806・810・811は弥生土器高杯である。杯部には、屈曲して内傾気味に立ち上がる短い口縁部を持つもの（793・794・797）、外方へ屈曲し端部を拡張させ、屈曲部内面に突帯状の立ち上がりを持つもの（795・796）、屈曲して内弯気味に立ち上がり口縁端部を拡張させたもの（798～800）などのバリエーションがみられる。一方脚部は、緩やかに外反しながら拡がる裾部を持つもの（801・803～806）、大きく外反する裾部を持つもの（802）などがある。端部を拡張して凹線を施したものが多い。杯部と脚部の接合は円盤充填を用いたもの（801・802・810）がみられる。ヘラ描き沈線も多用されている。805はヘラ描き沈線の下に山形文を描いている。812・813は弥生土器甕の胴部破片を再利用した有孔土製円盤で、紡錘車の紡輪として用いられたのであろう。814は中央に穿孔をした土玉である。815～820はサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式（815・819）と凸基式（816～818・820）がある。821はサヌカイト製の打製石匙である。縄文土器・弥生時代前期の物を除いたその大半は弥生時代中期後半～後期前半の年代が想定できる。



第182図　J④西SR02断面図(1/50)



第183図　J④西SR02出土遺物①(1/4)

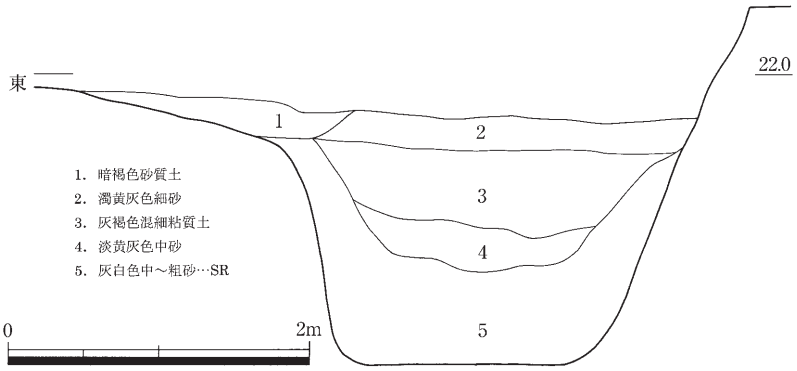


第184図　J④西SR02出土遺物②(1/2、1/4)

822～831は断面図最下層下の青灰色中～粗砂層から出土した遺物である。822～824は縄文土器である。822・823は深鉢で沈線文を施している。永井Ⅰ式に相当し縄文時代後期前半に位置づけられる。824は凸帯文土器深鉢で口縁部外面に刻み目突帯を1条めぐらした、縄文時代晩期後半のものである。825・826は弥生土器壷である。大きく外反する口頸部で口縁端部は上下に拡張して凹線をめぐらす。825は端部に凹線をめぐらした後に刻み目と2個1組の円形浮文を貼り付ける。さらに口縁部内面には円形浮文と貫通する刺突をめぐらせる。826は口縁部内面と頸部に櫛状の工具による刺突文をめぐらせている。827・828は弥生土器甕である。827は強く屈曲する口縁部で端部を上下に拡張し擬凹線をめぐらす。828は丸みを帯びた平底である。829・830は弥生土器鉢である。829は口縁端部を拡張し、外面に凹線3条をめぐらす。830は端部を丸く収めている。831は弥生土器高杯の脚部である。端部を分厚く肥厚させている。これらは弥生時代中期後半～末に位置づけられるものである。

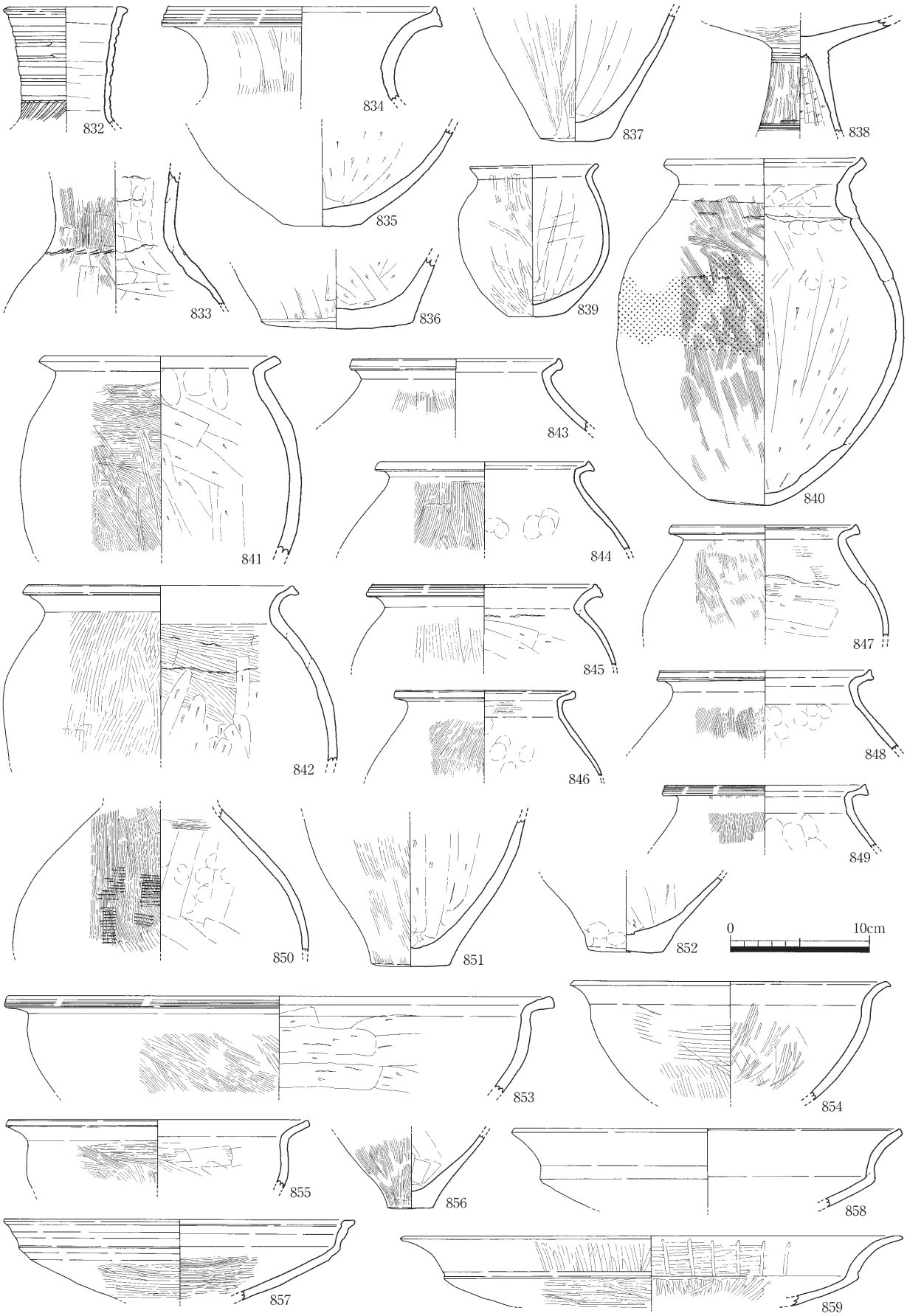
Ｊ④東SR01（第185～187図）

Ｊ④東区の西端、第３面で検出した自然河川である。検出長4.3m、検出幅6.6m、深さ1.7mの規模を測り、北から南へ流下する。調査区西壁にかかっているが、幅７ｍ前後の自然河川と推測できる。南方で高松東調査Ｄ区SR02と連続するものである。断面形状は逆台形を呈しており、土層断面観察からは最下層の灰白色中～粗砂層とその上位の堆積層の上下に二分することができる。上層からの遺物の出土はほとんどなく、下層の砂層から多量の遺物が出土した。高松東道路調査Ｄ区SR02も上下に二分され、上層は中世以降の自然河川、下層は弥生時代の自然河川と理解されている。この遺構と対応させると上層は中世以降のものに相当することになるが、遺物がないため結論は保留せざるを得ない。なお、この埋没河川は現在も地下水の通水がみられ、調査は困難を極めた。

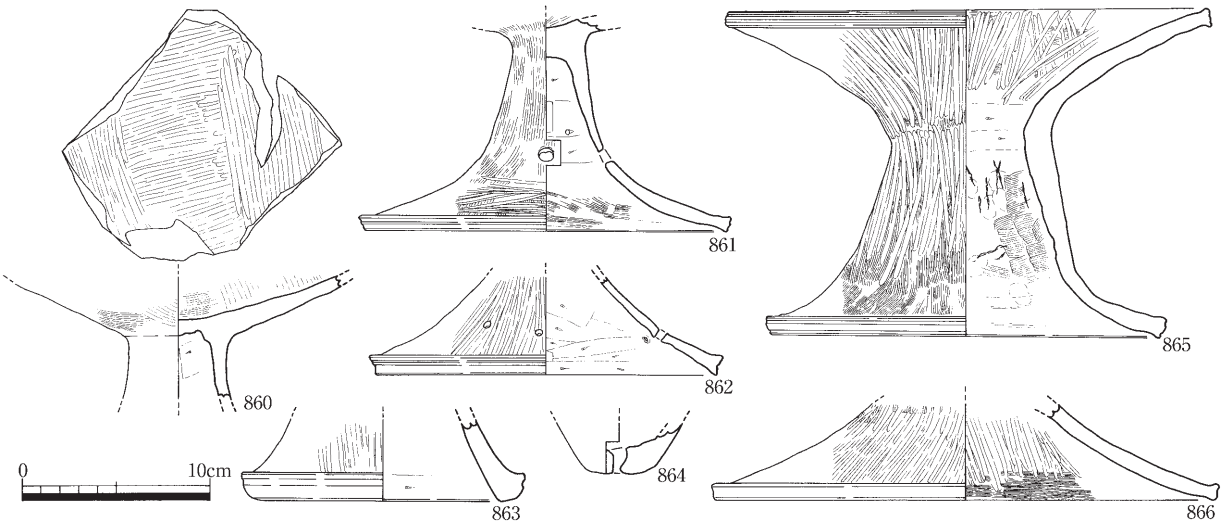


第185図　Ｊ④東SR01断面図(1/50)

832～866は下層の中～粗砂層から出土した遺物である。832～836は弥生土器壷である。832はわずかに外方に開き気味の長い口頸部を持ち端部は面を持つ。外面に凹線４条をめぐらす。833は縦長の胴部からわずかに外に開き気味の長い頸部が付くものである。頸胴境には刺突文をめぐらす。834は大きく外反する口頸部で端部は拡張して凹線をめぐらす。835・836は平底の壷底部である。837・839～852は弥生土器甕である。839～842は縦長の胴部から外反する口縁部を持つものである。839・840は平底を有する。841は屈曲気味に外反している。840・841は胴部外面にスス・炭化物が付着しており実際に使用したことがわかる。842は口縁端部を肥厚させている。843～849は屈曲して開く口縁部を持つ甕で、口縁端部は拡張するもの（845）や肥厚するもの（843・844・846～849）がみられる。845は凹線２条、849は擬凹線３条をめぐらせている。844・846・848はいわゆる「下川津Ｂ類」土器である。850は倒卵形をした胴部上半で、タタキ調整ののちにハケメ調整で仕上げている。851・852は平底を持つ甕底部である。853～856は弥生土器鉢である。内弯して立ち上がる胴部に外反する口縁部が付くもので、外反の度合いには違いがみられる。853は口縁端部を肥厚させて擬凹線２条をめぐらす。854・855は外反度が弱めである。856は平底の鉢底部としたが、甕の可能性もあろうか。857～863は弥生土器高杯である。857は屈曲して上方に開き気味の短い口縁部を持つ杯部である。口縁端部は拡張し、外面には凹線３条をめぐらす。杯部内面は４分割のヘラミガキ調整である。858・859は屈曲して外反する口縁部を持つが、口縁部は短めである。860は円盤充填を用いて接合をしている。杯部内面は４分割のヘラミガキ調整をした「下川津Ｂ類」土器である。861・862は中位で屈曲気味に大きく開く裾部を持った脚部である。端部は面を持ち凹線をめぐらせている。863は接合部から外反気味に開く脚部で、端部に面を持ち凹線１条をめぐらす。861・863は「下川津Ｂ類」土器である。864は弥生土器甑である。小さな平底の底部中央に1穴を穿っている。865・866は弥生土器器台である。865は大きく開く上半部と途中から屈曲して開く下半部を持ち、端部には沈線をめぐらせている。内外面にヘラミガキ調整が顕著である。



第186図　J④東SR01出土遺物①(1/4)

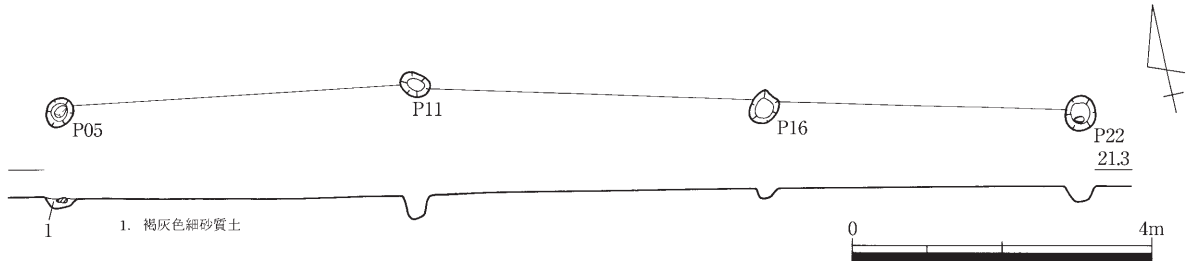


第187図　J④東SR01出土遺物②(1/4)

（2）古代の遺構・遺物

J③SA01（第188図）

J③区中央付近、第1面で検出した3間の柵列である。長さ13.5mで、N78°Wの方向を有している。柱穴の遺存状況は浅く、後世の削平を受けたことは明白であり、掘立柱建物跡の一辺であった可能性もある。SP05から9～10世紀頃に比定できる土器片が出土しており、当該期に属すると判断した。

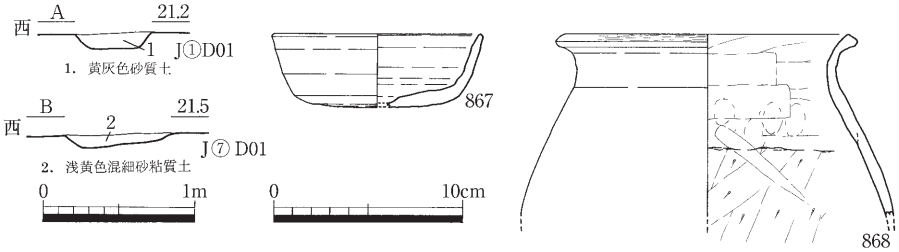


第188図　J③SA01平･断面図(1/100)

J①SD01・J⑦SD01（第189図）

J①区中央、J⑦区中央の第1面で検出した検出長23.5m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。J⑦区ではベース層が砂層であり調査時の雨によって肩が崩れて幅が広くなってしまったが、本来はJ①区で検出した規模が近い。南方への延長上にJ③区でも小溝が存在しており、南方へ続いていた可能性がある。断面形状は逆台形を呈し、N13°Eの方向を有する。

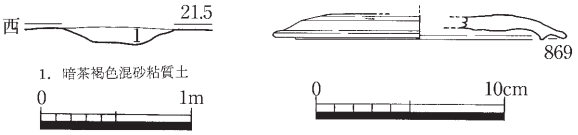
埋土から867・868が出土している。867は須恵器杯である。868は弥生土器甕で、器壁表面に鉄分が多量に付着している。周辺からの混入品であろう。867の形状から8世紀頃の年代が想定できる。



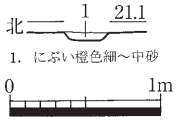
第189図　J①SD01･J⑦SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｊ②SD03（第190図）

Ｊ②区東半、第１面で検出した検出長5.1ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.1ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、Ｎ４°Ｅの方向を有する。南端でほぼ直交するＪ②SD01と連続している。また東側に存在する、ほぼ同規模で同じ方向を持つＪ②SD02も南端でＪ②SD01に接続しており、同時期に機能していたと判断できる。869は須恵器杯蓋である。内面のかえりは端部より突出しており、７～８世紀に属するものである。



第190図　J②SD03断面図(1/50)、出土遺物(1/4)



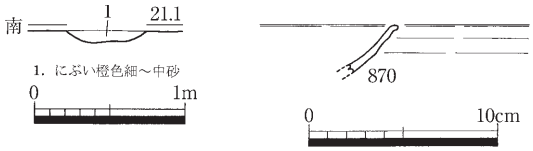
.第191図　J③SD09
断面図(1/50)

Ｊ③SD09（第191図）

Ｊ③区西半、第１面で検出した検出長2.9ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.1ｍの規模を持つ直線的な溝である。断面形状は浅い皿形を呈し、Ｎ65°Ｗの方向を有する。埋土は細～中砂層で、９～10世紀頃に比定できる土器小片がわずかに出土している。

Ｊ③SD10（第192図）

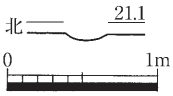
Ｊ③区中央付近、第１面で検出した検出長9.8ｍ、幅0.6ｍ、深さ0.1ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、Ｎ75°Ｗの方向を有する。埋土はＪ③SD09と同様の細～中砂層であり、洪水等で一気に埋められた可能性が考えられる。埋土中から870の緑釉陶器皿が出土している。９～10世紀に比定できるものである。



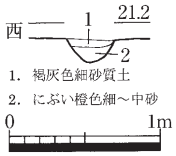
第192図　J③SD10断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｊ③SD11（第193図）

Ｊ③区中央付近、第１面で検出した検出長2.0ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.1ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、Ｎ80°Ｗの方向を有する。埋土中から８世紀代に想定される土器片がわずかに出土した。



第193図　J③SD11
断面図(1/50)



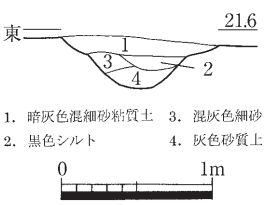
第194図　J③SD14
断面図(1/50)

Ｊ③SD14（第194図）

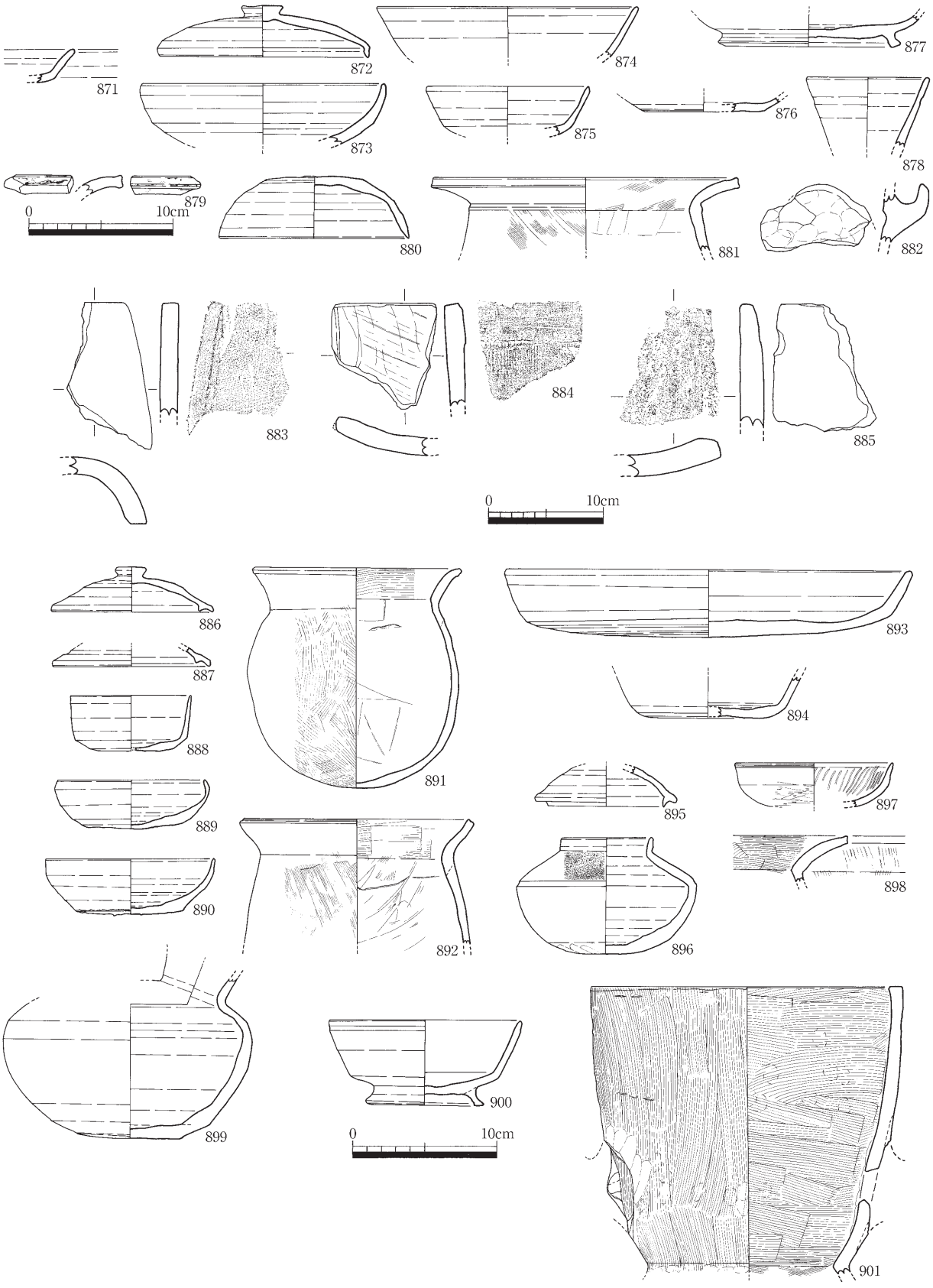
Ｊ③区南東隅付近、第１面で検出した検出長6.1ｍ、幅0.5ｍ、深さ0.2ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状はＵ字形を呈し、Ｎ4°Ｅの方向を有する。埋土中から10世紀に比定できる土器片が出土した。

Ｊ④西SD09（第195・196図）

Ｊ④西区の西半、第３面で検出した検出長11.3ｍ、幅1.2ｍ、深さ0.4ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。南西部は幅が約4.4ｍと広がっており、その部分に小規模な円形の土坑状を呈する深みが存在している。



第195図　J④西SD09断面図(1/50)



第196図　J④西SD09出土遺物(1/4、1/5)

断面形状は逆三角形を呈しN54°Eの方向を有するが、これは当該期には窪地状となった埋没自然河川の方向と同じであり、その影響を受けたものと判断できる。

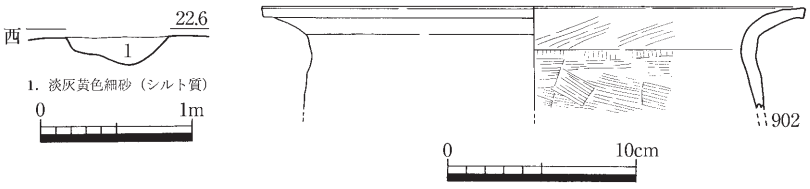
埋土中から871～901の遺物が出土しているが、このうち886～894は小規模な円形の土坑状を呈する深みの上面部分から、895～901はその内部から出土している。

871は須恵器皿である。872は須恵器蓋で、口縁端部を折り曲げてかえりを作っている。扁平な摘みが付く。873～876は須恵器杯である。内弯して立ち上がるもの（873）と直線的に立ち上がるもの（874・875）がみられる。873・874は焼成が甘く瓦質に近い。876の底部外面は回転ヘラ切りである。877は須恵器椀の底部である。878は須恵器壷で、直線的に外に開く口縁部を持つ。平瓶の口縁部の可能性がある。879は土師器皿で、内外面に赤彩の痕跡が残る。880は7世紀代の須恵器杯蓋として図化したが、杯身かもしれない。881は土師器甕で、ハケ調整が顕著である。882は土師器甕の把手と思われるが、甑の把手の可能性もある。883は丸瓦、884・885は平瓦である。8世紀代に属するものと想定できる。

886・887は須恵器蓋である。886は扁平な摘みが付く。888～890は須恵器杯である。直線的に立ち上がる口縁部（888）や内弯気味に立ち上がる口縁部（889・890）などがみられる。891・892は土師器甕である。891は球形に近い胴部に外反する口縁部を持つ。892はやや長胴で口縁は内弯気味である。893は須恵器盤である。894須恵器杯の底部である。895は須恵器蓋で内面のかえりは外方へ突出している。896は須恵器短頸壷で、外部上面に重ね焼きの痕跡（おそらく蓋だろう）とヘラ記号が認められる。897は土師器杯で内面に暗文がみられる。外面下半は手持ちのヘラケズリ調整であろう。898は土師器甕の口縁部である。899は須恵器平瓶で、扁球形の胴部に小さな平底を持つ。900は須恵器椀、901は内外面のハケ調整が顕著な土師器甑である。これら土坑状の深みから出土した遺物の年代は7世紀を中心とした年代が想定される。

J⑤SD05（第197図）

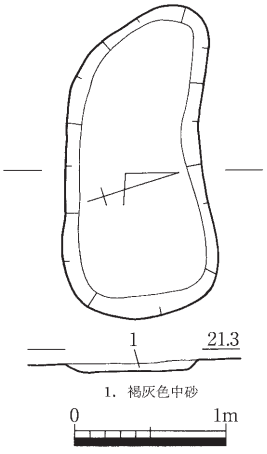
J⑤区中央、第1面で検出した検出長3.7m、幅1.2m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N5°Wの方向を有する。埋土中から902が出土した。902は土師器甕で8世紀代の年代が想定できよう。



第197図　J⑤SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

J⑦SK01（第198図）

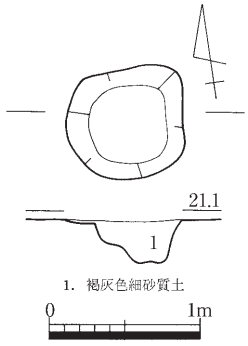
J⑦区北西隅付近、第1面で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。2.1m×0.9m、深さ0.1mの規模を測り、断面形状は浅い皿形を呈している。底面は平坦であるが棺痕跡等は確認できなかったことから墓ではないと判断する。埋土中から9～10世紀に属するとみられる土器小片が出土している。



第198図　J⑦SK01平・断面図(1/50)

Ｊ③SK06（第199図）

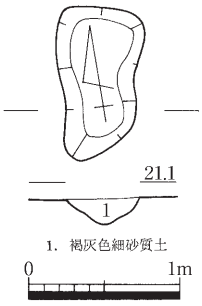
Ｊ③区中央付近、第１面で検出した隅丸方形を呈する土坑である。75㎝×75㎝、深さ27㎝の規模を測り、断面形状は段をもった逆台形状を呈している。図示できなかったが９～10世紀に属するとみられる土器小片がわずかに出土した。



第199図　Ｊ③SK06
平･断面図（1/50）

Ｊ③SK08（第200図）

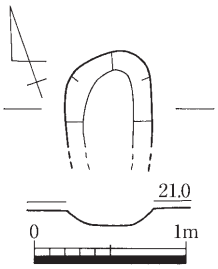
Ｊ③区中央南壁寄り、第１面で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。102㎝×52㎝、深さ16㎝の規模を測り、断面形状は浅めの椀形を呈している。埋土は褐灰色細砂質土１層で、図示できなかったが９～10世紀に属するとみられる土器小片がわずかに出土した。



第200図　Ｊ③SK08
平･断面図（1/50）

Ｊ③SK11（第201図）

Ｊ③区北東隅付近、第１面で検出した長楕円形を呈する土坑である。南端を後世の暗渠排水によって壊されている。65㎝以上×55㎝、深さ10㎝の規模を測り、断面形状は浅い皿形を呈している。10世紀代と想定される土器小片が出土した。

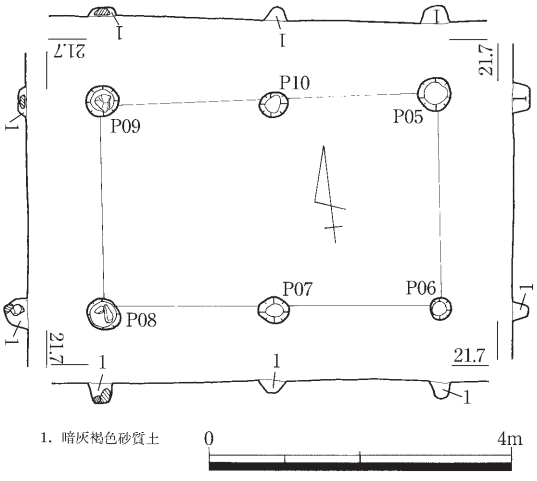


第201図　Ｊ③SK11
平･断面図（1/50）

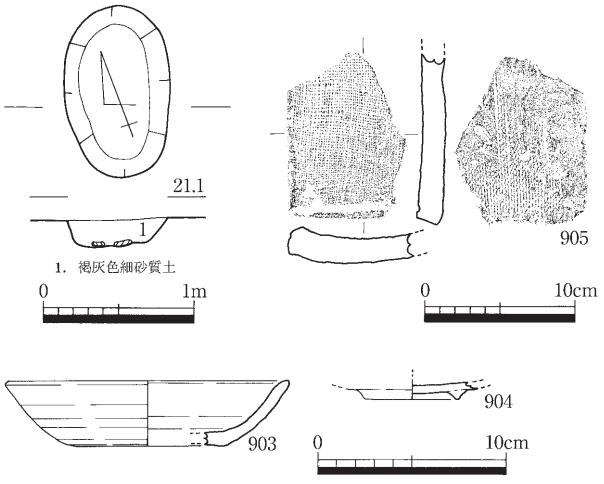
（３）中世の遺構・遺物

Ｊ②SB01（第202図）

Ｊ②区東半、第１面で確認した１間×２間の掘立柱建物跡である。2.8ｍ×4.4ｍの規模を持つ東西棟で、床面積は12.3㎡を測る。建物主軸はＮ84°Ｗの方向を有している。古代の溝Ｊ②SD02の埋没後に作られた建物である。西辺の柱穴２基には拳大の石が入れられており、礎石ないし詰め石として使用されたものであろう。SP05・07から中世土器と想定される土器破片が出土している。



第202図　Ｊ②SB01平･断面図（1/100）



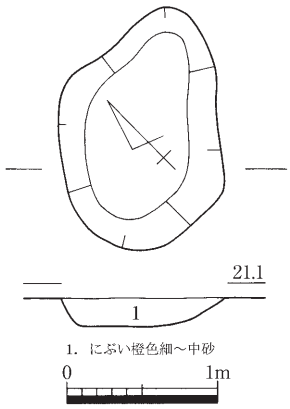
第203図　Ｊ③SK05平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4､1/5）

J③SK05（第203図）

J③区中央西寄り、第１面で検出した長楕円形を呈する土坑である。112㎝×65㎝、深さ17㎝の規模を持ち、断面形状は逆台形を呈している。埋土は褐灰色細砂質土１層で、903～905が出土している。903は土師器杯、904は瓦質土器椀である。どちらも12世紀代の年代が想定される。905は凸面に明瞭な縄目タタキの痕跡を残した平瓦である。905は混入したものであろう。

J③SK09（第204図）

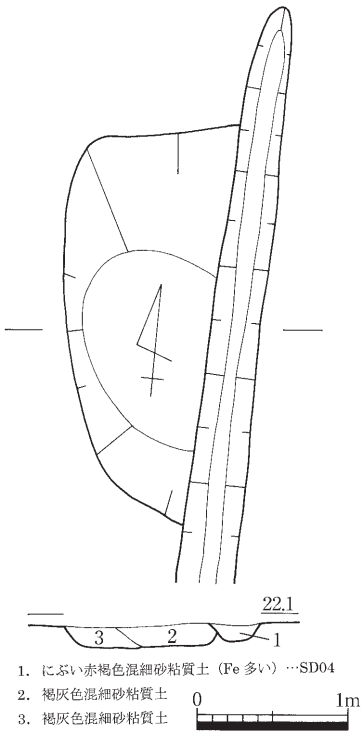
J③区中央付近、第１面で検出した不整楕円形を呈した土坑である。165㎝×110㎝、深さ19㎝の規模を測り、断面形状は逆台形状を呈している。図化できなかったが中世土器の小破片が出土している。



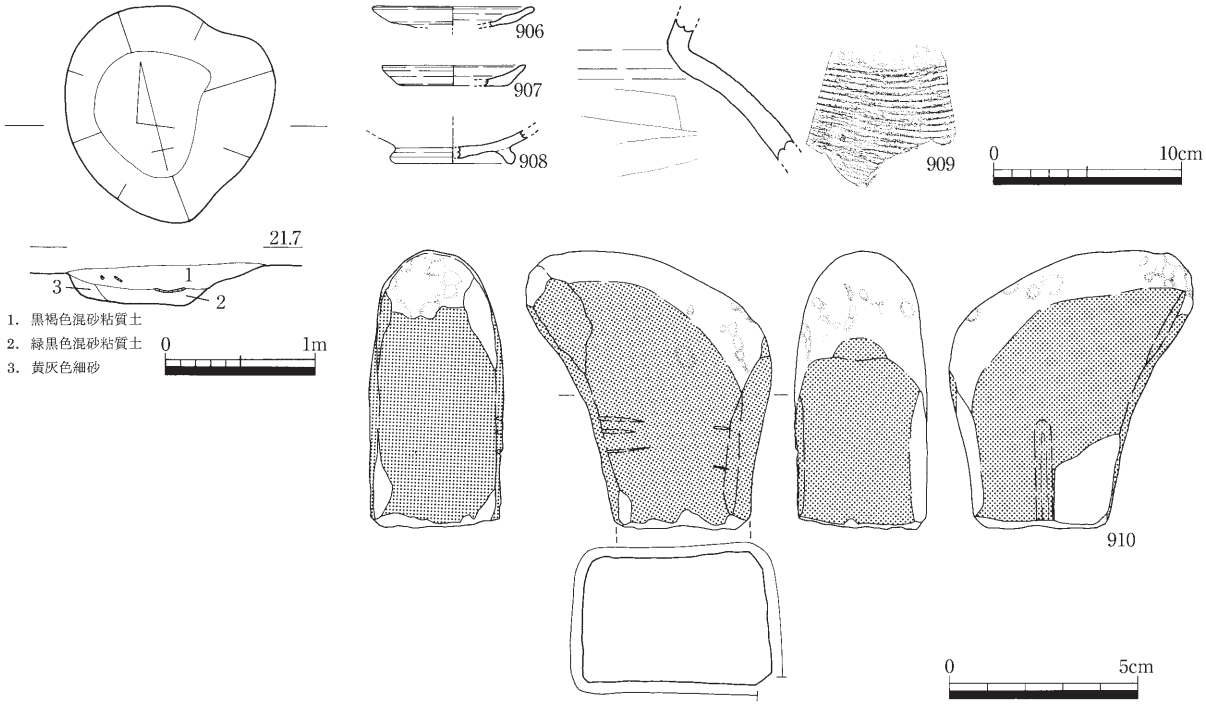
第204図　J③SK09
平･断面図(1/50)

J④西SK01（第205図）

J④西区の西半南壁寄り、第１面で検出した長方形を呈する土坑である。東辺を近世の溝によって壊されているが、2.6m×1.1m、深さ0.1mの規模を測るものである。断面形状は逆台形を呈している。埋土中から中世土器の破片がわずかに出土している。



第205図　J④西SK01
平･断面図(1/50)



第206図　J④西SK04平･断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

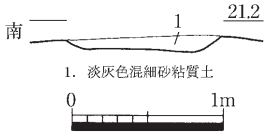
Ｊ④西SK04（第206図）

Ｊ④西区中央付近、第３面で検出した不整楕円形を呈する土坑である。1.5ｍ×1.4ｍ、深さ0.3ｍの規模を測り、断面形状は皿形を呈している。最下面で検出したが本来は第２面に属するものと思われる。埋土中から906～910が出土している。906・907は土師器小皿である。908は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。909は須恵器甕で、胴部外面に平行タタキ痕が明瞭に残る。910は砂岩製の砥石で４面を砥面として使用している。これらの遺物には古代に属する混入品もみられるが、907の形態などから13世紀に位置づけられるものであろう。

（４）近世の遺構・遺物

Ｊ④東SD01（第207図）

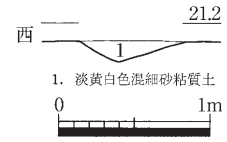
Ｊ④東区の第１面で検出した検出長7.9ｍ、幅1.0ｍ、深さ0.1ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、Ｎ74°Ｗの方向を有している。西端はＪ④東SD02の下位に位置しており、先行して作られた溝といえる。近世の陶磁器類がわずかに出土している。



第207図　J④東SD01
断面図(1/50)

Ｊ④東SD02（第208図）

Ｊ④東区の第１面で検出した検出長4.3ｍ、幅1.6ｍ、深さ0.2ｍの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆三角形を呈し、Ｎ９°Ｅの方向を有する。北端部は西方に向かってやや幅が広くなっており、屈曲していた可能性もある。Ｊ④東SD01より後出するが、ともに近世に属するものと判断できる。



第208図　J④東SD02
断面図(1/50)

（５）Ｊ区の柱穴・遺物

Ｊ①SP04（第209図）

Ｊ①区東半南壁寄り、第１面で検出した。60㎝×35㎝、深さ12㎝の長楕円形を呈する。青磁椀911が出土した。鎬蓮弁をもつ中国・竜泉窯産のものと思われ、13世紀に位置づけられよう。

Ｊ②SP29（第209図）

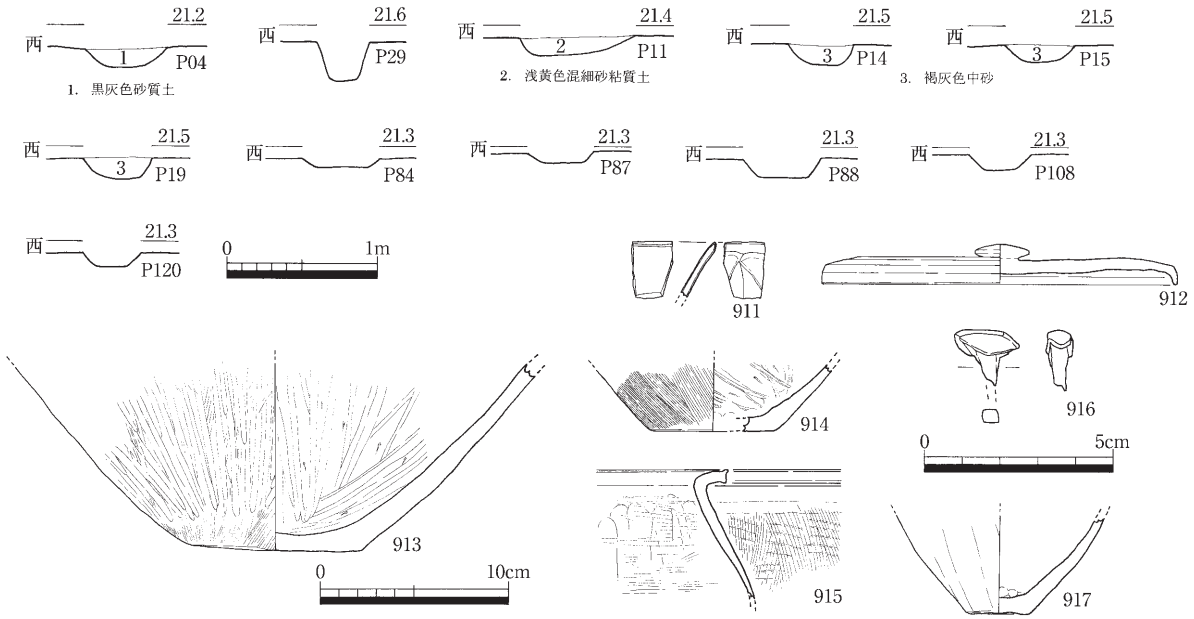
Ｊ②区中央付近、第１面で検出した。60㎝×40㎝、深さ26㎝の楕円形を呈する。912は須恵器蓋で、端部を折り返してかえりとしている。扁平な宝珠様摘みが付く。８世紀代に位置づけられる。

Ｊ⑦SP11（第209図）

Ｊ⑦区西半の北壁寄り、第１面で検出した。110㎝×80㎝、深さ12㎝の楕円形を呈する。913～915の弥生土器が出土している。913・914は平底の壷底部、915は「下川津Ｂ類」土器の甕である。弥生時代後期に属する土器である。

Ｊ⑦SP14（第209図）

Ｊ⑦区中央北壁寄り、第１面で検出した。45㎝×40㎝、深さ13㎝の楕円形を呈する。916は埋土から



第209図　J①SP04、J②SP29、J⑦SP11･14･15･19･84･87･88･108･120断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

出土した鉄製の釘である。頭部両端は折り曲げられ先端部を欠損している。

J⑦SP15（第209図）

J⑦区中央北壁寄り、第1面で検出した。45cm×40cm、深さ13cmのほぼ円形を呈する。弥生土器鉢917が出土したが、須恵器小片なども出土していることから古代に属する柱穴と想定される。

J⑦SP19（第209図）

J⑦区中央北壁寄り、第1面で検出した。50cm×40cm、深さ14cmのほぼ円形を呈している。図示しなかったが須恵器小片などがわずかに出土しており、平安時代に属するものと想定される。

J⑦SP84（第209図）

J⑦区中央付近、第2面で検出した。直径50cm、深さ6cmの円形を呈する。弥生時代後期に属する土器小片が出土している。

J⑦SP87（第209図）

J⑦区中央付近、第2面で検出した。直径40cm、深さ6cmの円形を呈する。弥生時代後期に位置づけられる土器小片がわずかに出土した。

J⑦SP88（第209図）

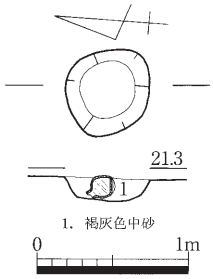
J⑦区中央北壁付近、第2面で検出した。直径50cm、深さ13cmの円形を呈する。弥生時代後期に属する土器小片が出土している。

Ｊ⑦SP108（第209図）

Ｊ⑦区中央南寄り、第２面で検出した。直径40㎝、深さ11㎝の円形を呈する。弥生時代後期と思われる土器片がわずかに出土している。

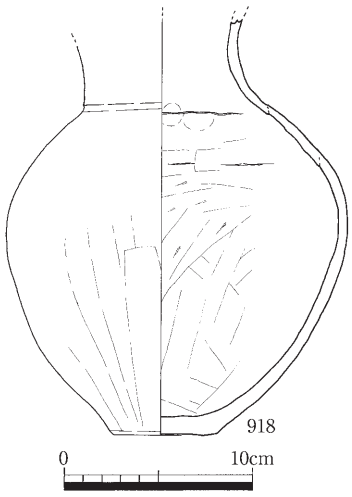
Ｊ⑦SP120（第209図）

Ｊ⑦区中央南寄り、第２面で検出した。62㎝×38㎝、深さ９㎝の楕円形を呈している。弥生時代後期に属する土器小片が出土した。



Ｊ⑦SP05（第210図）

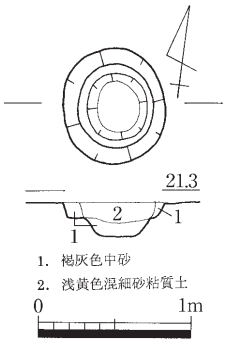
Ｊ⑦区西半の西壁寄り、第１面で検出した。60㎝×55㎝、深さ14㎝の楕円形を呈する。柱穴底面に接して弥生土器壷918が出土した。球形の胴部に外反する長い頸部が付くもので、弥生時代後期後半の年代が想定される。柱穴ではなく、土坑としたほうが適切かもしれない。



第210図　Ｊ⑦SP05平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｊ⑦SP08（第211図）

Ｊ⑦区西半の西壁寄り、第１面で検出した。80㎝×65㎝、深さ23㎝の楕円形を呈している。柱穴の断面形状は２段に掘り込まれており、内部の掘り込みは柱痕であり、柱は抜き取られたことが想定される。



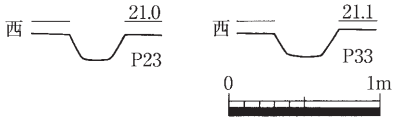
第211図　Ｊ⑦SP08
平･断面図(1/50)

Ｊ③SP23（第212図）

Ｊ③区中央南壁寄り、第１面で検出した。50㎝×35㎝、深さ17㎝の楕円形を呈する。埋土からは中世に属すると判断される土器小片が出土した。

Ｊ③SP33（第212図）

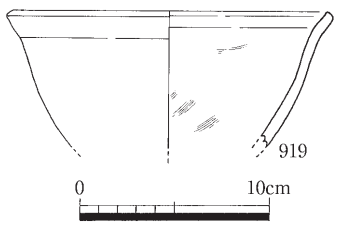
Ｊ③区東半南壁寄り、第１面で検出した。52㎝×42㎝、深さ17㎝の楕円形を呈する。埋土中から９世紀頃に比定される須恵器小片が出土している。



第212図　Ｊ③SP23･33断面図(1/50)

Ｊ③SP60（第213図）

Ｊ③区中央付近、第２面で検出した。50㎝×30㎝の楕円形を呈する柱穴である。埋土から919の弥生土器鉢が出土している。内弯気味に立ち上がる体部にわずかに外反する口縁部が付く。弥生時代後期に位置づけられるものであろう。



第213図　Ｊ③SP60出土遺物(1/4)

Ｊ④西SP16（第214図）

Ｊ④西区の東南隅付近、第１面で検出した。70㎝×50㎝、深さ21㎝の楕円形を呈する。埋土中から土師器杯920が出土している。13世紀代に位置づけることができる。

Ｊ④西SP52（第214図）

Ｊ④西区の東半、第２面で検出した。直径40㎝、深さ12㎝の円形を呈する。図化できなかったが中世土器の小片が出土している。

Ｊ④西SP54（第214図）

Ｊ④西区の東半、第２面で検出した。65㎝×55㎝、深さ43㎝の楕円形を呈する。埋土中から土師器杯921が出土した。13～14世紀代に属するものと想定される。

Ｊ④西SP63（第214図）

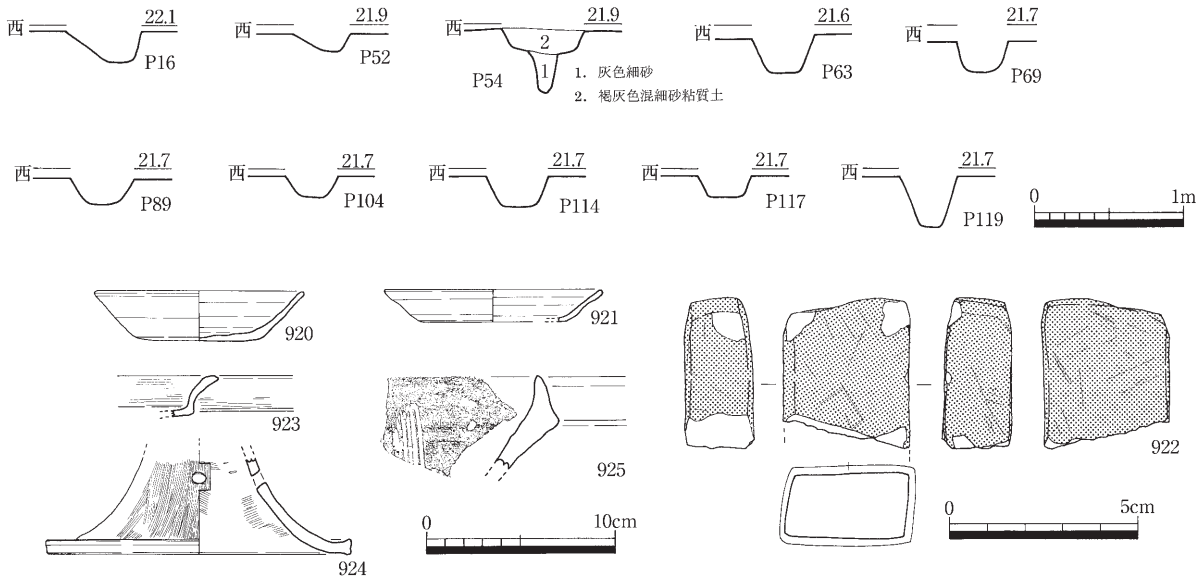
Ｊ④西区の中央南壁寄り、第３面で検出した。直径40㎝、深さ24㎝の円形を呈する。図示できなかったが15世紀代に想定される土器片が小量出土している。第２面に属する柱穴であろう。

Ｊ④西SP69（第214図）

Ｊ④西区の中央南壁寄り、第３面で検出した。直径30㎝、深さ20㎝の円形を呈する。本来は第２面に属する柱穴であろう。平安時代頃に想定される土器片とともに922が出土した。922は流紋岩製の砥石で、５面を砥面に使用した手持ちの砥石である。

Ｊ④西SP89（第214図）

Ｊ④西区の東半南壁寄り、第３面で検出した。直径45㎝、深さ17㎝の円形を呈するが、第２面に属する柱穴であろう。埋土からは中世土器の小片がわずかに出土している。



第214図　Ｊ④西SP16･52･54･63･69･89･104･114･117･119断面図(1/50)、出土遺物(1/2、1/4)

Ｊ④西SP104（第214図）

Ｊ④西区の東半南壁寄り、第３面で検出した。直径40㎝、深さ14㎝の円形を呈するが、第２面に属する柱穴であろう。埋土からは923・924の弥生土器が出土している。923は屈曲して外反する口縁を持つ高杯の杯部で、「下川津Ｂ類」土器である。924は大きく外反する高杯の脚部である。弥生時代後期に位置づけられるものである。

Ｊ④西SP114（第214図）

Ｊ④西区の東半、第３面で検出したが、本来は第２面に属する柱穴であろう。直径40㎝、深さ20㎝の円形を呈する。弥生時代後期と考えられる土器片がわずかに出土した。

Ｊ④西SP117（第214図）

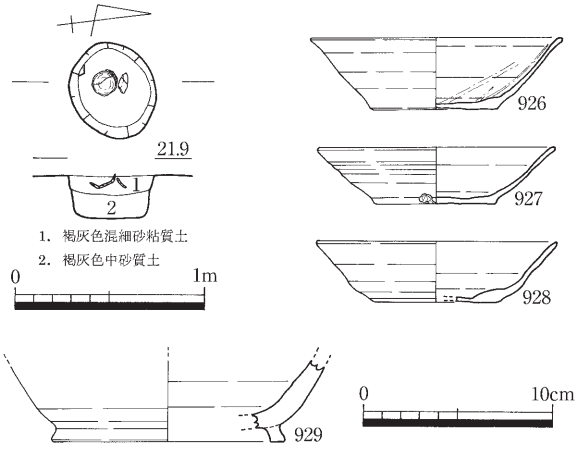
Ｊ④西区の東南隅付近、第３面で検出した。直径40㎝、深さ15㎝の円形を呈する。もともとは第２面に属するものであろう。中世土器破片が出土している。

Ｊ④西SP119（第214図）

Ｊ④西区の東壁付近、第３面で検出した、50㎝×38㎝、深さ34㎝の楕円形を呈する柱穴である。第２面に属する柱穴であろうと思われる。埋土から925の陶器すり鉢が出土した。内面に６条１単位の卸し目が残る。15世紀代に位置づけられる備前焼の製品である。

Ｊ④西SP35（第215図）

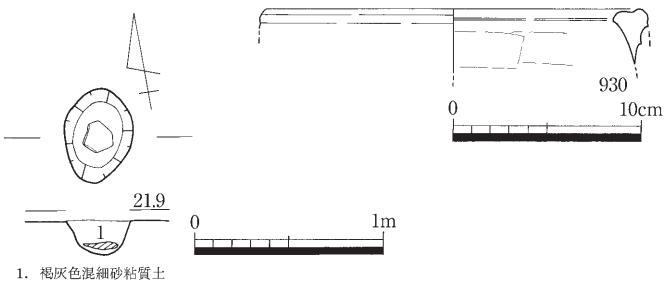
Ｊ④西区の西半南壁寄り、第２面で検出した。54㎝×45㎝、深さ22㎝の楕円形を呈する柱穴である。埋土の上位から926～929の遺物が出土している。926～928は土師器杯である。直線的に外方に伸びる口縁部を有する。926は内面に重ね焼きの痕跡がうかがえることなどから、焼成不良の須恵器の可能性がある。929は須恵器壷底部である。これらは９～10世紀代に位置づけられる資料である。



第215図　J④西SP35平･断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

Ｊ④西SP60（第216図）

Ｊ④西区の東南隅付近、第２面で検出した。50㎝×35㎝、深さ18㎝の楕円形を呈する。底面には礎石として板石を入れていた。930の土師器足釜が出土している。16世紀に位置づけられよう。

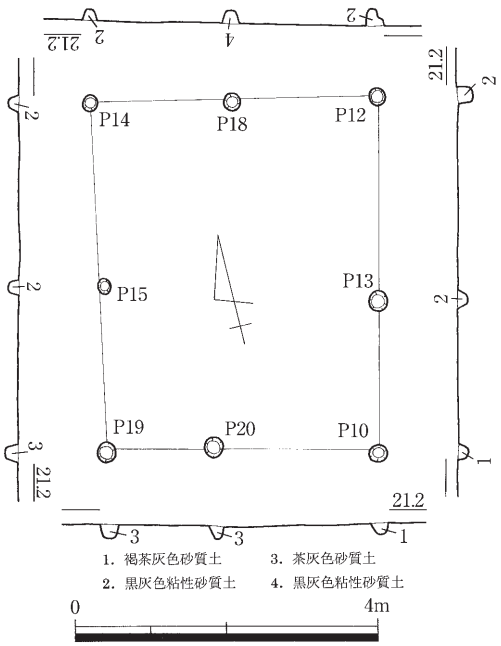


第216図　J④西SP60平･断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

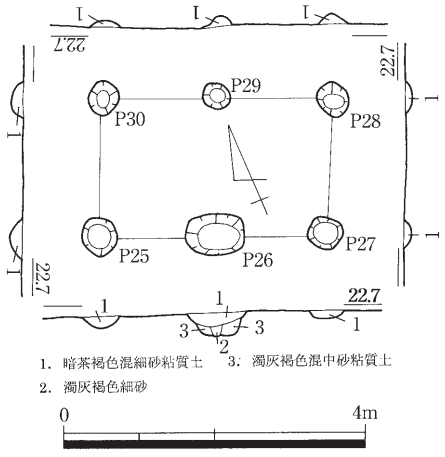
（6）時期不明の遺構

J①SB01（第217図）

J①区中央付近、第1面で確認した2間×2間の掘立柱建物跡であるが、南北の桁間の方が東西の梁間より長くなっている。3.6m×4.7mの規模を持つ南北棟で、床面積は17㎡を測る。建物主軸はN12°Eの方向を有している。柱穴からの遺物は全く出土せず、異なる遺構との重なり等もみられないために、時期を判別することはできない。



第217図　J①SB01平･断面図(1/100)



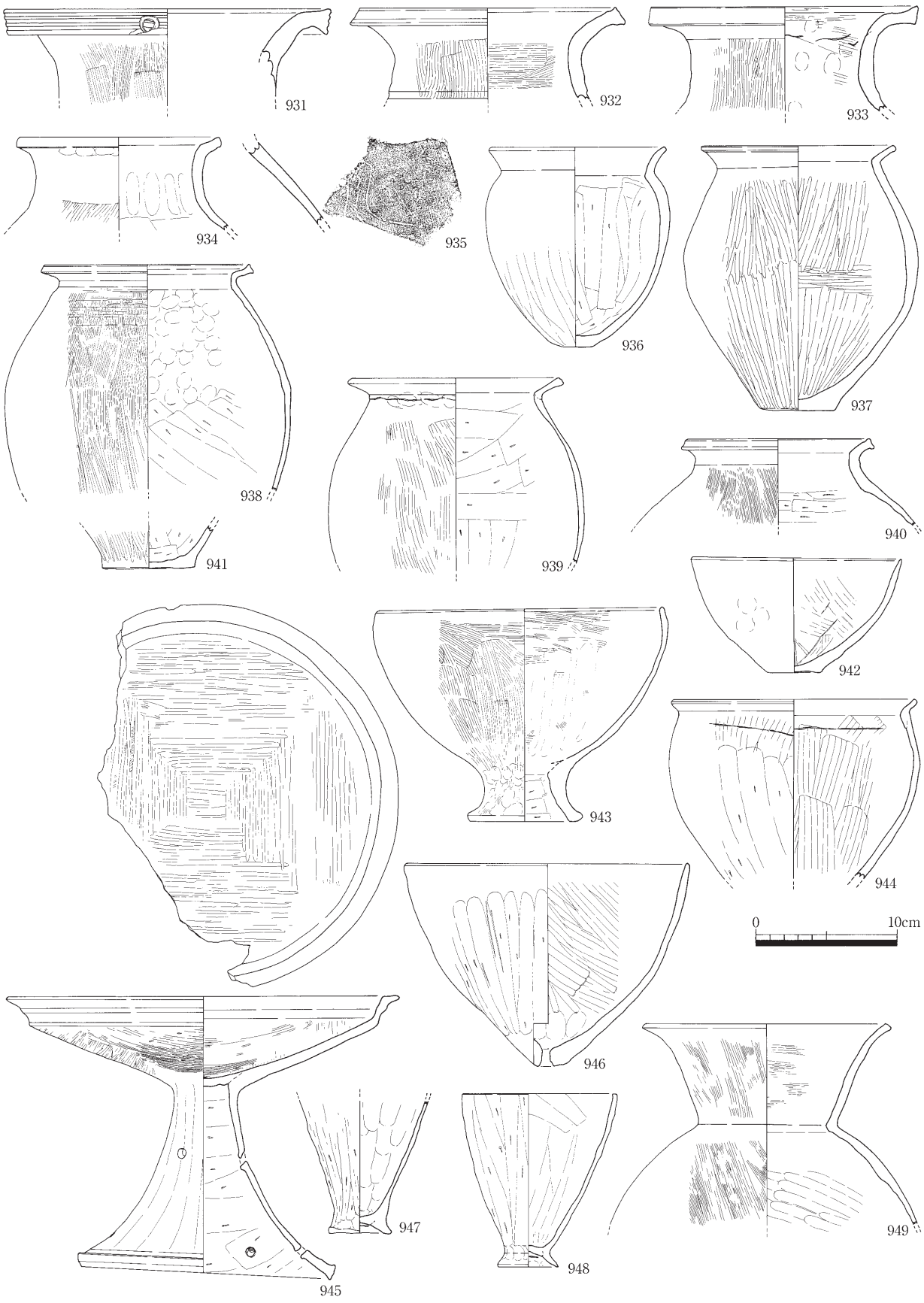
第218図　J⑤SB01平･断面図(1/100)

J⑤SB01（第218図）

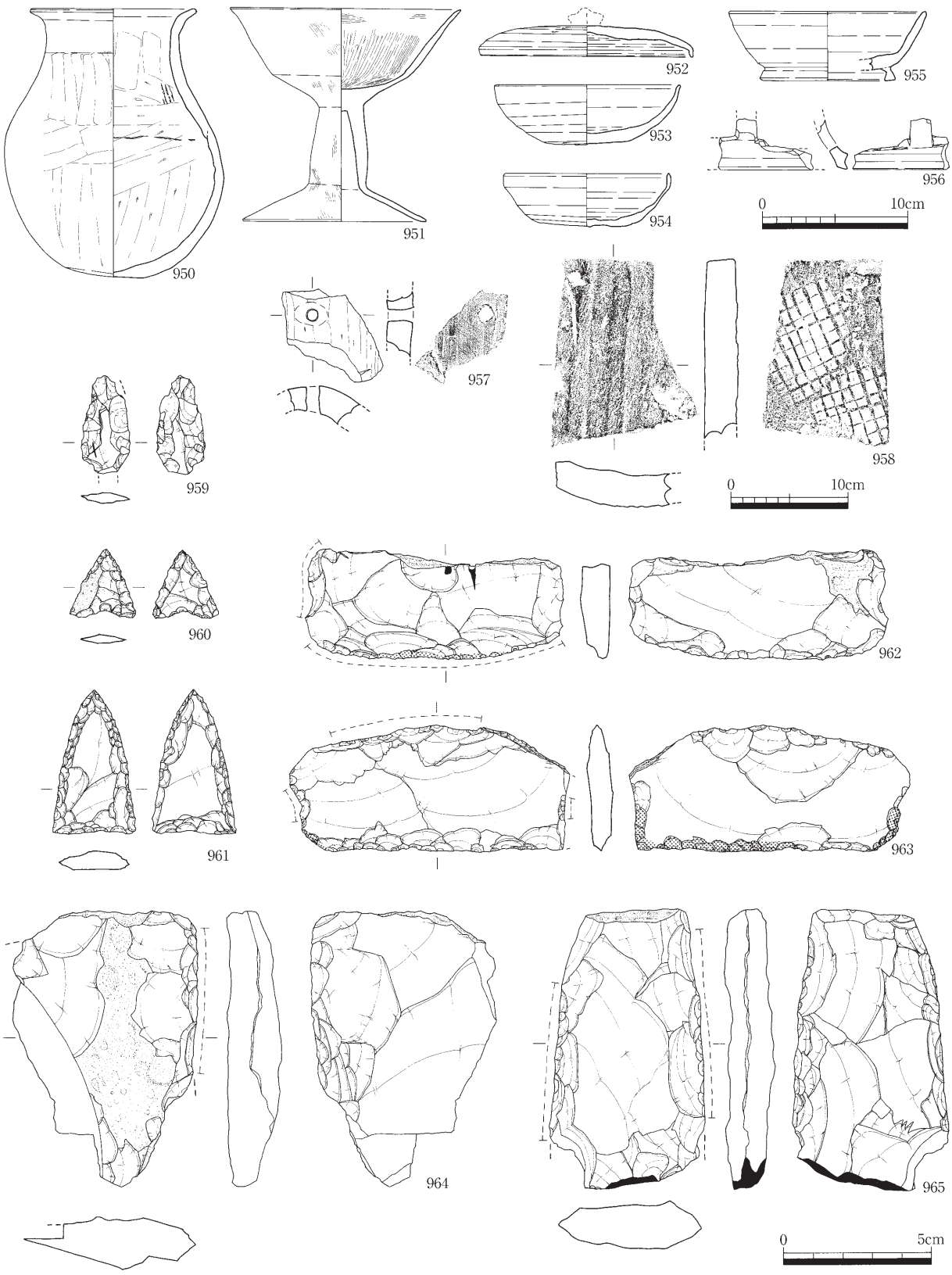
J⑤区北東隅付近、第2面で確認した1間×2間の掘立柱建物跡である。1.8m×3.1mの規模を持つ東西棟で、床面積は5.6㎡を測る。建物主軸はN68°Wの方向を有する。小規模な建物である。

（7）包含層出土遺物（第219～221図）

931～966はJ①・②・⑦区出土の遺物である。931～935は弥生土器壷である。931～934は大きく外反する口頸部を持つもので、口縁端部を拡張するもの（931）、拡張気味のもの（932・933）、拡張しないもの（934）がみられる。931は端部に凹線3条をめぐらした後に竹管文を施している。935は弥生土器壷の肩部破片であるが、内容不明のヘラ描き絵画文がみられる。936～941は弥生土器甕である。936は倒卵形の胴部に大きく外反する口縁部を持つもので、底部は丸みを帯びた小さい平底をしている。937～940は強く屈曲する口縁部を持つものであるが、屈曲の度合いや口縁端部の形態に差異がみられる。937は縦長の算盤玉状の胴部で平底をしており、内外面のヘラミガキ調整が顕著である。938は口縁端部を肥厚させた「下川津B類」土器の甕である。外面に煮炊きに使用した際のスス・炭化物が付着する。940も口縁端部を肥厚させて擬凹線1条をめぐらす。941は平底の甕底部である。942～944は弥生土器鉢である。内弯気味の直口口縁のもの（942・943）と口縁部が外方へ屈曲するもの（944）がある。943は脚台を付けているが、その接合には円盤充填を用いている。945は弥生土器高杯である。杯部は屈曲し短く外方へ開く口縁部を持ち、端部は面を持つ。脚部は大きく下方へ開くもので、拡張気味の端部は面を持つ。杯部と脚部の接合は円盤充填を用いている。「下川津B類」土器である。946は弥生土器甑である。鉢のような直口口縁で、尖り気味の底部中央に1穴を設けている。947・948は製塩土器である。これらの弥生土器はその形状から弥生時代後期前半に位置づけることができる。949は土師器壷である。球形の胴部から大きく外方に開く口縁部を有する。細かなハケ調整で仕上げている。950はフラスコ形

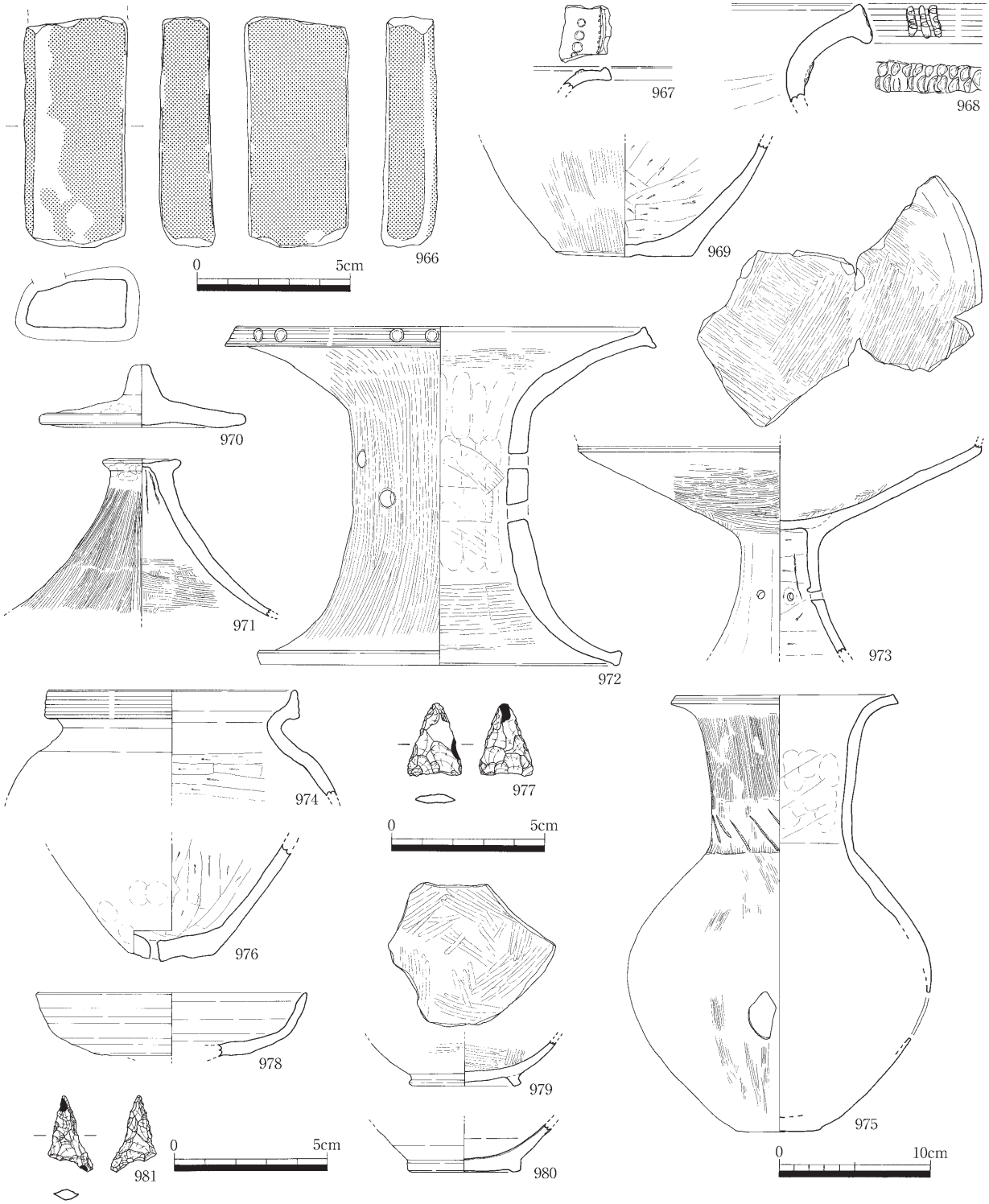


第219図　J区包含層出土遺物①(1/4)



第220図　J区包含層出土遺物②(1/2、1/4、1/5)

の胴部に外反する口頸部を持つ土師器壷である。底部は丸底をしている。951は土師器高杯である。屈曲して直線的に開く長い口縁部と円筒状で屈曲して大きく開く脚部を持つものである。これらの土師器は古墳時代初頭に位置づけられるものである。952は須恵器蓋で端部を下方に折り曲げている。953・954



第221図　J区包含層出土遺物③(1/2、1/4)

は須恵器杯、955は須恵器椀である。これらの須恵器は7～8世紀代に位置づけられる。956は須恵器円面硯の脚部である。方形の透かし穴を施している。先の須恵器と同じ頃のものであろう。957は釘通しの穴を開けた丸瓦、958は凸面に格子タタキ痕を明瞭に残した平瓦である。959～961はサヌカイト製の打製石鏃である。凸基式（959）、凹基式（960）、平基式（961）がある。962・963はサヌカイト製の打製石庖丁である。ともに刃部の一部に使用による磨滅が認められる。964・965はサヌカイト製の打製石

斧で、どちらも折損している。966は流紋岩製の砥石である。直方体をしており 4 面を砥面に使用した手持ちの砥石である。

967～974・977はＪ③区出土の遺物である。967～969は弥生土器壷である。967は口縁部内面に列点文と円形浮文を施している。968は口縁端部を上下に拡張し凹線3条をめぐらせた後に刻み目を施した棒状浮文を貼り付けている。頸部には 2 段の爪形文を施した突帯を貼り付けている。この 2 点は弥生時代中期に属するものとみられる。969は平底の壷底部である。970・971は弥生土器蓋である。970は扁平な円盤状に突起状の摘みを付けたもので壷の蓋であろう。971は大きく開く形態の甕の蓋である。内面にはススの付着がみられる。972は弥生土器器台である。円筒状の体部から大きく外反する口縁部と脚部を持つ。口縁端部は拡張して凹線をめぐらせた後に 2 個 1 組の竹管文を施している。973は弥生土器高杯である。杯部と脚部の接続には円盤充填を用いている。「下川津Ｂ類」土器である。974は弥生土器甕で、口縁端部を上下に拡張して凹線をめぐらせている。これらは弥生時代後期前半に位置づけられる資料であろう。977はサヌカイト製の平基式の打製石鏃である。

975・976・978～981はＪ④西・東区から出土したものである。975は弥生土器壷である。たまねぎ形の胴部に直立気味の長い頸部がつき、口縁部が外反する形態をしている。頸部にはハケ調整に使用した工具（ハケ原体）による刺突文が施されている。胴部下半の穴は意図的に打ち欠いた可能性も考えられる。弥生時代後期前半に位置づけられる。976は弥生土器甑である。丸底気味の底部の中心から外れた位置に 1 穴を穿っている。978は須恵器高杯で、 9 世紀代のものと思われる。979は内外面に炭素を吸着させた黒色土器椀で、内面には 6 分割ミガキが残る。11世紀頃のものか。980は白磁椀で、削り出し高台を有する。13世紀頃に位置づけられようか。981はサヌカイト製の凹基式の打製石鏃である。

（8）小結

Ｊ区は縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代はＪ③SR01・Ｊ④西SR02の連続する自然河川から後期前半と晩期後半の遺物が出土した。出土量も少なく上流から流されてきたものと判断でき、近辺での遺構の存在は否定的である。

弥生時代は同じ自然河川から弥生時代中期末～後期を中心とした多量の遺物が出土している。遺構も河川部分を除いた各調査区において溝を中心に検出している。Ｊ②SH01は唯一の竪穴住居跡例であり、Ｊ②・⑦区以北に居住域が存在したことが想定できよう。Ｊ②SD06やＪ③SD18などは居住域の南辺に築かれた溝とみることができ、溝内から出土した多量の後期土器は居住域から廃棄されたものと捉えることができよう。自然河川の東岸で検出したＪ⑤SD11・12も同様の性格を持つ溝の可能性が強い。

古墳時代の明瞭な遺構・遺物は確認していない。

古代になっても遺構の数は決して多くはなく、散在する傾向がうかがえる。自然河川はほぼ埋没し使用できる土地は広がったが、居住域に使われなかったのは土地条件の悪さに起因するものであろうか。少し小高いＪ②・⑦区周辺には柱穴や小規模な溝がみられ居住域として使われたものと判断できる。Ｊ⑤区東端は安定した地盤であり、Ｋ区を中心とした居住域の西端とみられる。

中世も遺構分布は前代と特に変化はみられず、小規模な溝や土坑などが散在している程度である。Ｊ②SB01は農作業小屋のようなものであろうか。Ｊ区のほとんどは主に畑などの耕作地として土地利用されたとみられる。

近世になっても耕作地としての土地利用が継続していたようである。

第５節　Ｌ区の調査

１．調査区の概要

南北幅10～12m、東西長103mの範囲を占めるＬ区は調査の都合もあり、４つの小調査区に分けて調査を行った。高松東道路調査Ｂ区の南側に隣接する調査区である。標高はおおよそ17.2～18.2mで、東西両端で約1.0mの標高差を有している。調査着手前はすべて水田として土地利用されており、高松東道路から水田へ耕運機等を搬出入させるためのコンクリート製のスロープが数箇所設置されていた。

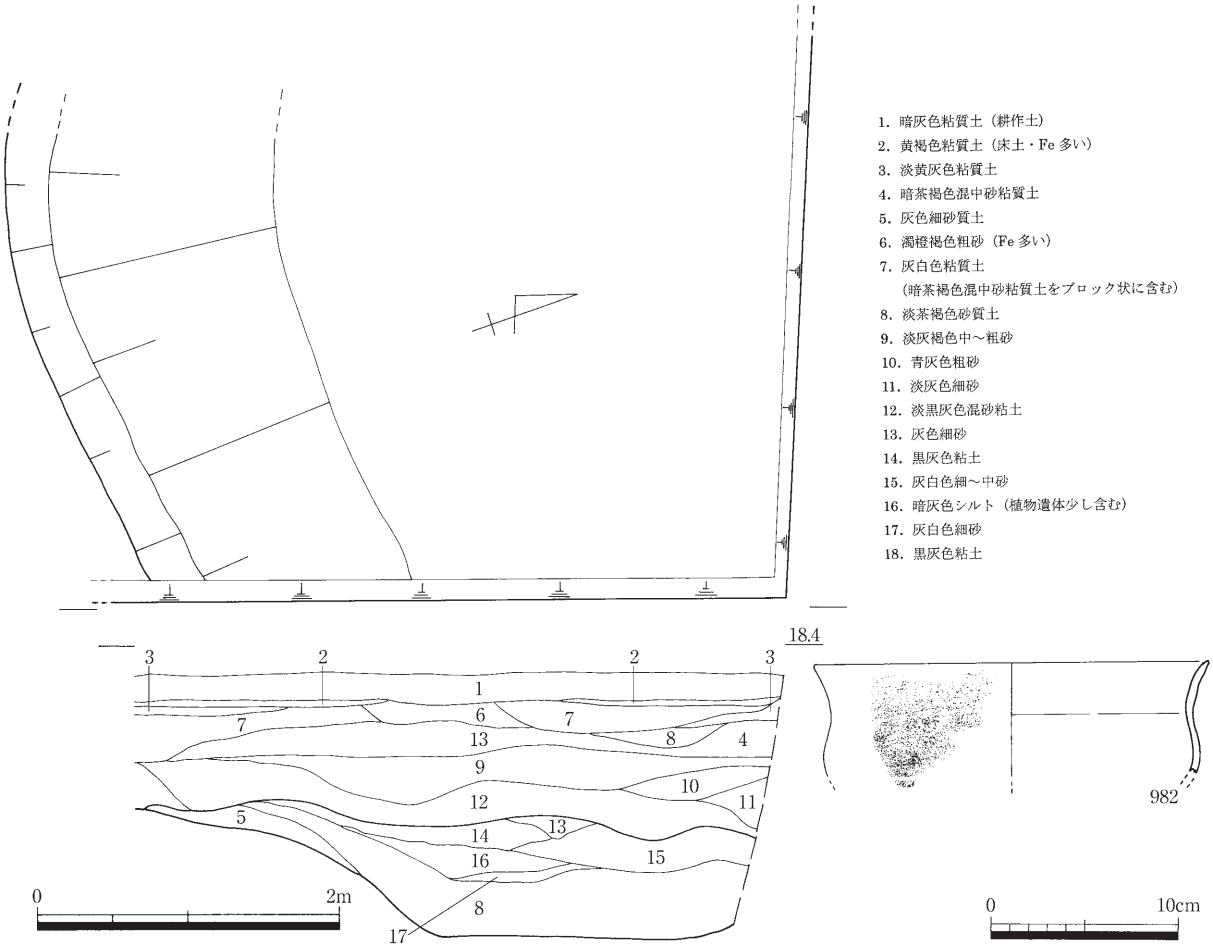
Ｌ区では遺構検出面を２面確認している。Ｌ①区・②西区では厳密には２面が存在したが、その比高は５～６cmと浅かったため合わせて調査を実施している。上から第１面が古代以降、第２面が古代以前と巨視的な大別は可能だが、検出状況はかなりの時期的な混在が存在する。また、Ｌ③区では上から第１面で弥生時代から中近世までの遺構を確認したが、東端の下層確認の際に下位で自然河川を検出し、これが第２面ということになる。また、Ｌ②区は調査の都合によって東西に二分したが、調査区がコンクリート製のスロープによって分かれているため、Ｌ②西区・東区で別々の小調査区とみなしている。

２．調査の成果

（１）縄文時代の遺構・遺物

Ｌ③SR01（第222図）

Ｌ③区北東端付近、第２面でその一部を確認した自然河川である。検出長2.9m、検出幅5.2mで深さ



第222図　Ｌ③SR01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

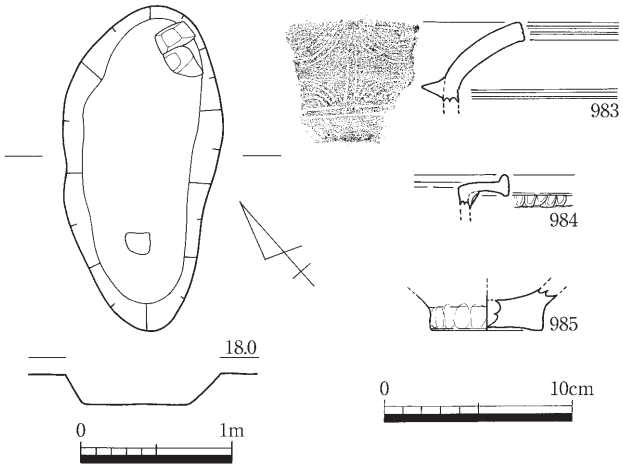
1.8mの規模を測る。高松東道路調査C区北西隅付近で検出されたSR01が調査区境界の道路下を通って、L③区へ続いてきたものとみられる。埋土は中～粗砂と粘質土の互層となっており、982が出土している。982は縄文土器深鉢で、口縁部から胴部にかけてS字状を呈する。外面には貝殻条痕調整を施している。縄文時代晩期前半に位置づけられる。

（2）弥生時代の遺構・遺物

L③SK04（第223図）

L③区東端付近、第1面で検出した長楕円形を呈する土坑である。2.2m×1.1m、深さ0.2mの規模を持ち、断面形状は浅い逆台形を呈している。北東隅に小児頭大の亜角礫2個が、南西側の隅からやや内側に板石状の亜角礫1個が底面に置かれていた。983～985の弥生土器壷が出土している。

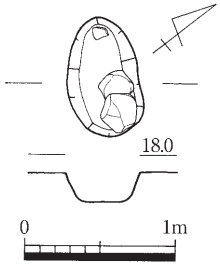
983は大きく外方へ開く口縁部で内面には突帯を1条めぐらし、ヘラ描きによる重弧文を施している。口縁端部と口頸部境にはヘラ描き沈線2条をめぐらせている。984は口縁端部を拡張させて頸部に刺突文を施した突帯を貼り付ける。985は突出した壷底部である。983・985は形状や胎土中に多量の砂粒を含むことから弥生時代前期に位置づけられる。984は弥生時代中期後半のもので、調査時の混入であろう。したがってこの土坑は弥生時代前期が想定できる。



第223図　L③SK04平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L③SK05（第224図）

L③区東端付近、第1面検出した楕円形の土坑である。80㎝×50㎝、深さ19㎝の規模を測り、断面形状は浅い逆台形を呈している。L③SK04の埋没後に掘り込まれている。南東隅に拳大の亜角礫2石、反対側に小礫1石を入れている。図化できなかったが、弥生時代後期に属すると思われる土器小片が出土している。

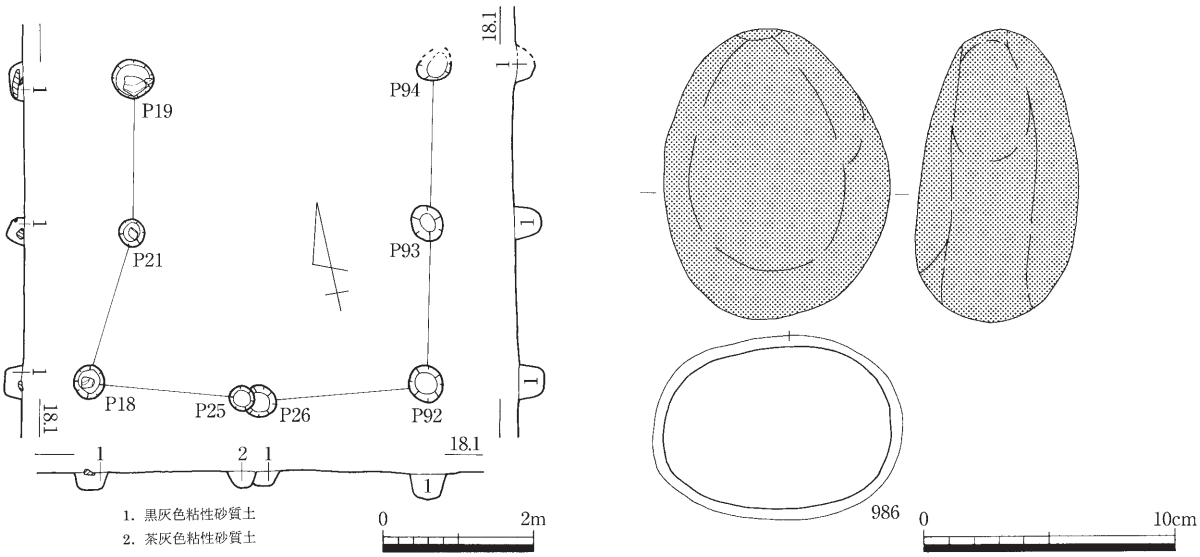


第224図　L③SK05
平･断面図(1/50)

（3）古代の遺構・遺物

L③SB01（第225図）

L③区西半の北壁寄り、第1面で検出した2間×2間以上の掘立柱建物跡である。桁間方向は調査区外に連続しているが、2間×3間の南北棟と推測される。建物主軸（東辺）はN14°Eの方向を有する。東辺が直線状であるのに対し、西辺はSP21がやや内側にあるために壁が屈曲してしまうことになり、このピットはこの建物に伴わない可能性が高いだろうか。SP19には板石が入れられており礎石として用いられたものであろう。SP18には986が柱の固定を目的とした詰め石として入れられていた。986は閃緑岩製の磨り石である。弥生時代に属すると思われ、周辺で拾った石を詰めたと推測できる。

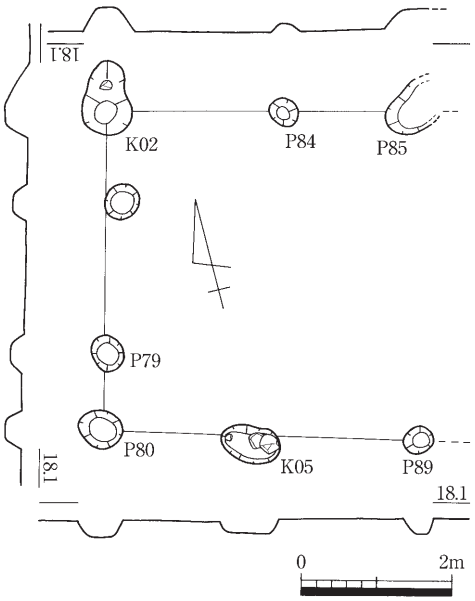


第225図　L③SB01平･断面図(1/100)、出土遺物(1/3)

L③SB04（第226図）

L③区東端中央、第1面で確認した1間×2間以上の掘立柱建物跡である。東側は調査区外へ続いている。4.2m×4.2m以上の東西棟であろう。建物主軸（南辺）はN76°Wの方向を有している。1間×2間以上と推測したが、SP89のすぐ北に位置する柱穴と西辺のSP79を結んだ線を南辺とすると、SP80－SP89は建物の南側に設けられた庇の柱穴とみることも可能である。

北西の柱穴であるL③SK02の埋土から9～10世紀に位置づけられる土器細片が出土していることから、この建物の時期もその年代と捉えておく。

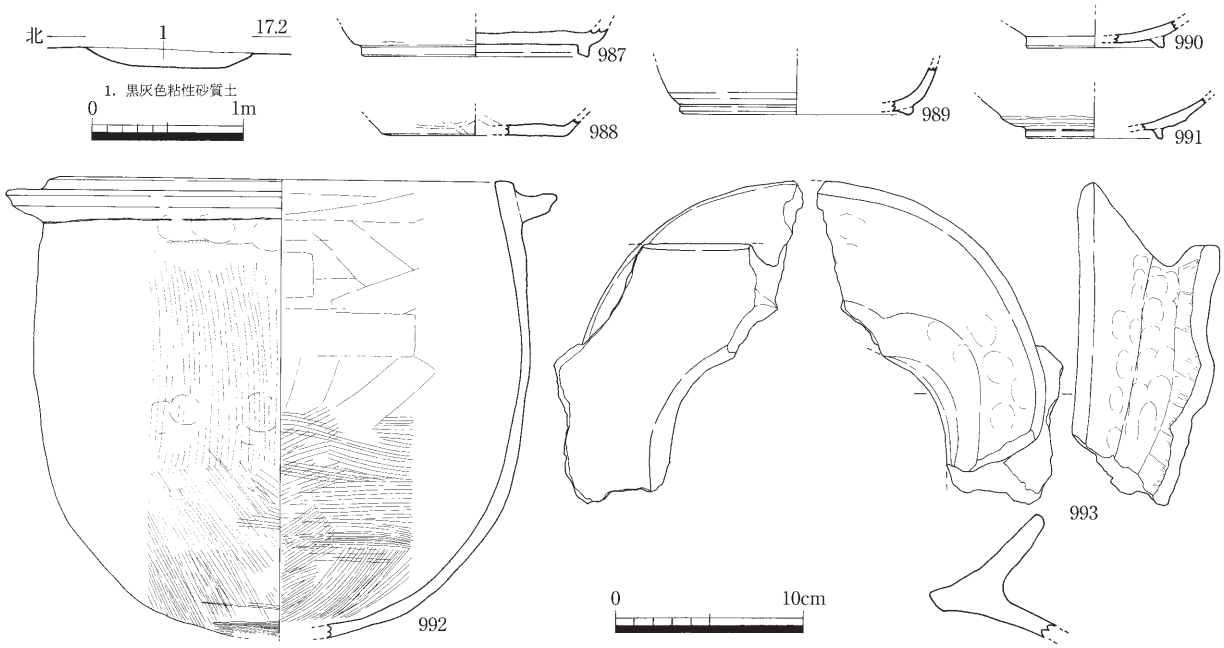


第226図　L③SB04平･断面図(1/100)

L①SD04（第227図）

L①区中央付近、第1面で検出した検出長13.7m、幅1.5m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。東端にはL②西SX01が位置しており、接続していた可能性が高い。断面形状は浅い皿形を呈し、N79°Wの方向を有している。埋土は黒灰色粘性砂質土1層で、987～993が出土している。

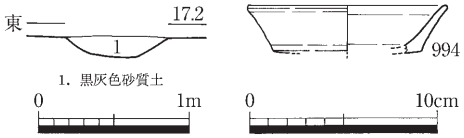
987は須恵器皿である。988は須恵器杯で、内外面に火襷の痕跡が残る。989は須恵器椀で焼成が悪い。990・991は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。どちらも高台や体部の外面に赤彩の痕跡が残る。992は土師器羽釜である。丸底から立ち上がる直口口縁の外面にやや上方に張り出す鍔をめぐらせている。ハケ調整が顕著に残る。993は竈で、側部から上部に付けられた大きな鍔が残る。9～10世紀に位置づけられよう。



第227図　L①SD04断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L①SD05（第228図）

L①区西半、第１面で検出した検出長4.1m、幅0.8m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、N15°Eの方向を有している。11世紀代の土器片が出土しており、13世紀代の年代が想定される土師器杯994は混入品か。一応当該期とするが、中世の可能性も十分にあり得る。

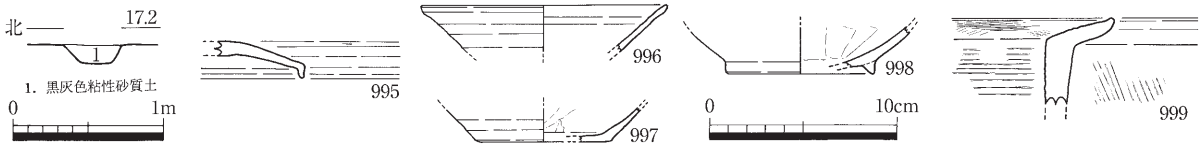


第228図　L①SD05断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L①SD09（第229図）

L①区中央南壁寄り、第１面で検出した検出長6.2m、幅0.6m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N89°Wの方向を有する。北側に隣接しているL①SD04とは概ね平行しているようにみえる。東端はL②西SX01に接続していた可能性が高い。

埋土中から995～999が出土している。995は須恵器蓋で、端部を下方に折り曲げてかえりとしている。996・997は須恵器杯である。996は焼成が甘く瓦質をしている。997は内面に火襷痕が残る。998は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。999は土師器甕で粗いハケ調整で仕上げている。これらは９～11世紀代に属するものである。

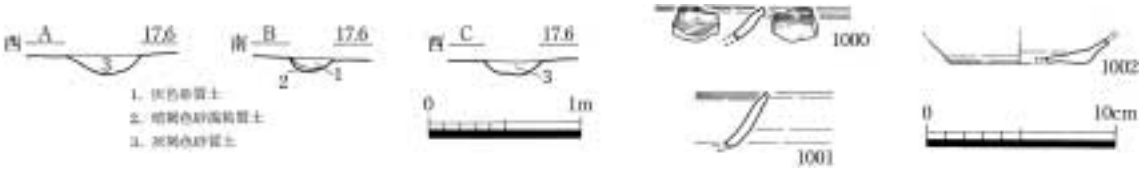


第229図　L①SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L②西SD01（第230図）

L②西区のほぼ中央、第１面で検出した検出長12.0m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構で

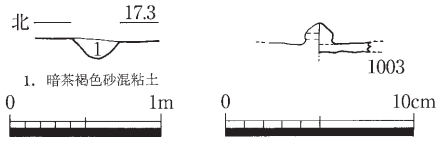
ある。西端と東端はほぼ直角に屈曲している。断面形状は浅いU字形を呈し、南北部分でN15°Eの方向を有している。埋土中から1000～1002が出土した。1000は土師器皿で、内外面に赤彩の痕跡が残る。1001・1002は土師器杯である。1001は口縁部内面に沈線1条をめぐらせ、内外面にわずかに赤彩の痕跡が残る。1002は底部を回転ヘラ切りで仕上げている。L②西SD01西半の下位には前代の溝が埋没しているため、1000・1001は下の溝の遺物の混入と判断できる。したがってこの溝の年代は、1002に想定される10世紀代に位置づけられよう。



第230図　L②西SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L②西SD17（第231図）

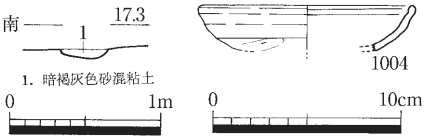
L②西区の西半、第2面で検出した検出長6.3m、幅0.4m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形で、N78°Wの方向を有する。1003は須恵器蓋で、8世紀代に位置づけられよう。



第231図　L②西SD17断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L②西SD18（第232図）

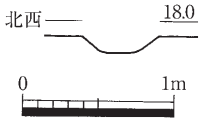
L②西区の中央から西半、第2面で検出した検出長12m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。東半はL②西SD01、西端はL②西SX01の下位に位置する。断面形状は浅い皿形を呈し、N75°Eの方向を有している。1004は土師器杯で、口縁内面に沈線1条をめぐらす。8世紀代に位置づけられる。



第232図　L②西SD18断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L③SD01（第233図）

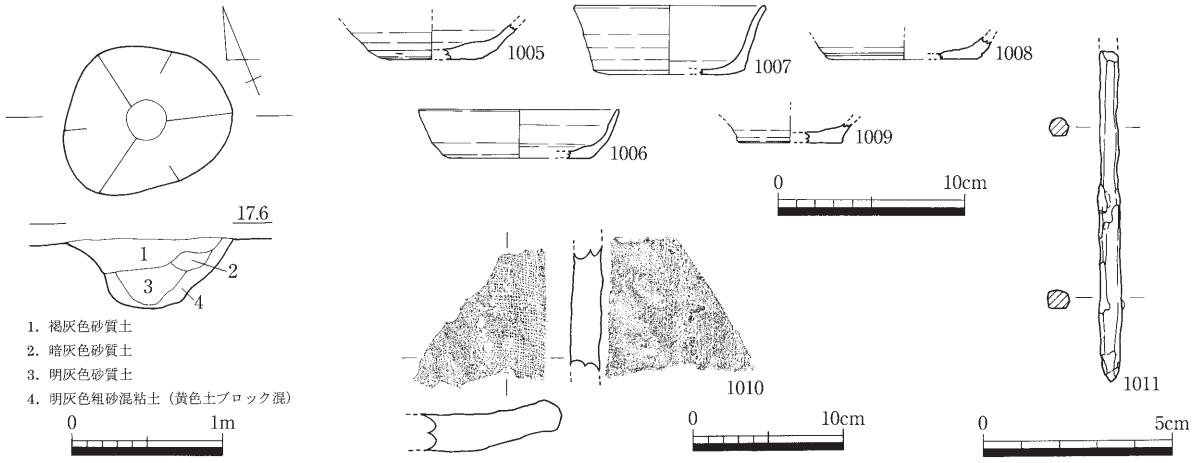
L③区中央南寄り、第1面で検出した検出長6.2m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆台形を呈し、N57°Eの方向を有する。8～9世紀に属するとみられる土器小片がわずかに出土している。



第233図　L③SD01断面図(1/50)

L②西SK01（第234図）

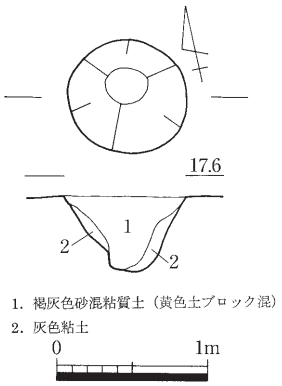
L②西区の中央付近、第1面で検出した楕円形を呈する土坑である。115cm×95cm、深さ46cmの規模を持ち、断面形状はすり鉢状を呈している。埋土最下層には粘土ブロックが混じっており、人為的に埋め戻された後に掘り直された可能性がある。遺物は一括で取り上げており、1005～1011が出土した。1005は須恵器杯である。1006～1009は土師器杯で、1006は内弯気味に立ち上がり、1007はやや外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。1008・1009は底部外面を回転ヘラ切り後にナデ調整で仕上げている。1010は須恵質の平瓦である。1011は鉄製品で、頭部を欠損した釘と判断した。土師器杯に年代差がみられるが、10～11世紀に属するものと想定される。



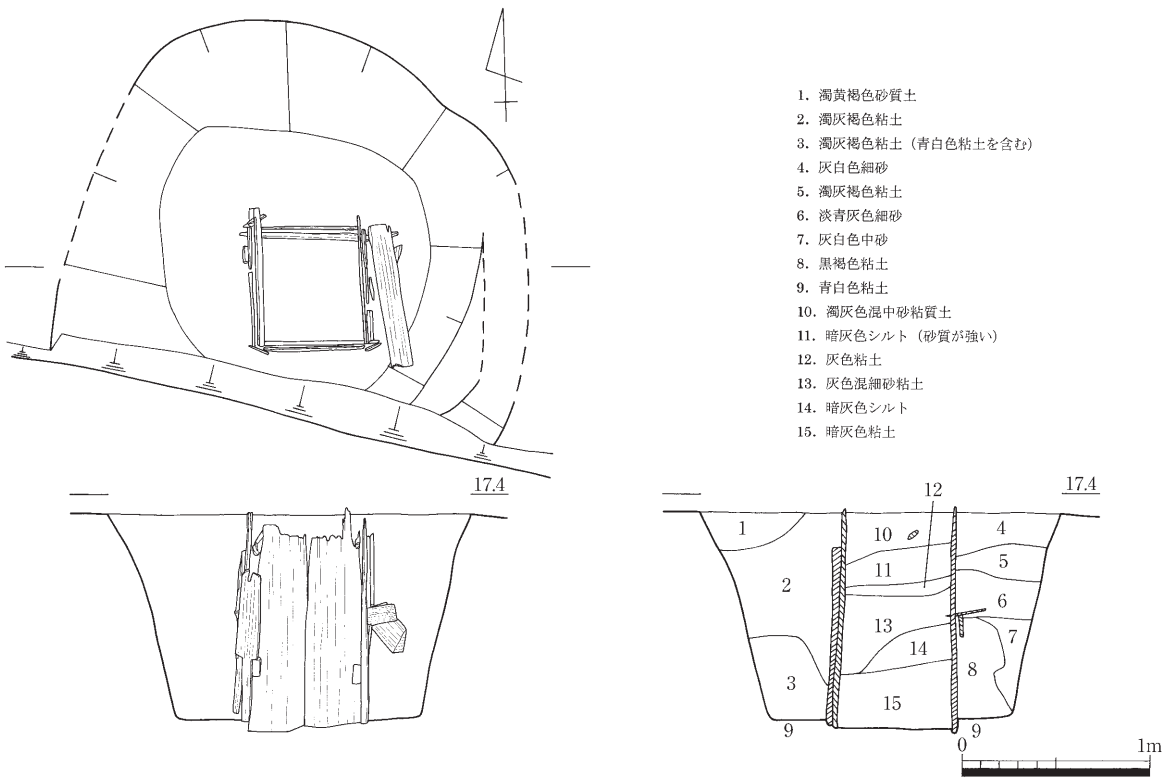
第234図　L②西SK01平･断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/4、1/5）

L②西SK02（第235図）

L②西区の中央付近、第１面で検出した円形を呈する土坑である。先述のL②西SK01の西隣に位置している。直径80cm、深さ48cmの規模を測り、断面形状はすり鉢形を呈する。上位の埋土には粘土ブロックがみられることから、最終的に人力によって埋め戻されたことがわかる。埋土中からの遺物の出土量は少なく、図化できなかったが９～10世紀に比定できそうな須恵器小片が出土している。



第235図　L②西SK02
平･断面図（1/50）



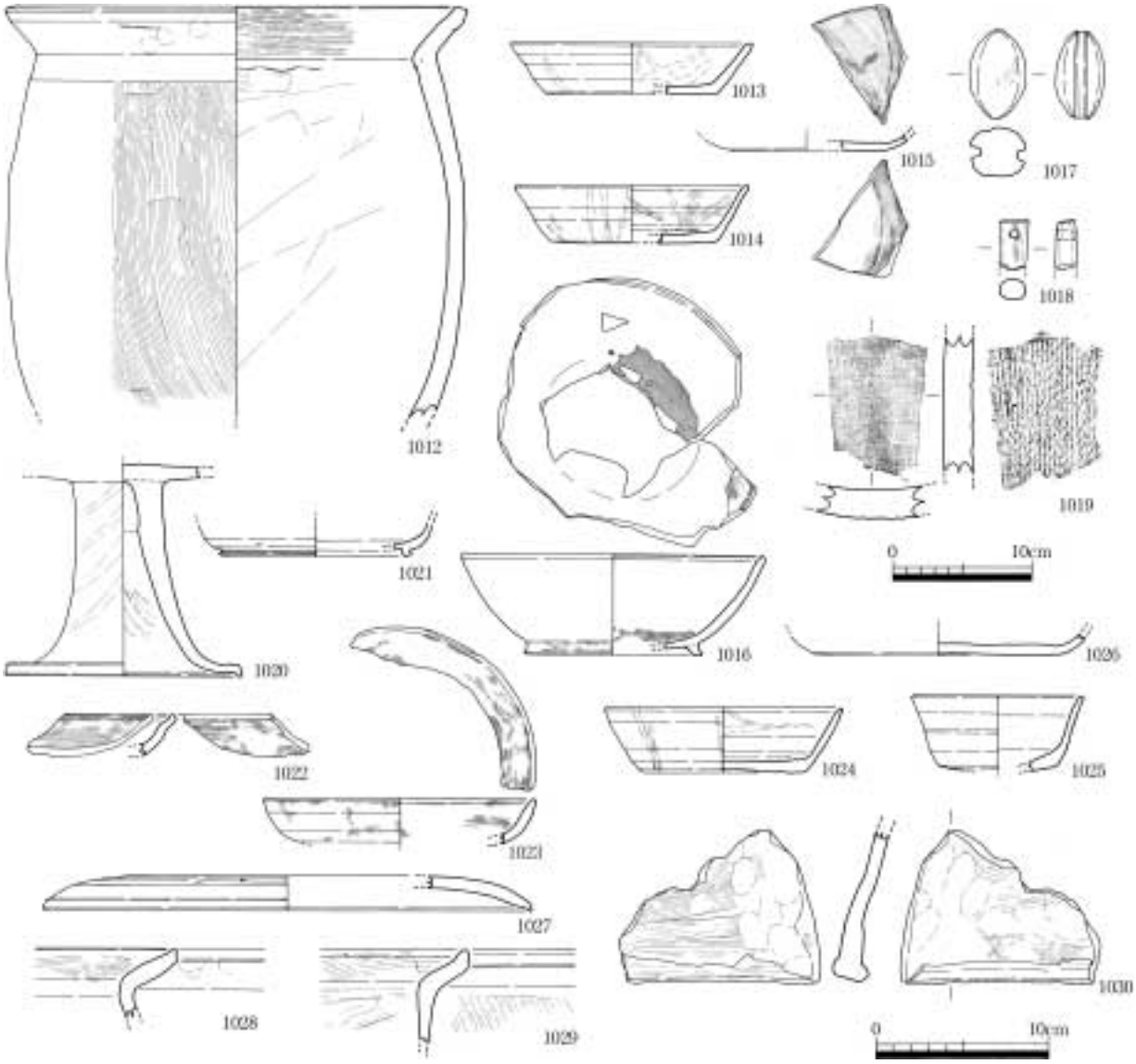
第236図　L③SE01平･断面図（1/40）

Ｌ③SE01（第236・237図）

Ｌ③区西半南壁沿い、第１面で検出した井戸である。調査区南壁にかかっているため、全体の規模は判明しないが、隅丸方形を呈するものと想定される。検出分の計測では2.5m×2.0m、深さ1.2mの規模を測り、一辺２m前後の井戸になるであろう。掘り方の断面形状は逆台形を呈しており、ほぼ中央部に内側で一辺0.6mの井戸枠を設置していた。井戸枠は長さ1.2m、幅0.3mの２枚の板材を並べて一辺とする部分と、幅0.6mの一枚板で一辺を形成する部分がみられる。板材は底から約30cmと約110cmの２ヶ所に切り込みを入れ、そこに角材を横桟としてわたして補強と型持ちを兼ねている。井戸枠の各コーナー外側部分には幅20cm前後、長さ60cm前後の板材を当てて、裏込土を入れており、板を合わせた隙間から土砂の流入を防ぐ工夫をしているようである。井戸枠内部の埋土には人為的に埋め戻した痕跡は認められないことから、自然にまかせて埋没していったものと思われる。

井戸枠内部の埋土および裏込土の中から1012～1030の遺物が出土している。

1012～1019は井戸枠内部から出土したものである。1012は土師器甕で長い胴部を有する。ハケメ調整が顕著である。1013・1014は須恵器杯である。ともに直線的に外方へ開く口縁部を持ち、内外面には火



第237図　L③SE01出土遺物（1/4、1/5）

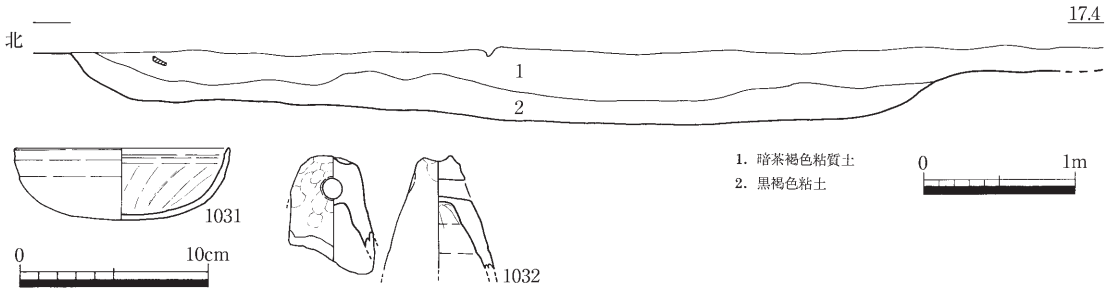
襷痕が認められる。1015は内外面に赤彩の痕跡が残る須恵器皿である。1016は土師器椀である。口縁端部内面に沈線１条をめぐらせており、内外面には赤彩の痕跡が残る。1017は土師質の有溝土錘で、断面形状は分銅形をしている。1018は土師質の棒状土錘で、一端に穿孔がみられる。1019は平瓦で、布目圧痕や縄目タタキが明瞭に残る。

1020～1030は掘り方の裏込土の中から出土したものである。1020は須恵器高杯である。円筒状で裾部が開き、端部を下方に折り曲げた形態を持つ脚部である。1021は須恵器椀である。1022・1023は土師器皿である。1022は口縁部内面に段状の沈線１条をめぐらし、内外面に赤彩の痕跡が残る。1023も内外面に赤彩を施していたようである。1024・1025は須恵器杯。1024は内外面に火襷の痕跡がみられる。1025はやや外方に開き気味の口縁部を持つもので、無蓋高杯の可能性がある。1026は須恵器皿と判断した。1027は土師器蓋で、端部をわずかに下方へ摘み出している。扁平で口径の大きい蓋である。1028・1029は土師器甕である。粗めのハケ調整で仕上げている。1030は竈である。端部は分厚く肥厚させて安定を図っている。ハケ調整と指頭圧痕が顕著である。

以上の遺物の年代観から、Ｌ③SE01は９世紀代に築かれ、10世紀代のうちに埋没したものと判断できよう。

Ｌ①SX01（第238図）

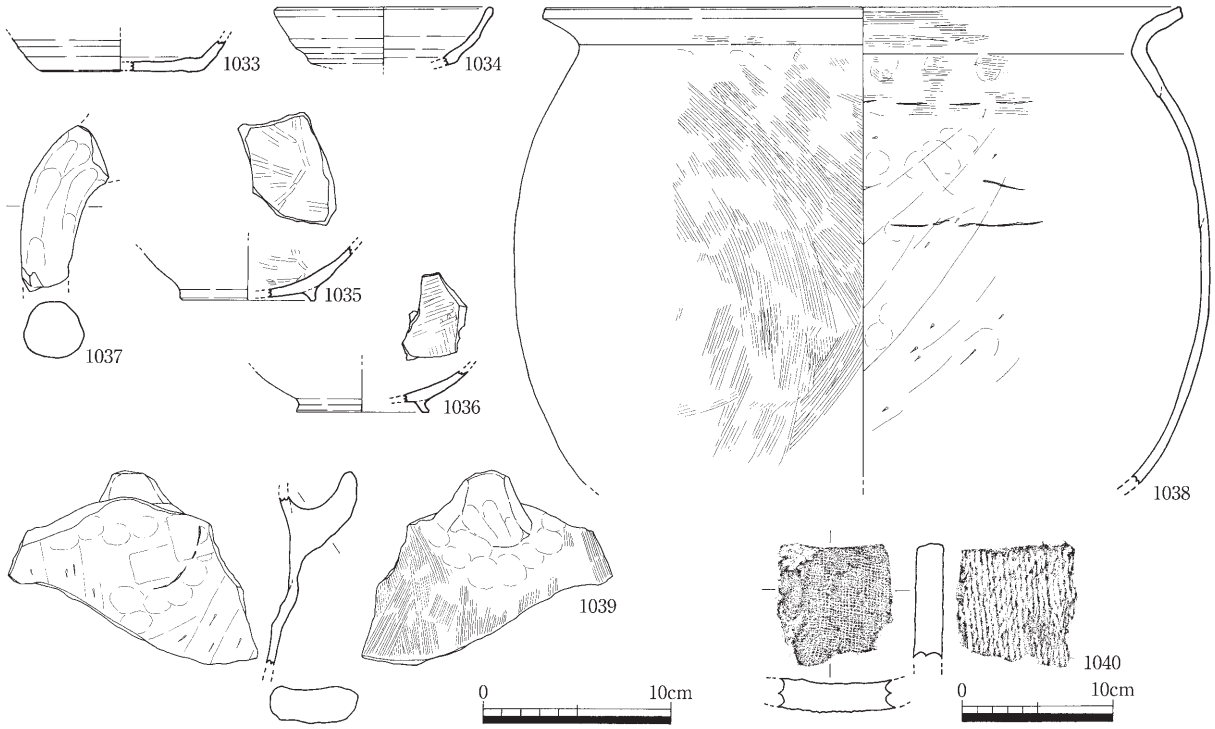
Ｌ①区東半北壁寄り、第２面で検出した不明遺構である。後述するＬ②西SX01の下位に位置している。平面形は不定形で、断面形状は皿形を呈しており、深さは約50㎝を測る。北端は調査区外へ続いている。埋土は黒褐色粘土であり、湿地状を呈しながら埋没していったものと思われる。1031は土師器椀である。口縁部内面に浅い沈線１条をめぐらしており、内面に暗文が施されている。７世紀代に位置づけられる土器である。1032は土師質の蛸壺の釣り手である。イイダコ用である。



第238図　Ｌ①SX01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②西SX01（第239図）

Ｌ②西区からＬ①区にかけて広がる不明遺構である。先述したＬ①SX01の埋没後に堆積している。不定形の落ち込みで、人為的なものではないと判断される。暗茶褐色粘質土の埋土から1033～1040の遺物が出土している。1033は須恵器杯、1034は土師器杯である。1035・1036は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。1036は内面を４分割ヘラミガキ調整で仕上げている。1037は土師器足釜の脚部。1038・1039は土師器甕である。1038は球形の胴部をもち、細かいハケ調整で仕上げている。1039は把手を付けた甕である。1040は平瓦で、内面の布目はやや粗く、外面の縄目タタキが顕著である。これらの遺物の年代観から、10世紀頃から埋没が始まり、最終的な埋没は中世にわたると判断できよう。



第239図　L②西SX01出土遺物（1/4、1/5）

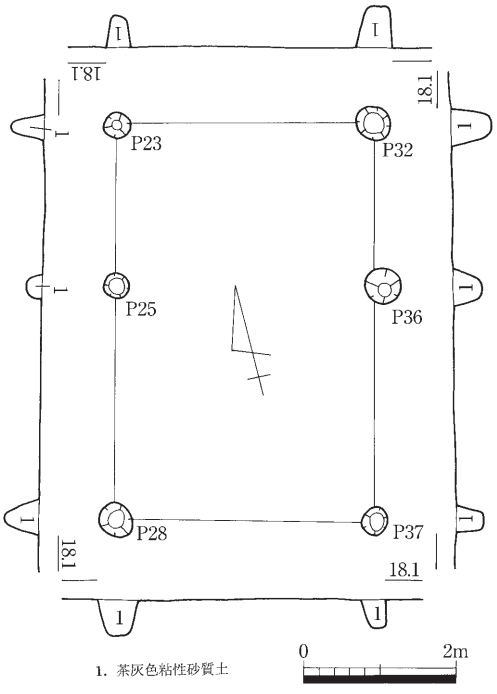
（４）中世の遺構・遺物

L③SB02（第240図）

L③区西半中央、第１面で確認した１間×２間の掘立柱建物跡である。3.4m×5.3mの規模で、床面積は18.1㎡を測る南北棟である。建物主軸はN14°Eの方向を有する。柱穴内に礎石や詰め石などは認められなかった。

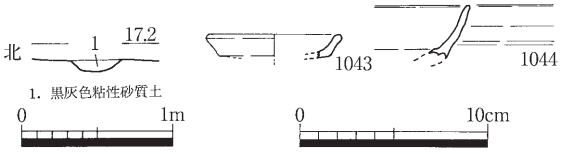
建物南西隅の柱穴SP28、北東隅のSP32、西辺中央のSP25から遺物が出土している。

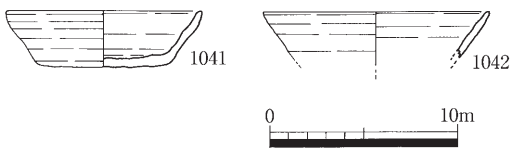
1041・1042はともにSP28から出土した土師器杯である。13世紀代に位置づけることができるであろう。図化できなかった他の土器も中世土器の小片である。



第240図　L③SB02平･断面図（1/100）､出土遺物（1/4）

L①SD03（第241図）





第241図　L①SD03断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

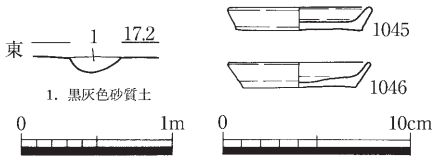
L①区西端、第１面で検出した溝状遺構で、東隣のL①SD08と連続するものと思われる。両溝を加えた検出長8.8m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ。断面形状は皿形を呈し、N81°Wの方向を有する。

埋土から1043・1044が出土している。

1043は土師器小皿、1044は土師器杯である。その形状から13世紀代に属するものと想定される。

L①SD06（第242図）

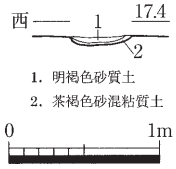
L①区西半、第１面で検出した検出長3.5m、幅0.3m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N13°Eの方向を有する。1045・1046は土師器小皿である。13世紀代に位置づけることができる。



第242図　L①SD06断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L②西SD04（第243図）

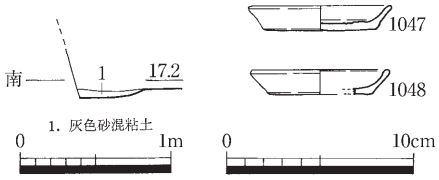
L②西区の西端付近、第１面で検出した検出長6.3m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。南端はL②西SK05によって壊されている。断面形状は浅い皿形を呈し、N10°Eの方向を有している。埋土からは中世土器の小片がわずかに出土した。



第243図　L②西SD04断面図(1/50)

L②西SD20（第244図）

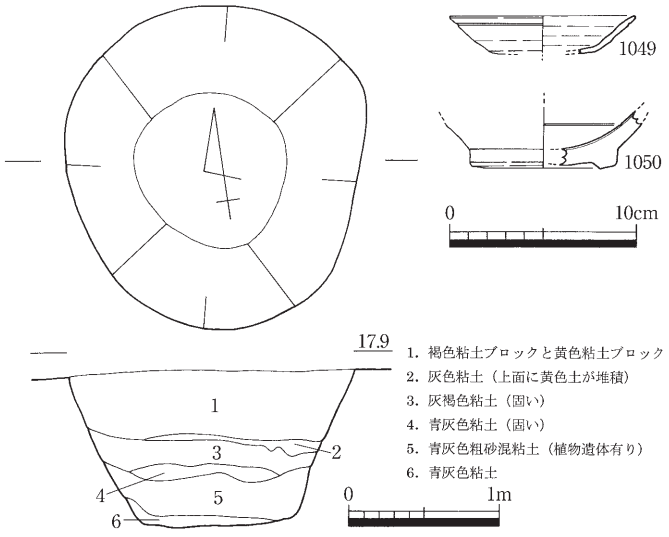
L②西区の中央南壁付近、第１面で検出した検出長11.6mを測る直線的な溝状遺構である。南壁にかかっており、検出幅0.4m、深さ0.1mの規模をもち、断面形状は浅い皿形を呈する。N73°Wの方向を有する。1047・1048は土師器小皿で、12世紀後半の年代が想定される。



第244図　L②西SD20断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

L②東SK03（第245図）

L②東区の北西隅付近で検出したほぼ円形の土坑である。2.2m×2.0mで深さ1.1mの規模を測り、断面形状は逆台形を呈している。埋土はほぼ水平に複数の土層が堆積しており、下層には植物遺体が混じっている状況が確認された。上半部を占める土層には粘土ブロックが混じっていることから、この土坑は最終的には人為的に埋め戻されたことが判明する。周辺の地下水位は高く、調査時もじわじわと水が染み出してきたことを考慮すれば、水を得る目的で掘られた可能性がある。



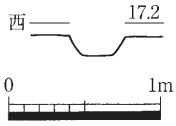
第245図　L②東SK03平・断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

埋土から1049・1050が出土した。1049は土師器杯である。1050は青磁椀で、内面に沈線１条が認められる。1049はその形状から13世紀代に位置づけることができるものである。

（５）Ｌ区の柱穴・遺物

Ｌ①SP14（第246図）

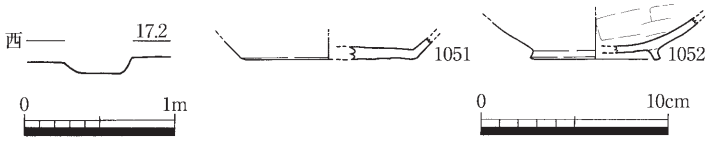
Ｌ①区中央付近、第１面で検出した。直径40cm、深さ13cmの円形を呈する。12～13世紀の年代が想定される土器片が出土している。



第246図　L①SP14断面図(1/50)

Ｌ①SP17（第247図）

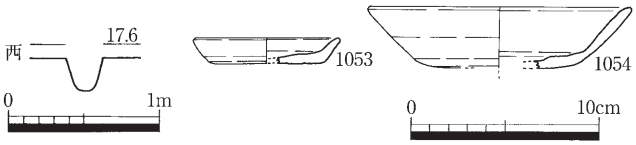
Ｌ①区中央南寄り、第１面で検出した。直径50cm、深さ12cmの円形を呈する。埋土から須恵器皿1051、黒色土器椀1052が出土している。1052は12世紀代に位置づけられよう。



第247図　L①SP17断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②西SP07（第248図）

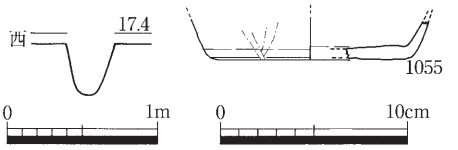
Ｌ②西区の東半、第１面で検出した。直径25cm、深さ22cmの円形を呈する。埋土から土師器小皿1053、土師器杯1054が出土した。12～13世紀に属するものと想定される。



第248図　L②西SP07断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②西SP14（第249図）

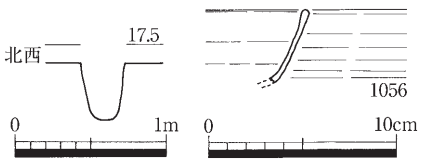
Ｌ②西区の西半、第１面で検出した。直径35cm、深さ33cmの円形を呈する。埋土から須恵器杯1055が出土した。外面に火襷痕が残るもので、10世紀頃に位置づけられよう。



第249図　L②西SP14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②西SP43（第250図）

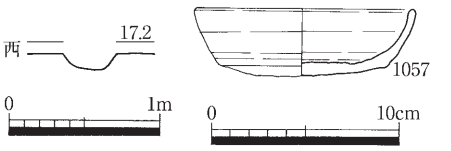
Ｌ②西区のほぼ中央、第１面で検出した。50cm×25cmの楕円形で、深さ38cmの規模を持つ。埋土から須恵器杯1056が出土した。10世紀代に位置づけられるだろう。



第250図　L②西SP43断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②西SP47（第251図）

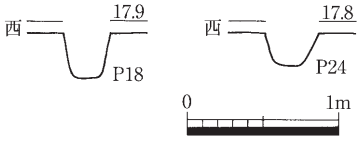
Ｌ②西区の西半北壁沿い、第１面で検出した。直径30cm、深さ11cmの円形を呈する。埋土中から土師器杯1057が出土している。底部外面には回転ヘラ切り後の板状圧痕が認められる。13世紀前半頃に位置づけられる土器である。



第251図　L②西SP47断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ②東SP18（第252図）

Ｌ②東区の中央付近で検出した。直径30cm、深さ30cmの円形を呈する。中世土器の小片がわずかに出土している。



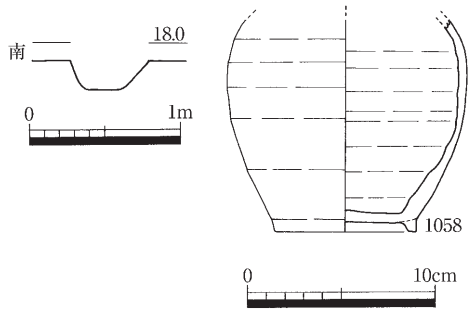
第252図　L②東SP18･24断面図(1/50)

Ｌ②東SP24（第252図）

Ｌ②東区の北西隅付近で検出した。直径35㎝、深さ22㎝の円形を呈する。中世土器の破片がわずかに出土した。

Ｌ③SP08（第253図）

Ｌ③区北西隅付近で検出した。50㎝×40㎝、深さ19㎝の楕円形を呈する。柱穴の南半部の底に置かれた状態で、須恵器壷1058が出土している。高台の一部に焼成前の凹みがみられる。８世紀代に位置づけられるだろう。

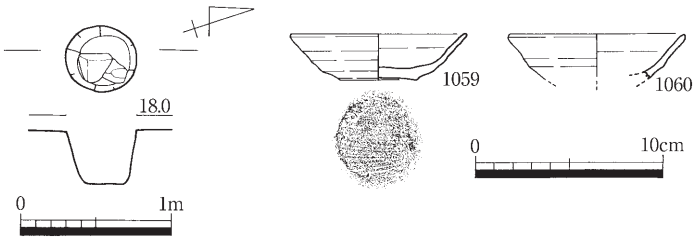


第253図　Ｌ③SP08断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

Ｌ③SP65（第254図）

Ｌ③区東半中央付近で検出した。直径48㎝、深さ35㎝の円形を呈する。柱穴底面には拳大の亜角礫２石が入れられていた。

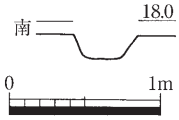
1059・1060は埋土中から出土した土師器杯である。ともに13世紀後半の年代が想定される。



第254図　Ｌ③SP65平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

Ｌ③SP87（第255図）

Ｌ③区東壁付近で検出した。直径45㎝、深さ16㎝の円形を呈する。図示できなかったが、近世の陶磁器片が出土している。



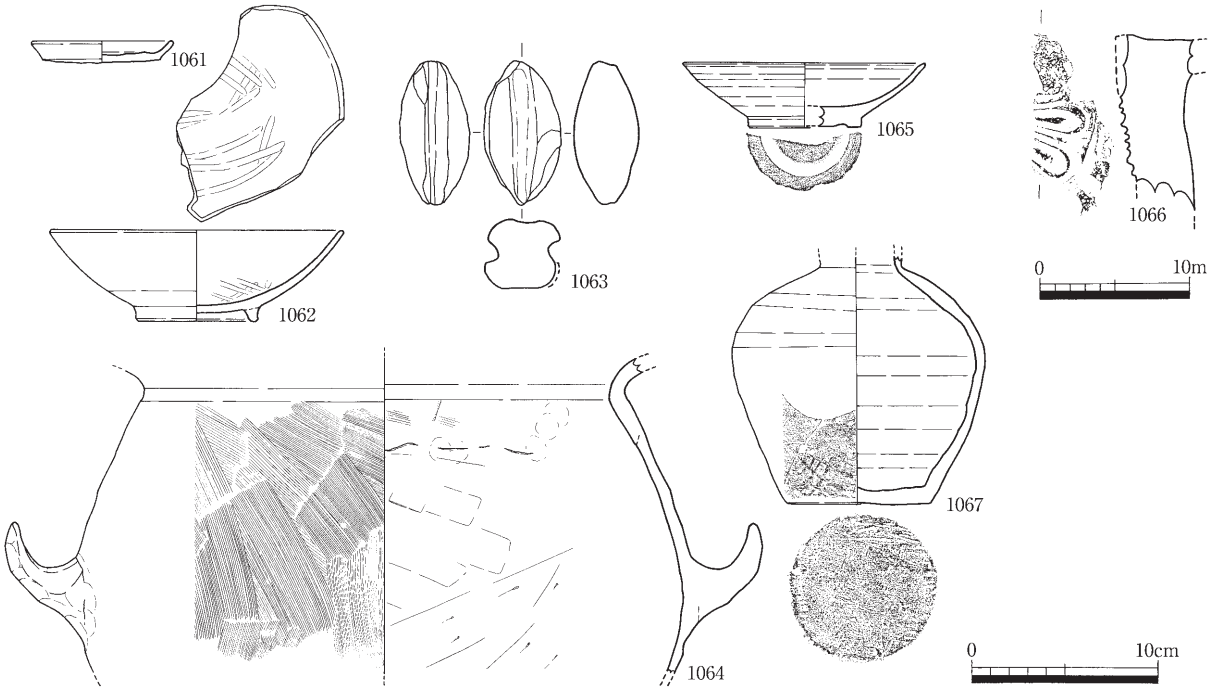
第255図　Ｌ③SP87
断面図(1/50)

（６）包含層出土遺物（第256図）

1061はＬ①区出土の土師器小皿である。直線的で外方に短く伸びる口縁部を持つ。形状から12～13世紀代に位置づけられる。

1062～1066はＬ②西区出土の遺物である。1062は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。内面のヘラミガキは４分割ミガキで仕上げている。高台の内外面に赤彩の痕跡が残る。12世紀代のものだろう。1063は有溝土錘で、断面の形状は分銅形を呈する。1064は土師器甕で、角状の把手を胴部中位に貼り付けている。外面の細かなハケ調整が顕著である。７～８世紀代のものであろう。1065は緑釉陶器椀で、削り出し高台を持つ。ほぼ全面に薄い施釉がなされている。９世紀頃に位置づけられるものである。1066は複弁蓮花文をもつ軒丸瓦である。破損が著しいため、外区の文様等はうかがい知ることはできない。側面には丸瓦部分が接合面に沿って剥がれ落ちた痕跡が認められ、接合部内側に補強のために貼り足した粘土には丸瓦に付いていた布目圧痕のスタンプがみられる。

1067はＬ③区出土の須恵器壷である。底部外面と胴部下端付近に格子タタキの痕跡が明瞭に残る。11～12世紀に属するものと想定される。



第256図　L区包含層出土遺物(1/4、1/5)

（7）小結

L区は縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代はL③区東端において縄文時代晩期前半の土器片が出土した自然河川がある。この河川は高松東道路調査C区SR01の続きと思われる。遺物は1点のみであり、付近に人間の営みを想像させる状況は考えにくい。

弥生時代の遺構・遺物は少なく、L③区東端付近で弥生時代前期および後期の土坑2基がわずかにみられる程度である。

古代に入ると遺構はL区全体にみられるようになる。L②東区の東側には掘立柱建物跡L③SB01・04や井戸L③SE01などが、西側には溝や土坑などが存在している。L②西区には時期不明の柱穴がいくつか認められるが、概ねL②東区を境にして、東側が居住域、西側がそれ以外の生産域として土地利用がなされていた可能性がある。

中世も東側（L③区）は居住域として使われたらしく、掘立柱建物跡L③SB02が認められる。西側で認められた柱穴には中世に属するものもあり、居住域が西方へ広がった可能性もうかがえよう。前代と比べて溝の数は減っている。L②東区で検出したL②東SK03は素掘りの井戸であった可能性も高い。

近世はL③区東壁付近で柱穴1基を検出したのみであるが、包含層などからは散在的に近世陶磁器の出土もみられる。居住域というよりは水田・畑等として土地利用されていたのであろう。

第６節　Ｍ区の調査

１．調査区の概要

南北幅12～29m、東西長108mの範囲を占めるM区は３つの小調査区に分けて調査を実施した。高松東道路調査Ｃ区の南側に隣接する調査区である。標高はおおよそ18.9～19.7mで、東西両端で約0.8mの標高差を有している。調査着手前は宅地と水田として土地利用されており、整地されて平坦になっていた。M③区とM①区の間が宅地と水田の地境にあたり、この部分には約70㎝の段差が存在していた。M③区は堀を伴った宅地であるため、調査区を堀の南北で２つに分割して調査したが、ここではまとめてM③区として報告する。

M区では遺構検出面を１～２面確認している。M①区は上から第１面が古代以降、第２面が弥生時代以前となっている。M②・③区は１面であった。なお、M区は縄文時代の遺物のみの出土はみられなかったため、縄文・弥生時代をまとめて報告する。

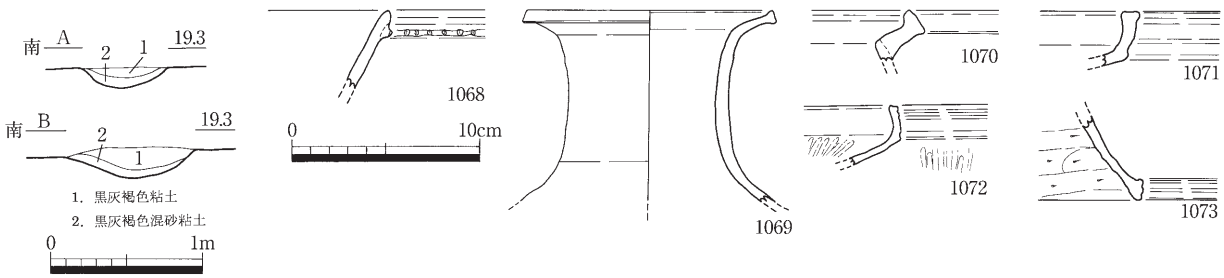
２．調査の成果

（１）縄文・弥生時代の遺構・遺物

M②SD15（第257図）

M②区東半で検出した検出長16.9m、幅1.0m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。調査区東半を北東から南西方向に横切っている。断面形状は皿形を呈している。埋土は２層で、下位に砂層、上位に粘質土層の堆積がみられ、流水ののち滞水状態のまま埋没していったとみられる。

埋土中から1068～1073の遺物が出土している。1068は口縁外面に１条の刻み目突帯をめぐらしている。焼成や胎土は弥生時代前期土器と同じであり、弥生時代前期の凸帯文系土器甕である。1069は弥生土器壷である。直立気味でやや長めの頸部から大きく外方へ開く口縁部を持つ。1070は弥生土器甕である。強く屈曲する口縁部で端部を上方に拡張している。1071～1073は弥生土器高杯である。1071は屈曲部から上方に立ち上がる短い口縁部を持ち、端部を肥厚させている。外面に凹線２条をめぐらす。1072は屈曲部から内傾する短い口縁部を持ち、外面に凹線３条をめぐらせている。1073は大きく開く裾部で端部を面取りして凹線２条をめぐらす脚部である。これらは1068を除いて、弥生時代中期末～後期前半に位置づけられる土器である。

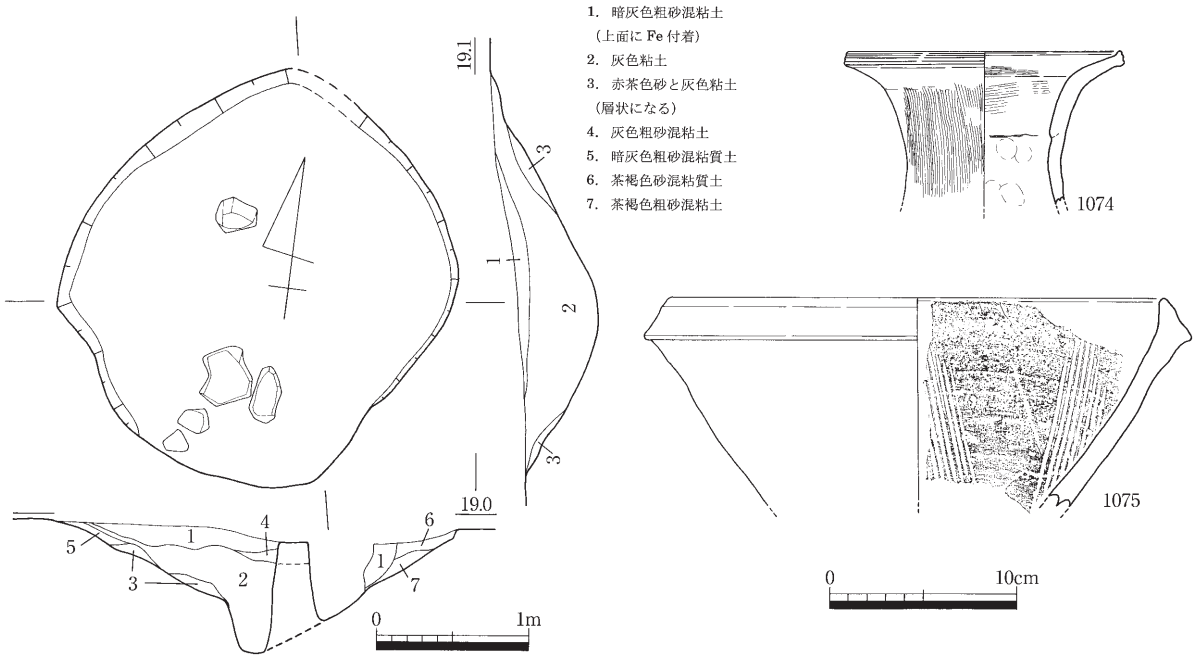


第257図　M②SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M①SX01（第258図）

M①区中央北壁寄り、第２面で検出した土坑状の不明遺構である。M①SR02が埋没した後に掘り込まれている。2.8m×2.7mの楕円形を呈し、深さは0.8mを測る。断面形状は不整逆三角形を呈している。

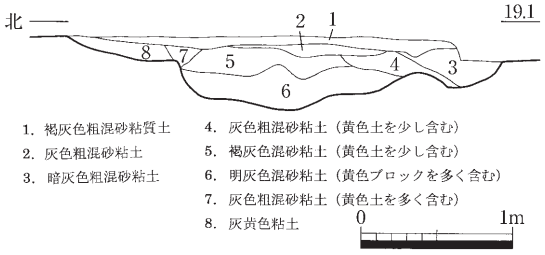
底面には小児頭～人頭大の亜角礫が数個入れられていた。1074・1075はM①SX01として取り上げられていた遺物である。1074は弥生土器壷である。長めの頸部から大きく外反する口縁部を有し、端部は小さく拡張させて凹線をめぐらす。弥生時代後期前半に位置づけられる。1075は須恵器すり鉢である。内面には７～８条１単位の卸し目を施している。13世紀代の東播系のすり鉢である。これ以外にも小量の弥生土器片が出土していることもあり、出土状況がはっきりしない1075を混入と考えて、ここでは当遺構を弥生時代後期に属するものと判断しておく。



第258図　M①SX01平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M②SX01（第259図）

M②区南西隅で検出した不定形な落ち込み状を呈する不明遺構である。その一部はM①区にまで広がっており、南方は調査区外へ続いている。断面観察によると、下半には粘土ブロックの混入がみられ、人為的に埋め戻されている可能性が高いが、上半は自然埋没のようである。図化できなかったが、弥生時代後期に属する土器片が少量出土している。



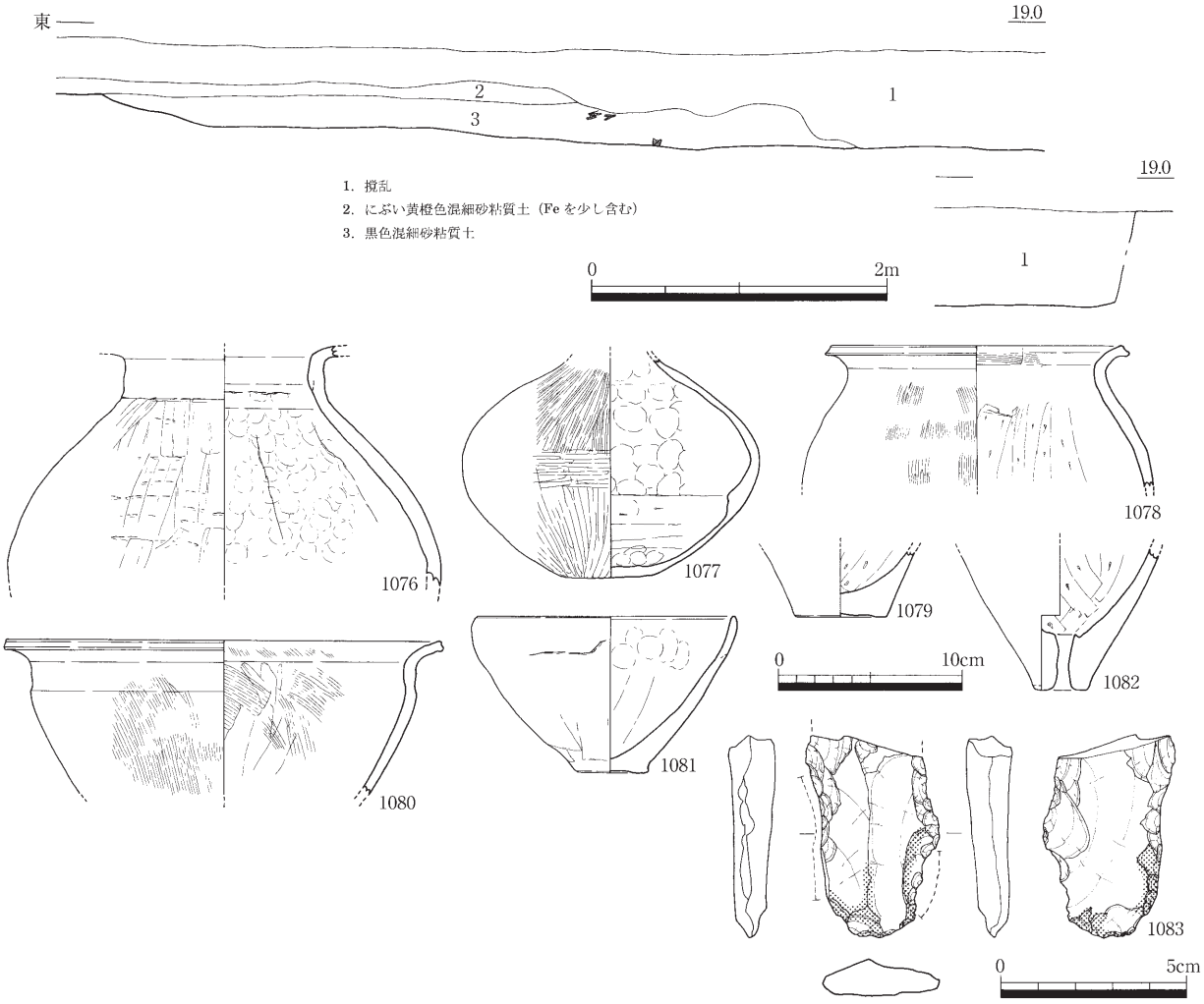
第259図　M②SX01断面図(1/50)

M③SX01（第260図）

M③区南側の西半で検出した落ち込み状を呈する不明遺構である。調査区の一部にかかるだけのため、全体の形状や規模は不明である。検出した部分で深さ66㎝を測る。底面は西方に向かってなだらかに下がっていく。上半には現代の撹乱が及んでいるが、下半には弥生土器片多数を含んだ混細砂粘質土層が堆積していた。

1076～1083はその土層から出土したものである。1076・1077は弥生土器壷である。1076はなで肩の体部に短く直立する頸部が付き、さらに大きく外方に屈曲する口縁部を持つものである。外面にタタキ調

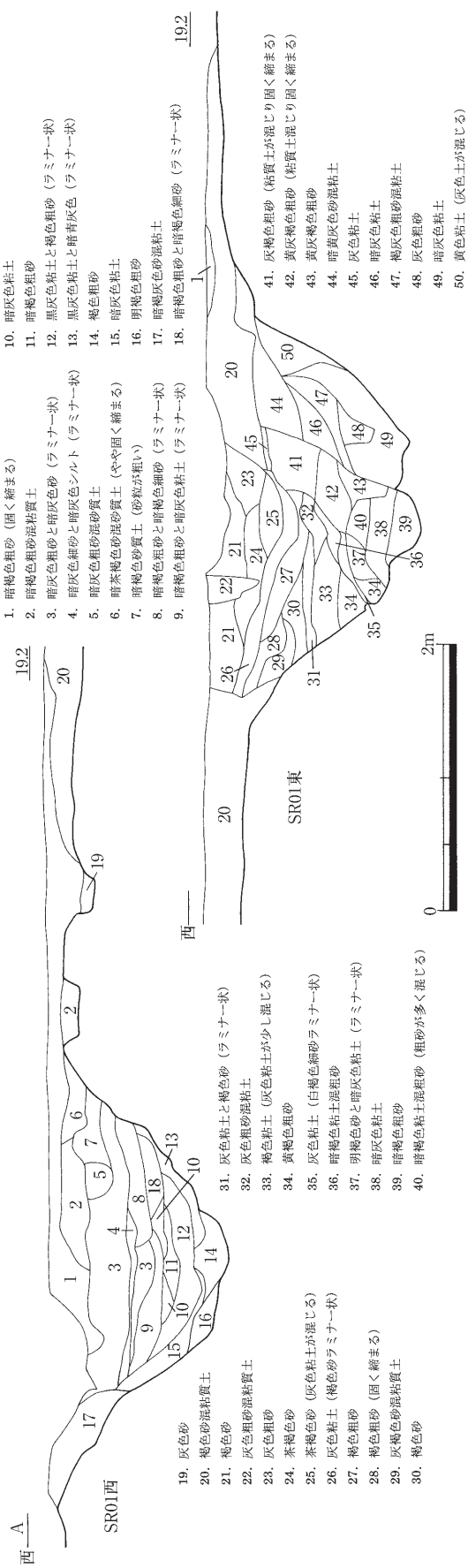
整の痕跡が残る。1077はタマネギ形の胴部で平底を有している。外面のヘラミガキ調整が顕著な、「下川津Ｂ類」土器である。細長い口頸部は欠損している。1078・1079は弥生土器甕である。強く外反する口縁部を持つ1078は端部を肥厚させて擬凹線１条をめぐらす。1079は平底の甕底部である。1080・1081は弥生土器鉢である。外反する口縁部を持つ1080と直口口縁の1081がみられる。1081は平底を有している。1082は弥生土器甑で、尖り気味の底部中央に１穴を穿っている。1083はサヌカイト製の打製石斧である。刃部には使用による磨滅痕がみられる。これらはその形状から弥生時代後期に属するものである。



第260図　M③SX01断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/4）

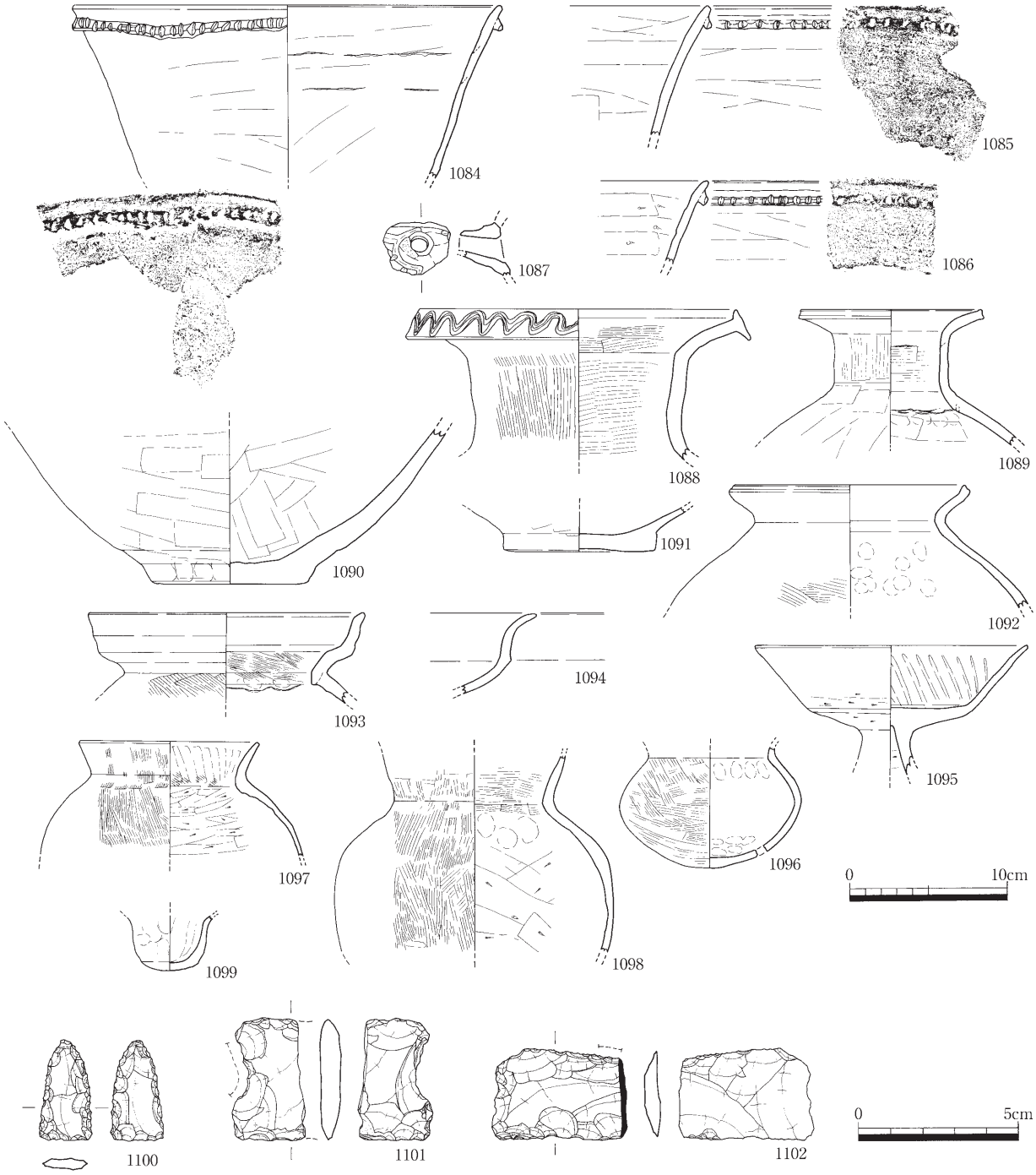
M①SR01東（第261～263図）

M①区西半、第２面で検出した自然河川である。横断道調査Ⅰ①・②・④区で検出した自然河川が、高松東道路調査Ｃ区を経由（SR01）して、M区に顔を出したものである。高松東道路調査Ｃ区南端付近の未調査部分で２つに分岐しているものと思われ、M区では北東から南西に向かって流下する２つの流路を検出した。西側をM①SR01西、東側をM①SR01東と呼称している。M①SR01東は北東から流下してくるM①SR02と合流している。M①SR01東は検出長18.3m、幅3.5m、深さ1.8mの規模を測る。埋土は砂層と粘質土層の互層がみられ、流水・滞水を繰り返しながら埋没していったことがわかる。それらは上下に二分して捉えられることから、上・下層に分けて遺物の取り上げを行っている。



第261図M①SR01東・01西断面図(1/50)

1084～1102は下層から出土した遺物である。このうち1084～1096・1100～1102は北半部で、それ以外は南半部で出土している。1084～1086は凸帯文土器深鉢である。全体の器形が判明するものはないが、1084・1086は砲弾形、1085は屈曲形の体部と推定される。いずれも口縁部外面に１条の刻み目突帯をめぐらせたもので、外面には炭化物の付着が認められる。縄文時代晩期後半の土器である。1087は注口土器の注口部分である。注口の横には太い沈線文がみられる。縄文後期前半の永井Ⅰ式に相当するものであろう。1088～1091は弥生土器壷である。1088は外方へ開き気味に直立する頸部から開く口縁部を持ち、端部は上下に拡張して櫛描き波状文を施している。1089は直立する頸部から外方へ開く口縁部を持ち、端部に凹線１条をめぐらせている。1090・1091は突出気味の平底となっている。1092・1093は土師器甕である。1092は球形の体部に内弯する口縁部が付くもので、口縁端部を肥厚させている。外面にススが付着している。1093は二重口縁を持つ甕である。1094は弥生土器高杯で、屈曲部から大きく外反する口縁部を持つ。1095は土師器高杯で、屈曲部から直線的な口縁部を持つ。1096は土師器小型丸底壷である。胴部下位に焼成後の穿孔が１つみられる。1097・1098は土師器

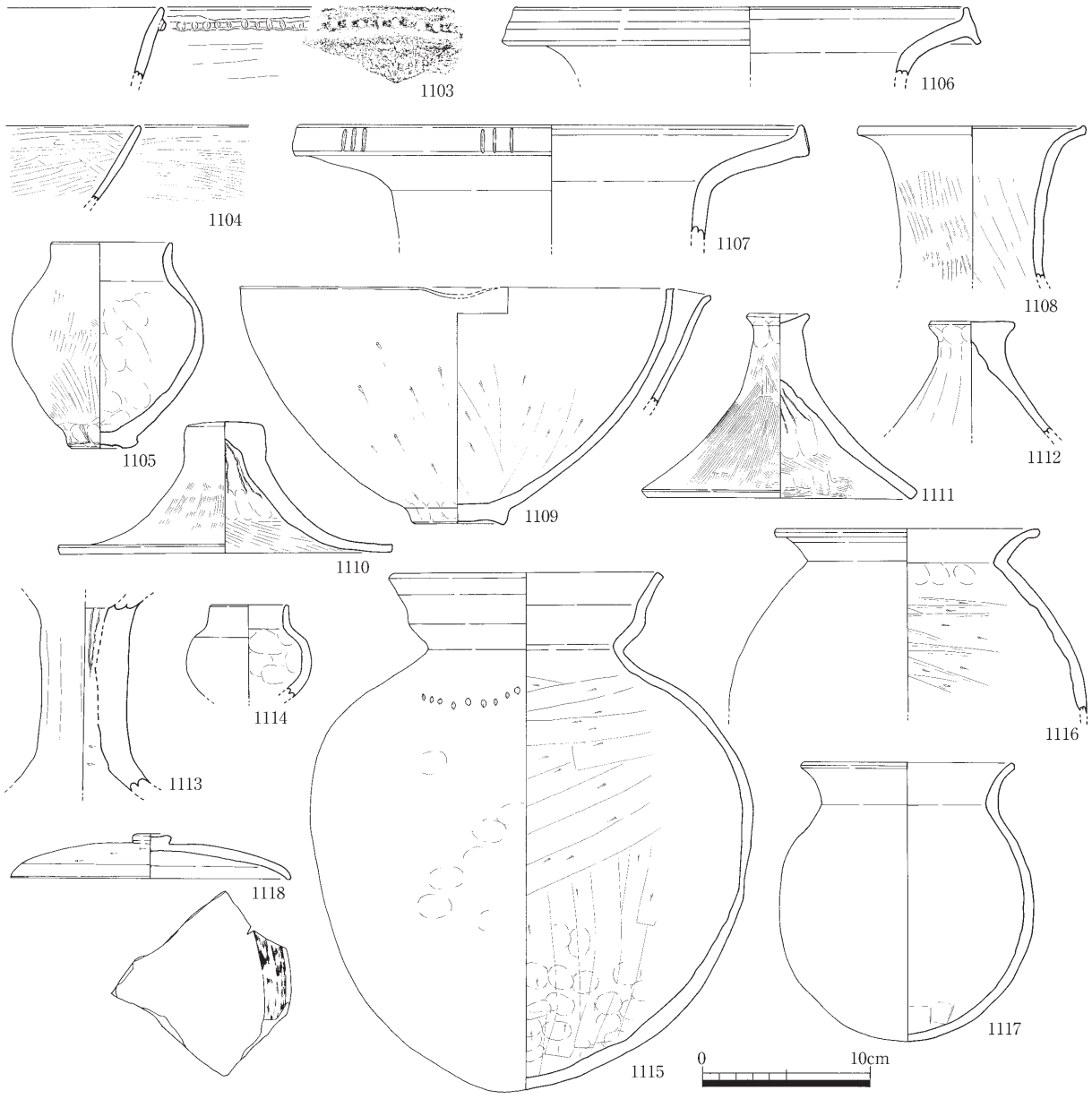


第262図　M①SR01東出土遺物①(1/2、1/4)

甕である。球形の胴部に短い口縁部が付いた布留系の甕である。どちらも外面に炭化物が付着している。1099は手捏ねのミニチュア土器である。甕を模したものであろうか。1100は平基式の打製石鏃、1101は打製石庖丁、1102は楔形石器で、いずれもサヌカイト製である。1102は側縁部にツブレがみられることから楔形石器と判断した。これら下層から出土した弥生土器・土師器は弥生時代後期～古墳時代初頭にかけての年代が想定されるものである。

1103～1118は上層から出土した遺物である。1103は凸帯文土器深鉢である。口縁部外面に刻み目突帯１条をめぐらせる。外面に炭化物の付着がみられる。1104は黒色磨研土器浅鉢である。内外面のミガキ

調整が顕著である。これらは縄文時代晩期後半に属する。1105～1108は弥生土器壷である。1105はタマネギ形の胴部に直立気味の短い口縁部がつく形態で、突出気味の平底を有している。壷と甕の中間形態のようである。1106・1107は直立する頸部から口縁部が大きく開くもので口縁端部を拡張している。1106は凹線2条をめぐらし、1107は3つ1組の刻み目を施している。1108はラッパ状に開く長い頸部を持つものである。1109は弥生土器鉢で、内弯する直口口縁にわずかにくぼませた片口が付く。突出気味の平底である。1110～1112は弥生土器蓋である。1110はやや扁平だが、1111・1112は器高が高く、甕の蓋であろう。1113は土製支脚である。円筒形の体部から大きく開く裾部を持つ。胎土中に粗い砂粒を多く含んでいる。1114は土師器小型丸底壷で、直立する短い口縁部を持つ。1115～1117は土師器甕である。1115はやや尖り気味の丸底をした球形の胴部に二重口縁が付く。肩部には9つの籾圧痕状の模様が施されている。1116は強く屈曲して外反する口縁部、1117は屈曲して直立気味に外反する口縁部に丸底を有



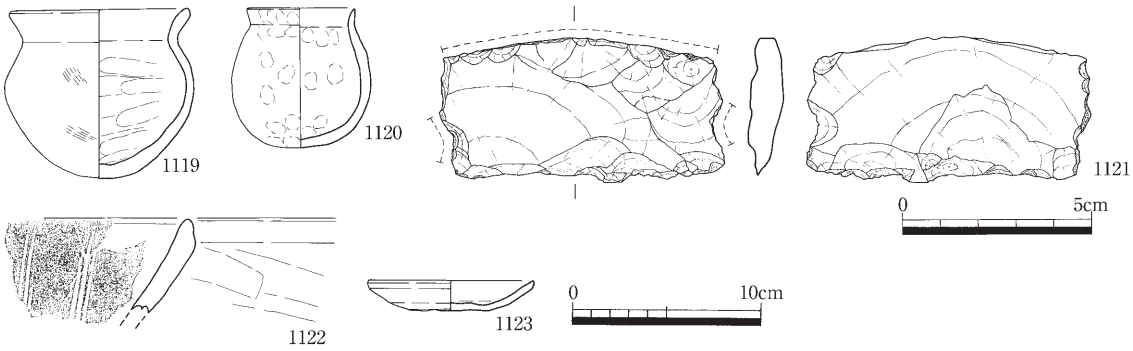
第263図　M①SR01東出土遺物②(1/4)

した甕である。1118は土師器蓋である。扁平な摘みが付き、外面全面と口縁端部内面の幅約２㎝部分に赤彩の痕跡が残る。８～９世紀に属するものである。縄文土器1103・1104と土師器蓋1118を除いた土器は、弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられるものであり、下層出土とした土器群と年代差は認められない。このことは強い水流による攪拌が幾度もあったことを示唆するものといえよう。

M①SR01西（第261・264図）

M①区北西隅付近、第２面で検出した自然河川SR01の西側の流路である。先述した東側の流路M①SR01東とほぼ平行しており、北東から南西方向に流下している。埋土の堆積状況もよく似ており、砂層と粘質土層の互層がみられる。M①SR01東からは多量の遺物の出土が伝えられているが、SR01西からの出土は少ない。埋土中から1119～1123の遺物が取り上げられている。

1119・1120は最上層から出土したとされる土師器小型丸底壷である。1119は扁球形の胴部に外反する短い口縁部が付く。1120は球形の胴部に屈曲の弱く短い口縁部が付く。古墳時代初頭に位置づけられる。1121はサヌカイト製の打製石庖丁である。弥生時代に属するものであろう。1122は土師器すり鉢で、内面に３条１単位の卸し目が施されている。1123は土師器杯である。1122・1123は第１面の中世の遺物が取り上げ時に混入したのであろう。1119・1120の年代観をM①SR01西の最終埋没時期と判断しておく。



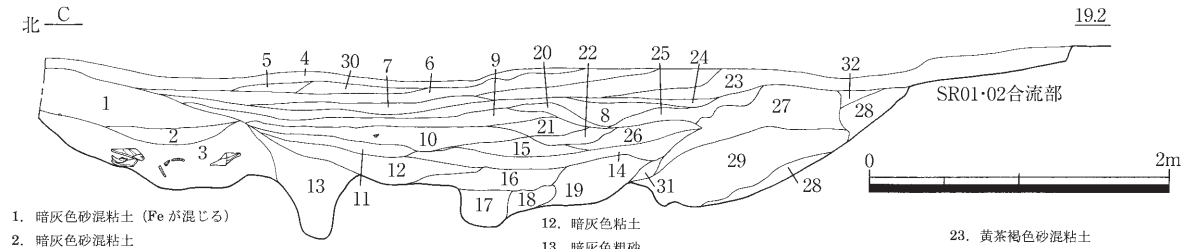
第264図　M①SR01西出土遺物（1/2、1/4）

M①SR02（第265～267図）

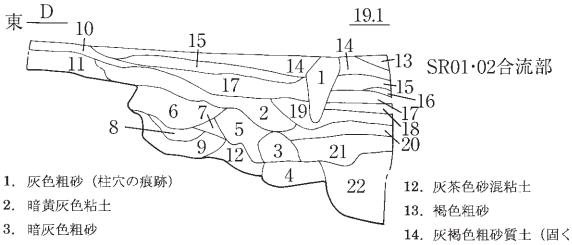
M①区北東隅付近、第２面で検出した自然河川である。M①SR01東に合流している。検出長10.3m、幅3.8m、深さ0.5mの規模を持ち、緩やかに弧を描いて合流している。断面形状は浅い皿形を呈しており、M①SR01東との底面の比高は約80㎝を測る。合流部の断面観察からはM①SR01東がある程度埋没したところへM①SR02が流れ込んでいるような状況が推測される。検出部のほぼ中央付近に拳大の礫と土器の集中する箇所がみられる。また、合流部付近でも多数の土器片が認められた。

遺物の取り上げは合流部付近と土器集中部とそれ以外のSR02部分に分けて行っているようなので、それに合わせて遺物を報告する。

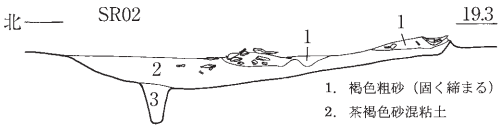
1124～1132は合流部付近で取り上げたものである。1124は弥生土器壷である。内傾して立ち上がる長い頸部に大きく屈曲して開く口縁部が付くもので、口縁端部は上方に拡張して凹線２条をめぐらす。頸胴部の境には刺突文を施し、その上位にはヘラ描き沈線を４条めぐらせている。弥生時代後期に属する。1125は土師器壷で、丸底を持つ球形の胴部に短く直立気味の口縁が付く。外面の粗いハケ調整が顕著である。1126は土師器小型丸底壷。胴部外面に炭化物とススが付着している。1127は二重口縁の土師器壷、



1. 暗灰色砂混粘土（Fe が混じる）
2. 暗灰色砂混粘土
3. 暗灰色粘土
4. 褐色粗砂
5. 茶褐色粗砂粘土
6. 褐灰色細砂
7. 褐色砂と黄褐色砂（ラミナー状）
8. 暗灰色粘土
9. 暗灰色細砂と赤茶色細砂（ラミナー状）
10. 赤茶色細砂と暗灰色粘質土と暗褐色砂（ラミナー状）
11. 暗灰色粘土（炭化物が混じる）と明褐色細砂と褐灰色シルト（ラミナー状）
12. 暗灰色粘土
13. 暗灰色粗砂
14. 灰色シルト（明褐色細砂が混じる）
15. 褐色砂と明褐色細砂と茶褐色粗砂（ラミナー状）
16. 灰色粗砂混粘土
17. 灰色粗砂混粘土と黒色砂混粘土と褐色粗砂が入り混じる
18. 暗灰色粘土
19. 暗灰色砂混粘土
20. 暗褐色砂質土
21. 暗褐灰色粘質土
22. 暗褐灰色粘質土と黄褐色砂（ラミナー状）
23. 黄茶褐色砂混粘土
24. 暗灰褐色粘土
25. 暗灰色粘土（砂が少し混じる）
26. 暗灰褐色粗砂
27. 黄灰色砂混粘土
28. 黄色粘土
29. 暗褐色砂混粘土
30. 灰褐色粗砂質土（固く締まる）
31. 褐色粗砂混粘土
32. 黄色粘土（灰色土が混じる）

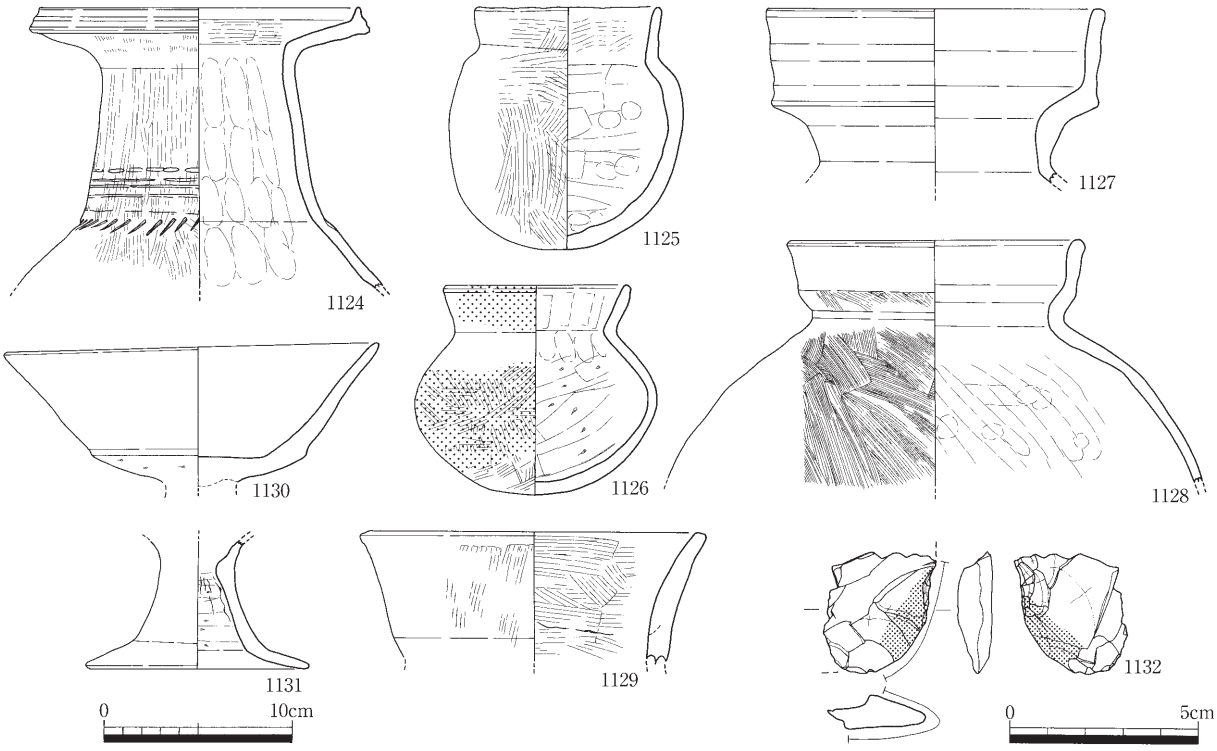


1. 灰色粗砂（柱穴の痕跡）
2. 暗黄灰色粘土
3. 暗灰色粗砂
4. 暗灰色粘土
5. 暗黄灰色粘土（砂を多く含む）
6. 黄灰色粘土
7. 暗灰色粘土（白褐色粗砂が筋状に入る）
8. 黄白色粘土ブロック
9. 黄灰褐色粘土
10. 暗褐色粗砂混粘土
11. 暗褐色砂混粘土
12. 灰茶色砂混粘土
13. 褐色粗砂
14. 灰褐色粗砂質土（固く締まる）
15. 褐灰色粗砂
16. 褐色砂と黄褐色砂（ラミナー状）
17. 暗灰色粘土
18. 暗灰色細砂と赤茶色細砂（ラミナー状）
19. 赤茶色細砂と暗灰色粘質土と暗褐色砂（ラミナー状）
20. 暗灰色粘土（炭化物が混じる）と明褐色細砂と褐灰色シルト（ラミナー状）
21. 暗灰色粘土
22. 暗灰色粗砂

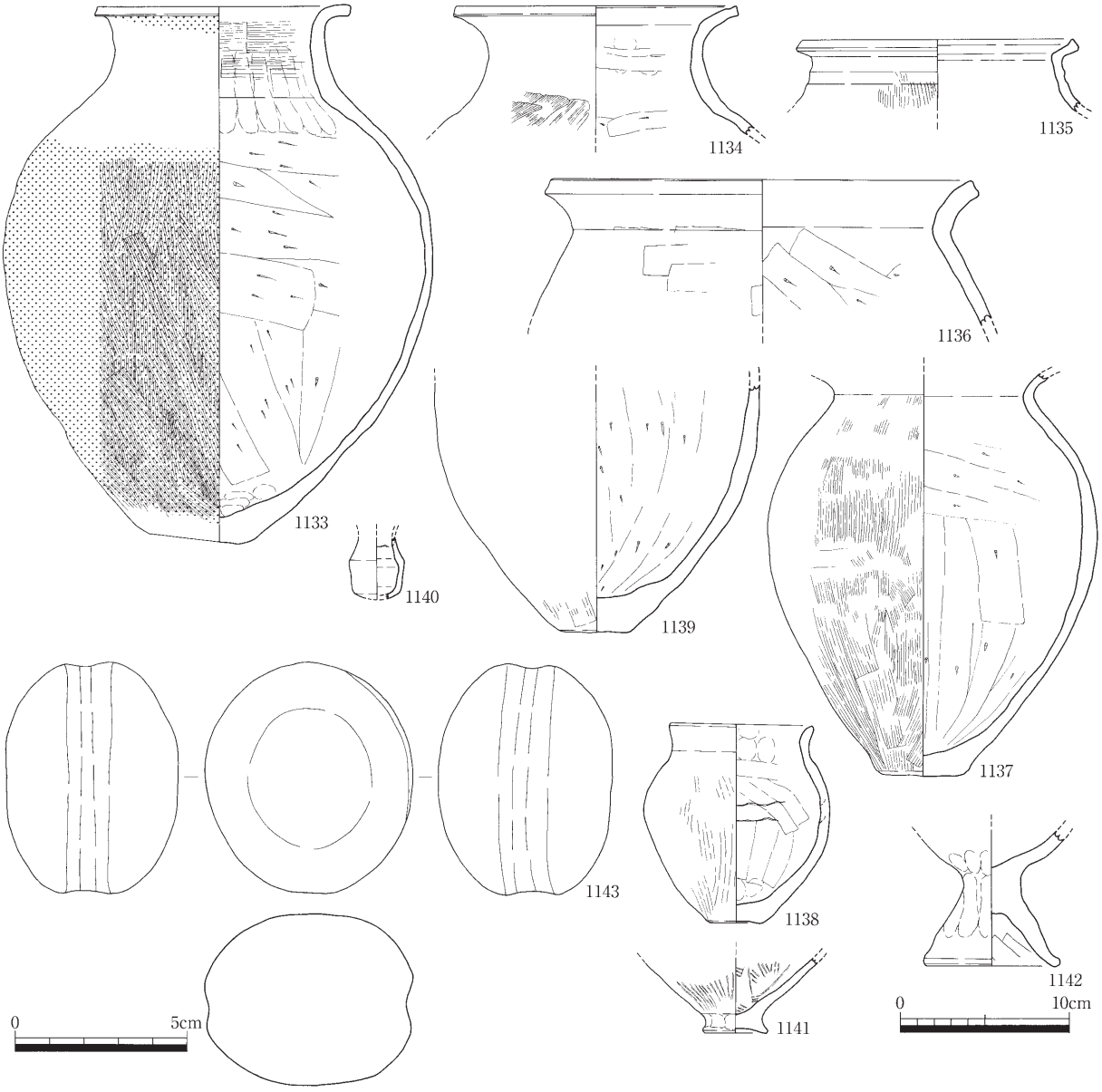


1. 褐色粗砂（固く締まる）
2. 茶褐色砂混粘土
3. 暗灰色粘土

第265図　M①SR01·02合流部·02断面図（1/50）



第266図　M①SR01·02合流部出土遺物（1/2、1/4）



第267図　M①SR02出土遺物(1/2、1/4)

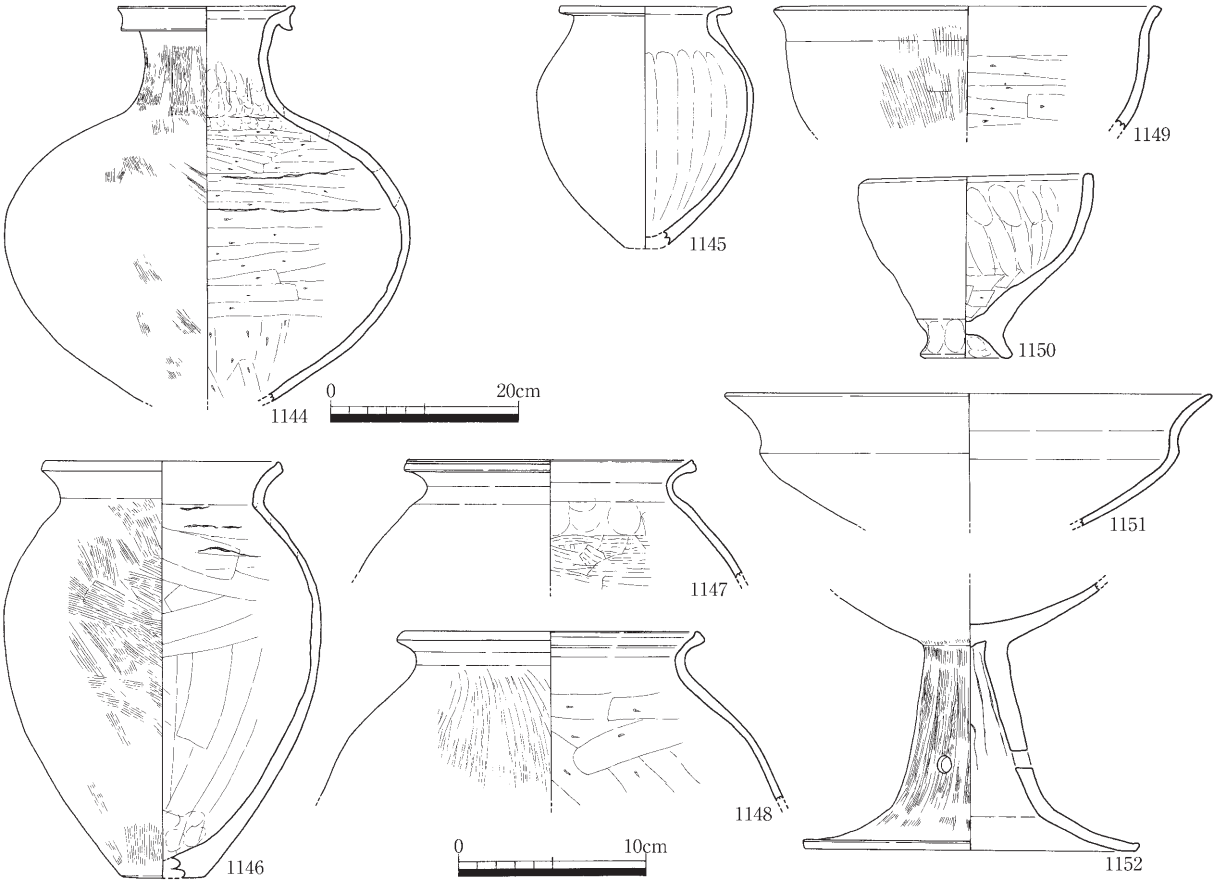
1128は二重口縁気味の土師器甕である。1129は外反気味に開く口縁部を持った土師器甕である。1130・1131は土師器高杯。1132はサヌカイト製の打製石斧で、刃部に使用による磨滅がみられる。古墳時代初頭に位置づけられる土師器が目立っている。

1133～1143はM①SR02として取り上げた遺物である。1133・1134は弥生土器壷である。1133は縦長の胴部に外反する頸部と大きく開く口縁部が付いた形態で、端部は面取りをしている。底部は平底である。胴部外面にススの付着が著しい。1134も同様の器形であろう。1135～1139は弥生土器甕である。強く屈曲する口縁部をした1135は「下川津Ｂ類」土器である。1136は屈曲して外反する口縁部を持ち、胎土や焼成、色調などから平底を持った1139と同一個体の可能性がある。1137は扁球形の胴部をした甕で、平底である。外面のハケ調整が顕著である。1138は小型の甕と判断した。1140はミニチュア土器で、壷を模したものであろうか。1141は弥生土器鉢で、突出した脚台が付く。1142は弥生土器高杯である。胎

土中に多量の砂粒を含み、指ナデや指押さえの痕跡が残されたままの作りの粗い土器である。弥生時代前期に属する可能性がある。1143は閃緑岩製の有溝石錘である。

1144～1152はM①SR02中央付近の土器集中部から出土したものである。1144弥生土器壷で、大型品である。胴部中位が強く張ったタマネギ形で、外反気味の長い頸部が付く。口縁部は強く折り返し、端部は上下に拡張させている。底部は見つかっておらず、意図的に打ち欠いてから投棄した可能性がある。1145～1148は弥生土器甕である。1145は倒卵形の胴部に強く屈曲した口縁部が付く形態で、平底である。1146は椎の実形の胴部に外反する口縁が付く。平底を持つ。1147・1148はなで肩の胴部に強く屈曲する口縁が付くもので、端部は肥厚させている。1149・1150は弥生土器鉢である。1149は軽く如意状に曲った口縁部を持つ。1150は内弯する直口口縁で、突出した脚台を持つ。1151・1152は弥生土器高杯である。これらは形状から弥生時代後期に位置づけら

第268図　M①SR02土器集中部平面図(1/50)

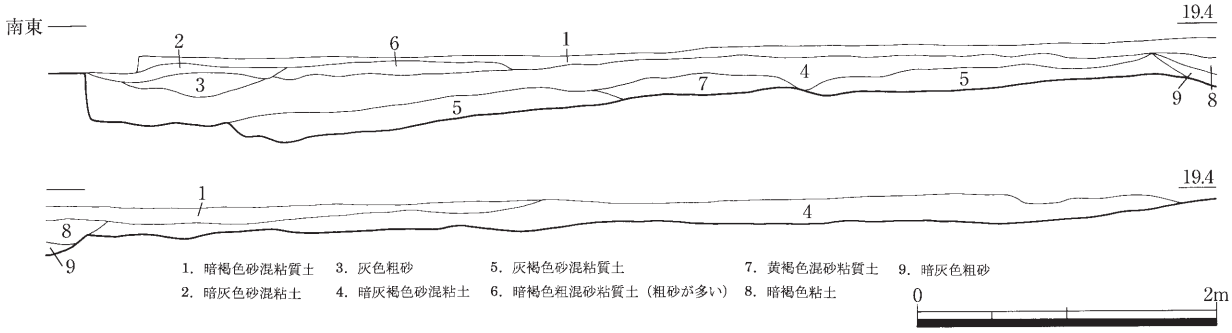


第269図　M①SR02土器集中部出土遺物(1/4、1/8)

れる。土器には磨滅があまりみられないことから、河川の南岸から投棄された可能性が高い。

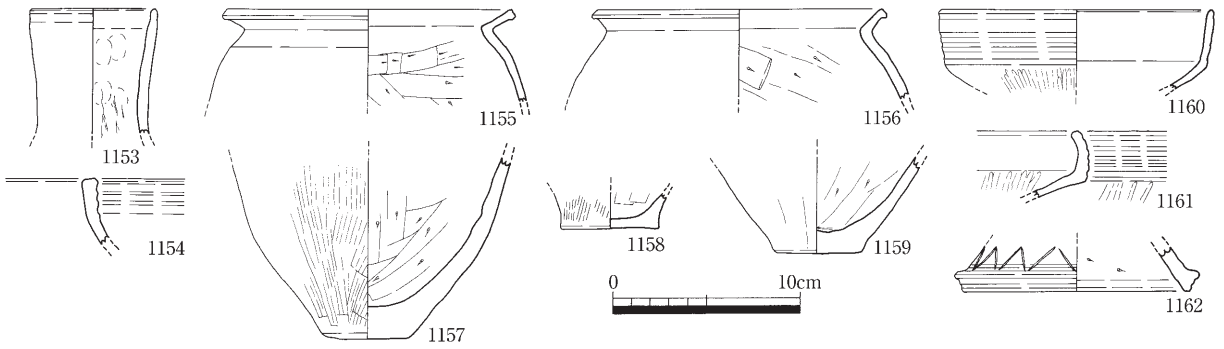
M②SR01（第270・271図）

M②区南東隅一帯で検出した落ち込みである。南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、東に隣接するN③区の自然河川の北西側にだらだらと広がっていた落ちであろう。調査時には自然河川としたため、ここでも自然河川として扱う。東南隅あたりで深さ0.6mの規模を持つ。埋土は基本的に粘質土であるが、自然河川に近い南東隅にラミナー状をした粗砂層がみられる。このことから、普段は湿地状に近く洪水時は部分的に浸水する状況にあったと復元できる。



第270図　M②SR01断面図(1/50)

埋土中から1153～1162が出土している。1153は弥生土器壷である。直口口縁をもつ細頸壷の頸部で、口縁端部外面に凹線１条を施す。「下川津Ｂ類」土器である。1154は口縁端部を肥厚させ、外面に凹線３条をめぐらせた無頸壷と判断したが、鉢の可能性もある。1155～1158は弥生土器甕である。1155・1156は強く屈曲する口縁部を持つもので端部を肥厚させている。1157・1158は平底の甕底部である。1159は弥生土器鉢の底部で、平底を持つものと判断したが壷底部の可能性もあろう。1160～1162は弥生土器高杯である。杯部は屈曲を持ち、1160は外へ開き気味の直立した口縁を、1161は内弯して立ち上がる口縁が付く。ともに外面には凹線を数条めぐらせている。1162は外へ開いた裾部端部に面を持ち凹線をめぐらせた脚部である。ヘラ描きの山形文を施している。これらの土器はその形状から弥生時代中期末～後期に位置づけられるものである。これらの土器は全体的な磨滅が認められることから、近辺から投棄されたものではなく、上流から流されてきた可能性が強い。

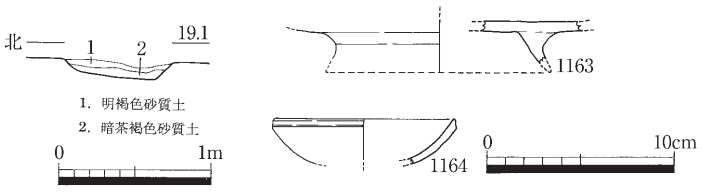


第271図　M②SR01出土遺物(1/4)

（２）古代の遺構・遺物

M①SD01（第272図）

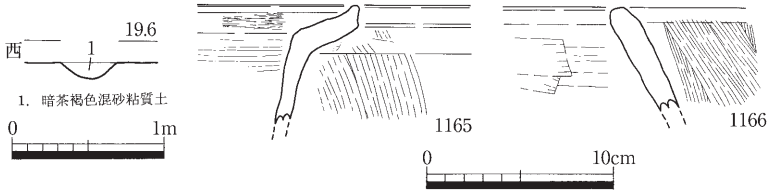
M①区南西隅付近、第１面で検出した検出長4.0m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は皿形を呈し、N79°Wの方向を有する。埋土から1163・1164が出土した。1163は土師器皿と思われ、高い高台を持つ。1164は土師器杯で、口縁部外面に小さな段を持つ。８世紀代に位置づけられよう。



第272図　M①SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M②SD01（第273図）

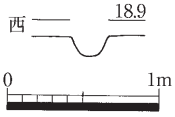
M②区北西隅付近で検出した検出長6.6m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N２°Eとほぼ真北方向を有している。1165は土師器甕で、内外面のハケ調整が顕著である。1166は甑の口縁部である。９～10世紀の年代が想定される。



第273図　M②SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SD08（第274図）

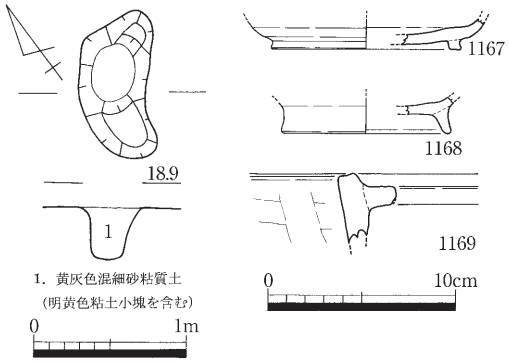
M③区北側の東半北壁寄りで検出した検出長2.5m、幅0.3m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状はU字形を呈し、N16°Eの方向を有する。大部分が中世の溝M③SD01によって消滅している。図化できなかったが10世紀代に比定できる土器片が少量出土した。



第274図　M③SD08
断面図(1/50)

M③SK11（第275図）

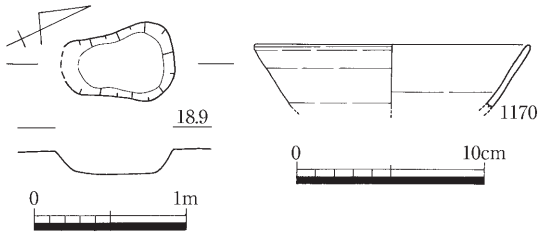
M③区北側の東半中央付近で検出した不整楕円形を呈した土坑である。95cm×45cm、深さ35cmの規模で、断面形状は逆台形を呈している。埋土中には粘土ブロックが認められ、人為的に埋め戻されたと判断できる。埋土中から1167～1169が出土した。1167は須恵器椀である。内面見込み部分に仕上げナデを施している。1168は土師器椀で、高い高台が付く。1169は土師器羽釜である。ほぼ水平な鍔を貼り付けている。これらは10世紀代に位置づけられる土器である。



第275図　M③SK11平･断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

M③SK12（第276図）

M③区北側の東半ほぼ中央で検出した隅丸長方形を呈した土坑である。南端を中世の柱穴によって壊

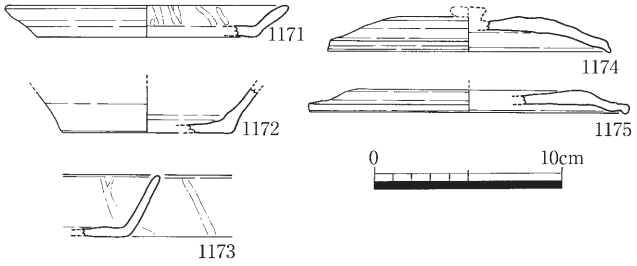


第276図　M③SK12平･断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

されている。75㎝×50㎝、深さ15㎝の規模を持ち、断面形状は皿形を呈している。埋土中から1170が出土している。1170は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀である。10～11世紀の年代に位置づけられようか。

M③SX02（第277図）

M③区北側の東半ほぼ中央で検出した溝状を呈する不明遺構である。北端を中世の溝M③SD01によって壊されている。南側は調査区外へ続くが、M③区南側までは伸びていない。検出長3.9m、幅1.9m、深さ0.3mの規模を持つ。埋土からは1171～1175が出土した。1171は須恵器皿、1172・1173は須恵器杯、1174・1175は須恵器蓋である。蓋は口縁端部をわずかに下方に折り曲げている。これらの形状から８～９世紀代に位置づけることができる。

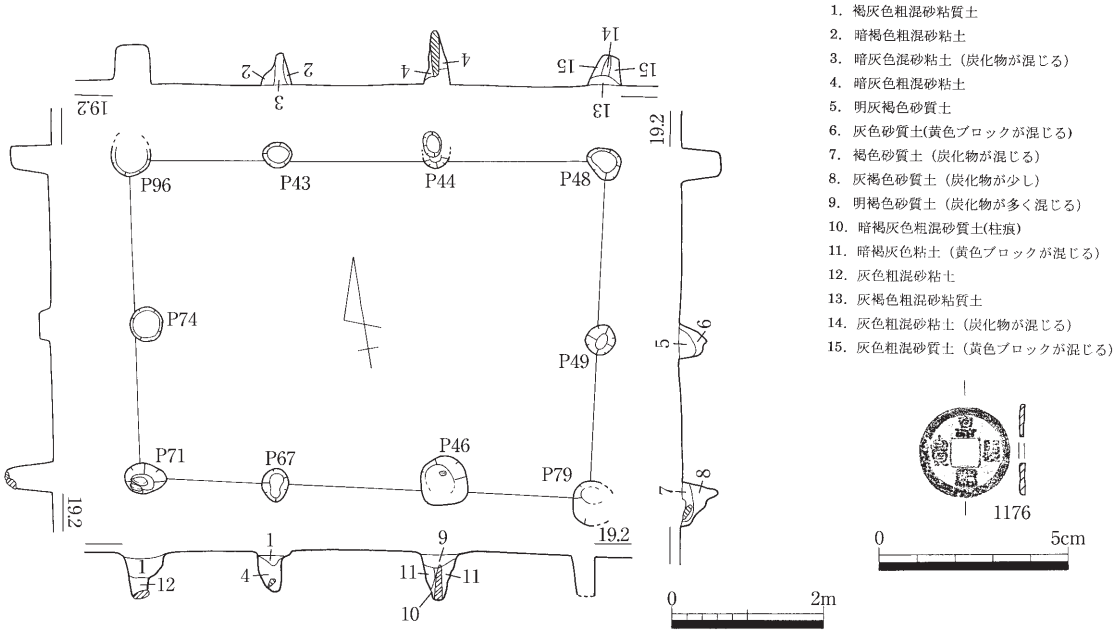


第277図　M③SX02出土遺物(1/4)

（３）中世の遺構・遺物

M①SB01（第278図）

M①区北西隅付近、第１面で確認した２間×３間の掘立柱建物跡である。4.5m×6.2mの規模で、床面積は27.6㎡を測る。建物主軸はN79°Wの方向を有する東西棟である。この方向は建物の南・東方に位置するM①SD02とほぼ同じ方向にあたっており、何らかの関係が想定される。建物を構成する柱穴

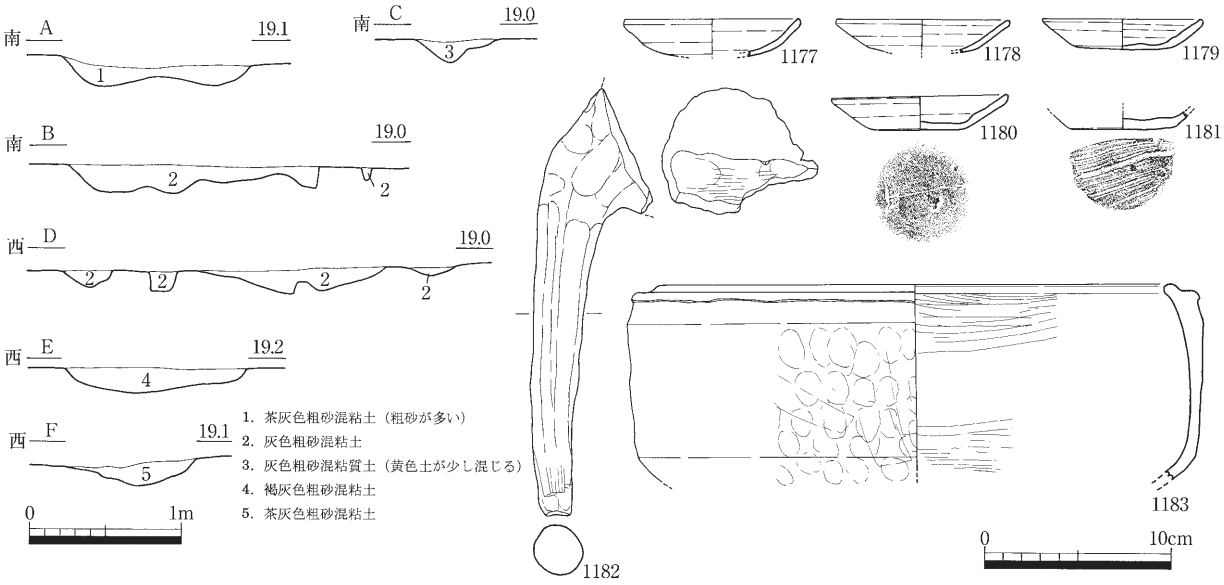


第278図　M①SB01平･断面図(1/100)、出土遺物(1/2)

のうち、SP46・SP44には直径15㎝程度の柱痕が遺存していた。柱穴内には拳大の亜円礫が含まれるものも数基認められ、SP71は礎石としてそれ以外は詰め石として使用されたものとみられる。出土遺物は少ないが、SP44・SP71からは中世土器と思われる小片が出土した。また、SP71からは銅銭1176が出土している。1176は北宋銭「嘉祐通寶」で、1056～1063年に鋳造されたものである。年代的な根拠に乏しいが、中世に位置づけられる建物である。

M①SD02（第279図）

M①区西半、第１面で検出した検出長30.5m、幅2.1m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。溝の本体は直角に折れ曲がる南・東辺部分と思われ、南辺ではN79°Wの方向を有する。屈曲部を東へ突き抜ける部分や、南辺から直角に北へ短く伸びる部分などがみられる。断面形状は基本的には浅い皿形を呈しているが、南辺では底面が２条の小溝状を呈している箇所がみられるなど、一定していない。M①SD02の北東側には掘立柱建物跡M①SB01や柱穴が多数存在しており、溝である以上、水を流す目的はもちろんであるが、それ以上に土地を区画する目的が強くうかがえるものである。

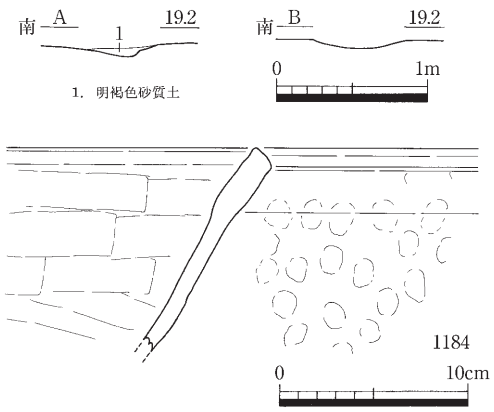


第279図　M①SD02断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

埋土中から1177～1183の遺物が出土している。1177～1181は土師器杯である。底部は1181が静止糸切りである以外はすべて回転ヘラ切りで、1180には板状圧痕が残る。1182・1183は土師器足釜である。1183は口縁部外面に形骸化して突帯状になった鍔がみられる。これらの特徴から、14世紀の年代が想定される。

M①SD05（第280図）

M①区中央部、第１面で検出した検出長25.8m、幅1.0m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝である。断面形状は浅い皿形を呈し、N75°Wの方向を有している。先述した14世紀代の溝M①SD02が埋没した後に掘られて



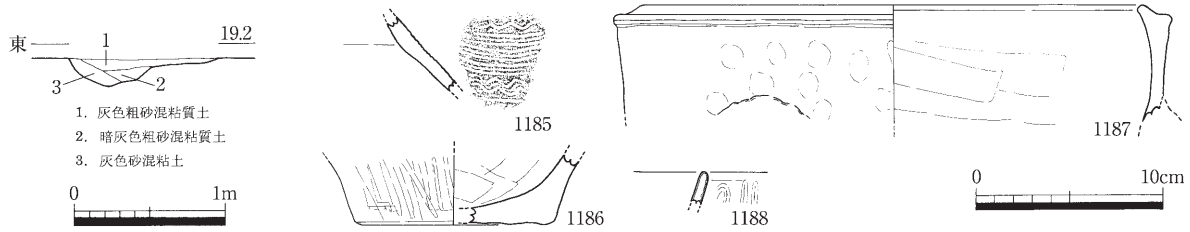
第280図　M①SD05断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

いる。埋土から土師器土鍋1184などが出土しているが、遺物の出土量は少ない。1184の形状から14世紀頃に位置づけて考えるのが妥当であろう。

M①SD09（第281図）

M①区中央付近、第１面で検出した検出長9.6m、幅1.0m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。北端付近はM①SD05に壊されており、南端は調査区外に続いていく。途中、M①SD02の屈曲部から東に延びる部分と交わるが、土層観察からは先後関係は認められず、同時期に機能していたものと判断される。断面形状は浅いU字形を呈し、N15°Eの方向を有する。M①SD02とはほぼ直角に交わっている。

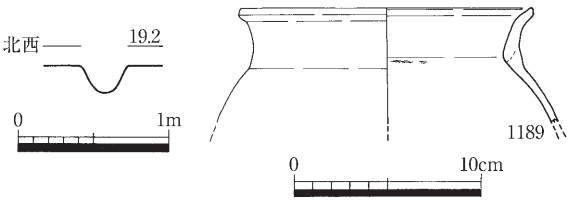
1185～1188は埋土中から出土したものである。1185・1186は弥生土器壷である。1185は壷の肩部で、外面に３条１単位の櫛描き沈線や櫛描き波状文が施されている。弥生時代中期前半に属する。1186は平底の壷底部で、弥生時代後期頃に位置づけられよう。これらは下位の遺構からの混入とみられる。1187は土師器足釜で、口縁部外面に形骸化して突帯状になった鍔が付く。14～15世紀代に位置づけられる。1188は青磁椀の破片である。外面に文様の一部が残る。



第281図　M①SD09断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M①SD14（第282図）

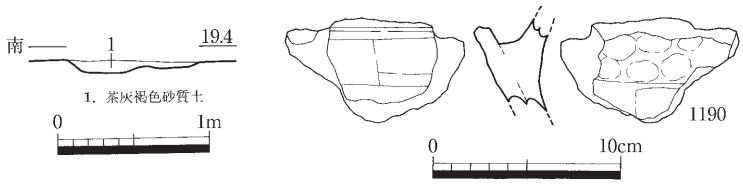
M①区南東隅、第１面で検出した検出長5.1m、幅0.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N35°Eの方向を有する。周囲の中世の溝とは方向が異なっている。図化した土師器甕1189は混入品であり、他に中世土器とみられる小片がわずかに出土している。



第282図　M①SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M①SD15（第283図）

M①区北東隅付近、第１面で検出した検出長6.4m、幅0.9m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。調査区東壁あたりで直角に折れ曲がっている。断面形状は浅い皿形で、南辺部分でN78°Wの方向を有する。南側に位置するM①SD05とはほぼ平行する位置関係にある。埋土から1190の土師器土鍋が出土している。外面に把手が付いており、15世紀代に位置づけることができよう。

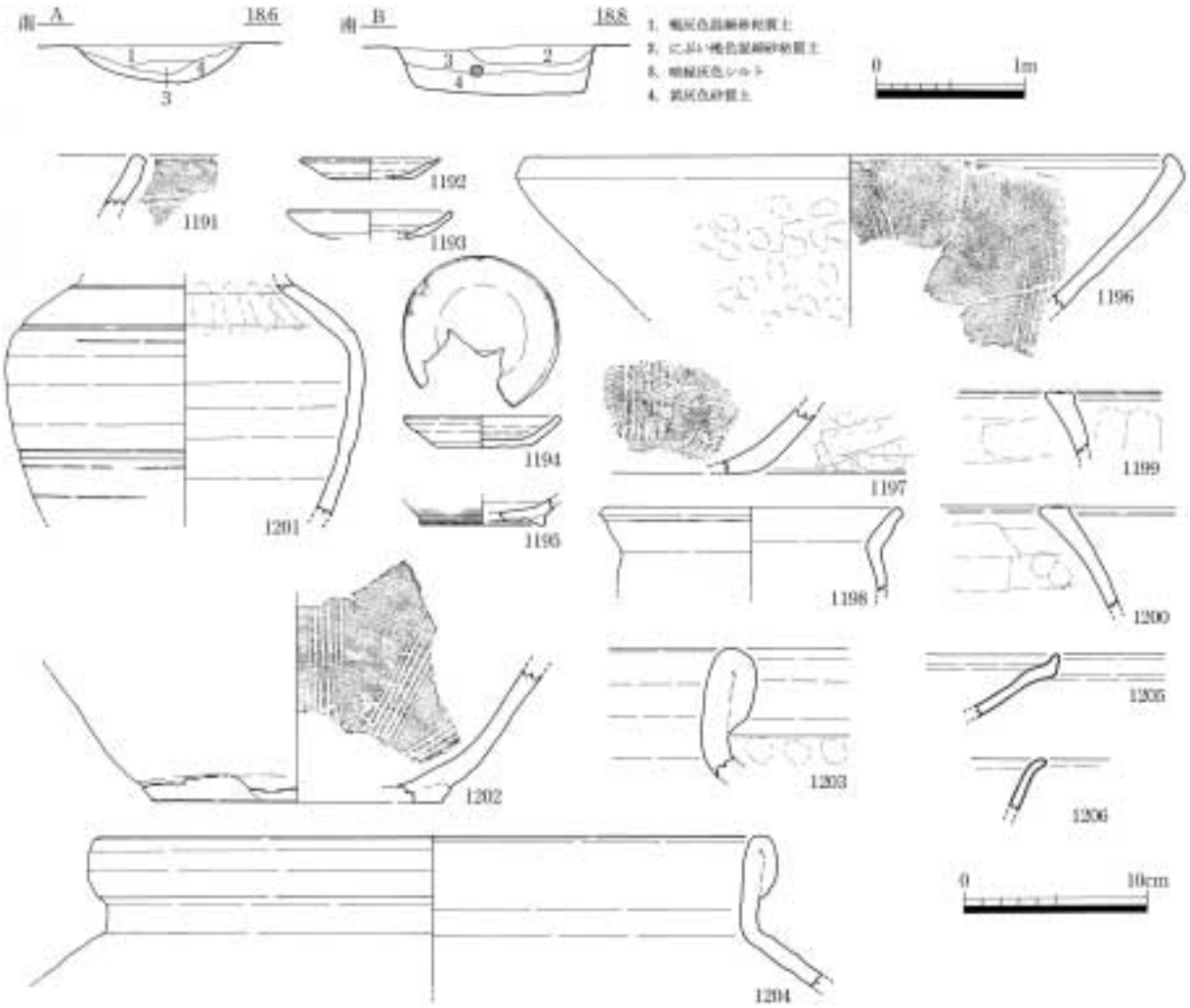


第283図　M①SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

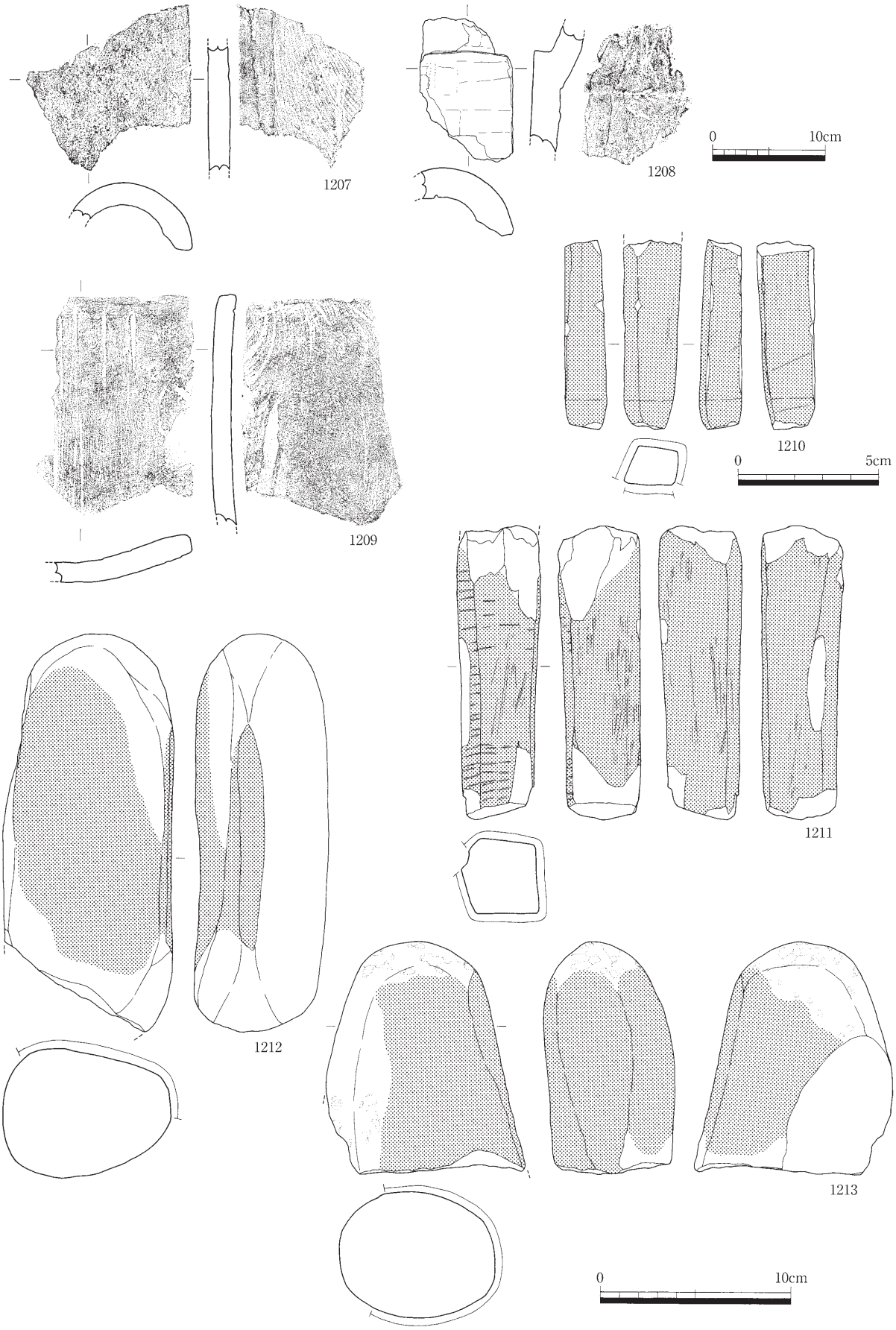
M③SD01（第284・285図）

M③区北側のほぼ全面にわたって検出した、検出長37.9m、幅1.5m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。西端と東端はほぼ直角に南方へ折れ曲がっている。北辺は約30mを測り、N80°Wの方向を有している。断面形状は浅い椀形を呈する部分や逆台形を呈する部分がみられるなど、一定していない。この溝を境にして内側には柱穴が集中してみられる傾向があり、居住域を区画する目的を持った溝の可能性が高い。M③SD01の東辺周辺には溝の北・東側にも柱穴がみられるが、これは北側に隣接する高松東道路調査C区で検出した掘立柱建物跡を含む柱穴群の広がりが続いてきたものと判断でき、時期的に遡るものが多数含まれているものとみられる。

溝の埋土中からは1191～1213の遺物が出土した。1191は須恵器鉢と思われ、外面に櫛描き波状文が顕著である。1192～1194は土師器杯である。1194は口縁端部内面の3箇所にススが付着した痕跡が認められ、灯明皿として用いられたことがわかる。1195は外面に赤彩の痕跡が残る土師器椀で、9世紀代に位置づけられる混入品である。1196・1197は土師器すり鉢で、どちらも内面に6条1単位の卸し目がみられる。1198は土師器の甕で、9世紀代の年代が想定される混入品である。1199・1200は土師器足釜で、どちらも口縁端部に形骸化して突帯状になった鍔がめぐる。1201は須恵器壷、1202は陶器すり鉢である。



第284図　M③SD01断面図(1/50)、出土遺物①(1/4)

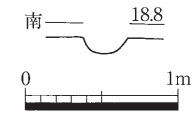


第285図　M③SD01出土遺物②(1/2、1/3、1/5)

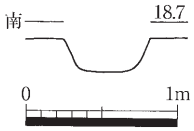
卸し目は6条1単位である。1203・1204は口縁部を折り返して肥厚させた陶器甕で、備前焼であろう。1205は青磁皿、1206は青磁椀である。1207・1208は丸瓦、1209は平瓦である。1208は有段で、1209は凹面に炭化物が付着する。1210～1213は砥石である。1210は流紋岩製、1211は安山岩製でこの2点は全面を砥面とした手持ちの砥石である。1212・1213は砂岩製で2～3面を砥面に使用している。これらの遺物には若干の混入品がみられるが、それ以外は概ね14～15世紀代に属する。

M③SD07（第286図）

M③区北側の東半中央付近で検出した検出長3.6m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝である。断面形状は浅いU字形を呈し、N80°Wの方向を有する。M③SD01北辺と平行している。中世土器片がわずかに出土している。



第286図　M③SD07
断面図(1/50)



第287図　M③SD10
断面図(1/50)

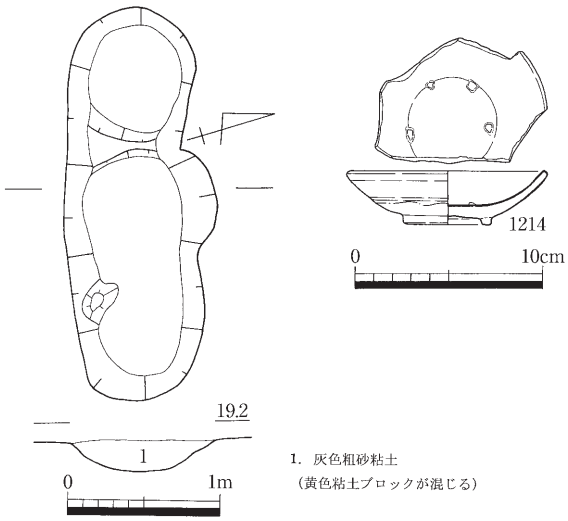
M③SD10（第287図）

M③区北側の中央付近南壁沿いで検出した検出長2.4m、幅0.6m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝である。東端はM③SK04によって壊されている。東方に位置するM③SD11と連続していた可能性が高い。断面形状は浅い逆台形を呈し、N79°Wの方向を有する。中世土器の小片が出土している。

M①SK01（第288図）

M①区南東隅付近、第1面で検出した長楕円形ないし隅丸方形を呈する土坑である。2.6m×1.0m、深さ0.2mの規模を持ち、底面は2つの楕円形土坑が連続したような形態を呈している。断面形状は皿形で、長軸はN77°Wの方向を有している。これはM①SD01南辺の方向とほぼ一致している。

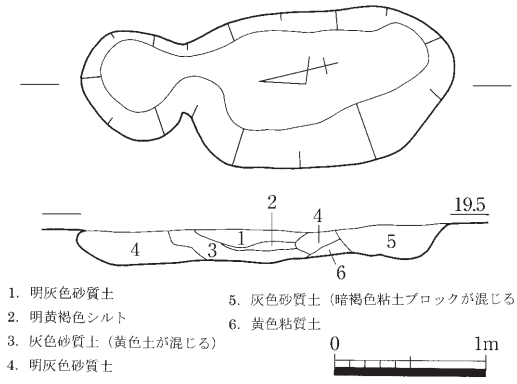
埋土中からは1214が出土した。1214は施釉陶器椀で、内面見込み部に砂目積みの痕跡が残る。底面は糸切り底で、高台の端部も3ヵ所を糸切りで小さく抉っている。15世紀代の年代が想定される。



第288図　M①SK01平･断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

M②SK02（第289図）

M②区ほぼ中央部付近で検出した2つの楕円形がつながったような平面形を呈する土坑である。2.5m×1.0m、深さ0.2mの規模を持つ。断面形状は浅い逆台形を呈しており､長軸はN15°Eの方向を有している。これはM①SD01東辺やM①SD09とほぼ同じ方向である｡埋土の一部には粘土ブロックが混じる土層もあり、部分的でも人為的に埋め戻された可能性がある。図化できなかったが、中世に属すると判断できる土器小片

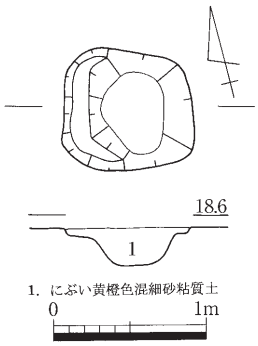


第289図　M②SK02平･断面図(1/50)

がわずかに出土した。

M③SK03（第290図）

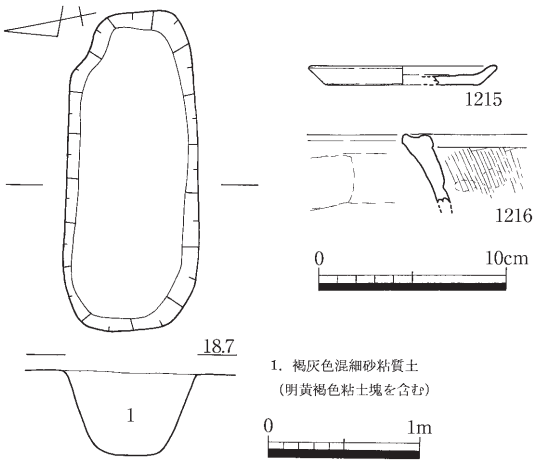
M③区北側の西半中央付近で検出した隅丸方形の土坑である。85㎝×75㎝、深さ25㎝の規模を持つ。断面形状はお釜形を呈しており、上部の削平を考慮すれば、本来は2段掘り込みであった可能性がある。主軸方向は北側に隣接するM③SD01北辺とほぼ一致している。埋土中から中世に位置づけられる土器小片が出土した。



第290図　M③SK03
平･断面図(1/50)

M③SK04（第291図）

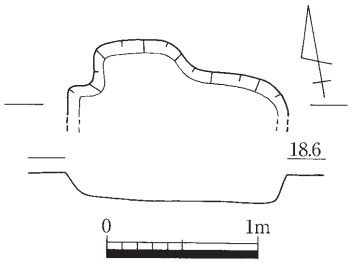
M③区北側の中央付近南壁沿いで検出した隅丸長方形を呈する土坑である。中世の溝M③SD10・11よりも後出する。2.1m×0.9m、深さ0.5mの規模を持ち、断面形状は逆台形を呈する。長軸はN77°Wの方向を有し、これはM③SD01北辺やM③SD10とほぼ一致している。埋土は単一土層であるが、粘土ブロックが混じっており、人為的に埋め戻されたものと判断できる。埋土中から1215・1216が出土した。1215は土師器小皿で、12世紀頃に位置づけられる。1216は土師器足釜で形骸化した鍔が残る。14～15世紀代に位置づけられよう。ここでは1216の年代を土坑の年代と判断しておく。



第291図　M③SK04平･断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SK05（第292図）

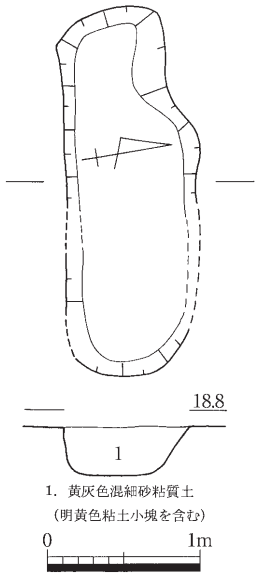
M③区北側の中央部南壁付近で検出した突出部を持つ隅丸長方形を呈した土坑である。南半部が調査区外に続くため、全体の形状は判明しないが、検出部分で1.5m×0.5m、深さ0.2mの規模を測る。断面形状は皿形を呈している。図化できなかったが、埋土中から中世に属すると判断できる土器小片が出土した。



第292図　M③SK05
平･断面図(1/50)

M③SK07（第293図）

M③区北側の中央やや東よりの南壁沿いで検出した隅丸長方形を呈する土坑である。遺構の重複状況からM③SD11より新しく、M③SD07より古い。2.4m×0.9m、深さ0.3mの規模で、断面形状は逆台形を呈している。

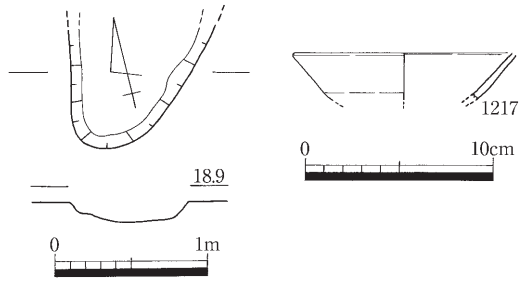


第293図　M③SK07
平･断面図(1/50)

M③SK04と同様に人為的に埋め戻された可能性が高く、両者には何らかの関係が想定される。埋土中から中世土器の小片がわずかに出土している。

M③SK08（第294図）

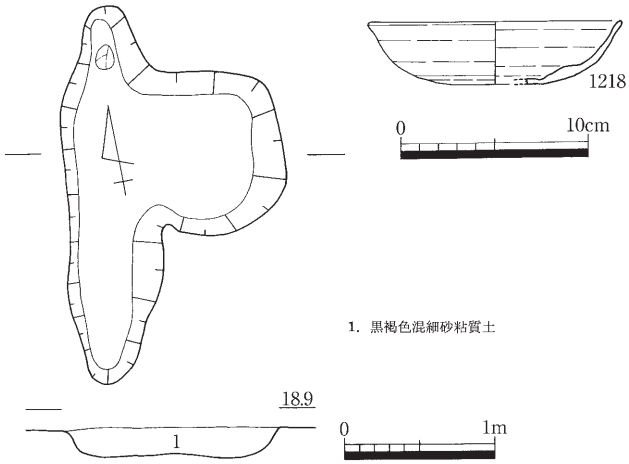
M③区北側の東半北壁付近で検出した長楕円形をした土坑である。北半は調査区外へ続く。検出部分で90cm×80cm、深さ13cmの規模を持つ。断面形状は浅い皿形である。埋土中から土師器杯1217が出土している。13世紀代に位置づけることができる。



第294図　M③SK08平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M③SK09（第295図）

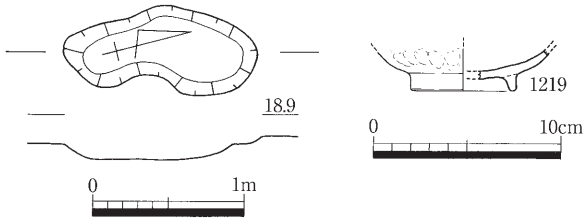
M③区北側の東半中央付近で検出した隅丸方形の突出部がついた長楕円形を呈する土坑である。2.5m×1.4m、深さ0.2mの規模を有する。断面形状は浅い逆台形である。長楕円形部分の北端には小児頭大の亜角礫１つが底面に接して置かれていた。埋土中から土師器杯1218が出土している。形状から13世紀代に位置づけられるものであろう。



第295図　M③SK09平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M③区SK10（第296図）

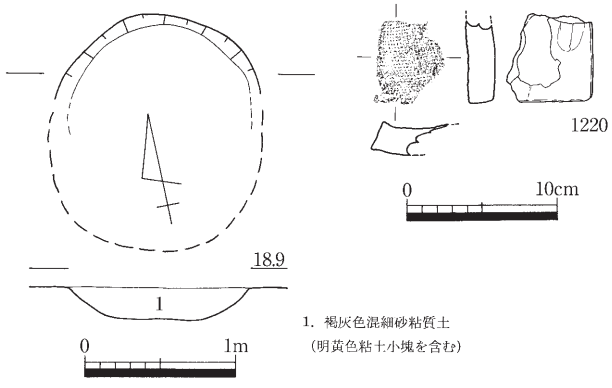
M③区北側の東半中央付近で検出した長楕円形を呈する土坑である。1.3m×0.6m、深さ0.1mの規模を持つ。断面形状は浅い皿形を呈している。埋土から土師器椀1219が出土した。13世紀代に位置づけられるものであろう。指頭痕が顕著で吉備系（早島式土器）の可能性がある。



第296図　M③SK10平･断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M③SK13（第297図）

M③区北側の東半北壁寄りで検出した楕円形を呈する土坑である。南側３分の２が中世の溝M③SD01によって削り取られているが、直径1.6m前後、深さ0.2mの規模に復元できる。断面形状は深めの皿形を呈する。埋土には細かい粘土ブロックが含まれており、人為的に埋め戻されたものとみられる。埋土中からは平瓦1220のほかに、中世に属するとみら



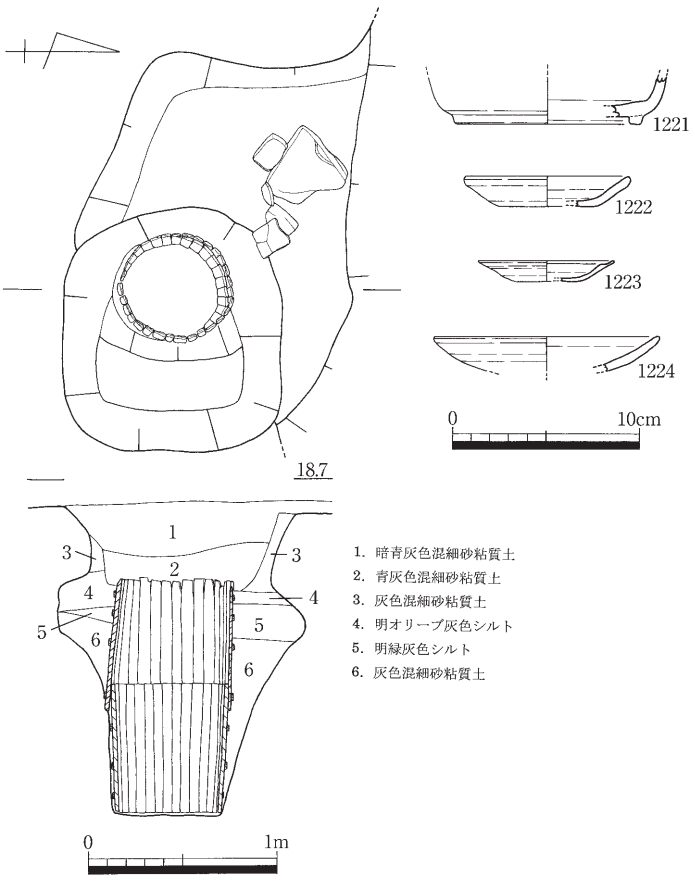
第297図　M③SK13平･断面図（1/50）、出土遺物（1/5）

れる土器小片が出土した。溝との重複関係から14世紀以前の年代が想定できる。

M③SE01（第298図）

M③区北側の中央付近で検出した井戸である。掘り方は1.3m×1.1mの隅丸方形を呈し、深さ1.7の規模を測る。ベース土層が砂質であるために、井戸の構築中に中位部分が崩落したらしく、掘り方の断面形状は中位が横に突出した逆台形を呈している。掘り方は東西方向の断面では東側の中位に平坦面を持った2段の掘り込みとなっている。掘り方の西寄りに底板を抜いた木桶を2段重ねて井筒としていた。木桶は直径60～70cmで外側の4箇所に竹製のタガをめぐらせていた。

井戸枠の内部には細砂～中砂層が詰まっており、隙間から浸入した砂によって埋没したものと想定される。また、井戸枠上位には石積み等の施設は作られず素掘りの状態であったと思われる。井戸枠内、掘り方埋土、井戸枠上部の埋土から遺物が出土している。



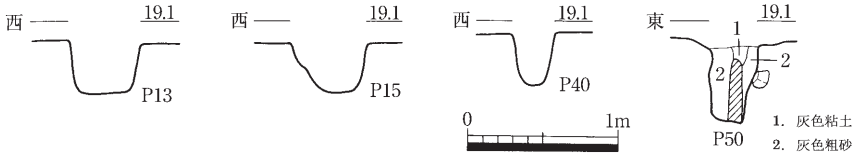
第298図　M③SE01平･断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

1221は掘り方埋土から出土した須恵器椀である。8世紀代の年代が想定され、周囲からの混入であろう。1223・1224は井戸枠内部から出土した土師器で、1223は小皿、1224は杯である。1222は井戸枠上部の埋土から出土した土師器小皿である。土器の年代観から、この井戸は15世紀代に機能し15世紀のうちに埋没したものと想定される。

（4）M区の柱穴・遺物

M①SP13（第299図）

M①区南西隅付近、第1面で検出した。直径45cm、深さ33cmの円形を呈する。15世紀代に属すると思われる土器片が出土している。



第299図　M①SP13･15･40･50断面図(1/50)

M①SP15（第299図）

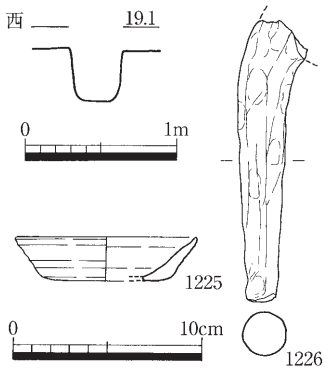
M①区南西隅付近、第1面で検出した。50cm×40cm、深さ32cmの楕円形を呈する。15世紀代に属すると思われる土器片が出土している。

M①SP40（第299図）

M①区北西隅、第１面で検出した。直径30cm、深さ33cmの円形を呈する。15～16世紀に属すると判断される土器小片が出土している。

M①SP50（第299図）

M①区西半北壁沿い、第１面で検出した。60cm×35cm、深さ50cmの楕円形を呈する。15世紀代に位置づけられる土器小片が出土している。直径11cmの柱痕が柱穴底に遺存していた。



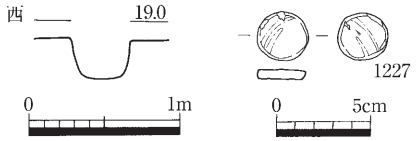
第300図　M①SP16断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M①SP16（第300図）

M①区南西隅付近、第１面で検出した。直径35cm、深さ33cmの円形を呈する。埋土中から土師器杯1225と土師器足釜脚部1226が出土している。1225の形状から13世紀代の年代が想定される。

M①SP23（第301図）

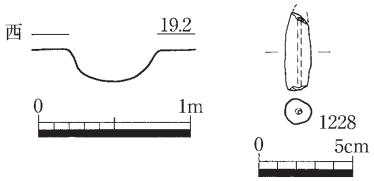
M①区南西隅付近、第１面で検出した。直径40cm、深さ24cmの円形を呈する。埋土中から1227が出土している。1227は土師器杯の破片を再加工して、直径2.5cmほどの土製円盤にしている。おはじきとして遊んだのだろうか。中世に属するとみられる。



第301図　M①SP23断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M①SP29（第302図）

M①区東半中央付近、第１面で検出した。75cm×60cm、深さ20cmの楕円形を呈する。埋土中から管状土錘1228が出土している。中世に属するものであろう。

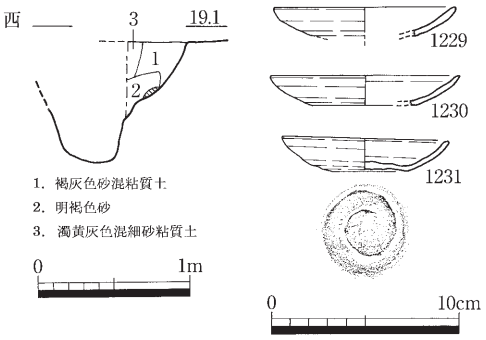


第302図　M①SP29断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M①SP39（第303図）

M①区北西隅、第１面で検出した。直径20cm、深さ80cmの円形を呈する。埋土中から1229～1231が出土している。その中でも完全に遺存していた1231は柱穴内に伏せた状態で出土している。この柱穴はM①SB01の北辺の延長上に位置しており、M①SB01に伴う地鎮遺構である可能性が高い。

1229～1231は土師器杯である。1231は底部を回転ヘラ切りしており、板状圧痕が残る。いずれも14世紀代に位置づけることができるものである。



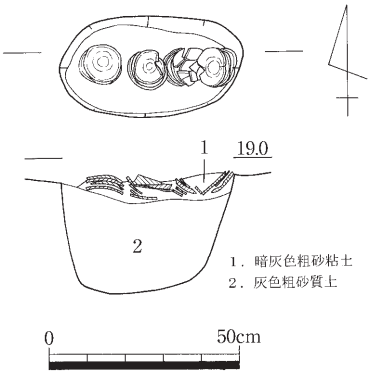
第303図　M①SP39断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M①SP72・73（第304図）

M①区北西隅付近、第１面で検出した柱穴である。調査時には２基の柱穴があると判断したために、

SP72・73という２つの番号をつけたが、調査の進展に伴い１基の柱穴であることが判明した。それまでに遺物は別々の番号で取り上げていたが、まとめて報告するために、ここでは「SP72・73」という呼称を使用するが、あくまで柱穴は１基であることに注意されたい。

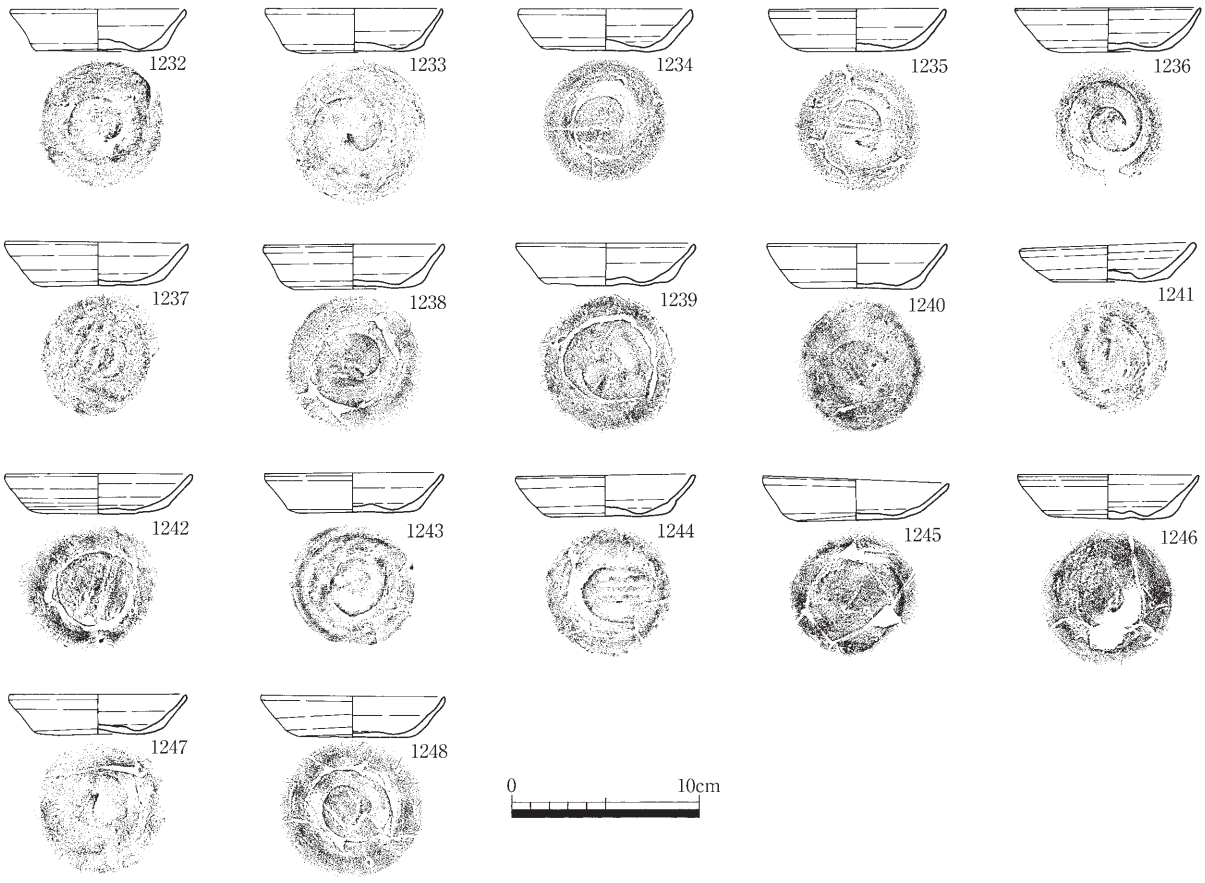
柱穴は東西に細長い50㎝×25㎝の長楕円形を呈し、深さ29㎝の規模を測り、断面形状は逆台形を呈している。埋土は２層で下位の灰色粗砂質土からは遺物の出土はなかった。上位の暗灰色粗砂粘土中に土師器杯を西から4個・6個・4個・3個の計17個を上向きに重ねて置いていた。地鎮を目的とした遺構である可能性がきわめて高いものと思われる。



第304図　M①SP72･73平･断面図(1/20)

1232～1248がその土師器杯である。形態には若干の違いがみられるものの、口径9.2～9.8㎝、底径5.4～7.0㎝を測り、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕がみられるという非常に規格化されたものである。同一工人の手によるものが複数含まれていると推測される。形状から14世紀代に位置づけられる土器群である。

このM①SP72・73は掘立柱建物跡M①SB01のちょうど中心に位置している。M①SB01柱穴からは年代を特定できる遺物がないため、同時期に存在していたかどうか判断はできない。先述したようにM①SP39も地鎮遺構の可能性が高く、M①SB01に伴うものとすると、建物の内外にそれぞれ地鎮遺構を持

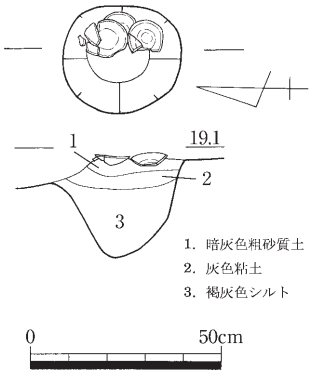


第305図　M①SP72･73出土遺物(1/4)

つ建物ということになる。さらに後述するM①SP93も地鎮遺構であるならば、３つの地鎮遺構が付属する建物ということになる。M①SB01自体の構造や規模には特殊性は認められず、通常の掘立柱建物跡との違いを見出すことはできない。M①SB01に伴うものであるのか、伴うとすればいかなる性格をもつ建物なのかなど解明すべき課題ではあるが、ここではそれを指摘するに止めてその結論は今後の類例の増加に期したい。

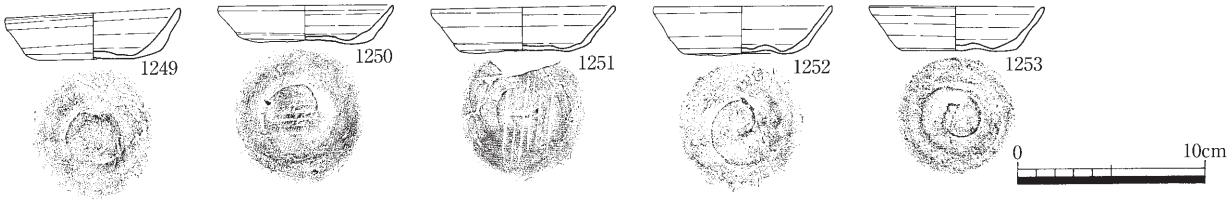
M①SP93（第306・307図）

M①区中央付近、第１面で検出した。32㎝×28㎝、深さ27㎝の円形を呈する。断面形状はU字形を呈しており、埋土は３層に分層できる。最上層の埋土中には土師器杯３個（1249～1251）が埋納されていた。まず中央に１個（1250）を置き、その上に口縁部を接するように南（1251）と北（1249）に２個を配置していた。最下層の埋土中からはさらに２個の土師器杯（1252・1253）が出土しており、計５個の土師器杯が埋納された遺構である。M①SP39やM①SP72・73のように、地鎮遺構の可能性がある。M①SB01からは東へ３ｍに位置しており、周囲にも若干の柱穴は存在するが建物を構成するには至らない。M①SB01に付属するものとすれば、ますますM①SB01の特異性が浮かび上がってくる。



第306図　M①SP93
平･断面図（1/20）

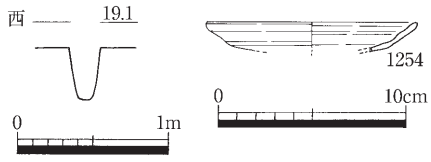
1249～1253がM①SP93に埋納された土師器杯である。口径9.2～9.8㎝、底径6.2～7.0㎝を測り、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕がみられる。1250のみ器高がやや低い点を除けば、とても規格化された土器群といえるだろう。これらの形状からは14世紀代に属するものと判断できよう。



第307図　M①SP93出土遺物（1/4）

M①SP94（第308図）

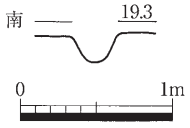
M①区中央付近、第１面で検出した。直径20㎝、深さ33㎝の規模で円形を呈している。埋土から土師器杯1254が出土している。14世紀代に位置づけられる。



第308図　M①SP94断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M②SP32（第309図）

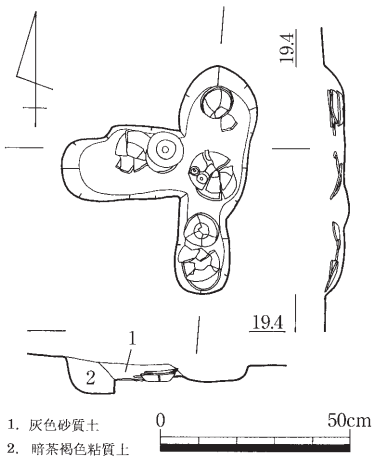
M②区西半中央付近で検出した。直径30㎝、深さ18㎝の円形を呈する柱穴である。周囲には柱穴が散在しており、建物を構成していた可能性もある。図化できなかったが、柱穴内部から中世に属すると想定できる土器小片がわずかに出土している。



第309図　M②SP32
断面図（1/50）

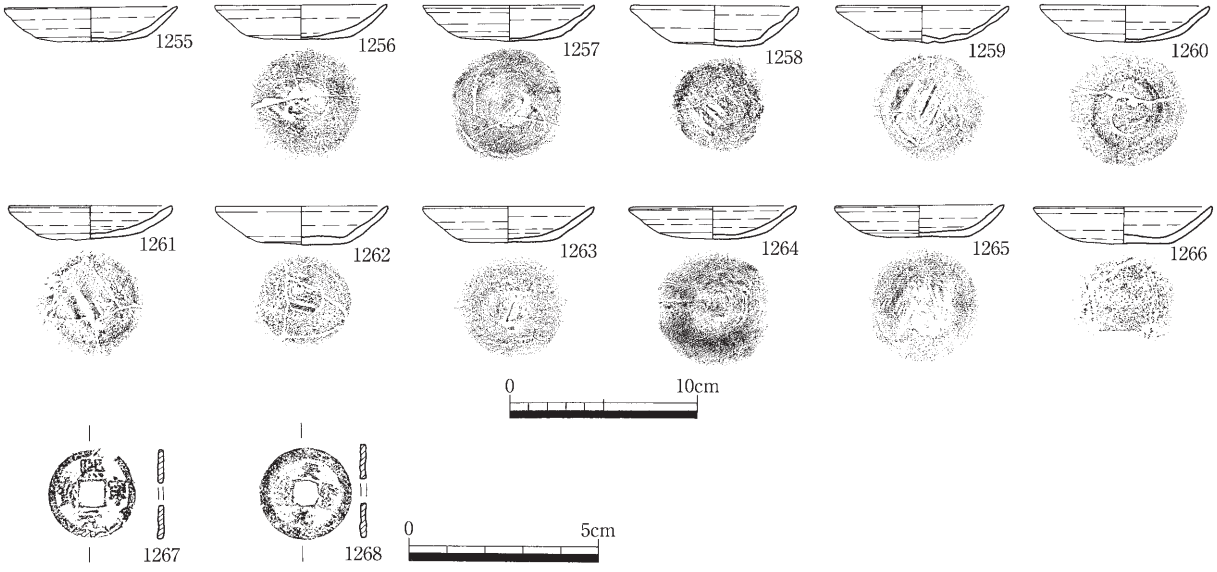
M②SP51（第310・311図）

M②区西半中央付近で検出した。西方に突出部を向けたT字形を呈する遺構で、柱穴と呼ぶのを思わず躊躇してしまう形状をしている。南北方向が60㎝、東西方向が50㎝で、深さは20㎝を測り、その方向は概ね正方位と一致すると判断できる。断面形状は浅い皿形を呈している。遺構の底面に接して多数の土師器杯が埋納されていた。南北方向の掘り込み部分には北から順に3個・2個・1個・2個を並べており、東西方向の掘り込み部分には西から1個・2個を並べていた。西端の1個のみが伏せた状態で入れられていた。また、南北方向の北から2番目には銅銭2枚が置かれていた。調査時には別の遺構が部分的に重複したものとも考えていたが、埋土の断面観察などから1つの遺構であり、当初からこのような形態を計画したものと判断できる。明らかに地鎮などの祭祀を目的とした遺構であるとみてよいだろう。



第310図　M②SP51平･断面図(1/20)

1255～1268が出土した遺物である。出土状況との対応は、南北方向の北から3個（上から1256～1258）・2個（上から1259・1260）・1個（1261）・2個（上から1262・1263）、東西方向の西から1個（1266）・2個（上から1264・1265）となる。したがって銅銭2枚（1267・1268）は1259の上に載せられていたわけである。1255は掘り下げ途中に取り上げられてしまったものだが、本来は南北方向の北から3番目の1261の上に重ねられていた可能性がある。これらの土師器杯は口径8.6～9.1㎝、底径3.9～6.1㎝の範囲にまとまりをみせ、底部を欠損する1255以外はすべて回転ヘラ切りで板状圧痕が認められる。14世紀代に位置づけられる一群である。銅銭は2枚とも北宋銭である。1267は「熙寧元寶」で1068～1077年に、1268は「天聖元寶」で1022～1063年に鋳造されたものである。



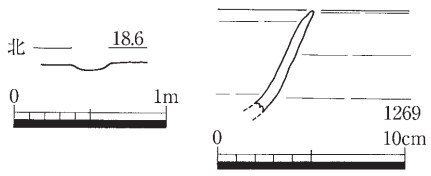
第311図　M②SP51出土遺物(1/2、1/4)

M②SP51は地鎮遺構とみられることを報告した。では、どの遺構に伴うものであるのかが、次の焦点となろう。この遺構の周囲には時期の判明しない柱穴や小規模な溝状遺構が存在している。この遺構が、先述したM①SB01建物内部にみられたM①SP72・73と同様に建物内部の地鎮遺構であるとみた場合、この遺構の西・北・東側には柱穴が存在し、さらに北・東部分には小規模な溝状遺構がみられる部

分がある。想像をたくましくすれば、M②SP51は雨落ちないし排水用の小溝を伴った掘立柱建物跡の内部に設けられた地鎮遺構と位置づけられることもできようが、詳細なデータが取られておらず、可能性の指摘に留めておく。

M③SP15（第312図）

M③区北側の西半で検出した。80cm×25cm、深さ4cmの長楕円形を呈している。削平された溝状遺構の名残かもしれない。埋土中から須恵器椀1269が出土している。外面に自然釉の玉垂れがみられるもので、9世紀代に位置づけられよう。



第312図　M③SP15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP16（第313図）

M③区北側の西半南壁寄りで検出した。直径30cm、深さ23cmの円形を呈する。埋土中から中世土器の小片がわずかに出土した。

M③SP21（第313図）

M③区北側の西半中央付近で検出した。45cm×35cm、深さ20cmの楕円形を呈する。埋土から15世紀代に比定できる土器小片が出土している。

M③SP49（第313図）

M③区北側の東半中央南壁寄りで検出した。中世のM③SK07の埋没後に掘られている。直径30cm、深さ16cmの円形を呈する。埋土中から15世紀代に属すると思われる土器片が出土している。

M③SP50（第313図）

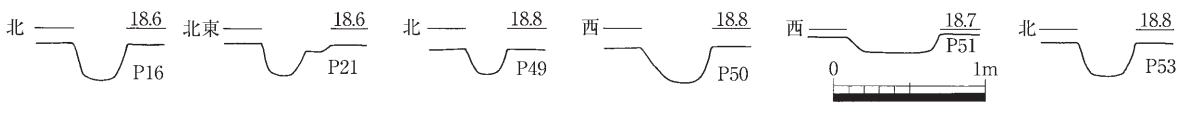
M③区北側の東半中央南壁寄りで検出した。直径45cm、深さ23cmの円形を呈している。埋土から15世紀代に比定できる土器片が出土した。

M③SP51（第313図）

M③区北側の東半中央で南壁にかかった状態で検出した。直径60cm前後、深さ10cmの円形を呈するものと推定される。埋土中から中世土器小片がわずかに出土している。

M③SP53（第313図）

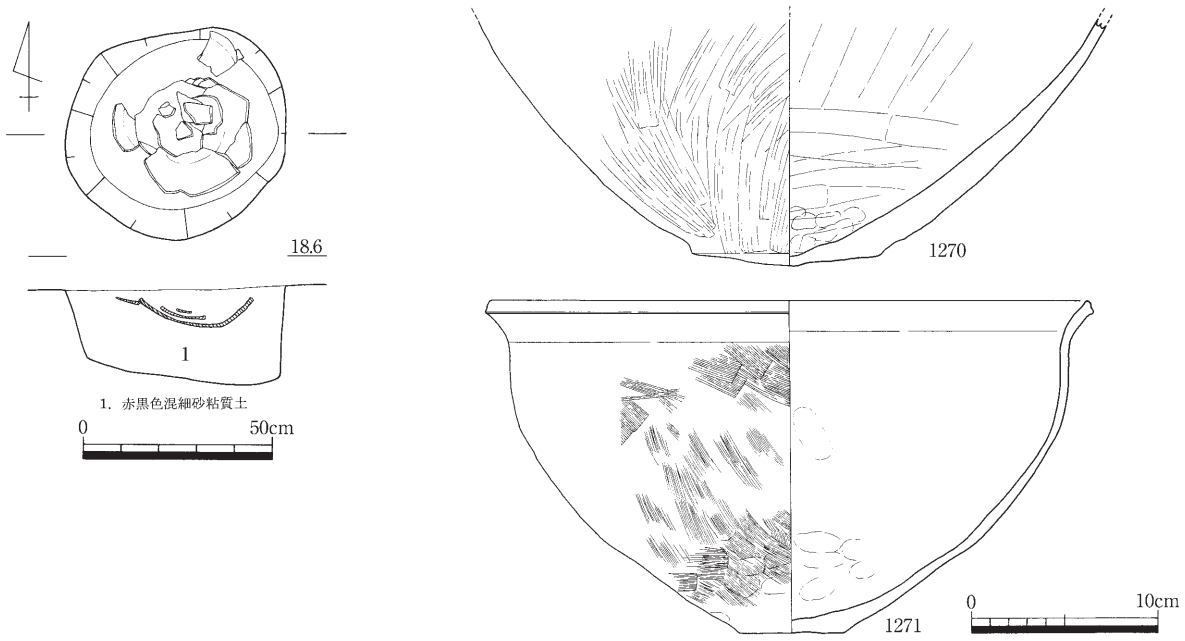
M③区北側の東半中央南壁寄りで検出した。40cm×30cm、深さ23cmの楕円形を呈する。埋土中から10世紀頃に比定される須恵器片が出土している。



第313図　M③SP16･21･49･50･51･53断面図(1/50)

M③SP22（第314図）

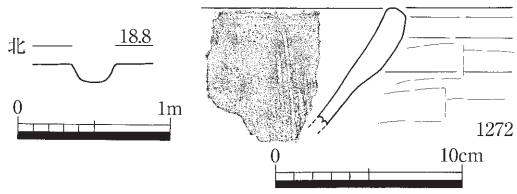
M③区西半中央付近で検出した。直径60㎝、深さ26㎝の円形を呈しており、柱穴というよりは土坑のほうがふさわしい規模である。断面形態は逆台形を呈している。埋土の中位から弥生土器1270・1271が出土している。1270は壷の胴部下半で平底の底部が付く。1271は内弯する体部に弱く外反する口縁部が付いた鉢である。平底を呈している。1271は全体の約３分の１が遺存しており、1270の中に入れられた状態で出土した。ともに弥生時代後期に属するものであろう。



第314図　M③SP22平･断面図(1/20)、出土遺物(1/4)

M③SP40（第315図）

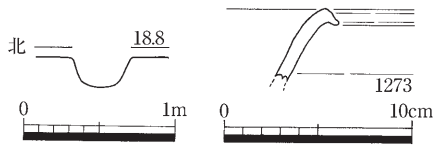
M③区北側の中央付近で検出した。直径35㎝、深さ13㎝の円形を呈する。埋土中から土師器すり鉢1272が出土している。口縁部を肥厚させており、内面には５条１単位の卸し目が残る。14～15世紀代の年代が想定される。



第315図　M③SP40断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP57（第316図）

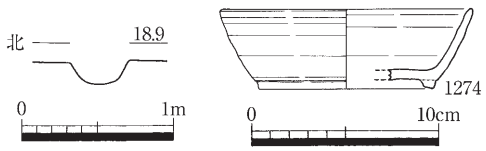
M③区北側の東半中央付近で検出した。M③SX02の埋没後に掘られている。直径40㎝、深さ20㎝の円形を呈する。1273は８～９世紀の年代が想定される須恵器甕で、M③SX02からの混入であろう。中世土器小片がわずかに出土しており、中世の柱穴であろう。



第316図　M③SP57断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

M③SP58（第317図）

M③区北側の東半中央付近、中世の溝M③SD01の下位

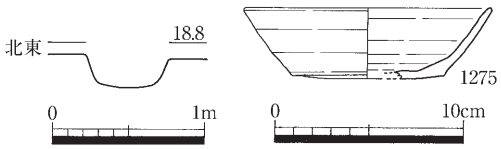


第317図　M③SP58断面図(1/50)､出土遺物(1/4)

で検出した。直径40㎝、深さ15㎝の円形を呈する。埋土中からは須恵器椀1274が出土している。1274はその形状から、８世紀代の年代が想定される。

M③SP64（第318図）

M③区北側の東半中央南壁寄りで検出した。50㎝×40㎝、深さ20㎝の楕円形を呈する。埋土中からは1275が出土している。1275は土師器杯で、底部外面は回転ヘラ切りである。９世紀代に比定できる。

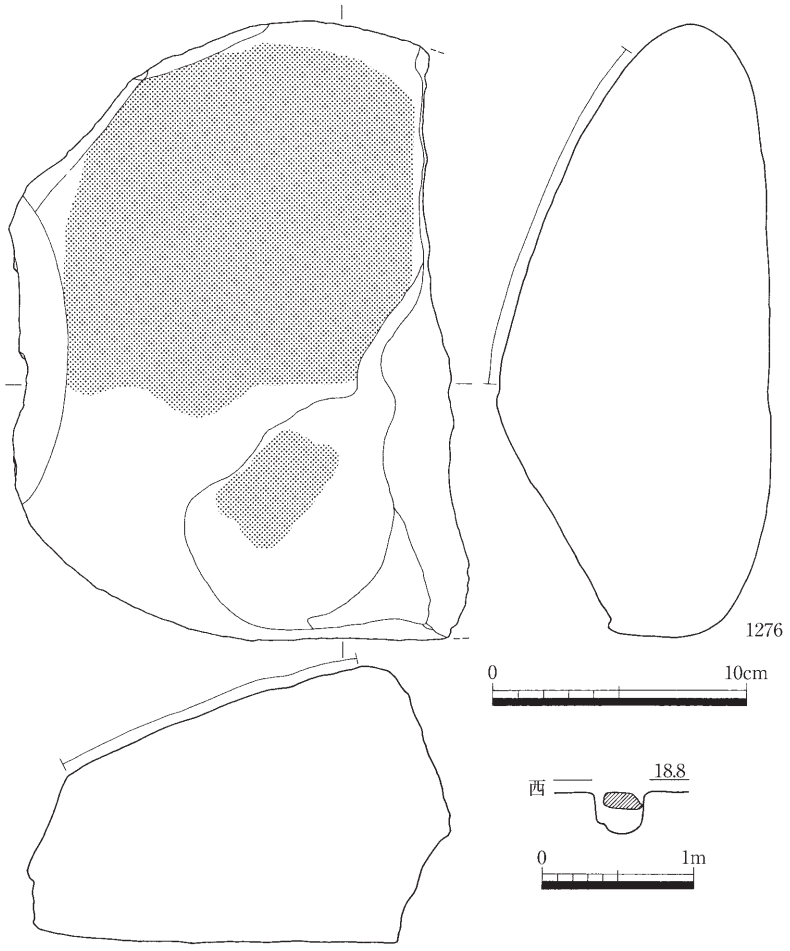


第318図　M③SP64断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

M③SP65（第319図）

M③区北側の東半中央南壁寄りで検出した。M③SP64のすぐ東側に隣接している。直径45㎝、深さ28㎝の円形をした柱穴である。断面形状はU字形を呈する。

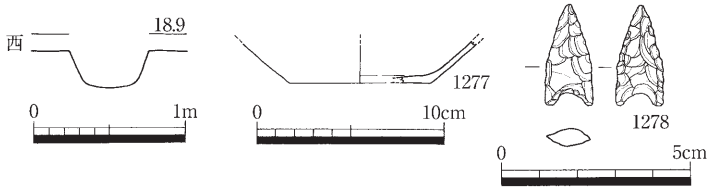
埋土の中位から1276が出土している。1276は砂岩製の砥石である。基本的に１面を砥面として使用しているが、隣接する面の一部にも使用痕が認められる。使用済みの砥石を柱穴の礎石に使用したものか、あるいは柱の抜き取り後に放り込まれたものとみられる。図化できなかったが、中世に位置づけられる土器小片が合わせて出土している。



第319図　M③SP65断面図（1/50）、出土遺物（1/3）

M③SP74（第320図）

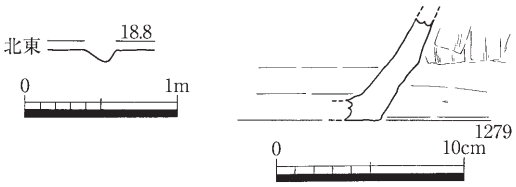
M③区北側の東半中央付近北壁にかかった状態で検出した。直径50㎝、深さ25㎝で円形の柱穴と推定される。埋土中から土師器杯1277とチャート製の打製石鏃1278が出土した。1278は弥生時代の凹基式の石鏃で、混入品である。1277は13世紀代に位置づけられると思われる。



第320図　M③SP74断面図（1/50）、出土遺物（1/2、1/4）

M③SP75（第321図）

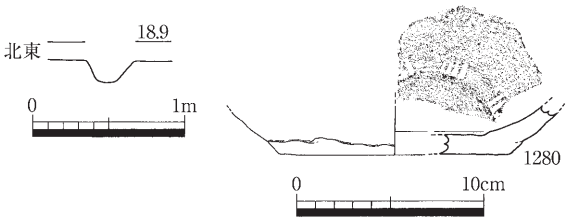
M③区北側の東半中央付近で検出した。25cm×15cm、深さ8cmの楕円形を呈する。埋土中から陶器すり鉢1279が出土している。硬く焼け締まったもので、備前焼とみられる。中世に位置づけられる。



第321図　M③SP75断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP77（第322図）

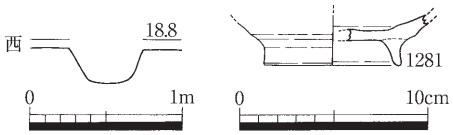
M③区北側の東半中央付近、M③SD01東辺の内側で検出した。直径30cm、深さ13cmの円形を呈している。埋土から須恵器すり鉢1280が出土している。内面に4条1単位の卸し目が3箇所残っている。中世に属するものである。



第322図　M③SP77断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP86（第323図）

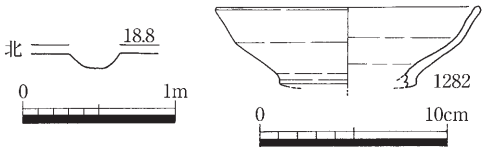
M③区北側の東半南壁寄りの位置で検出した。直径50cm、深さ23cmの円形を呈する。埋土中から土師器椀1281が出土している。長めの高台を有する椀で、12世紀代に属するものと想定される。



第323図　M③SP86断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP92（第324図）

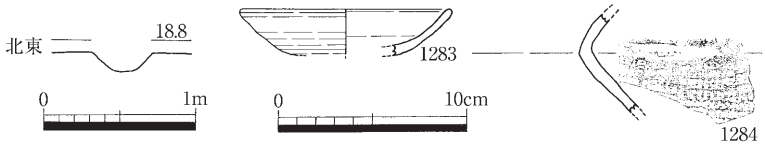
M③区北側の東南隅付近で検出した。直径30cm、深さ10cmの円形を呈する。埋土中から土師器杯1282が出土している。1282は円盤状高台状の底部を有するもので、12世紀代の年代が想定できる。



第324図　M③SP92断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP95（第325図）

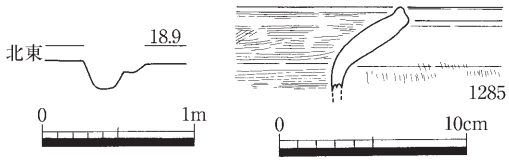
M③区北側の東半東壁寄りで検出した。西端の一部を中世の溝M③SD01によって壊されている。直径40cm、深さ13cmの円形の柱穴と推定できる。埋土中から1283・1284が出土した。1283は土師器杯である。1284は須恵器甕で、胴部外面に格子タタキの痕跡が明瞭に残る。形状などから11世紀代に位置づけられるものであろう。



第325図　M③SP95断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP98（第326図）

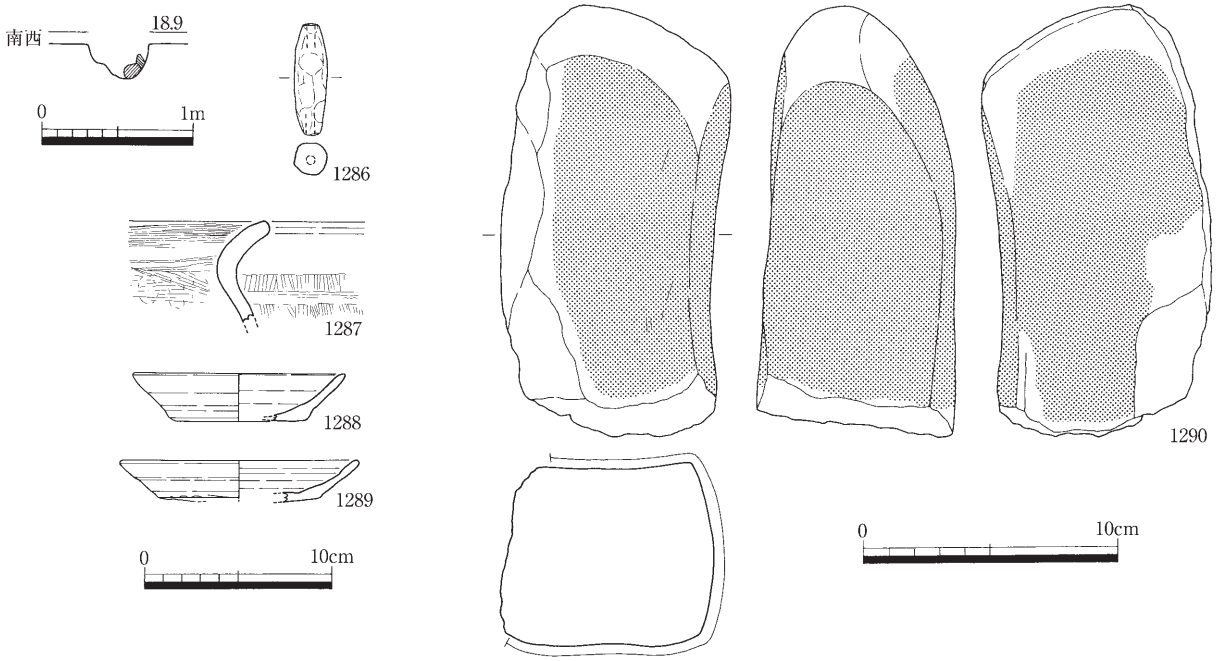
M③区北側の北東隅付近で検出した。直径40cm、深さ18cmの円形を呈する。埋土中から土師器土鍋1285が出土した。13世紀代に位置づけられよう。



第326図　M③SP98断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP101（第327図）

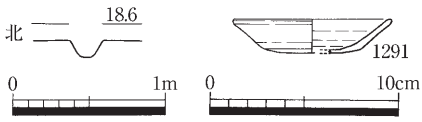
M③区北側の北東隅付近北壁寄りで検出した。直径45㎝、深さ23㎝の円形を呈している。柱穴の底面には拳大の亜円礫２石が中心からややずれた位置に入れられており、柱を固定する目的の詰め石と判断できる。埋土中からは1286～1290の遺物が出土している。1286は管状土錘、1287は土師器甕である。1287はハケ調整が顕著なもので、８世紀代に位置づけられるものである。1288・1289は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りの杯で、11世紀代に属するものである。1290は砂岩製の砥石で、詰め石の１石として用いられていた。３面を砥面として使用している。1288・1289の年代観から、この柱穴は11世紀代に属すると想定できる。



第327図　M③SP101断面図(1/50)、出土遺物(1/3、1/4)

M③SP123（第328図）

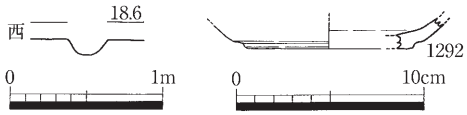
M③区南側の中央付近南壁寄りで検出した。直径25㎝、深さ10㎝の円形を呈している。埋土中から土師器杯1291が出土している。底部に回転ヘラ切りを施したもので、15世紀代に属すると想定される。



第328図　M③SP123断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP126（第329図）

M③区南側の中央付近南壁寄りで検出した。直径25㎝、深さ10㎝の円形を呈する。埋土中から土師器杯1292が出土した。円盤状高台の杯で、12世紀代に位置づけられよう。

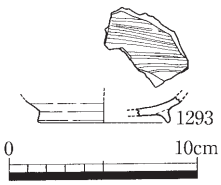


第329図　M③SP126断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

M③SP139（第330図）

M③区北側の東半中央付近で、中世の溝M①SD01東辺先端の下位で検出している。直径25㎝、深さ

23㎝の円形を呈する。埋土中から1293が出土している。1293は内面に炭素を吸着させた黒色土器椀で、内面はヘラミガキ調整で仕上げている。11～12世紀代の年代が想定される。



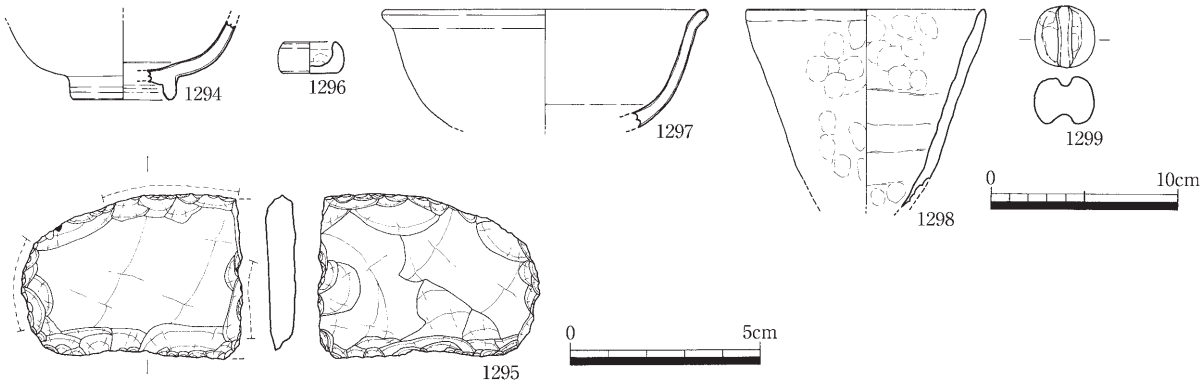
第330図　M③SP139
出土遺物（1/4）

（4）包含層出土遺物（第331図）

1294・1295はM①区から出土した遺物である。1294は青磁椀である。内面の見込み部分に沈線を1条めぐらせているもので、オリーブ灰色の色調の釉薬をかけている。中国・龍泉窯系のものであろう。1295はサヌカイト製の打製石庖丁である。使用途中に半分に折れたようだが、折れ面を再加工して、再び石庖丁として使用したことがうかがえる。弥生時代に属するものである。

1296・1297はM②区から出土した遺物である。1296は手捏ねのミニチュア土器である。口径2.8㎝、器高1.7㎝を測る小型品である。壷をイメージしたものであろうか。胎土や焼成などから弥生時代に属するものと判断できる。1297は青磁椀である。口縁部をわずかに外方へ折り曲げているもので、模様は認められない。全体にオリーブ灰色の釉がかかる、龍泉窯系のものであろう。

1298・1299はM③区から出土した遺物である。1298は内外面に指頭圧痕が顕著に残った製塩土器である。形状から弥生時代に属するものと思われる。1299は直径3㎝内外を測る小型品で、扁球形をした有溝土錘である。断面形状は分銅形を呈している。胎土や焼成などから弥生時代に属するものと想定される。



第331図　M区包含層出土遺物（1/2、1/4）

（7）小結

M区では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代のものとしては、M①区で検出した自然河川の埋土中から縄文時代後期前半および晩期後半の土器が出土している。縄文時代に属する遺構はM区では確認できず、河川出土の遺物も上流から流れてきたものと判断できるため、M区周辺は河川氾濫等の危険の高い、人間にとっては利用価値の低い土地だったのであろう。

弥生時代の遺構も数えるほどしか確認できない。M①区を流下する自然河川M①SR01は依然として流水・滞水を繰り返しており、M②区南東隅～N③区の自然河川も同様であったと思われる。M①SX01も人為的なものとは想定しづらく、河川内から弥生時代中期末～後期の遺物が一定量の出土をみるのだ

が、遺構として人間の営みを把握することは困難な状況といえる。M①・②区に比べて土地が安定しているM③区では弥生時代後期のM③SP22がみられるものの、遺構・遺物の数は僅少である。

古墳時代としては、古墳時代初頭の土器が自然河川から出土している程度で、この時期に属する遺構は認められない。

古代になると、M③区を中心として柱穴や溝がみられるようになる。特にM③区の東半部分には古代に属する柱穴が集中する傾向が認められる。これは北側の高松東道路調査C区で検出された掘立柱建物跡が重複する部分の延長であり、狭い調査区内が災いして建物を復元することはできなかったが、居住域が広がっているものと推定できる。M①・②区でも散在的ではあるが柱穴が存在しており、居住域の縁辺にあたるものと想定できよう。

中世も前代の傾向は引き継がれるようである。M①・③区では土地を区画することを目的とした溝M①SD02やM③SD01などが造られている。M③SD01の区画内には井戸M③SE01が作られたり、M③SD01の方向に規制されたように小規模な溝や土坑が作られたりしている。建物こそ復元できなかったが、これらに伴う建物が存在したことは明白であろう。M③SD01は居住域を区画する溝といえる。一方のM①SD02についても、M①SD02で区画された内部には建物M①SB01や数は少ないものの柱穴が存在しており、居住域を区画する溝として把握できようか。ただし、溝自体に分岐する部分や屈曲部を突き抜ける部分がみられるなど、M③SD01とは様相が異なっている。復元できた掘立柱建物跡としてはM①SB01がM①SD02の区画内にある。M②SP51の周囲に想定できるものが存在したとすれば、M①SD02の区画外にも建物が存在することになる。これが細かな時期差による現象なのか、同時期で意味を持つあり方なのかが気になるところではあるが、溝による区画も全体の形状が判明したわけでもないのでこれ以上の追及はひとまず留め置きたい。M①・②区だけで地鎮を目的としたと思われる土師器杯埋納遺構が4基存在していることは特筆できよう。このうちM①SP72・73とM②SP51は掘立柱建物跡に伴うものと思われる。M①SP39は掘立柱建物跡M①SB01に伴うものと判断しているが、調査区外に存在する異なる掘立柱建物跡に付属する可能性も残している。また、M①SP93については、掘立柱建物跡M①SB01に付属するものと、M①SD02によって区画された土地全体に付属するものの2通りの可能性がありうることを指摘しておきたい。

第７節　まとめ（第332・333図）

前田東・中村遺跡の８小調査区のうち５つの調査区の調査結果について、調査区ごとに記述を行った。ここではＪ区を除く４つの調査区（対象地西半）についてのまとめとして、遺跡の時代変遷について述べてみたい。Ｊ区と残る３小調査区（対象地東半）については、次の報告内において前田東・中村遺跡全体のまとめと合わせて行う予定である。

前田東・中村遺跡の西半分において検出した遺構群は、概ね６つの時期に大別して変遷を捉えることができる。以下、各時期について概説する。

縄文時代

調査対象地で確認された遺構としては数条の自然河川以外に、土坑状のⅠ④SX04ただ１基のみである。自然河川は対象地中央付近の規模の大きなもの、対象地西端の小規模なもの、Ｌ③区東端で検出した小規模なものが認められる。中央と西端の河川内からは縄文時代後期前半に位置づけられる永井Ⅰ式相当の土器が出土しており、それらは上流から流されたものと判断できる。遺跡の北東付近にこの時期の遺構が確認される可能性があろう。中央の河川内からは縄文時代晩期の凸帯文土器も出土している。Ⅰ④SX04も同時期のものである。この土器はいわゆる「水田農耕」に伴うとされる土器であり、畦畔等の遺構は検出していないが、自然河川近辺の湿地帯などで稲作を行っていた可能性もありえよう。

弥生時代

弥生時代になると、数は決して多くはないものの溝状遺構や土坑、柱穴などがみられるようになる。それらの中には弥生時代前期の遺構も存在するがＬ③SK04の土坑１基のみであり、出土遺物の年代からほとんどは弥生時代中期末～後期を中心としたものであることがわかる。弥生時代になると前代の自然河川のうち小規模なものはほとんど埋没しており、対象地中央の自然河川のみが弥生時代全体を通して機能しているが、埋没していく過程にある。対象地西半部においては弥生時代に属する明確な建物遺構は確認できていないが、Ⅰ③区第２面にはこの時期の柱穴がみられたり、Ⅰ①区には水を得るために掘られたとみられるⅠ①SK01などが存在したりすることから、Ⅰ区北西付近の地盤が安定したところを居住域とした可能性が高い。また、自然河川からは磨滅をほとんど受けていない弥生後期～古墳時代初頭の土器が見つかっており、それらは上流から流されたものではなく付近から投棄したものとみられる。これも近辺に居住域の存在を示唆するものであろう。南側のM①区においても連続する自然河川内からは同時期の土器などが同様の状況で出土しており、近辺に居住域の存在を感じさせるが、調査区内において遺構は見つからなかった。M③区のM③SP22やM③SX01は居住域の一端であるのかもしれない。この後、古墳時代は遺構・遺物が見当たらず、当該地における人間の活動は一旦休止したようである。

奈良時代

奈良時代になると中央の自然河川は完全に埋没してその役割を終えており、その上位にも遺構が展開をみせるが、遺構分布の中心となるのは旧自然河川の西側部分である。溝状遺構や土坑など以外にも掘立柱建物跡や井戸などが作られている。対象地北西のＨ区において掘立柱建物跡Ｈ①SB01・Ｈ③SB03、井戸Ｈ②SE01、溝状遺構などが作られている。建物の主軸や溝状遺構の方向は、現在も周囲に残る条里制由来の条里型地割りとほぼ一致しており、周囲の地割りはこの時代までさかのぼるとみてよいだろう。Ｈ③SB03の周辺には時期不明ながら多数の柱穴がみられ、まだ他にも建物が存在したものと思われる。Ｈ③SB03は総柱構造の建物であり、倉庫として機能していたものであろうか。Ｈ区以外ではⅠ

区やＬ区M区で小規模な溝状遺構を検出したが、数えるほどしか見当たらない。

平安時代

前代に増して遺構の数は増え、その分布もM①・②区を除いた地区に広がりをみせる。H区は居住域として継続して建物H①SB02やH③SB02などが作られているが、その東隣のⅠ③区にも居住域は拡大しており、建物Ⅰ③SB02やⅠ③SB03が認められるようになる。Ⅰ③区では計３基の井戸が掘られており、居住域として継続した土地利用がはかられたと推定できる。Ⅰ①・③区を南北に貫く溝Ⅰ①SD01・Ⅰ③SD19は居住域の東限を区切る区画溝とみられる。下層からは緑釉陶器や円面硯が出土している。また、その溝に接続するⅠ①SD02・Ⅰ②SD02などからは緑釉陶器や瓦類の出土が目立ち、近辺に瓦葺きの建物の存在を示唆するようでもある。包含層資料ではあるがⅠ①区では仏具の「浄瓶」もみられることなどと合わせて「寺院」を連想させるものといえようか。また、H②SD08から出土した「寶」の文字が想定される陶印の存在も、識字層の存在を示唆しており、何らかの関連があるものかもしれない。

南側の調査区では、Ｌ③区に建物Ｌ③SB01やＬ③SB03が建てられ、井戸Ｌ③SE01も掘られている。周囲にも柱穴が分布しており、居住域が想定できる。M③区東半の柱穴群は高松東道路調査Ｃ区の当該期の建物群と連続するもので、建物が存在した可能性は高い。Ｌ③区とH区の間には高松東道路調査Ｂ区が位置するが、同Ｂ区では遺構が希薄なうえに柱穴などがみられないことから、Ｌ③区とH区の居住域はそれぞれ独立した居住域であるものと想定される。Ｌ①区では幾条かの溝状遺構がみられるが、調査区が狭く、居住域であるのか生産域であるのかなど、その性格等について判断する材料はない。この時期の建物の主軸や溝状遺構の方向は、前代と大きな変化はみられず、条里型地割りを基準とした土地区画は依然として建物や溝状遺構の方向を規制する力を保っていたとみられる。

なお、遺構の重複状況や出土遺物の年代などから、当該期は前・後期に区分できる可能性がある。

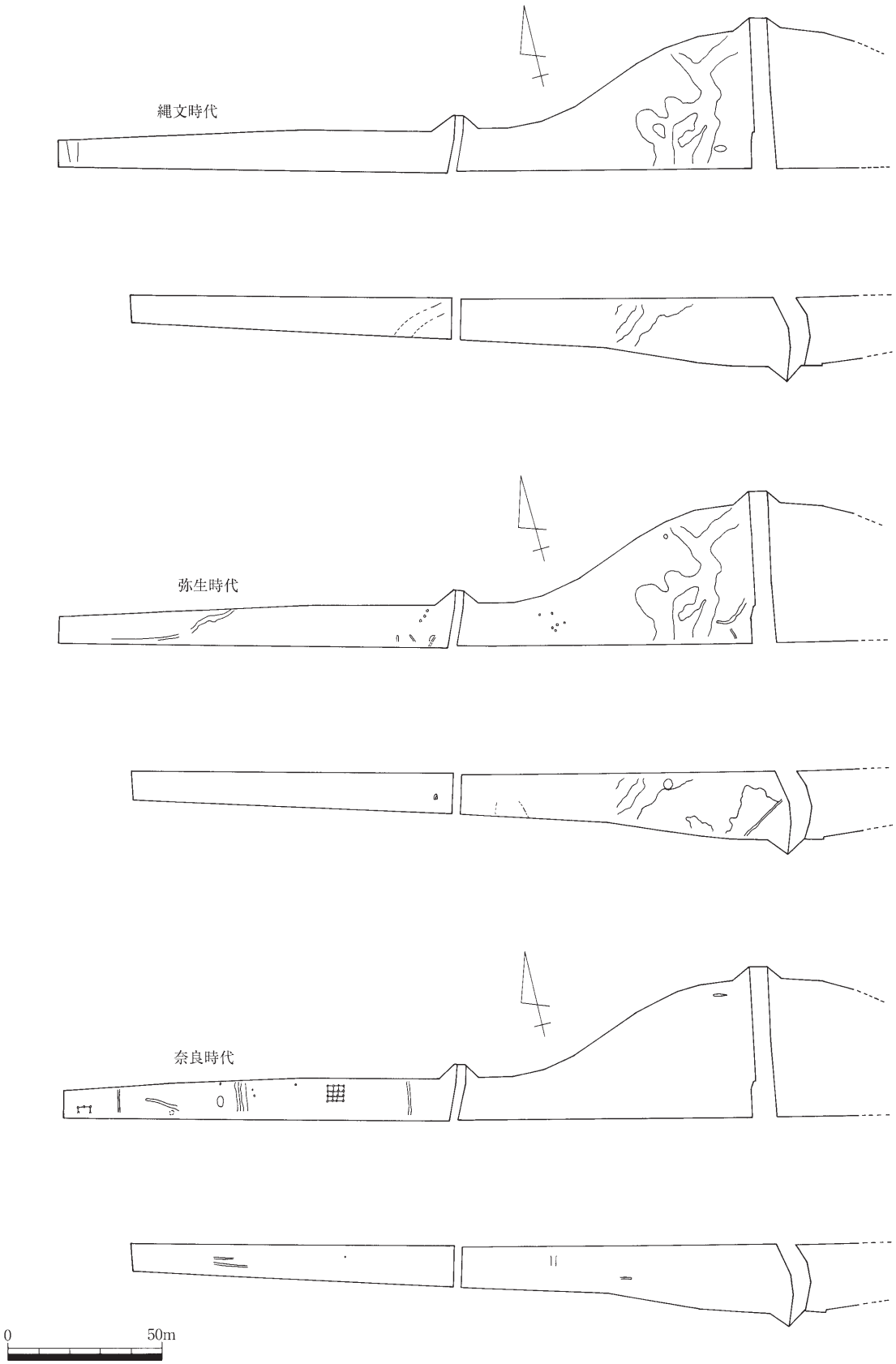
中世

前代に居住域として土地利用されていた南北それぞれの居住域は基本的にこの時期にも踏襲されている。北側のH～Ⅰ③区では、建物や柱穴はH②～Ⅰ③区に集中する傾向をみせ、Ⅰ③区はさらに小規模な溝状遺構によるいくつかの区画が認められるようである。しかしH①区には井戸H①SE01が存在するなど、居住域内として捉えてよいであろう。この井戸の南西には土器を焼成した窯H①SF01が築かれており、H①区が居住域の縁辺付近に相当するとも考えられよう。Ⅰ③区東端のⅠ③SD19は依然として機能しており、居住域の東限は変化していないようである。Ⅰ④区で確認した鋤溝群は当該期に属するものと想定でき、Ⅰ③SD19を境にして東側は畑地等の耕作地として使われたことがわかる。

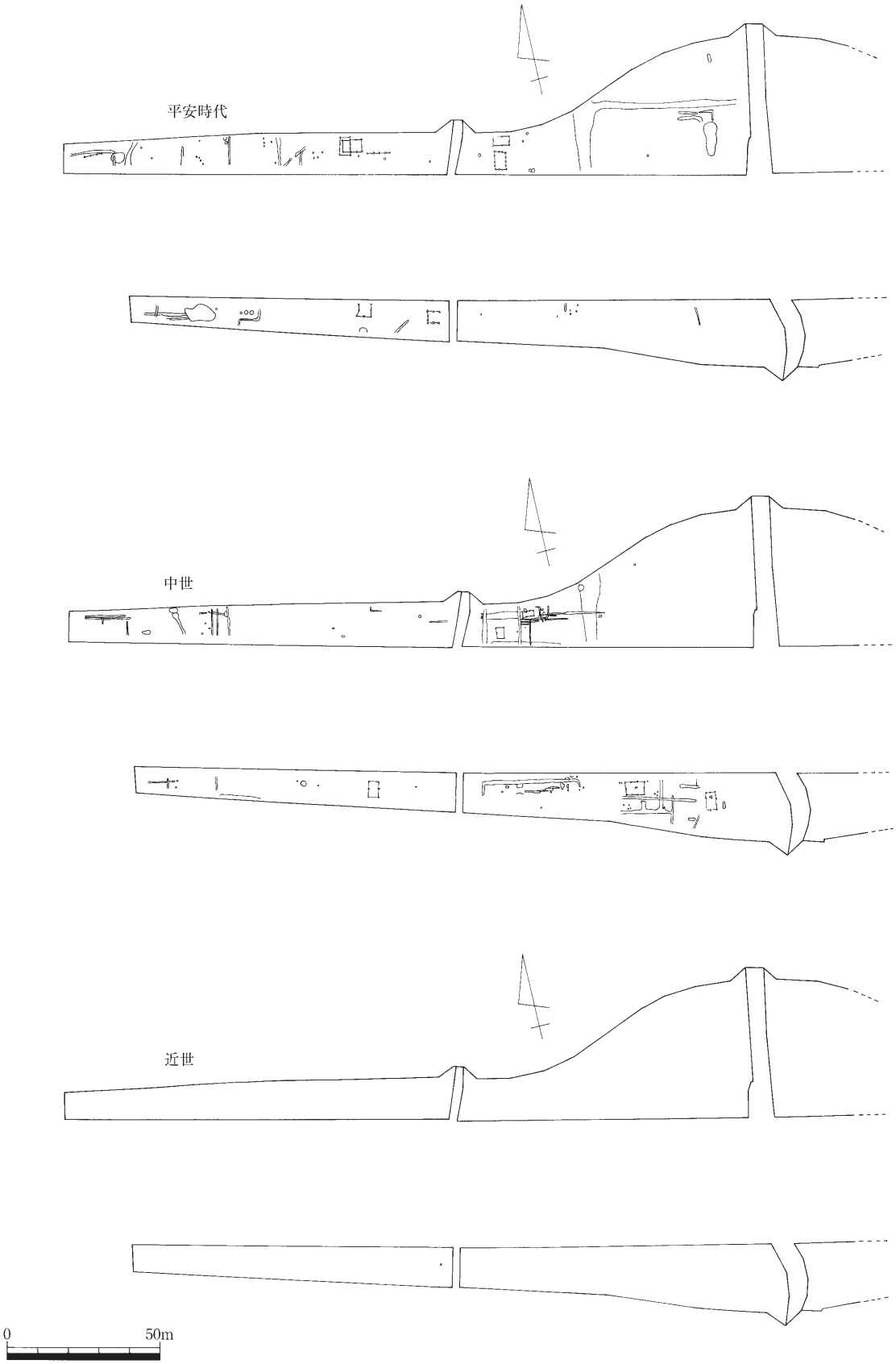
南側のＬ③～M③区では前代と比べて変化がみられる。M①・②区でも建物や溝状遺構が作られており、東側に居住域が広がっている。M①・③区では区画溝M①SD02やM③SD01が作られ、M①SD02の区画内の建物M①SB01は地鎮遺構を伴っている。また、M①SD02の区画全体を対象とした可能性のある地鎮遺構も検出している。区画溝が登場したとはいっても、区画外にもＬ③SB02やM②SP51を伴う建物などが存在しており、居住域全体が区画溝の内部に集中するわけではないようである。
当該期でも遺構の重複がみられるなど、さらに細分できる可能性があるが今回は果たせなかった。

近世

わずかにＬ③区で柱穴Ｌ③SP87を検出しただけである。前代の居住域はすべて廃絶し、当該地はそのほとんどが耕作地として土地利用されたものと想定できる。Ⅰ④区の掘立柱建物跡Ⅰ④SB01は当該期に属する可能性があるが、住居というよりもむしろ農作業小屋的なものであろうか。



第332図　遺構変遷図①(1/2,000)



第333図　遺構変遷図②(1/2,000)

＜註＞

註１：国立歴史民俗博物館の平川南先生に、陶印の写真による鑑定をしていただいたところ、下記のような御教示をいただいた。

・陶製であることから私印と判断できる。

・破損の状態および文字の残画から、印面の文字は一文字と考えられる。また、印面は縦が横よりもわずかに長い長方形を呈したと推測される。

・文字を構成する字画は、部分的に左文字と正文字が混在している。

・文字は、北魏・元楨墓誌、北周・賀屯植墓誌（伏見冲敬編『書道大字典』角川書店、1974年）例などの「寶」に類似しており、強いて言うならば「寶」の可能性がある。

・「寶」（＝寶・財）は「福」などとともに吉祥語として私印に用いられることが多い。例としては、奈良県大和文華館所蔵「寶」印、三重県斎宮跡出土施印土器「寶」などが知られる。なお、本遺跡付近には古代の寺院跡である宝寿寺があるが、その寺名の「寶」を指すかは不詳である。

印面の文字については、「寶」は一つの可能性に過ぎず、今後も引き続き類例調査等が必要と思われる。現段階においては、文字の内容はさておき、この陶印の背後に役人・僧侶・有力氏族などの識字層の存在がうかがえる点を評価したい。

註２：今回報告した石器石材のうち砂岩はすべて和泉砂岩であると、元香川大学の谷山穣先生に鑑定していただいた。

＜参考文献＞

・森格也・古野徳久『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　前田東・中村遺跡』1995.3　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

・片桐孝浩『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』　1992.1　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

・佐藤竜馬『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第18冊　国分寺楠井遺跡』1995.10　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

・佐藤竜馬『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』　2000.3　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

・信里芳紀・山元素子『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第53冊　中森遺跡、林・坊城遺跡Ⅱ、東山崎・水田遺跡Ⅱ』　2004.10　香川県教育委員会他

・乗松真也『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　浜ノ町遺跡』2004.3　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

・渡部明夫・安藤清和『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第９冊　永井遺跡』1990.12　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター他

・真鍋昌宏『県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　山南遺跡』　2003.3　香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター

報 告 書 抄 録

ふりがな	まえだひがし・なかむらいせき　に
書　　名	前田東・中村遺跡Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第五十五冊
編著者名	宮**﨑**哲治
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762－0024　香川県坂出市府中町字南谷5001－４　TEL.0877－48－2191(代表)
発行機関	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・西日本高速道路株式会社
発行年月日	2005(平成17)年10月31日

総　頁　数	目次等	本文	観察表	図　版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	CD-ROM枚数
191頁	13頁	178頁	(CD収録)	(CD収録)	342枚	294枚	なし	１枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町名	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まえだひがし・なかむら 前田東・中村 いせき 遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 まえだひがしまち 前田東町	37201	582	34度 17分 40秒	134度 07分 12秒	1997.10.1 ～ 1999.6.30	13,146	四国横断自動車道建設に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前田東・中村遺跡	集落	弥生時代中～後期	溝状遺構・土坑・柱穴・自然河川	弥生土器・石器	絵画土器
		古代	掘立柱建物跡・柵列・溝状遺構・井戸・土坑・柱穴	須恵器・土師器・緑釉陶器・黒色土器・瓦類・陶印	陶印･墨書土器
		中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・柱穴・井戸・窯跡	須恵器・土師器・瓦類	

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第55冊
前田東・中村遺跡Ⅱ

平成17年10月31日　発行

編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷5001-4
電話（0877）48-2191（代表）
発行　香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
西日本高速道路株式会社
印刷　タナカ印刷株式会社